鬼畜ショタ指揮官の艦船調教日誌

竜騎兵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新設されたばかりの海軍基地に着任することになったイラストリアスであったが、そこは艦船たちを孕ませて子を作らせるための悪魔の施設であったのだった。

２０１９／１０／２２日追記　そろそろ堕とした子が六人になったので一旦完結、気が向いたら続編を投稿するかも。

目次

堕ちる純白　起　1
堕ちる純白　承　10
堕ちる純白　転　19
堕ちる純白　結　28
白の想い　39
黒の堕ちる時　起　47
黒の堕ちる時　承　54
黒の堕ちる時　転　62
黒の堕ちる時　結　73
黒の想い　82
悪い夢（長良編）　起　89
悪い夢（長良編）　承　99
悪い夢（長良編）　転　106
悪い夢（長良編）　結　114
長良の想い　121
堕落する深紅　起　129
堕落する深紅　承　141
堕落する深紅　転　149
堕落する深紅　結　160
深紅の想い　168
二羽の鶴　起　175
二羽の鶴　承　188
二羽の鶴　転　201
二羽の鶴　結　209

堕ちる純白　起

雲一つない青空から太陽の光が降り注いでくる。
眩しい日差しを遮るため、イラストリアスは少し深めに帽子を被り、今日から自分が着任することになった設立されたばかりの海軍基地の門の中に入っていた。
門の入り口の前にはイラストリアスと同じように配属されたばかりの衛兵たちが警備しており、麗しいロイヤルのレディの大人の色気にドギマギしながら一礼し、その女性もわずかに微笑みながら一礼し、ここの海軍基地の指揮官が居る執務室の存在する艦隊司令部まで歩を進めてゆく。
基地の奥へと進んでゆくイラストリアスに向けられる衛兵たちの視線は大きく実った豊満な果実や、胸と比べて肉付きは薄いものの形の引き締まった桃尻、そして、一種の芸術品のような雰囲気を感じさせる整った美しい顔に向けられていた。
衛兵の1人がごくり、と生唾を呑み込んで、頭を何度か横に振って邪な事を考えてしまいそうになった自分を責め、一瞬沸き上がった雄としての欲望を忘れようとするが、暫く忘れられそうになかった。
真新しい司令部のドアを開いて、絨毯の敷かれてない、花なども一切飾られていない飾り気のない廊下を歩いてゆきながら、ふと、イラストリアスは違和感を感じた。
「(・・・。　妙、ですね。　随分と人気が少ないような・・・？　先ほど、衛兵さんに会った以外に、他に出会った人もいませんし。　もしかして、私以外に配属された艦船は居なかったりするんでしょうか？)」
海軍基地にしては、随分と人気が少ないのだ。
施設を保つための最低限の人員はいるようだが、肝心の艦船にはここに来るまでに殆ど出会う事は無かった。
その事に、少しだけ違和感を感じながら、イラストリアスは執務室のドアをノックする。
すると、ドアの向こうから幼い少年の声が返ってくる。

「鍵は開いてるよっ、どうぞどうぞ～、入ってね～」
　失礼します、と、イラストリアスは内心の驚きを隠しながら、ゆっくりとドアを開いて、執務室の中に入りつつ、今日から自分の指揮官となる人物に視線を向けた。
「こんにちは。　君がイラストリアスだね？　ボクはここの基地の指揮官のメイ少佐だよっ、よろしくね！」
「・・・え、ええ。　よろしくお願いします。　メイ、少佐・・・」
　にぱっ、と太陽の輝きに似た満面の笑みを浮かべる、明らかに初等教育学校に通っているべき人間の姿を見て、イラストリアスは思わず我が目を疑ってしまった。
　輝かんばかりの金色の長い髪に、髪と同じ色の美しい瞳、純白の海軍軍服に身を包んだ人物の顔は、西洋人形のように整った、しかしながらもどこか愛嬌のある可愛らしい顔をしており、どう見ても少女であったのだから。
「あっ、もしかしてさ、ボクの見た目に驚いちゃった？　あははっ、ごめんね。　ボク、こんな見た目してるけど、男の子だよ？」
「す、すいません。　し、失礼しました」
「あはは、気にしてないよ！　可愛いって言われるの、ボク嫌いじゃないしね、うんうん♪」
　座って、とソファに座るようにイラストリアスに促しながら、メイ少佐は指揮官の椅子から立ち上がり、紅茶を淹れようと手早く準備してゆく。
　慌てて、自分がやります、と言うイラストリアスであったが、来てもらったばかりのイラストリアスにそんな事させるのは悪い、と言って、座っておくように命じて、ティーカップに紅茶を注いでゆく。
　最初は見た目で驚いてしまったが、意外と気さくで優しい指揮官なのかもしれない。　ここの指揮官となら、上手くやっていけるかも。
　そう思いながら、ティーカップに紅茶を注いでゆくメイ少佐の背中を見ているイラストリアスは、気が付いていなかった。
　密かに少佐が袖口に仕込んでいたプラスチック製の小袋から睡眠薬の粉末が自らが飲む紅茶に入れられていた事に。

「はい、どうぞ」
「ありがとうございます、指揮官さま」
　目の前に置かれたティーカップを手に取り、優雅に口元に運んでゆっくりと飲んでゆくイラストリアスの姿を見つつ、可愛らしい見た目の、しかしながらも内面は悪魔そのものである少佐は、心の中でほくそ笑んだ。
「（・・・あれ・・・？　急に瞼が・・・）」
　ふらり、とイラストリアスの体が揺れる。
　自らに襲い掛かってきた睡魔に抗おうとするが、対艦船用に調整された強力な睡眠薬に到底抗うことなど出来ずに、手に持っていたティーカップを床に落としてしまいながら瞼を閉じて、意識を手放してしまう。
　意識を手放す前に最後に見た少佐の顔は、口元をにやり、と邪悪に歪めた悪魔のような笑みを浮かべていた。
「さてさて。　本当にいい体してるよね、この子。　お胸のサイズ、どれぐらいあるのかな？　この衣装とかも絶対特注品だよね？　正しく牛乳～」
　すう、すう、と小さな寝息を立てて、ソファに横になりながら、小柄ながらも雌の事を孕ませることが出来る凶悪な雄に、その雄の劣情を無条件に誘ってしまいそうな極上の体を無防備に晒してしまっているイラストリアスに小さな雄は正面から覆いかぶさり、服をはだけさせて、無自覚に雄を誘っていたその果実を完全に露にさせて、露になった柔らかそうな牛乳と言っても良さそうなその柔らかな乳肉に細い指先を食いこませてゆき、その大きいながらも形が整っている魅惑の牝肉を卑猥に歪めてゆく。
　むにむに、と自らの意識がないうちに、好き勝手に体を使われてしまっているイラストリアスは、胸肉に細い指先が食い込んでゆくたびにんぅ、と口の端から悩まし気な声を漏らしてしまっていた。
　まだ、イラストリアスの意識が目覚める様子はない。
　強力な睡眠薬の効果はばっちりだったようで、イラストリアスは少佐のされるがまま、その体を好き勝手されてしまっている。

しかしながらも、体は敏感に反応を示してしまっているようで、胸肉が卑猥に歪んでしまう度に、イラストリアスの白い肌に僅かに朱が差し、鮮やかなピンク色の胸の突起はツン、と尖がり始めた。
「ふふ♪　寝てる間に弄られて、もしかして感じちゃってるの？　この身体だし、性欲とか溜まっちゃってたのかな？　ふふ♪　ボクも溜まっちゃっててさぁ♪　君みたいの事をずーっと待ってたんだよ？」
イラストリアスは、知る由もない事だろう。
まさか、海軍上層部が、戦力増強とメンタルキューブの節約の為に、余剰の艦船を『使って』戦力の拡大を図ろうとしている事も。
そして、その哀れな犠牲者として自らが選ばれた事も、そして、今、自らの胸を好き勝手に弄っている可愛らしい見た目の指揮官が、調教師の腕を見込まれてここの海軍基地の指揮官として上層部から雇われた事も。
イラストリアスは、知る由も無いだろう。
「あはっ、おっぱい柔らかーい♪　ずっと揉んでいたくなるぐらいの見事なおっぱい。　うんうん、赤ちゃん孕ませても、美味しいミルク出してくれるだろうなぁ♪」
えへへっ、と無邪気に調教師上がりの指揮官は、可愛らしい屈託のない笑みを浮かべて、胸に吸い付いて舌先でぺろぺろと胸の突起を慣れた様子で嘗め回して、果実を掴んでいた右手を名残惜しそうに放しながら、その手をイラストリアスの下半身に持って行き、パンツをずらして、毛を剃っている綺麗な割れ目を外気に晒させる。
外気に晒された割れ目は、ぴっちりと侵入するものを拒むかのように閉じており、性経験の少なさを物語っている事だろう。
そして、その性経験の少なさそうな割れ目に、細い人指し指をあてがい、割れ目をかき分けて膣口の方に細い指先をあてがい、ゆっくりと、僅かに湿ってるだけのその割れ目に自らの指先を埋めてゆき、突然の侵入者に慄くかのようにぴくぴくと震える膣壁を優しく撫でるかのように指の腹の部分で擦ってゆくかのように手首を軽く上下に揺さぶってゆき、膣穴の性感帯を探り当てるかのように指先で責め立ててゆきながら、意識を失ってる間に与えられる刺激に更に硬くなっ

てきた胸の突起に軽く歯を押し当てて、胸の突起を押しつぶし、慣れた様子で快楽に不慣れな雌の体に快楽を与えようとしてゆく。
元調教師と言うだけあって、指揮官の責めは卓越していた。
生娘であったイラストリアスの性経験の少なさを物語るかのように狭く、解れていなかった膣穴は指揮官の細い指先が上下に揺さぶられて、指揮官によって開拓されつつある性感帯を擦られるたびに淫らな反応を示し、膣奥から愛液を溢れさせて上下に揺さぶられる細い指先に膣壁を絡みつかせてゆきながら、更なる快楽を欲するかのようにぴん、と痴豆を尖がらせてしまっていた。
「あはっ、お豆さん尖がらせちゃってるぅー♪　可愛いね♪　沢山気持ちよくしてあげるからね～？」
細い指先が膣穴から抜ける寸前まで手を引いて、一気に人指し指を根元まで埋めてゆきながら、それと同時に親指で自己主張の激しい普通の女性のものと比べて比較的大きめのクリトリスを押しつぶしてゆき、膣奥から愛液を溢れさせて、快楽の知らなかった純粋無垢な秘所に強烈な刺激を与え、一気にイラストリアスの体を絶頂へと押し上げてゆく。
人指し指が根元まで一気に埋められた瞬間に、きゅぅぅっ、と人指し指に膣壁を絡みつかせて限界が近い事を少佐に素直に教えてしまっていたイラストリアスの体は、クリトリスを親指で乱暴にぐりぐりと押しつぶされた瞬間に艦生初の絶頂へと強制的に押し上げられ、ぷしゃっ、と人指し指が埋められた蜜壺から愛液を勢いよく噴き出してしまいながら、体をびくびくと痙攣させて、意識を失ったままの哀れな子羊はその男の視線を釘付けにする淫らな体に快楽の味を本人が知らない間に覚えさせられてしまっていた。
「ふふ♪　これだけ濡れてたら、ボクのおちんちんを捻じ込んじゃっても、問題はないよね？　えへへ♪　ボクのこれはとっても大きいけど、イラストリアスの体なら大丈夫だよね、装甲空母って頑丈らしいしー♪」
膣穴に埋められていた指先を抜いて、涎塗れになった胸の突起から口を離し、自らの指先に付着した愛液を軽く舐めとり、真新しい指揮

官のズボンのベルトに手を伸ばして、かちゃかちゃと音を立てて手早くズボンを脱いでゆき、自らの雄としての象徴を露にさせようとしてゆく。
　ズボンとパンツと言う枷から外されて、外気に晒されることになったメイ少佐の凶悪な肉棒は、今まで数多の牝を堕としてきた事を雄弁に物語るかのように赤黒く、血管が竿の部分に浮き出ており、グロテスクな悍ましいものであった。
「ねぇ、ねぇ、早く起きないと～♪　ボクのおちんちんで、君の処女が奪われちゃうよ？　あはっ♪　起きれる訳ないか♪　あの薬飲んだらー、数時間はずっとぐっすりだもんね♪　君が寝てる間に～♪　ボクの赤ちゃんの元、沢山おまんこに注いであげるね？」
　今まさに、犯されようとしているのにイラストリアスの目が開くことは無かった、意識を失ったまま、その体を悪童のされるがままにしている。
　しかしながらも、体は敏感に反応を示しているようで、イラストリアスの白い美しい肌は性的興奮を示すかのように朱に染まり、すぅ、すぅ、と寝息を立てている口からは熱っぽい声が漏れてしまっている。
　そして、悪童はこの雌に自らの物だという証を刻んでやろうと、２０ｃｍ以上の長さはありそうな、小柄な体格からは信じられないほどに巨大な、数歳ほどの子どもの握りこぶしぐらいはありそうな凶暴な肉棒の先端部を、愛液によって湿ってしまっている割れ目に押し当てて、ぐりぐりと腰を前へと押し出して割れ目をかき分け、膣口に肉槍の矛先を押し当ててゆきながら、一気に、小柄な体格ながらも精いっぱいに腰に体重を乗せて前へと突き出してゆき、イラストリアスの狭い膣口を強引にこじ開けてゆきながら、一気に膣奥めがけて肉棒を捻じ込んでゆく。
　強引に膣口が押し広げられ、激痛に慄くかのように震えるイラストリアスの体が、膣奥を肉棒が思いっきり抉りつけた瞬間に大きく跳ねて、そのたわわに実った果実がぷるん、ぷるん、と揺れ、雄の目を楽しませる。

「あはっ、処女貫通おめでとうー♪　うんうん、ボクの予想した通り、イラストリアスのおまんこぉ♪　名器だね♪　気に入ったよ♪」
　ぱんっ、ぱんっ、と貫通したばかりの文字通りの処女地を耕して開拓してゆくかのように、幼い外見とは裏腹に熟練した腰遣いで肉棒を前後に揺さぶり、イラストリアスの膣穴に自らの肉棒の形を覚えこませようとしてゆく。
　文字通り、イラストリアスには体を引き裂かんばかりの激痛が刻み込まれてしまったことだろう、その証拠に、意識を失ってはいるものの、イラストリアスの顔には苦悶の表情が浮かび、額からは汗が滲んでしまっていた。
　肉棒が前後されてゆくたびに、結合部からは初めての証を奪われてしまったせいで溢れ出た純血の証がソファに飛び散り、シミを作ってしまう。
　しかしながらも、眠ったままレイプされてしまってるというのに、少しずつ、少しずつ、イラストリアスの体は少佐の肉棒に順応し始めてしまっていた。
　強引に突き入れられてゆく肉棒から精液を搾り取るかのように、肉棒によって解されてしまった膣壁を纏わりつかせて、こじ開けられてしまった膣口を強烈に締め付け、何とか雄の精液を搾り取り子を孕ませて貰おうと殊勝にも子宮の入り口を思いっきり抉りつけられるたびに子宮口を先端部に吸い付かせてゆく。
「これはっ・・・ふふ♪　凄いね、君、こうやってボクに犯されるために生まれてきたの？　もうちょっと、堪能しようと思ってたけど・・・もう、我慢できそうにないや・・・♪　ほぉら、中に出すよ・・・しっかり受け止めて、ねっ♪」
　意識を失ったままのイラストリアスの口からは、子宮の入り口を思いっきり肉棒で押し上げられるたびにあんっ、あんっ、と淫らな嬌声が溢れ、先ほどまで苦悶の表情を浮かべていた顔も淫らに蕩けてしまっていた。
　子宮の入り口が抉りつけられるたびにぷるん、ぷるん、と揺れて雄の興奮を誘っていたその果実をメイ少佐は両手でしっかりと鷲掴み

にしてゆきながら、自らの種を吐き出すべく、肉棒を膣穴から抜けるギリギリまで、それこそ膣口からカリ首が露出してしまいそうになるまで引き抜いた後に、全体重を込めて、一気に腰を前へと突き出してゆき、自らの肉槍の先端で膣粘膜をごりごりとこそぎ落とすかのように擦りつけてゆきながら、子宮の入り口をごちゅんっ、と抉りつける。
「っ・・・っ・・・・~♪　っ・・・・♪」
　子宮の入り口を思いっきり抉りつけられた瞬間に、イラストリアスの体がびくぅっ、と一層強く痙攣し、その口からは声にならない悲鳴が漏れてしまう。
　びゅるっ、びゅるっ、と音が聞こえてしまいそうなほどの勢いで注ぎ込まれてゆく雄の種は一瞬でイラストリアスの子宮内を満たしてゆき、純潔を保っていた、穢れを知らなかった乙女の聖域が容赦なく雄の種によって塗れ、汚されてゆく。
「うんっ・・・あはっ・・・♪　凄い気持ちいいね・・・♪　腰、止まんないや・・・♪」
　むにっ、むにぃっ、と両手で鷲掴みにしているたわわな果実を揉みしだいて卑猥に歪ませてゆきながら、雄は腰を腰を揺さぶり続けて、肉槍に装填された熱い精液を念入りに純潔を奪われたばかりの膣穴に注ぎ込み続けてゆく。
　腰を前後に揺さぶってゆくたびに、結合部から愛液と精液、そして初めての証が交じり合ったピンク色の体液が溢れ出て、ソファを汚してしまうが、少佐は気にする様子はなく。
「それじゃあ、第二回戦と行こうか？」
　イラストリアスの体を仰向けから、うつ伏せにさせて後ろから覆いかぶさり、なおも貪り続けた。

　結局、イラストリアスが意識を失ってる間に数時間に渡ってレイプを繰り返し、４回膣穴に種を注ぎ込み続けたメイ少佐は、行為の後、意識が目覚める寸前のイラストリアスの体を抱き上げ、執務室の地下に存在する『建造ドッグ』へと連れてゆき、そこで更なる調教を行うことにした。

イラストリアスの淫らな悪夢は、まだ始まったばかりなのだ。

堕ちる純白　承

頭が痛い、ついでに言うと股の辺りにも違和感を感じる。
深い眠りから漸く目覚めつつあったイラストリアスがまず抱いた感想はそれであった。
「(あれ・・・？　私・・・。　指揮官さまに、紅茶をいただいて・・・その、後・・・どう、したんでした、っけ・・・？」
朦朧とする意識の中、ゆっくりと瞼を広げて、周囲を見回そうとする。
周囲は、先ほどまでいた執務室と違って、どこかの地下なのか薄暗く、蛍光灯の灯りだけが頼りの不気味な場所であった。
「(ここ・・・執務室・・・では・・・ありません・・・わよね・・・？　あれ・・・？　どうして・・・？)」
少しずつ、意識が覚醒してゆく。
地下室と思われる場所の壁際には棚が置かれており、その棚には男性器を模したピンク色の卑猥な道具や、鞭、そして更には注射器なども置かれている。
「・・・え？　こっ、ここって、どこです!?」
不穏なものを見て、急速に意識が覚醒したイラストリアスは己の体を動かそうとするが、四肢を拘束されているようで、自らの体を動かすことは出来ない、そして、肌寒さを感じる。
肌寒さの正体は、どうやら自分は衣服と言うものを着てない生まれたままの姿のようで、かぁぁ、と頬に熱が溜まるのをイラストリアスは感じた。
頬を朱に染めてしまいながら、自らの四肢を拘束しているものの正体に視線を向ける。
どうやら、自分は分娩台のようなものに寝かされて、股を大きく広げるような形のまま四肢をロープで拘束されているようだ。
そして、先程、自らに紅茶を飲ませてくれた指揮官は、股を大きく広げさせられる形となり、露にさせられてしまっている膣穴の入り口に棚に置かれていたものと似たような男性器を模したものを精液と

愛液が交じり合ったものが垂れ流されている膣穴に近づけて。
一気に根元まで埋めて、そのバイブの振動を最大まで上げながら、意識を取り戻したイラストリアスの方に視線を向けた。
「あ、おはよう♪　君があんまりにもお寝坊さんだったからさ、寝てる間に沢山楽しませて貰ったよ？」
「ひっ、あっ、ぁぁぁっ♪　なっ、なんですかっ、これぇっ!?　やめっ、やめてください！　お、おまんこに入れてるの、と、止めてえええええええええ！」
意識を失ってる間に散々少佐に蹂躙され、快楽の味を覚えこまされてしまったイラストリアスの牝穴は、一気に根元まで埋められた一般的な成人男性の肉棒と同じほどのサイズのイボ付きバイブを易々と受け入れてゆき、バイブが強烈に振動し、イボが膣粘膜を擦るたびに、ぎしぎしとイラストリアスは自らの四肢を拘束しているロープを軋ませてしまいながら、刺激から逃れようと暴れるが、頑丈なロープのようで逃れる事は出来ない。
「あはっ、やめるわけないでしょ？　今から君の事、調教するんだしぃー♪　今からお尻にローション塗ってあげるね？」
「いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁ！　やめてえええええっ！　誰かっ、誰かっ、助けてえええええ！」
イラストリアスの声に快楽の混じった、しかしながらも悲痛な叫びが地下室にこだまする。
しかしながらも、その悲痛な叫びは外に届く事は無く、後ろの穴の入り口に、ローションが付着した少佐の人指し指と中指が押し当てられる。
イラストリアスの後ろの穴の入り口は、一種の清楚ささえ感じさせるほどに綺麗に閉じた美しい窄みで、快楽目的で触ったことがないであろうその綺麗な菊門にローションで濡れた人指し指と中指の先端部が押し当てられて、閉じられていた入り口をこじ開けてゆきながら、奥へ奥へと埋められてゆく。
「ひぃっ・・・！　やめっ・・・嫌っ、いやぁっ！　あぁぁぁぁぁぁぁっ！」

後ろの穴に埋められてゆく異物の刺激に、首を横に振って拒否反応を示すが、少佐のローションで濡れた人指し指と中指は無慈悲に埋められてゆき、しっかりと指が根元まで埋められたら、かくかくと前後に手首を揺さぶり、堅い腸穴を解そうとしてゆく。

ローションで濡れた細い指先の腹の部分が腸壁を擦ってゆくたびに、イラストリアスの体に未知の、妖しい刺激が刻み込まれてゆき、膣穴に埋められたイボ付きバイブをきゅっ、と締め付けてしまいながら、ぶんぶんと髪を振り乱して頭を横に振り、必死に何度もやめて、やめてと懇願し続ける。

「うん、これだけ濡れたら大丈夫かな？　そろそろ次の段階に行くね。今は叫ぶ元気があるみたいだけど、これ使ってまだそんな元気あるかな？」

ローションをしっかりと腸穴に塗り込んだ後に、菊門から指先を引き抜いて、今度は大小さまざまな玉が数珠つなぎにされた淫具を取り出す。

後ろの穴に埋められていた人指し指が抜かれる刺激に苦し気に呻きながら、やっと指が抜かれて僅かに安堵の息を吐いていたイラストリアスの顔が絶望に染まる。

「これはね、アナルパールって言うんだよ。　凄いでしょ、これ。　最初の玉は小さめなんだけど、少しずつ大きくなっていってるんだよ？」

アナルパールと言われたその代物は、少佐の言う通り最初は小さく、親指ほどの大きさだったのだが、次の玉から少しずつ大きくなってゆき、最後の玉に至ってはゴルフボールほどの大きさであった。

「ひぃっ・・・！　やめてっ・・・ゆ、許してください・・・！　そ、そんなの、入れられたら、私ぃっ・・・！」

何とか、少佐を説得しようと口を開いたイラストリアスの事を黙らせるかのように、アナルパールを握ってない方の手で膣穴に埋められているバイブの根元を握り、前後に揺さぶり、膣壁の敏感な場所を容赦なく擦り、責め立ててゆく。

性感帯を強烈に擦られる刺激に、ぷしゃっ、とバイブが埋められた

膣穴から愛液を噴き出してしまっているイラストリアスを尻目に、後ろの穴の入り口にもう片方の手に握られたアナルパールを押し当て て、ゆっくり、ゆっくりと一つずつローションで濡れた菊門に埋めてゆく。

　最初は小さな玉で受け入れる事は容易だったものの、指先と比べて堅いプラスチック製のボールが腸壁を擦り、一つ、また一つと埋められてゆくたびに、前の穴に埋められているバイブを強烈に締め付けて、イラストリアスは悶えてしまう。

　最後のゴルフボールほどの大きさのアナルパールが埋められる頃には、後ろの穴は内側から強烈に圧迫され、イラストリアスの額からは苦痛から冷や汗が浮き出てしまっていた。

「あはっ、ねぇ、これからどうすると思う？　これを…こうやって…えいっ、引き抜いてあげると―♪」

「ひっ、　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　あっ、ぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　後ろの穴に埋められたアナルパールが、一斉に引き抜かれてゆく。その瞬間に強烈に腸壁が擦られ、イラストリアスの口からこの世の物とは思えないほどの絶叫が響き、絶頂へと押し上げられたばかりのイラストリアスは再び絶頂へと押し上げられてしまう。

　先程とは違って、膣穴に与えられる快楽にではなく、後ろの穴に与えられる快楽によって、だが。

　異物が引き抜かれたアナルの入り口は無残にも割り開かれてしまっており、更なる快楽を求めるかのようにひくひくと押し広げられた入り口をひくつかせてしまっていた。

「あはっ、凄いイキっぷりだったね♪　そんなに後ろの穴気持ちよかったの？　良かったね、イラストリアスぅ♪　君、艦船じゃなくても娼婦として生きていけるよ？」

「あっ・・・あっっ・・・・♪　あっ・・・・あっ♪」

　ぴくっ、ぴくっ、としっかりとロープで拘束されている四肢を痙攣させて、絶頂の余韻に浸っているイラストリアスの割り開かれた後ろ

の穴の入り口に、少佐は自らの肉棒の先端部を押し当てて、一気に体重を込めて腰を前へと突き出し、腸壁をごりごりとこそぎ落とすかのように乱暴に擦ってゆきながら、敏感なアナルの最奥を思いっきり抉りつけて、イラストリアスに更なる追い打ちをかけてゆく。
「ひっ・・・ぎいっ・・・！　やっ・・・あっ・・・いたっ、痛いっ・・・！」
　アナルパールで解されたと言えども、イラストリアスの後ろの穴は異物にはまだ慣らされてなく、凶悪な肉棒が乱暴にねじ込まれてゆくと、絶頂の余韻に浸っていたイラストリアスの意識は強制的に現実に引き戻されて、口の端から無様な悲鳴を漏らしてしまう。
　ぎちっ、ぎちっ、と痛々しい、括約筋が拡張されるような音を響かせてしまいながら奥へ奥へと埋められてゆくたびに、イラストリアスの後ろの穴は少佐の肉棒の形に内側から押し広げられてしまい、イラストリアスの口からは苦しそうな声が漏れてゆく。
　頑丈な、装甲空母なだけあって、イラストリアスの菊門は壊れる事は無かったが、もし、艦船ではない一般人であったら少佐の肉棒をアナルにねじ込まれては筋が切れて一生人工肛門の世話になることになっただろう。
　奥へ奥へと埋められてゆく少佐の凶悪な肉棒の先端部がついに腸穴の深い場所に到達し、奥の壁を強烈に抉りつけてゆき、イラストリアスの体を大きく揺さぶられる。
「あはっ♪　後ろの穴も締まりも中々のものだね♪　最初は痛いかもしれないけど、すぐになれるよ？」
「ひぃっ、あっ、あぁぁっ！　動かさないで、動かさないでくださいっ、いやっ、痛いっ、痛いいいいいいいっ！」
　少佐の腰が深いストロークで乱暴に前後に揺さぶられてゆき、勢いよく腸粘膜を強烈に擦りあげ、突き入れられてゆく雄の肉槍の先端部が割り開かれたばかりのイラストリアスのアナルに雄の肉棒の形を覚えこませ、淫らに作り変えようとしてゆく。
　最初は、肉棒が前後するたびに苦しそうに呻いていたイラストリアスであったが、天性の淫乱としての素質か、はたまた少佐の卓越した

性技か、その両方か、乱暴に菊門をレイプされてしまってるというのに、前の穴に埋められているバイブを強烈に締め付けてゆきながら、イラストリアスは後ろの穴を穿られて与えられる背筋がゾクゾクとしてしまいそうな妖しい快楽と、強烈に振動し続けるバイブによって与えられる快楽に身悶えてしまっていた。

少しずつ、後ろの穴に自らの肉棒が馴染み、明確に雄槍でケツ穴の性感帯を擦られるたびに快楽に喘いでしまってるイラストリアスの姿を見て、少佐の責めが少しずつ変わってゆく。

「ね、ねぇ♪　イラストリアスちゃんは、さ、お尻の穴を穿られてなんでこんなによがってるの？　ふふっ、バイブは抜いたのにぃ、えっちな液、溢れ続けちゃってるよ？」

「そっ、そんなっ、後ろの穴で気持ちよくなるなんてっ・・・そんな事、ありえま・・・ふわぁぁぁぁっ♪」

少佐の手が強烈に振動を続けているバイブにあてがわれ、スイッチが切られ、ゆっくりと膣穴からバイブが引き抜かれる。

バイブを引き抜いてゆきながらも、後ろの穴に埋められている自らの肉棒を前後に揺さぶってゆくのはやめずに、しかしながらも先ほどとは違って、浅いストロークで先ほど探り当てた後ろの穴の性感帯をカリ首の部分で引っ掻くかのようにして責め立ててゆく。

カリ首が少佐の肉棒によって解され、開拓されてしまった腸壁を擦ってゆくたびに、バイブが抜かれてしまった膣穴の奥から愛液を分泌させ、膣口から溢れさせてしまいながら、淫らにイラストリアスは喘いでしまった。

必死に否定しようと言葉を紡ぐものの、その瞬間に敏感な場所が強烈に擦られ、びくっ、と自らを縛るロープを軋ませてしまいながら軽く絶頂へと押し上げられてしまう。

「ふふっ♪　初めて後ろの穴を穿られちゃってるのに、こんなに感じちゃうなんて、イラストリアスはさ、淫乱さんなのかな？　あはっ♪

ロイヤルの誇り高き装甲空母が～、こんなに淫乱だなんてボク失望だなぁ♪　後ろの穴にぶっといおちんちん入れられちゃってるのに、こんなにおまんこからえっちな汁漏らしちゃうなんてー♪　へん

たーい♪」
「いやっ、ダメっ、言わないで、いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁ！」
後ろの穴の敏感な場所が擦られてゆくたびに、愛液が噴き出て、もはや隠しようがないほどに快楽を感じてしまっている事を雄弁に物語る。
快楽を必死に耐えようとするものの、少佐の卓越した性技によって責め立てられ続けてしまって、体が昂りきってるイラストリアスはもはやその快楽に抵抗することは出来ずに、後ろの穴の最奥を抉りつけられた瞬間に、再び無様に絶頂へと押し上げられてしまう。
後ろの穴に与えられる激しい快楽に絶頂へと押し上げられてゆくたびに、イラストリアスは自らの誇りと、人間としての尊厳が踏みにじられる感覚を覚える事だろう。
純潔を自分が意識なくしてる間に踏みにじり、あまつさえ後ろの穴を蹂躙しているこの男に良いように体を使われて、浅ましく快楽を感じて喘いでしまっているのだ。
メイ少佐の言う通り、自分の本性は淫らな淫乱なのかもしれない、自らのプライドと、理性にひびが入り始めたイラストリアスに追撃を加えるかのように、後ろの穴に肉棒を埋めたままの少佐は更に激しく腰を揺さぶり、ラストスパートをかけるかのように菊門の最奥を何度も、何度も乱暴に抉りつけてゆく。
「あはっ、後ろの穴にも吐き出してあげるよっ、しっかり受け止めて・・・ねっ♪」
「ひぃっ、いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁ♪　ダメなのにぃっ♪　イッちゃうぅぅぅぅぅ♪」
菊門の深い場所を逞しい肉棒の先端で抉りつけてゆき、壁越しに子宮の辺りを責め立ててやりながら、イラストリアスのたわわな果実に細い指先を食いこませ、柔らかなその胸肉を淫らに歪めてゆきながら、どくんっ、どくんっ、と音を立てて溶岩のように熱い粘っこい子種を吐き出してゆき、快楽を覚えこまされてしまった、排泄の為の穴を白濁で染め上げてゆく。
アナルが白濁で埋め尽くされて、少佐の種で染め上げられてゆくた

びに、最奥を抉りつけられた瞬間に絶頂へと押し上げられてしまった身体が更に強い絶頂へと導かれてゆき、派手に今は何も弄られてない膣穴から潮まで吹いてしまって度重なる絶頂に虚ろな目をしてしまいながら絶頂の余韻に浸ってしまっていた。
「ふぅ♪　気持ちよかったよ、イラストリアスぅ♪　でも、まだ調教はこれからが本番だからね？」
　念入りに、十数秒に渡って後ろの穴に種付けを行い、すっかり精液で染め上げられてしまった菊門から肉棒を抜いてやりながら、イラストリアスの顔を見つめるが、苦笑いを一つ浮かべた。
　イラストリアスのここに来たばかりの頃は清楚で美しかった顔も今では涙と汗と鼻水でぐしょぐしょになってしまい、与えられた快楽で無様に歪んでしまっていたのだ、かつての清楚が今では想像も出来ない。
　そんな無様な様子のイラストリアスを見ながら、地下室の壁際に置かれた棚から新品の注射器を取り出し、その注射器に同じく棚に置かれた薬液を充填してゆき、ゆっくりとイラストリアスに近づき、そのわずかに朱に染まった美しい首筋に突き刺してゆき、充填された薬液を注ぎ込んでゆく。
「ねぇ、この注射器の中身の薬液、これは本当にすごいよ？　製造方法とかは企業秘密らしいけど、調教師にとっては夢のようなお薬なんだ」
　首筋に感じたちくりとした痛みから、絶頂の余韻に浸っていたイラストリアスは現実に引き戻されて、すっかり怯えきった目で少佐の事を見つめた。
「この薬はね、えへへ♪　凄いよ、解毒剤打たないと、オーガズム、つまりイく事が出来なくなっちゃうお薬なんだ」
「・・・ふ・・・・え？」
　その言葉を聞いて、一瞬、イラストリアスは少佐の意図を理解することが出来なかった。
　なんで、そんな薬を自分に打つ必要があるのか、目を丸くして困惑してるイラストリアスを見て、くすりと笑みを浮かべて少佐は言葉を

続ける。
「ボクさ、今日もう疲れちゃったからさ、ベッドに戻って休もうと思うんだよね。　でも、その間イラストリアス、暇しちゃうでしょ？　だからね」
　前の穴と、後ろの穴に成人男性の肉棒と同じぐらいの大きさのバイブがねじ込まれてゆき、強烈に振動させられてしまう。
　両穴を穿ち、激しく振動するバイブによって攪拌され泡立った愛液が膣口から飛び散り、アナルに埋められたアナルバイブの隙間から吐き出された精液がぽたぽたと溢れてゆく。
　両穴に与えられる激しい刺激に、イラストリアスは絶頂へと押し上げられてしまいそうになるが、絶頂へと至る事は出来ない。
　しかしながらも、刺激は与えられ続けるままで、延々と寸止めされる続ける刺激にイラストリアスは思わず懇願してしまっていた。
「いっ、イかせて、イかせてくださいっ！　あうっ、ああっ・・・イかせてくれないならっ、抜いてえええええええ！」
　悲鳴を漏らし、今日一番の抵抗を見せて何とかロープから逃れようとするイラストリアスの目にアイマスクを付けて視界を奪いながら、何とか叫んで助けを呼ぼうとしているその口にギャグボールを装着し、抵抗できないようにしてやりながら、くるり、と少佐は踵を返して。
「じゃ、明日また来るよ。　それまで沢山道具で楽しんでいってね♪」
　去ってゆく。
　遠ざかってゆくその足跡をイラストリアスは聞きながら、心を暗い闇が覆ってゆくのを感じた。
　この闇の正体は、絶望だと気が付くのにそう長い時間はかからなかった。

堕ちる純白　転

「・・・うっ・・・ぁっ・・・」

もはや、呻くだけの気力も残っているか怪しいものであった。

四肢を拘束していたロープから何とか解放されようと、数時間、イラストリアスからすればその何十倍も続いたかのように感じた悪夢の数時間の前までは、逃れようともがいていたものの、頑丈に四肢を拘束しているロープから逃れる事は出来ずに、数時間の間ずっと絶頂へと達することも出来ないまま責め続けられてしまったのだ。

快楽を与えられ続けて、絶頂地獄に突き落とすよりも、何十倍も辛い、絶頂寸前へと押し上げられたまま責め続けられるという悪夢のような責めはひびが入っていたイラストリアスの理性を完全に打ち砕いた。

「・・・」

視界が塞がれ、口もギャグボールで塞がれ、四肢を拘束され、ただひたすら寸止めされ続ける地獄のような責め苦を味わう。

つい先日までは生娘であったイラストリアスには到底耐えられるはずもなく、バイブを咥えこんでいる前の穴からは粘度の高い愛液を溢れさせて股を濡らしてしまいながら、後ろの穴に埋められたバイブが腸穴を穿つたびに、僅かに体を震わせてその胸を揺らしてしまいながら、ぐったりと股を大きく開いたままの姿勢でロープから逃れようとすることも出来ずに、自らに唯一残された救いがやってくるのを待つしか無かった。

何度も、舌を噛みちぎって楽になろうかと思ったが、口に咥えさせられたギャグボールのせいで出来ず、ただひたすら己の運命を呪うしか無かっただろう、しかしながらも、イラストリアスの待ち望んだ救いが、やっと地下室の扉を開いてやってきたのだ。

「やぁやぁ、おはよう。　うわ、凄い量の汁。　随分とお楽しみだったみたいだねー。　ねー、イラストリアスちゃん、意識ある？」

自らをここまで追い込んだ張本人である小柄な鬼畜がやってくる。

そして、口を塞いでいたギャグボールが外され、その指揮官の唇が

イラストリアスの唇に押し当てられて、その口に含まれた冷たい水がイラストリアスの口内に注がれてゆく。
穴と言う穴から液体を溢れさせてしまって、喉が渇ききっていたイラストリアスは、必死になって水を飲ませてくれる指揮官の唇に舌を割り入れてしまいながら、何とか水分を飲み干そうとしてゆく。
ぴちゃぴちゃと湿った水音を響かせてゆきながら、指揮官もイラストリアスの舌に自らの舌を絡ませて、水を飲ませてゆき、水を飲ませ終わったら、ゆっくりと指揮官はイラストリアスの唇から自分の唇を離し、イラストリアスの四肢を拘束していたロープを外してあげて、イラストリアスの体を地下室の冷たい床に降ろしてあげた。
「やぁ、イラストリアス。　もうそろそろ限界でしょう？　イかせて欲しい？」
地下室の冷たい床が、火照った体に気持ちいい。
床に降ろされて、ぐったりとしてるイラストリアスの前の穴と後ろの穴に埋められた二本のバイブが引き抜かれて、悪魔が幼い少女をたぶらかすかのように、少佐はイラストリアスの耳元で囁く。
「・・・かせて・・・。　くだ・・・さい」
か細い声で、懇願するイラストリアス。
アイマスクで視界を塞がれつつも、何とか必死に言葉を紡ぐイラストリアスの姿を見ながら、少佐はほくそ笑んだ。
もう、限界だなと。
「うん？　聞こえなかったな？　もっと大きな声でお願い♪」
「イかせてっ！　イかせてくださいっ！　お願いしますっ、もう、限界なんですぅ！」
ぐったりとした体を何とか抱き起して、気配だけを頼りに少佐に抱き着こうとしながら、イラストリアスはついに限界を迎えた様子で、必死にイかせて欲しいと懇願し始める。
自分を殴り倒して、逃げようとしない辺り、本当に追い詰められてるなと感じた少佐は、自らに抱き着いてきたイラストリアスの体を優しく抱きしめ返してあげつつ。
「ふふっ・・・♪　良いよ、じゃあさ、ボクの言う通りに言ってね？

『私は、メイ少佐の、肉便器になって、一生、性処理の為に生きます。
おまんこだけじゃなくて、お尻にも、赤ちゃんの元ください』ってね」
「・・・あぅ・・・。　そ、それは・・・」
イラストリアスの最後に残った、僅かに残ったプライドが、その言葉を紡ぐのを躊躇させる。
躊躇する様子を見て、想像通りだと言わんばかりににこっ、と少佐は口元を歪めて。
「あ、言わないの？　じゃあ、またあそこに寝転がって貰って、責め続けちゃおうかな♪」
離れ、イラストリアスの体を再び抱き上げ、分娩台に寝かせようとする。
「いやっ、いやっ、やめて、まって、待ってください！　お願いします、言います、言いますから・・・！」
「・・・ふふ、じゃあさ、股を広げてさ、今の台詞言ってね？」
屈辱的であった。
再び床に寝かされたイラストリアスは、ゆっくりと、頬を朱に染めて、恥じらいながら、M字開脚の姿勢で大きく股を自らの意志で広げて、先ほどまでバイブがねじ込まれていたせいでよく解された自らの愛液が滴る膣口の方に指先を持って行き、くぱぁ、と指先をチョキの形にして膣口を広げる。
散々快楽を覚えこまされ、雄の肉棒の味を知ったイラストリアスのヴァギナは鮮やかなピンク色に染まり、うねうねと雄の肉棒を求めるかのように膣壁を蠢かせてしまっていた。
そして、イラストリアスは、意を決して、その言葉を、口にし始める。
「わ、私は・・・め、メイ、少佐の、肉便器に、なって・・・。　い、一生、性処理の為に、生きます・・・。　お、おまんこ、だけじゃなくて、お尻にも、赤ちゃんの元を、沢山、沢山注ぎ込んで・・・。私の事を・・・私の事を、無茶苦茶にしてくださいいいいいいいい！」
最後の一線が完全に打ち砕かれた瞬間であった。

最後の守るべ女としての尊厳も、誇り高きロイヤルの装甲空母としての矜持も完全に打ち砕かれたイラストリアスは、もはや快楽に従順な雌犬そのものであった。
屈服してしまったイラストリアスの首筋に、メイ少佐が懐から取り出した薬が打たれる。
「今のお薬は、君に打った薬の解毒剤。　これで思う存分イき狂えるね♪」
「はぃ・・・♪　ありがとう、ございぃ・・・ます♪」
アイマスクが外される、アイマスクが外されて、露になったイラストリアスの瞳には理性の光はもはや宿っておらず、暗く澱んでしまっていた。
「ふふ♪　素直にボクの肉便器になってくれたイラストリアスには、たーくさん気持ちぃい事してあげるね？　特別だよ？」
そう言って、イラストリアスの体に正面から、正常位の姿勢で覆いかぶさり、自らの逞しい肉棒の先端部を指で拡げられた膣口に押し当てて、腰をゆっくりと前へと押し出してゆき、先ほどまで散々行ってきた文字通りのレイプとは打って変わった、恋人同士がするような優しい挿入。
イラストリアスの酷使された膣壁を傷つけないように慎重に、慎重にゆっくりと腰を前へと突き出してゆき、ぬぷぬぷと肉棒を埋めてゆき、子宮口まであと半分、と言うところまで肉棒を埋めたら、腰を浅いストロークで小刻みに揺さぶってゆきながら、ゆっくり、ゆっくりと、膣壁をカリ首で擦るかのようにして、優しく、労わるかのように肉棒を埋めてゆく。
「あっ・・・ぁぁっ・・・♪　嬉しいです・・・ありがとう、ございますぅ・・・♪」
最初は、今まで与えられた快楽と質の違う刺激に戸惑っていたイラストリアスであったが、自らの体に与えられる優しい快楽にすぐさま歓喜するかのように愛液を膣奥から分泌させて、淫らな、歓喜に満ちた嬌声を口から溢れさせてしまっていた。
ゆっくり、ゆっくりと小刻みに肉棒を前後させて、優しく掘り進む

かのように肉棒を埋めてゆきながら、胸の突起に、甘えるかのように少佐は吸い付いて、舌先でぺろぺろと胸の先端を嘗め回して、刺激していこうとする。
先程のような欲望に任せた胸辱ではなく、優しい、相手の事を労わった快楽を与えるための責めによって、イラストリアスは一気に胸だけでの絶頂へと押し上げられてしまいそうになるだろう。
少佐の細い指先がイラストリアスの牝肉に食い込み、たわわに雄の欲望が擬人化したかのような魅惑の果実は淫らに歪み、すっかり淫らに開拓されてしまった胸の性感帯が指先で指圧され、イラストリアスは悩まし気な声を漏らす。
「ふふっ・・・♪　ね、イラストリアス♪　ボクの頭、撫でてくれるかな？　甘えて良い・・・？」
ぺろぺろ、と胸の突起を嘗め回してゆきながら、ぐにぐに、と牝肉を揉みしだき、上目遣いでイラストリアスの顔を見上げる。
もはやすっかり心が屈服してしまっているイラストリアスは、自らのご主人様のお願いに嫌悪感を抱くようなことはなく、むしろ母性がくすぐられてしまった様子で、優しく頭を撫でてあげながら、自らの膣奥目指してゆっくり、ゆっくりと埋められてゆく肉棒に蠢く膣壁を絡ませて、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。
「・・・ん♪　ふふ、こうやって撫でられるの好きかも♪」
頭を撫でられて、少佐は目を細めながら、えへへっ、と照れ臭そうに微笑み、ついに最奥に到達した肉棒の先端部で、膣奥の子宮口を優しく押し上げて、動かしても良いかな、と小声で聞く。
その言葉に、イラストリアスは強くうなずいて。
「早く、動かして、ください・・・♪　滅茶苦茶にしてくれても、良い、ですから・・・ね♪」
「ふふっ、もちろんだよ♪　焦らしてごめんね？　激しく動かすよ、もし、痛かったり、辛かったりしたら、すぐに言ってね？」
そう言って、優しく肉棒を埋めていた動きから一転し、一気に腰を肉棒が抜ける寸前まで引き抜いて、抜ける寸前まで引き抜いた自らの肉棒を、一気に腰を前へと突き出し、深いストロークで捻じ込むかの

ように埋めてゆく。
　勢いよく、捻じ込むかのように埋められてきた肉棒の先端部ですっかり昂りきった膣壁が強烈に擦られ、子宮の入り口がこじ開けられんばかりに、体が大きく揺さぶられてしまうほどに抉りつけられた瞬間に、イラストリアスはすっかり焦らされ続けてられてしまったその体を念願の絶頂へと誘われてゆく。
「あっ、あぁぁぁぁぁぁぁ♪　きたっ、来たぁ♪　あっ、すごっ、あっ、ぁぁぁ♪」
　口の端から涎を溢れさせて、清楚さなど全く感じさせない快楽に蕩け切った顔を晒してしまいながら、長い髪を振り乱して絶頂へと押し上げられることへの悦びを体全体を使って表現する。
　そして、イラストリアス自身の体もメイ少佐の事をご主人様だと、自らが子を孕むのに相応しい雄だと認めてしまったのか、子宮が下りてきて、子を孕む用意をし始める。
　子を孕む用意が整いつつあるイラストリアスの子宮の入り口を、再び少佐の凶悪な肉棒の先端部が抉りつけてゆき、緩みつつあった子宮の入り口を強引にこじ開けて、雌として一番大切な場所さえも肉棒で蹂躙されてしまいながら、ご主人様に己の体全てを捧げられる悦びに歓喜するかのように、歓喜の悲鳴をあげる。
「あはっ♪　もうすっかりチンポ狂いの変態さんだね♪　良いよ、そんな変態さんのイラストリアスでも♪　ボクが、ずーっとエッチなことして、赤ちゃんを仕込み続けてあげるからね？」
「はいっ、少佐の、ご主人様の赤ちゃん、孕んでっ、沢山、赤ちゃん産みますぅぅぅぅぅ♪」
　もはや、ここに居るのはロイヤルの誇り高き装甲空母ではなく、快楽に堕ちてしまった淫乱な雌犬であった。
　メイ少佐の腰遣いが更に激しくなってゆき、膣壁の敏感な場所がこそぎ落とすかのように強烈に擦られてゆきながら子宮の入り口をこじ開け、何度も子宮の奥の壁をごちゅんっ、ごちゅんっ、と抉りつけてゆき、子宮内すらも自らの肉棒で踏みにじってゆきながら、限界が近いのか肉棒がびくん、びくん、と震え始める。

射精が近いのを感じ取り、イラストリアスは自然と少佐の腰に足を絡めて、種付けを懇願してしまっていた。
そして、種付けを懇願する淫乱な雌にトドメが刺される。
一層強く、少佐が腰を前へと突き出し、子宮の奥の壁を抉りつけたかと思うと、肉棒に装填された熱い種が堰を切ったかのように注がれていったのだ。
「あはっ♪　ふふ♪　これでイラストリアスはぁ・・・♪　完全にボクのものぉ・・・♪」
濁流のような凄まじい勢いで吐き出されてゆく少佐の粘っこい種は一瞬でイラストリアスの子宮内を白濁で埋め尽くしてゆき、遺伝子情報のたっぷりと詰まった精子で雌の卵子を蹂躙し、子を孕ませようとしてゆく。
音を立てて、濁流のように注ぎ込まれてゆく数と質を併せ持った精子の波に襲われたイラストリアスの子を孕む用意が整ってしまっていた卵子はあっさりと陥落し、少佐の精子を受け入れて、卵子と精子が結合し、新しい命が作られてゆく。
「あはっ・・・♪　あっ・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪　凄いっ・・・凄いっ・・・♪　これ・・・気持ち良すぎて・・・私・・・また・・・イっちゃうぅぅぅ♪」
自らが屈服した雄の子を孕むという雌として最高クラスの悦びに包まれながら、イラストリアスは快楽によって悲鳴をあげてしまいながら、絶頂の波に攫われていった。
今まで自らが感じたことが無かったかのような激しい、激しい、意識が軽く飛んでしまいそうなほどの強烈な絶頂はイラストリアスの体と心はおろか魂にも刻み込まれてゆき、完全に心の底からメイ少佐の事をご主人様だと認め、心酔することになるだろう。
「ふふ♪　そんなに気持ちよかったの？　あはっ、これだけ赤ちゃんの元吐き出しちゃったら、ボクの赤ちゃん妊娠しちゃってるよねー♪
でもでも、これからもたーくさんエッチな事してあげるから、楽しみにしててね？」

かくかく、と孕ませ汁を肉棒の先端部から溢れさせてゆきながら、少佐は小刻みに腰を揺さぶり、装填された種を念入りに、確実にイラストリアスが孕むように注ぎ込み続けてゆく。
小刻みに腰が揺さぶられてゆくたびに膣壁が擦られ、刺激され、強烈な絶頂の余韻に浸っていたイラストリアスはその刺激だけで軽く絶頂してしまい、肉棒が埋められている蜜壺全体を締めて、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。
「はい・・・。　私、妊娠、しちゃったと・・・思います♪　でもぉ・・・♪　もっと、もっと、私の、おまんこ、だけじゃなくて・・・お口にも、胸にも、お尻にもぉ・・・吐き出して、ください・・・♪」
以前のイラストリアスが聴いたら卒倒してしまいそうなセリフを吐いてしまいながら、自らに種を注ぎ込んでゆく小さな雄の頭を優しく撫でて、快楽に堕ちてしまった理性を感じさせない蕩けた声で無様におねだりしてしまう。
そんなイラストリアスの膣穴に、数十秒に渡って肉棒に溜まった精液を注ぎ込み続けてゆき、注ぎ込み終わるころにはスレンダーだった下腹部は妊娠を暗示させるかのようにぷくぅ、と小さく膨らんでしまっている事だろう。
「あはっ♪　もちろんだよ、じゃあ、ボクの汚れたこのおちんちん、綺麗にしてくれるかな？」
「もちろんです・・・ご主人様ぁ・・・♪」
念入りに確実に孕むように自らの胎内に精液を吐き出し続けていた雄の肉棒が膣穴から引き抜かれて、イラストリアスの口元に近づけられる。
イラストリアスは、何の躊躇もなく汚れた雄の肉棒を咥えて、舌先を肉棒に這わせて、まだまだ上手とは言えないものの、懸命に汚れを舐めとってゆく。
「ふふ、綺麗にしてくれてありがとう、じゃあ、次は四つん這いになって、お尻をこちらに向けてくれるかな？」
はい♪　肉棒が引き抜かれた口の端から涎を溢れさせてしまいながら、四つん這いになって尻を突き出してふりふり、と雄を誘うかの

ように揺らすイラストリアスに後ろから少佐は覆いかぶさり、獣のように貪ってゆく。

地下室には、堕ちた雌と、快楽に飢えた雄の互いの体を貪りあう獣のような声が暫くの間響き続けた。

堕ちる純白　結

海軍基地に存在する衛兵の詰め所。
カーテンが閉め切られた、薄い位部屋の中で、男女の荒い息遣いが聞こえてくることだろう。
1人の麗しい、出るところは出ている極上の肉体を持つ銀髪の長髪が特徴的な、お淑やかな印象を受けるお嬢様風の女性が男たちに囲まれて、犯されてしまっている。
立ったままの姿勢で雄を誘うかのようにがに股で下品に股を開き、雄を誘っていたその雌に、正面から衛兵の1人が抱き着いて、雌の口に自らの唇を押し当てて、
相手の舌と自らの舌を絡め合わせてゆきながら、既に数人ほどの衛兵の精液を注ぎ込まれてしまった膣穴を肉棒で穿ち、
結合部から愛液と精液が交じり合ったものを周囲に飛び散らせてゆきながら、容赦なくその体を蹂躙してゆく。
後ろからもまた別の衛兵がその雌をに覆いかぶさり、たっぷりと肉の乗った桃尻に手を添えて、膣穴と同じように、
先ほどまで肉棒によって穿たれていた後ろの穴の入り口をくぱぁ、と開いて、前の穴を犯している雄と同じように後ろの穴に肉棒を捻じ込み、
雌の負担など一切考えずに獣のように腰を揺さぶり、後ろの穴を穿ち、己の精液を吐き出そうと獣のように腰を揺さぶってゆく。
「あんっ、あんっ♪　逞しいですわ・・・♪　衛兵さん達のおちんちん・・・♪　もっと、もっと、淫乱なわたくしの事、いじめてくださいまし・・・♪」
雌は、イラストリアスは、両穴を肉棒で穿たれて、容赦なく蹂躙されてしまってるというのに、淫らに喘ぎ、更なる快楽を求めようとするかのように雄の興奮を煽るかのような淫語を口から吐く。
初めてみた時は清楚な、お嬢様のような印象を受けたイラストリアスの、淫らな本性は雄たちの興奮を煽り、責めが更に苛烈になってゆ

く。
ここに居る雄たちは皆、イラストリアスの卓越した性技によってすっかり骨抜きになってしまっているようだった。
女体にありつけなかった男たちのうち何人かはその光景を見て自らの肉棒を手で扱いている。
前の穴を占領している雄は何度も、何度も自らの唇を相手の唇に重ねてゆきながら、菊門に根元まで肉棒を埋められてゆくたびに大きく揺さぶられるたわわな果実を両手でしっかり鷲掴みにして、
大きく実ったその胸を卑猥に歪めてやりながら、自らの雄の欲望のままに乳肉を揉みしだき、重量感たっぷりの大きな果実に自らの手形を刻み込んでやりつつ、膣穴に精を吐き出そうと腰を揺さぶり続けてイラストリアスの体を貪り続けてゆく。
「まさか、イラストリアスさんがこんなに淫乱だなんて思いもしませんでしたよ・・・！　自分から俺たちの奉仕を申し出るなんて」
「あんっ、あんっ♪　はいっ、私、淫乱さんなんです・・・♪　もっと、もっと、衛兵の皆さんのぉ、精液、注ぎ込んでくださいましっ！　あっ、あぁっ♪」

アナルに根元まで肉棒を捻じ込んでいる、前の穴を犯している衛兵の男に比べて年上と思われる強面の男は、後ろの穴の強烈な締まりに口の端からくぐもった声を漏らし、
凄まじい名器っぷりに肉棒から精液を搾り取られるかのような錯覚を覚えてしまう事だろう。
「ぐぅっ・・・凄い締め付けだな・・・！　そろそろ後ろの穴に吐き出してやるぞ・・・しっかり受け止めろよっ・・・この変態が・・・！」
事実、少佐によってすっかり淫らに開拓されてしまったイラストリアスの菊門は第二の性器と言っても良いほどの名器具合で、
乱暴にねじ込まれてゆく肉棒の竿に腸壁を纏わりつかせて、菊門の入り口を強烈に締め付けて、肉棒の根元の部分を締め付けて、確実に雄の精液を搾り取ろうと乱暴に突き入れられ続けてゆく雄の肉棒に快楽を与え続けてゆく。

「あはっ、お尻の穴にぃ・・・出てますわぁ・・・♪　凄い勢い・・・♪」
　後ろの穴の具合に強面の男は絶頂へと押し上げられてゆき、両手でイラストリアスの細い腰を掴んで逃れられないようにしてゆきながら、腰を桃尻に打ち付け、ぱんっ、ぱんっ、と肉と肉がぶつかり合う淫らな音を周囲に響かせてゆきながら菊門を穿ち、蹂躙し続けてゆく。
　そして、菊門に根元まで何度も肉棒を捻じ込まれて、少佐によって開拓されてしまったアナルを容赦なく責め立てられて、イラストリアスも絶頂へと強制的に押し上げられてゆき、背筋をぴんっ、と逸らしてしまいながら、喉を震わせて嬌声を溢れさせる。
　びくっ、びくっ、と雄の腰が震えながら達した余韻に浸るかのように痙攣を繰り返すアナルの深い場所めがけて突き入れられてきた肉の槍を異物に纏わりつくかのように絡みついてくる柔軟性のある腸壁でぎりぎりと締め上げてゆき、奥を抉りつけた瞬間に子種を吐き出させ、
　入り口の窄みを強烈に締め付けてゆき、根元まで埋められた肉棒全体を締めあげるかのようにして尿道に残ってる種をも吐き出させようとしてゆく。
「あぁっ・・・♪　気持ちいいっ・・・♪　前の穴にも、もっと、もっと吐き出してくださいまし・・・♪」
　後ろの穴に勢いよく吐き出されてゆく粘っこい種の感触に、イラストリアスは恍惚とした表情を浮かべてしまいながら、自らを押し上げてゆく快楽に導かれて軽く絶頂に達し、膣穴に埋められた肉棒を更に締め付けて、雄の種を吐き出させようとしてゆく。
　後ろの穴も名器であると同時に、前の穴も後ろの穴に勝るとも劣らないほどの凄まじい名器で、雄の種を搾り取るのに特化した蜜壺で自らの膣穴を穿つ醜悪な肉棒から精液を搾り取ろうとしてゆく。
「あっ・・・今締め上げられたら・・・っ・・・っ・・・！」
　前の穴に肉棒を埋めて、乱暴に獣のように腰を揺さぶり続けていた新米の衛兵は自らの肉棒から精液を搾り取ろうとするかのような強

烈な刺激に耐えきれるはずもなく、呆気なくイラストリアスの膣穴に自らの種をたっぷりと吐き出してゆく。
どくんっ、どくんっ、音を立てて大量に吐き出されてゆく粘っこい子種汁はイラストリアスの何度も雄の種を注ぎ込まれて精液で埋め尽くされた膣穴を更に白濁で満たしてゆき、結合部から複数人の精液と愛液が交じり合った混合汁が肉棒をつたり、ぽたぽたと音を立てて床に零れ落ちてゆく。
雄二人に前後から責め立てられて、精液を注ぎ込まれてしまったイラストリアスは、淫らに口元を歪めて。
「えへへ・・・♪　もっと、もっと、淫乱な私に、お慈悲をください・・・♪」
自らを取り囲み、目の前で行われた凌辱劇に興奮して肉棒を膨らませている雄たちに更なる快楽を求めるかのように、すっかり快楽に堕ちた雌の声で懇願する。
両穴を犯していた雄たちが退くと、休みなしで行われた激しい行為によって足腰が立たなくなってしまったイラストリアスは、前のめりにどさり、と倒れて、大きく実ったたわわな果実を床に押し付けて卑猥に歪ませてしまいながら、様々な雄たちによって乱暴に掴まれ、揉みしだかれてしまったせいで赤い手形の付いた痛々しい桃尻を突き出すかのような無様な格好を雄たちに晒すことになった。
ごくり、と生唾を呑み込んで、イラストリアスを取り囲んでいた雄の1人が、尻を突き出すかのような格好で無様に隙を晒しているその雌に後ろから覆いかぶさり、何度も、何度も精液を注ぎ込み続けられてしまったせいで精液と愛液が止めどなく溢れる膣口に肉棒を押し当てて、全体重を込めて腰を前へと突き出してゆき、イラストリアスの昂りきった膣壁を乱暴にごりごりとこそぎ落とすかのように擦ってゆき、先ほどまで突きこまれていた雄の肉棒とは比べて細長い肉棒で子宮の入り口を抉りつけてゆく。
「あんっ♪　貴方のおちんちん♪　長くて、良いですね・・・♪　はいっ、その調子で、赤ちゃんの部屋、何度も、何度も抉りつけてください♪　私の事、気持ちよくしてぇ・・・♪」

後ろから覆いかぶさられ、文字通り獣のような姿勢のまま膣穴を踏みにじられ、蹂躙されてしまってるというのに、イラストリアスの顔は歓喜に満ち溢れていた。
後ろから覆いかぶさり、膣穴を細い肉棒で穿っている雄はその言葉に応えるかのように後ろから桃尻を両手でしっかりと掴み、この雌に自らの欲望を吐き出そうと腰を揺さぶり、肉棒を前後させて膣穴をかき混ぜ続けてゆく。
口にも肉棒が押し当てられ、イラストリアスはなんの躊躇もなくその肉棒を咥えて、舌先でぺろぺろと嘗め回してゆき、口内にも雄の種を吐き出して貰おうと肉棒にご奉仕し続けてゆく。
口だけではなく、イラストリアスの長い美しい銀髪の髪にも、両手にも肉棒が擦りつけられ、手に擦りつけられた二本の肉棒を両手を使って丁寧にご奉仕してゆく。
体全体を使って、雄にご奉仕してゆきながら、イラストリアスは快楽に溺れていった。

数時間後。
「うひゃあ　こいつは酷いね、何回位犯されちゃったんだろう」
少佐が、イラストリアスを迎えに衛兵の詰め所に入るころには、既に太陽は沈み、すっかり暗くなってしまっていた。
僅かにカーテンの隙間から差し込んでくる月の灯りが、快楽に堕ちた雌の体を照らし出す。
整った美しい顔は雄たちの種でドロドロに汚されてしまっており、口の端からは精液を垂らしてしまいながら、はぁ、はぁ、と何度もか細い呼吸を繰り返していた。
イラストリアス自身も１０回から先は数えてないほど、何回も犯されて種を注がれてしまった口は、数時間に及ぶ激しい輪姦によって雄を満足させる術を徹底的に覚えこまされてしまっており、数多の雄の種を受け止め続けた口元は淫らに歪み、自らのご主人様の声を聴いて

か細い呼吸を繰り返してゆきながら、嬉しそうに微笑んだ。
女の命と言えるほど長い銀髪は数多の雄たちの精液を受け止め続けてしまったせいでドロドロになってしまっており、すっかりその長い髪には雄の精液の匂いが染みついてしまってる事だろう。
髪だけではない、今のイラストリアスの体は、衛兵たちに数十回以上犯されて、汚されてない場所がないほどに精液によって汚れてしまっていた。
大きく実ったたわわな果実は雄の手形が幾つも刻み込まれて、その上から精液によって化粧が施されてしまっており、乳輪には歯形まで刻みまこれてしまっており、何度も、何度も数えきれないほど雄の種を注ぎ込み続けられてしまったせいで、そのスレンダーな下腹部も大きく膨らんでしまっている事だろう、ゆっくりと少佐は無様な姿を晒してしまっているイラストリアスに近づいて、軽く大きく膨れた腹部を足で押す。
その瞬間、濁流のように精液が溢れ出てゆき、膣壁を擦る激しい快楽で体をびくんびくんと痙攣させてしまいながら膣口から精液と共に潮まで吹いてしまっていた。
膣口から濁流のように精液を吐き出してゆき、度重なる絶頂でぐったりとしてしまっているイラストリアスの膣口がひくひくと痙攣する。
少佐に初めて犯された頃には、ぴっちりと閉じていた綺麗な膣穴であったそこは小陰唇が捲れ、ピンク色の花を咲かせてしまっているかのようで、そのピンク色の花の中心からはぽたぽたと精液を溢れさせ続けてゆきながら、膣口は開閉を繰り替えし更なる快楽を求めるかのように痙攣している。
後ろの穴も、散々徹底的に犯されてしまったせいで、綺麗だった窄みは大きく口を開けて、吐き出された精液を溢れさせてしまい、床に零れ膣口から吐き出された精液と合わさって淫らな水溜りを作ってしまっていた。
正しく満身創痍、しかしながらも、イラストリアスはやっと自らを迎えに来たご主人様の気配に、口元を歪めて、ゆっくり、ゆっくりと、

体を起こして、抱き着こうと近づいてくる。
　抱き着く寸前で、バランスを崩しかけたイラストリアスの体を優しく少佐は抱き留めてあげながら、労わるかのように精いっぱい腕を伸ばして頭を優しく撫でた。
「ご主人、様ぁ・・・♪　イラストリアスはぁ・・・頑張り、ました・・・よぉ・・・♪　衛兵の、皆さんに、満足してもらうために、おまんこも、お口も、お尻もぉ・・・♪　沢山、沢山、気持ちよくなって、もらって、せーえき、溢れちゃうぐらいまで、注ぎ込んじゃい、ましたぁ・・・♪」
「ふふ、楽しんでくれたようで何よりだよ♪　よく頑張ったねぇ♪　よし、頑張ったご褒美に・・・♪　たーくさん、犯してあげるね？」
「はい・・・ありがとう、ございい、ますぅ・・・♪　おまんこぉ・・・にぃ、出して、くださぃ・・・♪」
　抱き留められて、床に降ろされたイラストリアスは、がくがくと度重なる絶頂によって疲労し、痙攣を繰り返す体に活を入れて、股をゆっくりと大きく開いて、雄の肉棒を誘おうとする。
「ふふ♪　地下室で調教してた頃は、強情だったのに、今はもうすっかり淫乱さんになっちゃったね。　ああ、ごめん、淫乱だったのは元からだったよ♪」
　くすくす、と少佐は笑み浮かべて、手早くズボンとパンツを脱いで、正面から自らの肉便器に堕ちた雌に覆いかぶさり、衛兵たちのモノと比べて一回りも二回りも太く、そして５ｃｍ以上は長い雌を堕とすのに特化した巨根を精液が滴り、快楽を求めるかのようにひくつく膣口に押し当てて。
　すっかり淫らに開拓されてしまった、雄の肉棒の形に作り変えられてしまった蜜壺に腰を勢いよく、子宮の入り口めがけて肉棒を突き出してゆき、ごちゅんっ、と力強く思いっきり抉りつけてやると、イラストリアスは面白いようによがり、念願のご主人様の肉棒によって与えられる快楽の味に酔いしれてしまう。
「はいっ・・・♪　わたくしぃ、淫乱さんになっちゃいました・・・♪　淫乱なぁ、イラストリアスにぃ・・・♪　慈悲をくださいぃ・・・

♪ ご主人様のおちんちんで、衛兵さん達のおちんちんで穿られちゃって、イっちゃった変態おまんこにい、オシオキしてください・・・♪」

かつてのイラストリアスが聴いたら間違いなく言葉を失っていたであろう台詞を何の躊躇なく吐いてしまいながら、自らの牝穴を穿つ逞しい肉棒の味に酔いしれてしまう。

自らの膣穴を穿ち、快楽を与えてくれるご主人様の肉棒が愛おしくて仕方ない。

ご主人様の肉棒によって与えられる快楽は、衛兵たちによって与えられた刺激よりも数段強く。

容易くイラストリアスの体を頂へと押し上げて、輪姦され、汚されてしまったその体が誰のものなのか一層強くイラストリアスの体と心に刻み込んでいこうとする。

「あはっ、そうだね、今の君はぁ、どこに出しても恥ずかしくない淫乱な雌犬さんだよ？　娼婦の方が天職だったのかもね♪　でも、ボクが許可するまでは他の人とセックスしたりしちゃだめだよ？　君の体は、ボクのモノなんだからね？」

少佐もまた、イラストリアスの体が誰のものなのか分からせようとするかのように、卓越した性技でイラストリアスの体に断続的に快楽を刻み込んでいこうとする。

見た目は幼い指揮官であっても、その逞しい肉棒と鍛え上げられた性技は正に悪魔的な快楽を生み出してゆくことだろう。

逞しい肉棒が膣穴の浅い部分に存在する、もっとも敏感な場所であるGスポットを的確に突きあげ、体力の消耗してしまった身体に容赦なく叩きこまれる快楽に白濁で塗れた体を震わせながら絶頂へと押し上げられてゆくイラストリアスに間髪入れずに肉棒が抜ける寸前まで腰を引いて一気に子宮口めがけ肉棒を突き出してゆき、子宮口を思いっきり抉りつけてやって激しい絶頂に押し上げられて限界まで過敏になってるポルチオを責め立て絶頂地獄に叩き落してゆく。

「あんっ、あんっ♪　あっぁぁぁぁ♪　はいっ、イラストリアスのぉ、体とっ、心もぉ、ご主人様のものですぅ・・・♪　あぁぁっ・・・凄

いっ・・・あっ、ぁぁ♪」
先ほどの衛兵たちによって与えられた快楽とは文字通り比べ物にならないほど激しい快楽。
先程の輪姦によって消耗したイラストリアスは、その絶頂地獄に突き落とされるかのような快楽に自らの意識が堕ちつつあるのを感じる。
しかしながらも、意識がある間に、なおも快楽を得ようと歯を食いしばり、気絶してしまうのを耐えて、自らのご主人様の肉棒を酷使された膣穴で一生懸命締め上げて、子種を吸い上げようとしてゆく。
その懸命な奉仕が身を結び、びくっ、びくっ、と少佐は腰を痙攣させてしまいながら、絶頂が近いのかラストスパートをかけるかのように腰を揺さぶってゆく。
「あはっ、1人目の赤ちゃん産んだ後も、すぐに2人目を仕込んであげるからね・・・♪　っ・・・っ・・・♪　あっ、ぁぁ♪」
「はいっ・・・2人目もぉ・・・3人目も・・・孕んで、産んで・・・育てます・・・だから、だから・・・私の事・・・ずっと、傍に置いて・・・あっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
指揮官の肉棒が子宮口を思いっきり抉りつけると同時に子種汁が吐き出されてゆく、その瞬間に、イラストリアスの体は今日一番の絶頂へと押し上げられて、ぷっつりと意識が途切れてしまう。
体をぴんっ、と張りつめられた弦のように反らしてしまって、その次にがくがくと体を震わせてしまいながらぐったりと脱力してしまう。
ぐったりと脱力したイラストリアスの体にかくかくと腰を揺さぶり、念入りに子種を吐き出してゆきつつ、ふふ、とイラストリアスの気絶する間際に聞こえた声を聴いたのか、少佐は笑みを浮かべて。
「勿論だよ。　ボクは、奴隷への面倒見はいい方だからね。　ずーっと、ずーっと、傍に置いて、可愛がってあげるからね？　・・・あはは、聞いてないか、もう、ご主人様が満足してないのに、先に気絶しちゃうなんてダメな奴隷さんだね♪」
ぐったりと脱力したイラストリアスの白濁塗れの体をその小さな

体とは想像も出来ないほどの力で抱えて、その対面立位の姿勢で射精したばかりだというのに未だに硬さと大きさを保ったままの肉棒で串刺しにするかのようにして。
「まだ、君の体使わせて貰うよ？　えへへ♪　良いよね？」
当然、その問いには答えられるはずもない。
ぐったりと気絶して脱力したイラストリアスの体が、まるでオナホールを扱うかのように乱暴に上下に揺さぶられ始める。
当然、体格差もあり、幼い指揮官の顔はその胸の谷間に包み込まれることだろうが、胸の柔らかさと吐き出された精液の酷いにおいを感じながら、なおも指揮官はその膣穴を貪り続けてゆく。
初めてイラストリアスの膣穴を自らの肉棒で穿った時に比べて、流石に締まりは緩くなっていたものの、その代わりに無数に蠢く襞が肉棒に纏わりついてきて、子種汁を搾り取ろうと優しく肉竿に絡みついてくる。
蠢く無数の襞で肉棒を竿の部分から先端の部分まで包み込みながら、時折膣口をきゅっ、きゅっ、と強めに締め付けて雄の種を絞るために最適化されたその穴は極上の名器と言ってもいいもので。
「ふふ・・・♪　本当にいい体してるね、癖になっちゃいそう♪」
自らの肉便器になった、極上の牝の体を離さないようにするかのように、ぎゅっ、と正面から強く抱きしめて、その腰の動きを速めてゆく。
気絶してもなお体を貪られ続けるイラストリアスの口からは、体はしっかりと感じている事を示すかのようにくぐもった声が漏れ、気絶したまま何回か達してしまったのかびくびくと体を痙攣させてしまいながら肉棒に襞を絡みつかせてしまう。
「ほぉら、二回目・・・♪　元調教師のボクでも虜になっちゃいそうな体・・・♪　凄いよね、うん♪」
ごちゅん、と正面から抱き着くような姿勢のまま子宮の入り口を叩きつけ、人間オナホにたっぷりと子種を吐き出してやって、二回三回と腰を揺さぶり、未だに一切萎えてない肉棒の先端から子種を吐き出す。

「最初は、指揮官として雇われるのは拒否するつもりだったんだよ。
国に雇われるなんてごめんだーって思ってた、でも、今は雇われて正解だったと思うよ。　うん」
子宮の入り口を突き上げられて、ぐったりとしてるイラストリアスの膣穴から肉棒を引き抜き、優しくその場に降ろしてあげて、えへへ、と微笑みながら、不特定多数の精液で汚れてしまってる口だということは全く気にせずに、優しく自分の唇を押し当て、キスする。
唇同士が触れ合うかのような優しいキス。
そのキスを受けて、イラストリアスの頬が僅かに歪んだように見える。
「・・・ふふ♪　頑張ったご褒美、偉いよ。　それじゃあ、続きは部屋に戻ってからシようか？」
優しく頭を一撫でして、うんしょ、とその体をお姫様抱っこしてあげて、幼い指揮官は自らの私室を目指した。
自らの肉便器になった、記念すべき指揮官の部下一号と共に。

司令部への報告書より一部抜粋
イラストリアス級装甲空母1番艦　イラストリアス
調教に成功　反乱の気配なし
艦船を調教し、子を孕ませて産まれてきた子を艦船として育てる、と言うプランは実現の見込みあり。
次の艦船の派遣も求む

堕ちる純白編　完

白の想い

わたくしのご主人様であるメイ少佐は、少しお寝坊さんです。
お寝坊さんのメイ少佐の事を起こすために、私は少佐の、棚に艦船のプラモデル、や、漫画などが置かれた比較的男の子らしいお部屋に足を踏み入れて、まずは締め切ったカーテンを開けて、太陽の光を部屋に差し込ませて。
「指揮官さま。　もう朝ですよ、起きてくださいまし」
むぅ、今日はいい天気で、日差しが気持ちいいと言うのに、指揮官さまは可愛らしい寝息を立てたまま目を覚ましてはくれません。
指揮官さまの性奴隷になってから、こうやって毎朝起こすようにしているのですが、指揮官さまは毎回こうなのです。
もうっ、と私は少しだけ頬を膨らませながら、指揮官さまの布団の方に近づくと、指揮官さまの布団から手が伸びてきて、私の事を、イラストリアスの事を自分の布団の中に引きずり込んできました。
「きゃっ、し、指揮官さま、起きていたんですか!?」
「うんっ、おはよう♪　イラストリアスぅ～♪　良い朝だね、えへへ♪」
にぱっ、と窓から差し込む太陽のように、輝かんばかりの満面の笑みを浮かべながら、私に微笑んでくれる指揮官さまの姿は、一見すると女の子のように見えます。
綺麗な長い金髪は私の妹であるヴィクトリアスと同じほどの、背中にまで到達してしまいそうな長さで。
整った美しいお顔はかつて見た西洋風人形のように整っていて、ぱっちりと開いた金色の瞳も魅力的です。
一見すると、本当に女の子にしか見えない指揮官さまですけども、この明るい向日葵のような少年の秘密を、私は知っているのです。
「ね、イラストリアス♪　執務する前にぃ、ボク、溜まっちゃってさ。ねぇ、ねぇ、イラストリアス♪　ご奉仕して貰っていいかな？」
「・・・もぅ、一回、精子を出したら、執務してくださいね？」
くすり、と私は口元を歪めて、甘えるかのようにわたくしに抱き着

き、顔を谷間に埋めている指揮官さまの頭を優しく撫でてあげながら、指揮官さまの逞しい男根によって押し上げられて、テントを張ってしまっている寝巻のズボンの方に手を伸ばして、優しくズボン越しに指揮官さまの逞しいソレを優しく撫でて差し上げます。
「んぅ・・・♪　えへへ、イラストリアスも手で擦るの、上手くなったね？」
　むにむに、と私の、歩く時は少し邪魔な大きな胸を小さな手で掴んで、細い指先を埋めてゆきながら、手淫を褒めていただきました。
　ご主人様にお褒め頂く、それだけで私は自然と笑みが零れてしまいます。
　私の愛する指揮官様が、こうやって私の事を褒めてくださる、それだけで嬉しさで胸が一杯になってしまいそうです。
「・・・はい、毎日、指揮官さまのおちんちんに、ご奉仕させていただきましたから♪」
　装甲空母として、戦うために作られた艦船として、使命感に溢れていた頃を思い出して、寂しくなることも確かにあります。
　今ではすっかり指揮官さまの、ご主人様の肉便器になってしまった自分の事を過去の自分は見て、どう思うでしょうか。
　不甲斐ないと、怒ってしまうかもしれませんね。
　ですけど、私は幸せです。
「うん♪　イラストリアスの手、気持ちいいよ♪　今度は胸とお口を使って気持ちよくしてくれないかな？」
「はい、仰せの通りに♪」
　仰向けで寝転がった指揮官さまの男根の方に、上半身を近づけて、寝巻越しに擦られてしまったせいで先走りで濡れてしまってるズボンと、パンツをゆっくりと手で脱がせてあげて、指揮官さまのソレを露にさせてます。
　露になった、何度も私の事を踏みにじり、獣のように蹂躙したソレの先端から溢れる先走りの匂いを嗅いで、ごくり、と私は生唾を呑み込みながら、膣奥から蜜が分泌されてしまうのを感じてしまいました。

最初は、嫌で嫌で仕方なかった指揮官さまのおちんちんによって与えられる快楽でしたけども、今はすっかり私の膣穴は指揮官さまの肉棒の形に作り変えられてしまいました。
確かに、指揮官さまに、憎しみと言う黒い感情を抱いた事は、あります。
ですけども、最初は乱暴に蹂躙して、私の事を踏みにじってきた指揮官さまで、猿以下の存在だと軽蔑したこともありましたけど、少しずつ指揮官様の本当の内面が分かってきたような気がするのです。
「んぅ・・・ちゅっ・・・はむっ・・・ん、んぅ・・・♪　あむっ・・・んぅ・・・♪」
自らの大きな胸の谷間で、指揮官さまの大きなソレを包み込みながら、僅かに谷間から露出してしまってる先走りが溢れる先端に口元を近づけて、歯を当てないように細心の注意を払いながら、咥えて、舌先を纏わりつかせるかのように指揮官さまの亀頭に這わせてゆきます。
確かに、指揮官さまは、私の事をレイプして、嫌がる私の事を何度も汚しました。
ですけども、それは指揮官さまの本性ではなくて、本当の指揮官さまはこのように胸の谷間で肉棒を挟みながらご奉仕してゆく私の頭を優しく撫でて、労ってくれる優しいお方なのでしょう。
「ふふ、イラストリアスの大きなお胸、だーいすきだよ？　イラストリアスは邪魔だと思ってて、もしかしたらコンプレックスに思ってるかもしれないけど、ボク、大好きだからね？　イラストリアスの胸♪」
ああ、指揮官さまの優しいお手が私の頭を撫でてくれる・・・♪
これほど幸福な事はありませんわ♪
指揮官さまの亀頭に舌先を這わせて、指揮官さまの肉棒に更に気持ちよくなって貰えるように、横から胸を圧迫し、乳肉で指揮官さまのおちんちんの竿の部分をぎりぎりと締めてあげながら、上半身を動かして、指揮官さまのおちんちんを胸肉で擦っていきます。
私の事を認めてくれて、獣のように求めてくることはあって、時々衛兵さん達の性処理もお願いされることもありますけど、優しくして

くれる指揮官さまのことを、私はもう嫌う事は出来なくなっていました。
ストックホルム症候群、と言う言葉が脳裏に一瞬浮かびます、けど。
私の心に存在する指揮官さまへの想いは、愛情と劣情が混じありったたソレは、嘘ではないと信じたいのです。
「んぅ・・・んっ・・・ちゅっ・・はむぅ・・・♪　しゅきかん・・・しゃまぁ・・・♪　たくさん、お胸に、吐き出して、くださいまし・・・♪」
びくびく、と絶頂が近いのか痙攣し始めてしまってるそれを、搾り取るかのようにむにむにと私自身の胸で指揮官さまの肉槍の竿の部分を優しく包み込んでしまいながら、先端に吸い付いて、子種を吸い出そうとしてゆきます。
指揮官さまの男根から音を立てて粘っこい精液が吐き出されてしまい、吐き出されてゆき口内を満たしてゆく種を何とか飲み干そうとしてゆきますが、口元から零れてしまって私自身の胸を零れた白濁で汚してしまいますが、気にせずに必死にソレをしっかりとしゃぶり、尿道に僅かに溜まった精液すら吐き出させようと指揮官さまの亀頭に舌を這わせ続けてゆきます。
「んぅ・・・んぅ・・・♪　ふふ、気持ちよかったよ、ありがとね、イラストリアス・・・♪　でもぉ、ボク、やっぱり一回だけじゃあ満足できないし・・・♪　今度はおまんこ使っていいかな？」
指揮官さまの、その言葉の通り、粘っこい子種汁を私の口内から溢れてしまいそうなほどに吐き出し続けてしまったというのに、指揮官さまのおちんちんはまだ硬くて大きいままで、私の口から解放されたソレは未だに反り返り、満足してはなさそうでした。
「・・いえ、指揮官さま。　今日は、お尻の穴、使ってくださいまし・・・♪」
本当は、何時もみたいに獣みたいな姿勢のままおまんこを穿り回して欲しかったのですけど、今回はそうもいかない事情がありました。
私はベッドに手をついて、指揮官さまがお尻を使いやすいように尻を指揮官さまの方に突き出し、ふりふり、とお尻を振って、指揮官さ

まのことを誘惑してしまいます。
「・・・ふふ♪　今日はイラストリアスはお尻の気分なんだね？　分かったよ。　君のお尻、ボクのおちんちんで穿ってあげるね？」
指揮官さまが、お尻を突き出している私に後ろから覆いかぶさり、私の尻たぶを掴んで、くぱぁ、と開いてきました。
指揮官さまの逞しいソレの先端部が、私のアヌスの入り口に押し付けられて、勢いよく、指揮官さまが腰を前へと突き出したかと思うと、逞しい肉槍がアヌスの壁を強引に押し広げてゆきながら、奥へ奥へと乱暴に埋められて行きます。
アヌスの壁を強烈に擦りつけてゆきながら奥を抉りつけて、壁越しに子宮の辺りを責め立てて来るその刺激に耐えきれることは出来ず、指揮官さまが達するよりも先に絶頂へと押し上げられてしまって、全く弄られていない膣穴から愛液を噴き出してしまいながら、ただ与えられる快楽に喘ぐだけの尻穴奴隷に堕ちてしまいます。
「あんっ、あんっ♪　指揮官さまっ、激しいっ・・・あっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
かつてはお尻の弄る、なんてことを想像すら出来ませんでした。
でも、お尻の快楽を教えてくれたのは指揮官さまで、この快楽を知ってしまった私は虜になってしまったのです。
アヌスの壁を激しく擦って、奥を何度も、何度も抉りつけてくるその逞しい肉槍で抉りつけられるたびに私は尻穴から背筋を駆け上がって脳天まで突き抜けてくる妖しい快楽に、私は容易く絶頂へと押し上げられてしまい、淫らに喘ぎ続けてしまいます。
気持ちいい、気持ちいい、他に何も考える事が出来ない、絶頂地獄とも言ってもいい程の快楽の暴風に晒された私はただ指揮官さまのおちんちんを締めあげて、その暴風が去るのを待つだけしか出来ません。
「ふふっ・・・♪　イラストリアスってば淫乱だね♪　お尻の穴でここまで気持ちよくなれるなんて、やっぱりイラストリアスは淫乱の素質があったよ♪　変態のイラストリアスには～、オシオキしてあげないと・・・ねっ！」

「あっ〝あっ〝♪　あああぁあっ〝あっぁ♪　いっ、っ!?」
獣のような喘ぎ声を漏らし、髪を振り乱して悶え続ける私の尻に衝撃が走ります。
再び衝撃が走り、小気味良い音が部屋に響いた時に、私は尻が指揮官さまの手でぶたれていることに気が付きました。
何度も、何度も、腰を獣のように指揮官さまは揺さぶり続けてゆきながら、指揮官さまの手が私の尻を叩いてゆくたびに、私は自分でも信じられない事に、快楽を感じてしまっていたのです。
指揮官さまの可愛らしい手が私の体に指揮官さまのモノだという証を刻み込んでくださる、それだけで幸福感で一杯になった私は絶頂へと達してしまいそうになってしまいます。
「ふふっ♪　お尻叩かれてるのに、気持ちよくなっちゃってるの？お尻叩かれるようになってから、おまんこから蜜が派手に溢れちゃってるよ？」
「はいっ、指揮官さまぁ・・・♪　私は、お尻を叩かれてしまってるのにぃ、感じてしまってる淫乱の変態ですぅぅぅぅぅぅ♪」
私のその言葉を聞いた指揮官さまは、一層強く私のお尻めがけて手を叩きつけて、ラストスパートをかけるかのように腸壁を強烈に擦りつけて、私の体に快楽を刻み込んでゆきながら、最奥を思い切り突き上げて、指揮官さまの肉槍から熱い精液が吐き出されてゆき、私の不浄の穴を白く染め上げてゆきます。
気が付いたら、私は悲鳴のような喘ぎ声を漏らして、背筋を反らしてしまいながら今日一番の絶頂へと押し上げられてしまいました。
「あっ・・・ぁぁっ・・・♪　指揮官さまのせーえきがぁ・・・私のお尻の奥ぅ・・・叩いてぇ・・・♪」
だらしなく口の端から涎を垂らして、アヌスを埋め尽くしてゆく熱い精液の感触に身悶えてしまいながら、かくかくと指揮官様の腰が揺さぶられて念入りに注ぎ込まれてゆき、ぐったりと上体をベッドに沈めてしまってる私に、指揮官さまは肉棒に溜まった精液を注ぎ込み終わった後にアヌスから肉槍を引き抜いて、私の頬を優しく手で撫でてくださいました。

「・・・ふふ♪　これで良い気分で目覚められたし、今日も一日頑張るよ。　ありがとね、イラストリアス♪」
　頬を緩めて、ありがとうございます、と指揮官さまに言いながら、上目遣いに見上げて。
「ふふ・・・♪　ええ、今日一日、頑張って行きましょう。　秘書艦として、今日も指揮官さまの事、お支えしますよ」
「うん、ありがとね、イラストリアス！　・・・でも、一つ質問があるんだけど良いかな？　なんで今日はおまんこじゃなくてお尻だったの？」
　その言葉を聞いて、くすり、と私は笑みを浮かべてしまいながら。
「実は、私、指揮官さまの赤ちゃん、妊娠してる事が分かったんです」
　そう言って、陽性反応が出てる妊娠検査薬を見せます。
「・・・そっか、えへへ、良かったぁ。　・・・でもさ、なんでボクの赤ちゃんだってわかるの？　衛兵さんたちにも犯されちゃったのに」
　くすり、と微笑み。
「指揮官さまは、分からないかもしれませんけど。　誰の種で妊娠、しちゃったってのは、雌としての本能なのか、何となく私、分かってしまうんです」
　あの時、私の赤ちゃんの部屋の壁を叩きながら直接子宮内に注ぎ込まれてきた粘っこい精液によって卵子が蹂躙され、逞しい雄のモノにされてしまうという強烈な快楽は、今思い出すだけでも自然と股が濡れてしまいます。
　それに、と私は続けて。
「・・・私の事を孕ませて、ママにしてくれるのは指揮官さまだけな気がするんです。　指揮官さまの赤ちゃんの元以外だと、私、妊娠しないかなって・・・。　だって、私の体は貴方のものなんですから♪」
　私の事を本当に悦ばせてくれて、雌としての本能のままに雄として求められるのはメイ少佐だけな気がします。
　他の男の人に屈服させられる自分の姿、と言うものは、どうしても想像が出来ませんでした。
　その言葉を聞いて、珍しくメイ少佐は頬を赤らめながら、その赤ら

んだ頬を隠すかのように私の方に抱き着いて。
「・・そ、そっか、赤ちゃん、ボクの赤ちゃん孕んじゃったんだ。　・・・ちょっと、嬉しいな」
　照れくさそうにそう呟く指揮官さまの頭を優しく撫でてゆきながら、私のお腹に顔を埋めて頬を擦りつけて甘えてくる指揮官さまといるこの時間を暫く楽しむことにします。
　この幸福な時間がずっと続けばいいのに、と思いながら、ふと時計の針を見ると、既に１０時を指していました。
　大遅刻です。
「しっ、指揮官さま！　もう朝の１０時ですよ！　書類仕事しないとまずいですわ！」
「・・・え、マジ？　もうこんな時間!?　早く執務室に向かおうっ！」
　大慌てで寝巻から着替えて制服に身を包む指揮官さまの姿を見ながら、私も精液で汚れた胸をタオルで拭い、慌てて身だしなみを整えます。
「指揮官さま、朝ご飯用意して持っていきますわね！」
「・・・ああ、うん、ありがと・・・」
　顔を青ざめさせて微妙な顔をする指揮官さまの姿に首を傾げつつ、私は身だしなみを整えて、キッチンへと向かうのでした。

黒の堕ちる時　起

今日から自分が配属されることになる海軍基地の門をちらり、見上げ、ゆっくりと歩を進めてその門を通る艦船の姿に、門を守っていた若い衛兵2人は見とれてしまっており、暫く敬礼も忘れてこの基地配属になった美しい女性に視線が奪われてしまっていた。

自らに視線が奪われてしまっている衛兵2人を見ながら、くすり、と口元を僅かに歪めて微笑むその艦船の名前はプリンツ・オイゲン。

技術の国、鉄血が誇る重巡洋艦の一隻で、今日からここに配属されることになったのだ。

1人衛兵の視線が、薄布越しに形が分かるオイゲンのきゅっ、と引き締まっていながら一目見るだけで柔らかそうだと思える桃尻と、すらっとした太股の方に注がれ、もう1人の衛兵の視線はオイゲンの美しい横顔と、露出の多い服の横から見える白い果実の横側と胸に存在するほくろの方に目が行ってしまっていた。

そんな2人の衛兵を衛兵たちのまとめ役と思われる壮年の男性が後頭部を叩いて叱りつけて、慌ててその2人はオイゲンに敬礼しなおす。

オイゲンは後頭部を叩かれた若干まぬけな衛兵と、苦労が多そうな隊長に蠱惑的な微笑を浮かべ敬礼を返しながら、こう思った。

(男って、本当に単純ね。そんなに私の胸と尻が気になるのかしら？

女である私には理解できないわねぇ)

そう、心の中で思いながら、新しく作られたばかりと聞いては居るものの、それにしては人が少ないように感じられる海軍基地の司令部を目指して足を進めてゆく。

勘の鋭いオイゲンは、妙ね、と感じるかもしれないが、指揮官への挨拶は済ませようと、司令部に到着したら扉を開いて、執務室へと向かう事にした。

廊下から漂ってくる匂いは花の香りの芳香剤の匂いに混じり、僅かに異臭がある部屋から、今から入ろうとしている執務室から漂ってい

ることにオイゲンは気が付いた。
「(この匂い・・栗の花と、女性の蜜が交じり合ったものかしら？　・・・私の勘違いだと良いんだけど、もしかしたらここの指揮官は時と場所を弁えられないやつかもしれないわね)」
　セクハラされないと良いけど、と扉の向こう側にいる人間に聞こえないように小さく呟き、こんこん、とオイゲンはドアをノックする。
　すると、少女のような可愛らしい声でどうぞ、と帰ってきて、オイゲンはドアノブに手をかけて、ふむ？　と僅かに首を傾げながらドアを開けて、中へと足を踏み入れる。
「やぁ、よく来てくれたね。ボクの名前はメイ。階級は少佐だよ。ここの指揮官をやってるんだ、よろしくね！」
「……へぇ、ここの海軍基地は坊やが指揮官をやってるのね。」
　ドアを開けて、中で笑顔を浮かべながらこちらを見つめてきた少女のように見える指揮官の方に視線を向ける。
　オイゲンは、今日から自らの指揮官となる少年の容姿にまず驚いた。
　腰のあたりまである長い髪は窓から差し込んでくる太陽の光を反射し、さながら光輝いてるように見えて、お人形さんのように整った美しい顔は満面の笑みを浮かべて、さながら向日葵が咲いたかのような快活な笑みでこちらを歓迎してくれている。
　正直、予め自らが配属される指揮官の事を男性だと知らされていなかったら、少女だと勘違いしていたに違いない。
　動揺を隠すべく、こほん、と一つ咳払いして。
「坊や。　メイ少佐ね。　ええ、よろしく。　私の名前は重巡洋艦、プリンツ・オイゲンよ」
「うんうん、オイゲン。　長旅ご苦労様、さぁさぁ、ソファに座って？　疲れたでしょう？」
　正直、どんなセクハラ野郎かと身構えていたオイゲンは、自らの姉であるヒッパーと似たような背丈で似たような見た目をしている指揮官に対してすっかり油断してしまっていた。
　まさか、こんな少女のような少年が執務室の中で堂々と行為に及ぶ

とはオイゲンにはどうしても思えなかったのだ。
なので、ソファに座って、差し出されたコーヒーも、当然特に警戒もせずに口を付けて飲んでしまった。
目の前でにこにこと微笑む少年の本性にも気が付かずに。
「・・・あれ・・・なんでこんなに急に・・・眠く・・・。　これ・・・まさか、睡眠・・・薬・・・？」
どさり、とコーヒーの入ったコーヒーカップを床に落としてしまって、割ってしまいながら、オイゲンの体から自らの意志に反して急激に力が抜けてゆき、そのまま横にソファに倒れこんでしまう。
その姿を見ながら、指揮官はにこりと笑みを浮かべた。
「ふぅ。　この見た目って本当に便利。　ささ、寝てる間に色々と準備しちゃおうっと」

「これで準備完了。　今回はお尻の穴を重点的に開発してあげないとねー」
ふぅ、と準備の終わった指揮官は一つ息を吐いて、目の前に晒しだされたオイゲンの体の方に視線を向ける。
ここは執務室の地下に存在する艦船を調教し、子を孕ませるための『建造ドッグ』で、哀れな事に油断して睡眠薬入りのコーヒーを飲んでしまって意識を失ってしまったオイゲンは、目には目隠しを付けられ、両手を天井から垂らされた鎖に繋がれて、一糸まとわぬ姿で捕食者にその男の視線を釘付けにしてしまう見事な体を晒してしまっていた。
そして、未だに意識を失ったままのオイゲンに向けて、ゆっくりと指揮官は近づいてゆき、後ろに回り込んで、何時ものように胸から責め立てるのではなく、胸と比べても十分肉の乗った桃尻の方に手を伸ばし、むにむにと桃尻に指先を埋めていこうとする。
「・・・おお、本当にオイゲンちゃんのお尻、良い尻してるねぇ♪」
細い指先を食いこませるたびに、雄を喜ばせるかのように柔軟に細い指先を受け止めてしまっている桃尻に指先をぎりぎりと跡が出来

てしまいそうなほどの強さで食い込ませてゆきながら、くぱぁ、と尻たぶを開いて、後ろの穴の入り口を外気に晒させようとしてゆく。
オイゲンのアヌスの入り口は綺麗に閉じており、恐らく性経験どころか自分で触った事すらないだろう。
綺麗に閉じた菊門は地下室の空気に触れてびくり、とこれからされる行為に慄くかのように軽く震えてしまっており、その僅かに震える侵入者を拒むかのように硬く窄みが閉じているアヌスの入り口に少佐はねっとりとした視線を浴びせながら、にぃ、と口角を僅かに歪めた。
「それじゃあ、まずはお尻の穴をゆっくり解してあげるね？」
しっかりと尻たぶを小さな両手で掴んで、くぱぁ、と外気に晒されてしまってる菊門に向けて何の躊躇もなく、慣れた様子で口を近づけて、後ろの穴の入り口に小さな舌先を押し付けて、アヌスの皺に舌を這わせて嘗め回していこうとする。
熱い少佐の舌先によって舐られることになったオイゲンのアヌスは、舌が這わされる窄みをひくひくと引く付かせてゆきながら、自らの体に初めて与えられるであろう後ろの穴を舐められるという異常な刺激にびくっ、と体全体を震わせて慄いてしまう。
不慣れな刺激に慄いてしまっているオイゲンの体を見て、後ろの穴の入り口に舌を這わせている少佐は少し苦笑いしてしまいながら、ゆっくり、ゆっくりと舌先を尖がらせて、舐められて僅かに解れてきた後ろの穴の窄みに舌先を埋めてゆき、更に刺激を与えていこうとするが、その時オイゲンの体が激しく暴れ始めだした。
「ひぃっ・・・!? な、何を・・・いやっ、やめっ、いやぁぁぁぁぁぁ!?」
菊門に与えられる妖しい刺激に、睡眠薬の利きが悪かったのか、オイゲンは目を覚まし、じたばたと暴れて逃れようとするが、両手を拘束している手錠は無情にも外れる事はなく、ゆっくり、ゆっくりと埋められてゆく指揮官の熱い舌先が腸壁に纏わりついて、舐めるかのように舌が動いた瞬間に、自らが経験したことのないような強烈な刺激に暴れようとする体の動きが止まり、指揮官に隙を晒してしまう。

蠱惑的な見た目をしている割には男性経験の全くなかったオイゲンにとっては、菊門に与えられる未知の刺激への耐性などあるはずもなく。

指揮官の熱い舌先がまだまだ解れてない硬いアヌスを解きほぐすかのように腸壁に纏わりつくかのようにして押し当てられて舌が動いてゆくたびに、普段のクールなオイゲンからは想像も出来ないほどの見た目年齢相応の可愛らしい悲鳴をあげてしまいながら、きゅうぅっ、と菊門に埋められている異物を排除しようとするかのようにアヌスの入り口を締めていこうとする。

「んぅ・・・んっ、ちゅっ・・・ん・・・んぅ・・・♪」

「っ・・・！　指揮官っ、あんた、ねぇ・・・！　これ、どういうことなのか説明して・・・ひぃいいいいいぃ!?　そこっ、舐めちゃだめぇぇぇぇぇぇ♪」

菊門に舌先を挿入し、一心不乱に嘗め回してゆく変態の正体が指揮官しかいないということに気が付いたオイゲンは、たまらず抗議しようとするが、解れてきて、少佐の巧みな舌技に少しずつ開拓され始めたアヌスの性感帯に舌が這わされた瞬間に、抗議しようとしたその言葉が快楽によって遮られてしまい、きゅうぅっ、とアヌスに埋められた舌先を締めあげてゆきながら未知の快楽に身悶えてしまう。

オイゲンの心に、幼い指揮官によって排泄の為に存在している穴を良いように使われて、あまつさえそれによって快楽を感じてしまっているという事実が重くのしかかってゆき、鉄血艦としてのプライドと、戦うために作られた艦船としての誇りが音を立ててへし折れそうになるが、何とかオイゲンは必死に歯を食いしばり、菊門に与えられるその刺激を耐えようとする。

しかしながらも、指揮官の責めはオイゲンの耐えようとするその意志を容易にへし折って行った。

ぎりぎりとオイゲンのたっぷりと肉の乗った桃尻に指揮官は細い指先を食いこませて、ぎりぎりとこの尻は自らのモノだという証を刻み込むかのように掴まれた跡を刻み込んでゆきながら、舌を尖がらせて指揮官の舌技によって十分解れてきた腸壁の性感帯を突き、舐り、

強烈に刺激し続けてゆき、オイゲンの体に容赦なく菊門陵辱によって与えられる快楽を刻み込んでゆき、絶頂へと誘おうとしてゆく。
「いやっ、いやぁぁぁ・・・！　お尻でなんて・・・イきたくないっ・・・！　やめてぇっ、指揮官！　お尻舐めるのやめてえええええええええ！」
必死に両手の手錠の拘束をがちゃがちゃと音を立てて外そうとするが、艤装が外され筋力が普通の女性程度に落ちてしまったオイゲンには逃れるすべなどない。
誇り高き鉄血艦としての意地と、プライドが何とか絶頂へと押し上げられてしまいそうになるのを耐えようとしてゆくが、陥落は目前であった、オイゲンの豊満な体が今まで感じたことのない尻穴絶頂への期待に震えるかのようにびくびくと動き、雄を誘うかのように腰が動いてしまう事だろう。
必死に絶頂へと押し上げられまいと耐えるその姿は流石は鉄血が誇る破られぬ盾の姿であったが、ついにその抵抗が終わる時がやってきた。
「い・・・　や、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　いやっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪　っ、っっっっっ♪」
明らかに自分よりも年下で、幼い少女のようにしか見えない指揮官によってアヌスを責め立てられて、腸穴の中を指揮官の唾液塗れにしてしまいながらオイゲンはびくっ、と背筋を反らしてしまいながら強烈な尻穴絶頂へと押し上げられてしまった。
全く弄れていない、指先すら触れてない膣穴からは勢いよく愛液が噴き出して、アヌスに熱い舌先を埋めたままの指揮官の体を汚してしまい、体全体をびくびくと痙攣させてしまう度に揺れ動くオイゲンの桃尻に指揮官の細い指先が食い込み、柔らかな尻肉をこねくり回すかのように揉みしだいてゆき、その尻肉を玩具のようにして扱って感触を楽しんでゆく。
びくっ、びくっ、と体全体を痙攣させて、快楽に耐えようとしてしまった分、皮肉な事に絶頂時の衝撃が強くなり、アイマスクの下に隠された普段は強気な光が宿った目から光を無くしてしまいそうにな

りながら、オイゲンは絶頂の余韻に浸りつつ死にたくなっていた。
「あっ・・・あっ・・・ぁぁ・・・♪」
プライドが音を立てて崩れていく音を感じる。
幼い少年に尻穴を好き勝手に弄られて、絶頂へと押し上げられてしまった自分の体への嫌悪感と、背筋に氷が押してあられたかのような絶頂感に体を震わせてしまいながら、舌が引き抜かれた菊門の入り口をひくつかせてしまいながら絶頂の余韻に浸ってしまう。
「あはっ、初めてのお尻の穴だったのに、凄いイキっぷりだったね♪」
指揮官の舌先が引き抜かれて、やっと尻穴に与えられていた刺激から解放される。
深呼吸を繰り返して、何とか呼吸を整えようとする。
少しだけ余裕が戻ってきたオイゲンは、言葉を紡ごうと口を開いた。
「・・・っ・・・！　あんた、ねぇ！　なんのつもりでこんなことしてるのよ！　言っとくけど、私を尋問して得られる情報なんて全くと言ってないわよ？」
視界が奪われつつも、艦船としてのプライドが踏みにじられてしまいそうになりつつも、強気な態度を崩さない。
まだ、余裕がありそうだ、指揮官はそう思いながら、更なる菊門調教を行うべく、調教道具の置かれた棚の中から、くちばしのような形をしたクスコを取り出し、にやり、と笑みを浮かべた。

黒の堕ちる時　承

ぞくり、とした寒気を感じた。
視界が奪われてしまっているオイゲンは、指揮官が手にしたそのくちばし状のクスコの形を確認することは出来ない。
しかしながらも、女としての直観か、急激に寒気を感じ始めたのだ、嫌な予感がする。
ステンレス製の嘴に潤滑油となるローションを塗りたくってゆきながら、少佐は屈託のない笑みを浮かべて、猛烈な寒気を感じて震えたプリンツの事を見つめた。
はてさて、嫌な予感というものはどうしてこんなにも当たってしまう物なのだろうか、オイゲンの嫌な予感の通り、舌でよく解されたオイゲンの菊門の入り口に、ぐりぐりと押し当てて、ひっ、と怯えるかのような悲鳴を漏らすオイゲンの事を無視し、ステンレス製の嘴をゆっくりとオイゲンの菊門に埋めてゆく。
「ひっ、いっ、いやぁ！　何よこれっ、冷たい・・・!?　だ、だから、私を尋問しても何も得られないわよ!?　さっさと開放なさい！　い、今なら許してあげるからぁ！」
「ん？　尋問？　ボクにはそんなつもりは無いんだけどね？　えへへ♪　君の事を調教して、ボクの虜にしてあげるのがボクの目的なんだよー？　暴れないでね？　後ろの穴、裂けちゃうかもしれないよ？」
自分を調教する？　その言葉を聞いて、寒気が走るのを感じながら、暴れようとしたオイゲンは裂ける、と言う不穏な言葉を聞いて体を震わせて何とか力を振り絞って逃れようとしていた体の動きを止めて、メイ少佐のされるがままに。
ステンレス製の嘴が菊門に埋められて、めりっ、めりっ、と音を立ててゆっくり、ゆっくり、細心の注意を払いながらそのステンレス製の嘴がオイゲンのアヌスの入り口を割り拡げてゆき、菊門の奥まで入り込んできた空気の冷たさにオイゲンは身震いした。
当然、舌とは比べ物にならないほどの強烈な圧迫感を感じる事だろ

うが、先程の暴れたら裂ける、と言う言葉を聞いてオイゲンは動く事すらままならない。
「あっ・・・ぐぅっ・・・裂けるぅっ・・・やめてぇっ・・・！　私の事なんて、調教しても無駄よぉ・・・！　ぜ、絶対に、あんたなんかに屈しないんだからぁ・・・！」
「あはっ、威勢がいいね。　その威勢がどこまで続くか楽しみだよ♪　おー、凄い凄い♪　君のアヌスは本当に締まりがいいねぇ、正しく極上の尻。　是非ともボクのモノにしたいものだよ♪」
　めりっ、めりっ、と音を立ててクスコがアヌスを押し拡げてゆくたびにオイゲンは苦痛に喘いでしまう。
　しかしながらも程よく肉が付いて引き締まった極上の尻は、艦船特有の頑丈さも相まって、クスコによるアナル拡張によく耐えていた。
　ついにゴルフボールほどの大きさまでアヌスの入り口を押し広げられて、菊門の最奥までメイ少佐に覗かれてしまう事になる。
　オイゲンの割拡げられた菊門の入り口から眺める事が出来る腸壁は、オイゲンの口とは裏腹に快楽を求めるかのようにピンク色の壁を物欲しげにひくひくとひくつかせてしまっていた。
「ふふ、綺麗なアヌスー♪　おちんちん受け止めるのにぴったりだね♪」
「いやぁ・・・！　いやぁっ、見ないでッ、見ないでぇ！」
　当然、オイゲンにも菊門が割り開かれて、自らのアヌスの奥まで眺められてしまうということは、メイ少佐の言葉から理解してしまうとだろう。
　しかしながらも、逃れることなど出来るはずもない、ただ、幼い少女のような見た目をした悪魔によって自らの排泄口を良いようにされるという事を突き付けられて、折れかけていたプライドが粉々に打ち砕かれてしまいそうになるだけだ。
「さてと、それじゃあオイゲンちゃんのお尻の穴、本格的に調教してあげようかな♪　ねぇねぇ、視界が塞がれちゃってるから～、何されちゃうか分かんないでしょ？　えへへ♪　可愛い声で鳴いてね？」
　アヌスを割り開くかのように挿入されて、ゴルフボールほどの大き

さまで入り口を拡張されてしまった、腸壁まで丸見えのオイゲンのアヌスに、クスコと同じように棚から持ってきた耳かきのように先端が曲がっている綿棒ほどの太さの細長い棒を取り出して、ひくひくと快楽を求めるかのようにひくつかせている腸壁にゆっくりと近づけ、曲がった先端部を突き立てて、引っ掻き回すかのようにその棒を上下に揺さぶり、オイゲンのまだまだ未開拓の菊門の性感帯を開拓していこうとする。

「ひっ、あっ、冷たいのがお尻の壁にぃ…♪　っ…あっ、ひっ、ぁぁ♪」

自らの腸壁をくにくにと柔らかいものが擦られるような音を僅かに響かせて、腸壁を耳かきのように先端が曲がっているソレを突き立てられながらかき混ぜられてゆくたびに、全く弄られてないはずの膣穴の入り口から愛液を溢れさせてしまいながら、視界を塞がれているオイゲンは頭を振り、その刺激から逃れようと腰を動かそうとするが、体を動かしてしまったせいで更に強く曲がっている部分が腸壁に突き立てられる形となり、余りに激しい刺激に勢いよく膣穴から蜜を溢れさせて軽く達してしまう。

「あはっ♪　軽く棒でかき混ぜちゃっただけなのに、もうイっちゃったの？　変態さーん♪」

菊門をかき混ぜられて軽く達してしまったオイゲンに対しての追撃は苛烈であった。

絶頂に押し上げられて過敏になっている腸壁に曲がっている先端を突き立ててゆきながら、少佐はにやりと笑みを浮かべて、もう片方の手を懐に突っ込んだ。

「それじゃあ、二本目も行っちゃおうか？　あはっ、簡単に音をあげちゃダメだよ？」

「に、二本目なんて無理いいいいいいいい！　いっ、ぁぁぁぁ♪」

空いている片方の手に、現在、オイゲンの腸穴を責め立てている棒と似たような、鉄製の、しかしながらも違う点は先端部が曲がっているのではなく無数の棘が生えているソレを取り出して。

その無数の棘は幸いなことに鉄製ではなくてゴムで出来た柔らか

いものであったが、もしそんなモノで過敏になってしまってる腸壁を擦られたらどうなるのかは想像するのは容易だろう。
一つの鉄製の小さな棒だけでも強烈な快楽に喘いでしまっていたオイゲンにとっては、二本目の棒によって与えられる快楽は想像を絶するものであった。
元々排泄口としての役目から過敏であった腸壁は軽く絶頂に押し上げられてしまったせいで更に過敏になっており、ゴム状の棘が無数に生えているその棒で腸壁を擦られた瞬間に、無様に再び絶頂へとオイゲンは押し上げられて、膣穴から勢いよく愛液を噴き出してしまいながら、背筋を反らし、体全体を使って絶頂へと押し上げられたことを示す。
「あはっ、引っ掻き棒はもっと種類あるからさ、沢山楽しんでね？」
「ひぃっ、もう、やめ、いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁ！」

数十分後。
「えへへ♪　どうだった？　気持ちよくて本当に死んじゃいそうになっちゃったでしょ？」
「あっ・・・♪　あっ゛、ぁっ・・・♪」
足に力が入らずに、両手を拘束している手錠に吊るされるような形で、ぐったりとしてしまってるオイゲンの姿があった。
アヌスに埋められていた、先端が二股に分かれている引っ掻き棒と、先端部にゴム状の棘が生やされて、更にその先端部を振動させることができる電動引っ掻き棒を引き抜き、すっかり解れてしまったアヌスからクスコを取り外してやって、アヌスを異物から解放する。
「・・・あっ・・・ぅ・・・」
菊門から異物を引き抜かれて、オイゲンの口からは安堵のため息と、更なる快楽を期待してしまっていたのか僅かに残念そうな声が漏れた。
そして、オイゲンのアヌスは異物が引き抜かれてしまったというのに、未だに大きく口を開けてしまっている、拡がってしまった先ほど

までは綺麗に閉じていた後ろの穴の窄みを物欲しそうにひくつかせて快楽を求めてしまっていた。
「ねぇ、オイゲンちゃん、そろそろこれが欲しかったでしょ？　たーくさん気持ちよくしてあげるからね？　ふふ♪　イき狂っちゃいなよ♪」
　既に大きくテントを張ってしまっていた指揮官のズボンのベルトがゆっくりと外されて、ズボンと一緒に脱いだパンツから屹立した、数多の女を雌に堕としてきた凶悪なペニスを外気に晒す。
　竿の部分に血管の浮き出た、赤黒い凶暴なペニスの先端部を、すっかり入り口が押し拡げられてしまって、拡張されてしまった後ろの穴の入り口にぐりぐりと２０ｃｍ以上はありそうな長さのペニスに相応しい小さな子どもの握りこぶしぐらいはありそうなその肉棒の先端部を押し付け、押し付けられた肉棒の熱さに僅かに悲鳴を漏らして、何とか絶頂し続けてすっかり体力を消耗してしまった身体を揺さぶって逃れようとするオイゲンの桃尻をしっかりと掴んでやりながら、一気に少佐は腰を前へと突き出していった。
「ひ、熱いのが、熱いのが入って・・・いっ、くぅぅぅぅぅ♪　あっ、ぁぁぁぁぁぁぁ♪　あ゛っ、あ゛っ！」
「あは♪　凄い悲鳴♪　うん、よーく解した甲斐あったね♪　オイゲンちゃんのお尻い、ボクのおちんちんに凄く絡みついてくるよ？」
　すっかり解されてしまったオイゲンの菊門は、勢いよく根元まで突き入れられてゆく少佐の太い肉棒に腸壁を纏わりつかせて、子種汁を搾り取ろうときゅっ、きゅっ、と肉棒に纏わりつかせた腸壁を締めあげて子種汁を搾り取ろうとしてゆきながら、最奥を肉棒で抉りつけられた瞬間にオイゲンは獣のような悲鳴を口から漏らしてしまいながら自らの体に襲い掛かってくる快楽には抗う事は出来ずに絶頂へと突き上げられてしまった。
　獣のような、地下室中に響いてしまいそうな悲鳴を漏らしてしまっているオイゲンの桃尻に指揮官は細い指先を食いこませて、逃れられないようにしてやりながら、自らが開拓した腸壁の性感帯めがけて的確に肉棒を突き入れてゆき、オイゲンの体に二度と忘れられないよう

な凄まじい快楽を刻み込んでいこうとする。
肉棒が突き進んでゆき、腸壁をごりごりとこそぎ落されるかのような強烈な刺激にオイゲンはたまらず声を震わせて許して、と懇願しようとするが、その懇願は届かずアヌスの深い場所にある性感帯を思いっきり抉りつけられ、膣穴から潮を吹いてしまいながら先ほどの引っ掻き棒で腸穴をかき混ぜられていた時以上の絶頂地獄へと突き落とされてゆく。
「おっ〝っおっ〝♪ あっ、おぉぉぉぉ〝♪」
「あはっ、オイゲンちゃん、艦船やめて雌のわんちゃんになっちゃったの？ さっきから凄い声してるよ？ ほぉら、雌犬のオイゲンちゃん？ もっと鳴いてみて、ボクを楽しませてみてよ♪」
細い指を食いこませていた桃尻から手を離して、腕を振り上げて今度はその桃尻めがけて腕を振り下ろし、小さな手形をオイゲンの桃尻に刻み込んでゆく。
勢いよく、桃尻に手が叩きつけられた瞬間に、たっぷりと肉の乗ったオイゲンの桃尻が波打ち、その衝撃の強さを物語る事だろう、もしかしたら、手形が痣となって刻み込まれてしまうかもしれない。
痣がついてしまいそうなほどの乱暴な勢いで桃尻を叩かれてしまったというのに、桃尻に叩きこまれる激痛すらも今のオイゲンにとっては更なる快楽を得るためのスパイスにしかならないのか、無様に尻を掘られてしまいながらきゃいんっ、と本当に発情した雌犬のように、快楽の声を漏らしてしまいながら鳴いてしまう。
尻穴を掘られ、無様に雌犬のように喘いでしまうオイゲンのその姿は、誇り高き鉄血の不沈の重巡洋艦ではなく、一匹の雌犬にしか見えない事だろう。
雌犬のよに尻穴を掘られ続けて喘ぐそのオイゲンの姿を見て、にやり、と指揮官は口角を吊り上げて、菊門に種付けするべくラストスパートをかけるかのように腰を揺さぶってゆく。
「おぅっ〝おぅっ！〝あっ、おぉ♪ ひっ、ぁぁぁ♪」
「オイゲンちゃん、お尻掘るたびに変な喘ぎ声しちゃって面白ーい♪
そろそろお尻に出してあげるよ、しっかり受け止めて・・・ねっ！」

割り開かれてしまったアヌスから抜ける寸前まで、カリ首が露出する寸前まで引き抜かれて、そのまま一気に腰が前へと突き出されて根元まで突き入れられた肉棒によってオイゲンはアヌスの最奥を思いっきり抉りつけられ、再び純潔を保ったままの無垢な膣穴から潮をぷしゃっ、と音を立てて吹いてしまいながら、背筋を張り詰められた弦のようにぴんっ、と反らしてしまいながら、オイゲンは今まで自分が味わった快楽の中で最上級の快楽を刻み込まれ、意識を軽く飛ばしてしまいそうなほどの強烈な絶頂へと押し上げられてゆく。

そして、意識を失いかけてしまいそうなほどの嵐のような絶頂へと導かれてしまったオイゲンの菊門の最奥を抉りつけてゆきながら、肉棒に溜まっている子種汁を少佐はどくんっ、どくんっ、と擬音が響いてしまいそうなほどの勢いで大量に吐き出してゆく。

勢いよく、音を立てて吐き出してゆく粘っこく熱い精液は一瞬でオイゲンの菊門を埋め尽くしてゆき、腸壁にスライムのようなそれが纏わりついて軽く意識を飛ばしてしまいそうな絶頂へと押し上げられてしまったオイゲンを更なる絶頂へと導いてゆき、その体と心に菊門陵辱によって与えられる極上の快楽の味をしっかりと覚えこませようとしてゆく。

「ふぅ・・・♪　お尻、気持ちよかったぁ♪　オイゲンちゃん、意識はあるぅー？」

「あっ・・・ぁっ・・・、　あっ、、ぁぁ・・・♪」

かくかく、と指揮官が尿道に溜まった子種汁を菊門に吐き出そうと軽く腰を揺さぶって、腸壁を擦られるたびに意識を飛ばしてしまっていたオイゲンは体全体を痙攣させて快楽を感じている事を少佐に知らせてしまっていた。

「もー、こんなに簡単に気絶しちゃダメだよ？　さてと、聞きたいこともあるし、起きて貰わないとね」

少佐は菊門に埋められていた肉棒を乱暴に引き抜いて、地下室の入り口付近に設置されてる蛇口から水を出して、バケツに汲んで、バケツに汲んだ水をオイゲンに持って行き、そのまま体全体にかかるように派手にバケツの水をぶちまけてオイゲンの意識を無理矢理引き戻

そうとする。
「っ・・・！　っ・・・こっ、のぉ・・・！」
オイゲンの触ると火傷してしまいそうなほどに火照ってしまっていた、無理矢理冷やされて、絶頂地獄に突き落とされて失っていた意識が無理矢理現実に引き戻される。
意識を取り戻したオイゲンは、自ら溢れさせた涙でぐっしょりと重くなってしまってるアイマスク越しに、自らに快楽と苦痛と共に自殺を一瞬考えてしまいそうになる屈辱を与えた、指揮官の事を睨む。
歯をむき出して怒りを露にさせるオイゲンの姿を見つつ、指揮官は余裕の態度を崩さずに口を開いた。
「で、どうする？　ボクのせーどれいになるんだったら、優しくしてあげていいけどー？」
当然、その言葉を聞いてオイゲンの怒りは更に煽られることになる。
「・・・ふざけないでよ。　体は、堕ちても・・・心は絶対にあんたになんて屈しないわ！」
鉄血艦としての誇りが、指揮官の思い通りにさせはしない、と言う選択肢をオイゲンに選ばさせた。
その選択肢も、指揮官からすれば思惑通りだということも知らずに。
「・・・ふぅん、そっか。　じゃあ、もっと激しく責めてあげないと駄目みたいだね？　ふふ♪　覚悟してね？　君にはこれから衛兵さん達の性処理して貰うからさ♪」

黒の堕ちる時　転

薄暗い、天井から吊るされた蛍光灯の頼りない灯りだけが光源の衛兵詰め所の地下に存在する営巣の中で、その凄惨な行為は行われていた。

女性の下半身が丸出しにされて、壁から突き出ている、壁から突き出ている桃尻には赤いペンで正の字が2つ書かれており、ここに固定されて菊門がどれほど酷使されているのか一目見るだけで分かるだろう。

壁から下半身だけが出ており、その光景を見たものは異質と感じるかもしれないが、様々な男たちに陵辱されて、その引き締まったヒップに手形や体液などが吐き出されたというのに性的魅力を衰えさせないどころか、皮肉な事に雄の劣情を誘う事になってしまってる桃尻を味わうべく列に並んで順番待ちしている雄たちはズボンを脱いで肉棒を露出させて近づいてゆき、また一匹の雄が後ろから覆いかぶさり、桃尻に手を食いこませて、くぱぁ、と尻たぶを開いて、散々酷使させれてしまった菊門を外気に露にさせる。

そして、両手の太い親指を菊門に挿入して、横に広げてやって、アヌスに注ぎ込まれた精液を体外に溢れさせてやりながら、親指で拡げられてしまった菊門に容赦なく肉棒を捻じ込み、犯し始めた。

「っ・・・っ、ぐっ・・・ぁっ・・・！」

口をギャグボールで塞がれて、尻を突き出すような格好のまま壁に固定させられてしまっている雌は、ただギャグボールの隙間から菊門に肉棒が勢いよくねじ込まれるたびにくぐもった声を漏らし、その刺激に耐える事しか出来ない。

「おお、あんだけ部下たちが犯されたってのに、本当に良い締まりしてるな、こいつの尻」

ぱんっ、ぱんっ、と後ろから覆いかぶさり、アヌスを貫いているのは衛兵たちの隊長の男で、当然の事ながらこの尻が誰のものなのか知る由も無い。

ただ、ここの海軍基地の指揮官が、平和そのもので、若干退屈していた自分たちに『慰安』と称して営巣に存在していた穴にどこかの売春婦の尻が丸出しになるように固定されて、貸し出されたものだ。
どこかの売春婦が誰なのか、そもそも本当に売春婦かどうかなのは知らないし、知る由も無い。
「しっかし、後ろの穴の使い勝手は良いんだけど、なんで前の穴弄ったらダメなんだろうな？　まぁ、良いか、後ろの穴になら好き放題して良いって言われてるし・・・、そろそろ出るぞ・・・しっかり受け止めろよ・・・！」
そう言って、アヌスにねじ込まれていた肉棒から精液を吐き出すべく、腰を乱暴に揺さぶってゆき、一層強く腰を前へと突き出してアヌスの根元まで肉棒を突き入れて、装填された粘っこい子種汁をどくんっ、どくん、と音を立てて名も知れない売春婦のケツ穴に大量に吐き出してゆく。
大量に吐き出されてゆく粘っこい子種は不特定多数の男たちに吐き出された子種汁とまじりあい、肉棒とアヌスとの結合部からごぼり、ごぽり、と音を立てて零れ落ちてゆく。
「・・・小便したくなってきたな。　・・・まぁ、良いか、このまましちゃって。　どうせあのちっこい指揮官からは好きに使っていいって言われてるし・・・お、出るぅ・・・」
「んぅっ、んぅっ、んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」
生暖かい小便が壁に固定されてるその女の菊門に注ぎ込まれてゆく。
自らの腸壁を叩く生暖かい小便の感触に、その女は身悶えし、ギャグボールの口の端から声にならない悲鳴を漏らしてしまいながら、何とかもがいて逃れようとするが、しっかりと穴に嵌って逃れられるはずもない。
「ふぅ・・・。　はははは！　こうやって本当に小便まですると肉便器そのものだな、よし、まだ後部下は２０人以上いるからよ、気張って奉仕してくれよ、肉便器さんよ」
大小さまざまの手形が刻み込まれて桃尻を軽く叩いて、菊門に埋め

られていた肉棒を引き抜き、３つ目の正の字を書くべく一本線を赤いペンで桃尻に書いて、離れる。
肉棒が引き抜かれたアヌスからは尿と精液が交じり合った液体が噴き出て、床に水溜りを作ってしまう。
尻穴だけを重点的に犯され続けているオイゲンは、ただこの暴虐が早く終わる事を目に涙を貯めて、ギャグボールで塞がれている口の端から涎を垂らしながら、新しく菊門に突き入れられてきた肉棒が腸壁を擦る刺激にくぐもった声を漏らした。

「あはは♪　随分とお尻の穴好評だったみたいだね。　衛兵の皆の相手、お疲れ様♪　皆オイゲンちゃんのお尻、気持ちいいって言ってくれてたよ？」
最後の衛兵の相手を菊門でした跡に、ゆっくりと営巣に足を踏み入れながら、アナルを便器代わりとして使われ続けたオイゲンの姿を見て小さく苦笑いした。
オイゲンの桃尻には数えきれないほどの男たちの手形が刻み込まれており、赤いペンで書かれた正の字が６つ書かれてしまっていた。
正の字が６つ、つまり３０回も男たちによって菊門が陵辱され、オイゲンの排泄口が酷使されてしまったのだ。
不特定多数の男たちの精液を受け止め続けて、酷使されてしまったオイゲンの菊門はすっかり拡がり切り、だまになった精液の塊が無残に割拡げられた窄みからどろどろと零れ落ちてゆき、コンクリートの床に拡がってる体液の水溜りに落ち、その水溜りを広げてしまっていた。
「・・・う・・・ぁ・・・」
ギャグボールで口を塞がれてなくても、恨み言の一つも言えなかったかもしれない。
既にオイゲンの意識は消えうせており、目は上を向いてしまっていた。
ぐったりとした様子のオイゲンの姿に苦笑いして、衛兵さん達も頑

張ってるなぁ、と呟き、壁尻として固定されていたオイゲンを少し手こずりながら引き抜いて、体に付着した汚れを落とすべく、その体を抱き上げてまずは自分の執務室の地下に連れてゆくことにした。
執務室の地下『建造ドッグ』 疲れ切ったオイゲンの体を労わるかのように、優しくお湯で濡らしたタオルで体の汚れを拭ってあげつつ、ギャグボールを外し、楽な姿勢にさせて床に寝転がらせてやりながら、暫く待つことにする。
「・・・はぁ・・・。 はぁ・・・。 も、もう・・・やめて・・・。
私、壊れる・・・壊れちゃう・・・！ こ、こんな事するなら、殺してよ・・・！ 殺してぇ・・・！」
暫く休むと、意識は取り戻すが、意識を取り戻したと言え、雄たちに菊門を蹂躙され続けて、体だけではなく心も折れてしまいそうになっていたオイゲンは、視界に入った指揮官の姿にびくっ、と体を震わせて怯えて、震えた声で殺すように懇願し始める。
先程の男たちに菊門をただひたすら貪られ続けるのは、流石のオイゲンと言えども堪えたのだ。
最初は、ひたすら菊門に与えられる陵辱を耐えようと歯を食いしばり、心までは堕ちまないと耐えていた。
しかしながらも、ただひたすら性処理の為に菊門を使われてしまってるというのに、快楽を感じてしまっている自分の体に絶望を抱き、菊門に尿を注ぎ込まれた瞬間にその絶望はさらに大きくなっていった。
完全に、心がへし折られたのは、菊門に小便器代わりに尿に注ぎ込まれてしまったのに、快楽を感じて軽く達してしまったその瞬間であった。
心がへし折られた後も続けられる菊門への陵辱はオイゲンの僅かに残った鉄血艦としてのプライドも、意地も完全に打ち砕き、そんな自分に絶望したオイゲンは自分をこんな目に合わせた指揮官に殺意を向けるのではなく、死を懇願してしまったのだ。
そんな様子のオイゲンを見て、指揮官は心の中で少しやり過ぎたかな？ と思いつつ、優しい声色で語り掛けた。

「ふふ・・・。　オイゲン、優しくして欲しい？　もう、酷い事されたくない・・・？　殺すことは出来ないなぁ、だってボク、殺し屋じゃないし」
「・・・私の事、こ、殺さないなら・・・せめて、優しくして・・・もう、酷いのは嫌なの・・・。　お尻に、酷い事されたくないのぉ・・・。　お願い・・・お願い・・・します・・・」
　肩を震わせて、濡んだ目から涙を溢れさせて、必死に懇願するオイゲンの姿を見て、にこりと指揮官は満面の笑みを浮かべて。
「いいよ、優しくしてあげる。　沢山酷いことしてごめんね？　今度は優しく、前の穴、弄ってあげるからね？　ボクの言われた通りにしてね？　足をＭの形にして股を広げるんだ、分かった？」
「・・・はい、こ、こう、ですか・・・？」
　言われた通りに、少し休んだお陰で気力と体力が僅かに戻りつつも、先程の凌辱のダメージが抜けきってないのか、ぷるぷると生まれたばかりの小鹿のように股をＭの字に開脚し、自らの割れ目を指揮官の目の前に晒しだす。
　菊門へ行われた凄惨な陵辱とは裏腹に、前の穴は全く弄られていなかったというのに割れ目からは愛液が止めどなく滲み出し、快楽を求めるかのように秘裂をひくひくと震わせてしまっていた。
「うん、そんな感じ。　ごめんね、オイゲンちゃん。　さっきは酷い事しちゃって・・・、でも、今から優しくしてあげるからね？　ボクに身を任せて・・・ね？」
　ひくひくと、快楽を求めるかのようにひくついている秘裂に舌を這わせて、ぴちゃぴちゃと音を立てて愛液を舐めとってゆきながら、丹念に、優しく、凄惨な陵辱を耐えたオイゲンにご褒美を与えるかのように、オイゲンの心の傷を舐めるかのように丁寧に割れ目を嘗め回してゆき、暫く割れ目を嘗め回して、割れ目の味を堪能した後に、舌先を尖がらせて、愛液滴る割れ目をこじ開け、膣穴の入り口に自らの舌先を埋めてゆき、先程菊門に行った時と同じように、膣穴を解きほぐしてゆくかのように、膣壁に舌を這わせて、嘗め回していこうとする。
　指揮官の舌先が膣壁に這わされて、舐められてゆくたびに、オイゲ

ンの体はびくっ、と震えて、んぅ、と口からくぐもった声を溢れさせてしまいながら、膣口をきゅっ、と締めて、自らの膣穴に埋められたその舌を締めあげてしまう。
「あっ・・・指揮官のぉ・・・舌がぁ・・・私のおまんこ舐めてぇ・・・♪　あぅっ・・・気持ちいいっ・・・♪」
　もう既に、快楽を否定し、指揮官に反抗しようとする意志などないオイゲンは、自らの体に与えられる刺激に素直に反応を示し、枷が外された口からはくぐもった吐息を漏らし、素直に快楽に喘いでしまっていた。
　舌先がヴァギナの浅い部分に存在する敏感な場所に這わされて、ぺろぺろと嘗め回してゆき、解していこうとしながら、自己主張の激しい、ぴんっ、と尖がってしまっているクリトリスの方に少佐は人差し指と親指を近づけて、優しく抓み、ぐにぐにと押しつぶしてゆきながら、少しずつ絶頂へと押し上げられてきたオイゲンを焦らすかのように、絶頂に押し上げられる寸前でびくびくと快楽を求めるかのように痙攣を繰り返している膣穴から舌を引き抜いて、指先で抓まれて更なる快楽を求めるかのように限界まで勃起してしまってるクリから指を離し、自らのズボンとパンツを脱いで、凶悪な２０ｃｍ以上はありそうなその男根を露にさせた。
「・・・ね、オイゲン。　ボクのモノになってくれる？　ボクの性奴隷になってくれるんだったら、もう、衛兵さん達の肉便器にならなくて良いし、気持ちいい事も毎日してあげるよ？」
　露になった、竿の部分に血管の浮き出たグロテスクな肉棒の先端部を割れ目に擦りつけて、膣穴から溢れ出た愛液を付着させてゆく。
　絶頂寸前でお預けを食らう形になったオイゲンは、もう既に抵抗する気力がなくなり、指揮官に屈服しつつある心は耐えきれるはずもなく、こくり、と頷いて言葉を紡ぐ。
「うん・・・指揮官、指揮官のものに、私、なるわ・・・♪　指揮官のぉ・・・。
　坊やとは思えないほど逞しいおちんちんで私のおまんこをかき混ぜてぇ・・・♪　私のおまんこ、指揮官専用のモノにしてぇ・・・♪」
「・・・ふふ♪　うん、もちろんだよ♪　オイゲン、君の体と、心は、

ボクのモノだからね？　その体にボクのモノだって証も、刻み込んであげるから・・・ねっ！」
割れ目に押し当てられた指揮官の肉槍が、ゆっくり、ゆっくりと、オイゲンの体を労わるかのように、優しく、優しく埋められてゆく。
ゆっくり、ゆっくりと菊門への陵辱とは打って変わって埋められてゆく指揮官の肉槍はオイゲンのすっかり快楽に緩んでしまっていた膣口を容易に押し広げて、最奥目指して膣肉をかき分けて突き進んでゆく。
指揮官の肉槍が柔肉を優しく割り拡げて奥へ奥へと埋められてゆくたびに、オイゲンは初めて前の穴に受け入れる雄の肉棒によって齎される快楽の味を口の端から涎を垂らしてしまいながら甘受してしまっていた。
先ほどまで自らに与えられていた快楽とはまた質の違う、甘く優しい快楽。
膣粘膜を擦り、指揮官の形に膣穴が作り変えられてしまっているオイゲンを労わるかのように、指揮官はつん、と尖がった、大きく実った果実の乳頭に口を近づけて、吸い付き、舌先でぺろぺろと胸の先端部に舌を這わせて、刺激してゆきながら、オイゲンの反応を伺いつつ、優しく、優しく肉棒を埋めてゆく。
「指揮官・・・指揮官・・・♪　あっ・・・気持ちいい・・・♪　セックスって・・・こんなに、気持ちよかったのね・・・♪　さっきとは、全然違うぅ・・・♪」
「・・・んぅ・・・♪　ふふ、気持ちいいでしょ？　セックス。　レイプされるのとは間違った快楽で、気持ち良すぎて虜になっちゃうでしょ？　でも、本番はこれからだからね？　オイゲンの事、もっと気持ちよくしてあげるんだから♪」
先ほどまで行われていた激しい菊門への陵辱は全てこの行為の為の布石であった。
一度、激しい陵辱によってオイゲンの心をへし折り、快楽を素直に受け入れやすい下地を作る必要があったのだ。
まさか全て指揮官の思惑通りとは知る由も無いだろうオイゲンは、

ゆっくり、ゆっくりと埋められてゆき、ついに自らの純潔の証を押し上げている肉棒をきゅっ、きゅっ、と膣口を締め付けて与えられる優しい快楽に素直に反応を示してしまいながら、だらしなく口元を歪めて、口の端から涎を垂らしてしまっていた。
「・・・ふふ、今のオイゲン、凄くだらしない顔してるよ？　・・・ね、オイゲン、君の初めて、奪うよ？　ボクのモノにしちゃうけど、本当に良いのかな？」
「あぅ・・・見ないで、は、恥ずかしいわ・・・。　・・・ええ、良いわよ、指揮官。　もう、私は指揮官の女なのよ。　私の初めて、奪って、貴方専用の性奴隷にして・・・？」
「・・・ふふ♪　勿論だよ、それじゃあ、行くよ？」
　ぐちゅっ、と音を立てて、初めての証を肉棒の先端部で押し上げてゆきながら、ゆっくり、ゆっくりと腰を前へと突き出してゆき、その純潔の証をぷっつりと音を立てて破ってやりつつ、初めての証を破った後に、肉棒を膣奥まで埋めてゆき、膣奥を肉棒で押し上げてゆきながら、ぎゅっ、とオイゲンの体を優しく抱きしめてあげて、落ち着くまで暫く待とうとする。
「・・・っ・・・・！　あっ・・・・ぅ・・・・！」
「・・ふふ、落ち着いたら言ってね？　処女膜破られるの、痛いでしょ？」
　流石に、処女膜を破られる激痛はオイゲンでも顔をゆがめて苦悶の表情を浮かべてしまっており、その様子を見た指揮官は胸の突起に吸い付いて、ぺろぺろと嘗め回してゆきながら、肉棒を埋めたままオイゲンの膣穴が自らの肉棒に慣れるまで待とうとする。
　暫く、膣穴に埋めたまま胸の突起に舌を絡めて、優しく嘗め回していると、オイゲンの方からこう言ってきた。
「・・・しき・・・かん・・・。　も、もう、大丈夫・・・だからぁ・・・。　私の、おまんこぉ・・・。　滅茶苦茶にして・・・ね・・・？」
　その言葉を聞いて、膣穴の最奥を押し上げていた肉棒が、突如激しく前後に揺さぶられ始める。
　腰が後ろに引かれて、膣口から抜ける寸前まで引き抜かれた凶暴な

肉棒の先端部が一気に腰を前へと突き出されて膣奥を思いっきり抉りつけてオイゲンの体を揺さぶり、強烈な衝撃を与えてゆく。
初めての証が奪われて、肉棒に少しずつ慣れ始めてきた膣穴と言えども、その激しい腰遣いによって責め立てられると少しだけ痛む、が、それ以上に快楽が強い事だろう。
その証拠に、膣奥を思いっきり抉りつけられたオイゲンの口からは与えられる快楽に歓喜するかのように嬌声が漏れてしまっていた。
「あはっ、そこまで言うんだったら仕方ないね、君のおまんこ、ボクのおちんちんで滅茶苦茶にしてあげるよ♪」
「うんっ・・・指揮官♪　私のぉ・・・淫乱マンコ、滅茶苦茶にしてぇ・・・♪」
もう、鉄血艦としてのプライドなどは投げ捨てたオイゲンは、思いつく限りの淫語を口から吐いて、指揮官の興奮を煽る。
最初は、獣のような腰遣いで単純な前後運動で膣壁をごりごりとこそぎ落としながら突き入れられていた指揮官の肉棒であったが、少しずつその動きに変化が生じ始める。
オイゲンの豊満な体が壊れてしまいそうなほどの勢いで乱暴に突き入れられていき、肉の洞窟の壁をごりごりと掘削してゆきながら子宮口を叩きつけたその先端部は、ゆっくり、カリ首で膣壁をこそぎ落とすかのようにゆっくりと腰が後ろに引かれてゆき、再び前へと、今度は先ほどよりもゆっくりとした動きで前へと突き出されてゆく。
強弱を付け、そして膣穴の一部分だけを責めるのではなく、お腹側、お腹側、様々な場所を亀頭で擦り、オイゲンを単調に責めるのではなく的確に責め立ててゆき、その肉棒の虜に堕としていこうとする。
正しく熟練の技、オイゲンの弱点はすぐさま露呈し、責め立てられ、責め立てられるたびに快楽に喘ぎ、軽く絶頂へと押し上げられ、膣奥から分泌される蜜の量が多くなってゆく。
生娘であったオイゲンにはその責めには耐えられるはずもなく、普段はクールで余裕ありげな表情を浮かべている顔は快楽で淫らに歪み、指揮官の手によって与えられる快楽に堕ちてゆく。
「あんっ、あんっ、指揮官のおちんちん、凄いっ、凄い！　私ぃ・・・

♪ 癖になっちゃう、本当に淫乱になって、ダメになっちゃうううう♪」
「いいよっ、ダメになって・・・堕落して良いんだ、ボクのおちんちんの虜になって・・・ボク専用の性奴隷になって・・・ねっ・・・！
っ・・・っ・・・・〜♪」
前後し、オイゲンの事を的確に責め立てていた指揮官の肉棒がびくん、びくん、と限界が近いのか震え始める。
限界が近いのをオイゲンも感じ取り、膣口をきゅうう、と締め付けて、指揮官の肉棒をけなげに締め付けてゆき、子種汁を吐き出させようとしてゆきながら、膣の最奥を、子宮の入り口を指揮官の肉棒で一層強く抉りつけられた瞬間に、指揮官の肉棒が一層強く震えて、どくん、どくん、と音を立てて粘っこい子種汁が吐き出されてゆく。
どくん、どくん、と音を立てて、大量に吐き出されてゆく指揮官の粘っこい子種汁は一瞬でオイゲンの子宮内を満たしてゆき、オイゲンの卵子を数と質が合わさった良質な精子で蹂躙してゆき、自らの遺伝子情報を刻み込んでゆこうとする。
自らの遺伝子情報を刻み込もうと卵子が精子で蹂躙される感覚を感じながら、オイゲンの僅かに残った理性は、妊娠を悟ってしまう事だろう。
これほどの数の精子で自らの卵子を蹂躙されて、メイと言う雄に屈服しつつあるオイゲンと言う名の雌の体は耐えられるはずもなかった。
むしろ、積極的に自らの卵子を踏みにじり、蹂躙してゆく精子を受け入れようとすらしてしまうかもしれない。
そして、一匹の精子がオイゲンの卵子と結合し、新しい命を作ろうとしてゆく。
雌としての直感から、妊娠したことを理解してしまいながら、オイゲンの僅かに残った理性も、プライドも、意地も、洪水で押し流される崩れかけの家のように完全に快楽に飲み込まれてゆき、オイゲンは無様に叫んでしまっていた。
「イグ゛っ、イグっ、妊娠して、イっちゃうううううう♪

あっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
自らを屈服させた雄に孕まされる、と言う雌としての最高の快楽を味わい、オイゲンは今日一番の激しい絶頂へと押し上げられてしまい、軽く白目を剥いてしまいながら吠えて、体全身を痙攣させてしまいながら自らを包み込んで、虜にしてゆくその激しすぎる快楽に脳の回路が焼け焦げてしまいそうになる錯覚を覚えてしまいながら絶頂に身を震わせてゆく。
白目を剥いて吠えながら絶頂へと押し上げられてゆくオイゲンの姿を見つつ、かくかくと雄は肉棒に溜まった種を腰を揺さぶって吐き出してゆき、念入りに種付けを行ってゆきつつ、十数秒に渡る種付けが終わった後に肉棒を引き抜いて、完全に意識を失ってしまった雌の姿を見てこうつぶやいた。
「・・・あはは、気絶しちゃってるや。　まだ調教は終わりじゃないってのに、これは続きは明日かなぁ・・・？」
股を大きく広げて、びくっ、びくっ、と体を痙攣させてしまってる完全に意識が飛んでしまったオイゲンの体を抱き上げて、膣口から溢れる精液をティッシュで拭ってあげながら、部屋に存在するベッドに寝かせてあげて、ぎゅっ、と正面から抱き着き、オイゲンの胸の谷間に顔を埋めながら指揮官は、すぅ、すぅ、と寝息を立て始めた。

黒の堕ちる時　結

オイゲンのたわわに実った卑猥な果実が大きく歪み、その男目を引き付ける胸の谷間に醜悪な雄の象徴が出し入れされる。
先程絶頂地獄に突き落とされて、意識を失ってしまったオイゲンは馬乗りになられて自らの自慢の胸の谷間を指揮官に好き勝手されてしまってるというのに、意識が戻る様子はない。
ただ、その大きく実ったマシュマロのような胸肉を、幼い指揮官の手によって好き放題に蹂躙されてゆくだけだ。
先走りの滴る肉竿の先端部で卑猥な胸肉の谷間を擦りつけてゆきながら、両手でしっかりとオイゲンの胸肉を掴んで横から力を加えて圧迫し、自らの肉棒にその柔肉を擦りつけようとしてゆく。
「あはっ♪　オイゲンのおっぱい、柔らかくて気持ちいいー♪　イラストリアスの胸に比べるとちょっとサイズは劣るけど、うんうん♪　張りがあって良いおっぱいだ♪」
意識を失っていても、その体はしっかりと感じてしまってるようで、指揮官の細い指先が胸肉に食い込んで、その柔肉が卑猥に歪んでゆき、胸の谷間を肉竿の先端で強烈に擦られてゆくたびに、んぅ、んぅっ、とオイゲンの口元からは悩ましい声が溢れてゆき、美しい、形の整った胸が先走りで汚されてゆく。
自らの胸をオナホ代わりに使われてしまってるオイゲンのぴん、と尖がってきた胸の先端部を指揮官は指先で抓りつつ、一層強く腰を前へと突き出してゆきながら、力を込めて横から胸を圧迫してやって、谷間から肉棒の先端部を突き出して、オイゲンの顔めがけて肉棒に溜まった雄の欲望をどくん、どくん、と音を立てて吐き出してゆき、オイゲンの整った美しい顔を雄の種で汚してゆく。
「んっ・・・。　何・・・この匂い・・・。　うっ・・・べとべとするんだけど・・・」
「あはっ、おはよう、オイゲン♪　お胸、使わせて貰ったよ？　昨日の続き、しちゃおうか？」
顔に吐き出された粘っこい精液の熱さと、強烈な雄の匂いで目が覚

めたオイゲンは、馬乗りになられて少しだけ苦しそうに呻きながら、ゆっくりと目を開けて、今しがた自らの顔に白濁をぶっかけたばかりの指揮官の方に視線を向ける。
　にこり、と満面の笑みを浮かべながら、かくかくと胸の谷間に挟んでいる肉棒を軽く腰を揺さぶって前後させて、尿道に残ってる子種を念入りに谷間に向けて吐き出してゆく指揮官の姿を見つつ、オイゲンはぼんやりと昨日の事を思い出してきた。
　その気になったら、指揮官の事を押しのける事は出来そうだったが、もう、そのような事をする意志など、オイゲンには残ってなかった、愛しいご主人様に向けて、にこり、と笑みを浮かべて。
「・・・ええ、おはよう、ご主人様・・・。　朝から、お盛んね♪　・・・良いわよ、昨日の続き、しちゃいましょうか？」
「ふふ♪　おはようおはよう♪　それじゃあ、さっそく、ボクのおちんちん口で咥えて、気持ちよくしてくれるかな？」
　こくり、とオイゲンは素直に頷いて、ベッドのふちにちょこんと腰掛けている指揮官の肉棒に顔を近づけ、そしてそのまま口で咥え、ご奉仕し始める。
　先ほどまで自らの胸の谷間を犯し、たっぷりと子種汁を吐き出したというのに未だに大きさと硬さを保ったままの逞しい肉棒の先端部を口で咥えて、舌先で亀頭の部分を嘗め回してゆきながら、ゆっくりと頭を上下に揺さぶり、丹念に、自らを屈服させた逞しい肉棒にご奉仕してゆきながら、自らの口内を満たす雄の香りに恍惚とした表情を浮かべる。
　性経験の少ないオイゲンの舌技は、お世辞にも気持ちいいと言えるものではなかったが、初々しい舌遣いで丁寧に自らの肉棒をご奉仕してくれるオイゲンの姿に、幼い見た目の指揮官はにこりと楽し気に笑みを浮かべながら、優しくその長く、美しい髪を撫でてあげて。
「ふふ・・・。　うん、その調子、気持ちいいよ、オイゲン。　その調子でボクのおちんちん、気持ちよくしてね？」
「んぅ・・・んっ・・・♪　ちゅっ、はむっ、んっ・・・んぅ・・・♪　・・・ええ、分かったわ、指揮官♪　んっ・・・♪　指揮官の、お

ちんちん、気持ちよく出来るように・・・私、頑張るわ・・・♪」
　自らの口内を満たす雄の香りにうっとりとした表情を浮かべたまま、肉棒の裏の部分に存在する筋の辺りに舌を這わせてゆきつつ、喉奥に肉棒を導いてゆき、口内全体を使って指揮官の肉棒を必死にご奉仕してゆき、びく、びく、と指揮官の肉棒が震え始め絶頂が近い事を悟ると、口を窄めて肉竿をしっかりと締め付けてゆきながら、口内に精液を吐き出させようとしてゆく。
「んっ・・・。　上手出来ました♪　偉いよ♪」
　指揮官の肉棒の先端部から、音を立てて粘っこい白濁が吐き出されてゆき、オイゲンの口内を一杯にしてゆく。
　先走り以上に濃い雄の匂いを放つ指揮官の精液を喉を鳴らして飲み干してゆき、尿道に舌を這わせて、竿の中にまだ残ってる精液を一滴残らず吸い出してゆきながら、オイゲンは口元から僅かに口内に収まりきらなかった精液が溢れてる事にも気が付かずに熱心に精液を絞ってゆき、指揮官の精液で喉を満たしてゆく。
　飲み干すのに苦労してしまいそうになるぐらい粘っこい子種汁で喉を満たしてゆきながら、ゆっくりと肉棒から口を離して、えへへ、と指揮官に向けて褒めて欲しそうな笑みを浮かべ、精液を飲み干した口の中を見せた。
「ふふ、偉いよ、オイゲン。　褒めてあげるね♪　上手にお口でご奉仕できたオイゲンの為に、オイゲンが使って欲しい穴を使ってあげるけど、どこがいい？」
　指揮官の優しい手がオイゲンの頭を撫で、頭を撫でられたオイゲンの頬が嬉しそうに緩む、そして、オイゲンは即答でこう答えた。
「おまんこに・・・溢れちゃうぐらい、指揮官の精液、注ぎ込んでください♪」
「ふふ、分かったよ。　そんなにおまんこに出して欲しいんだね？　うん、わかった♪　オイゲンが壊れちゃうぐらいまでたーくさん注ぎ込んであげるからね？　四つん這いになって、お尻こっちに向けてくれるかな？」
　オイゲンは一つ頷き、何の躊躇もなく、すっかり色欲に堕ちてし

まった雌の顔をしてしまいながら、四つん這いの姿勢になり、上半身をベッドに押し付けて精液で淫らな化粧が施されてしまったたわわな果実を卑猥に歪ませてしまいながら、肉付きの良い桃尻を指揮官に突き出して、快楽を求めるかのように淫らに尻を振る。

淫乱な雌犬に仕置きをしようとするかのように、後ろから少佐は覆いかぶさり、自らの肉竿の先端部を、先日吐き出された冷たくなった精液がどろり、どろり、と零れ落ちて来る膣穴の入り口に押し付けて、溢れてしまった分の精液を補給するべく、一気に腰を前へと突き出してオイゲンの膣穴を容赦なく貫いてゆく。

「来たっ、来たぁ・・・♪　指揮官のおちんちん、太いぃぃぃ・・・♪」

勢いよく、昨日たっぷりと種付けしてやった子宮の入り口めがけて突き入れられてゆく凶暴な雄の象徴は、割り開かれてしまったせいで拡張され、指揮官の肉棒の形に作り変えられてしまったオイゲンの膣壁をごりごりとこそぎ落とすかのように擦って強烈に刺激してゆきながら子宮の入り口を思いっきり抉りつけ、オイゲンの豊満な体を大きく揺さぶってゆく。

指揮官の肉棒の形によく絡むように最適化されたオイゲンの膣穴は乱暴に突き入れられてきたその肉棒から精を搾り取ろうと膣壁がうねうねと蠢きながら肉竿に絡みつき、突き上げられた子宮の入り口は肉棒の先端部に吸い付くかのようにして膣穴全体を使い子種汁を搾り取ろうとしてきて、指揮官に極上の快楽を与えていこうとして、その具合の良さに思わず挿入者は気持ちよさそうに声を漏らした。

「おお・・・これは・・・♪　ふふ、オイゲンのおまんこ、気持ちいいよ♪　名器って言って良いかも♪」

「あっ、ぁぁ・・・♪　指揮官っ、そんな、いきなり、激しぃ・・・♪　あっ、ひぃ・・・♪」

オイゲンの桃尻を逃さないように両手でしっかりと掴んで、その尻肉に細い指先を食いこませてゆきながら、獣のように、ぱんっ、ぱんっ、と部屋中に肉と肉がぶつかり合うかのような湿った淫らな音を響かせてゆき、オイゲンの体を貪るかのように蹂躙してゆく。

荒々しく、最初から後先など考えずにトップスピードで突きこまれ

てゆく逞しい指揮官の肉棒の先端部がオイゲンの弱点を擦るたびに、雌は背中を反らしてそのたわわな果実を大きく揺らし、淫らな喘ぎ声を漏らしてしまっている。

オイゲンの膣穴はまさに名器と言っても呼んでいい代物であった。

突き入れられてゆく亀頭の部分に膣壁が柔軟に絡みついて子種汁を搾り取ろうとしてゆき、子宮口を思いっきり抉りつけた肉棒が逃れられないように、子宮口を先端に吸い付かせて先走りすらも吸い取ってゆきながら、自らの体から放さないようにするかのように膣口が強烈に、さながら巾着袋の入り口のようにぎりぎりと締めあげ、肉竿が後ろに引かれるその時にも強烈に締め付けてゆき、自らに種付けをせがむかのように雄の肉槍に丁寧に快楽を与えてゆく。

イラストリアスの膣穴とはまた別ベクトルの名器具合に、思わず指揮官の頬が緩む。

「ふふ・・・♪　艦船って皆名器なのかな？　だとするとやっぱこの指揮官になって正解だったって思うよ♪　おまんこ気持ちいい？　もっと気持ちよくしてあげるから、覚悟してよ・・・ね！」

子種汁を搾り取るのに特化した、並の雄ならば挿入するだけで骨抜きになってしまいそうな名器であったが、そこは経験豊富な元調教師。

その名器の誘惑に打ち勝ち、自らの雌を悦ばせるの特化した性技でオイゲンを自らの肉棒の虜にしていこうとする。

肉棒を後ろに引いて、抜ける寸前、亀頭が地下室の冷たい外気に触れてしまう寸前まで引き抜いた後に、ぎりっ、と一層強く雌の桃尻を掴んでいる手に力を込めて、跡が残ってしまいそうなほどに指先を埋めて逃れられないようにしてやりながら、角度を付けて肉棒を勢いよく、膣穴の浅い部分に存在するその場所めがけて突き入れてゆき、思いっきり腹側の天井に存在するソコを、Gスポットを抉りつけてやる、その瞬間、オイゲンの体が一層強く跳ねて、声にならない悲鳴が響く。

「っ・・・っ・・・〜！　っ・・・ひっ・・・ひっ、ひぃぃぃぃぁっ・・・♪　ぁっ、ぁぁぁぁぁぁ♪」

「あはっ、気持ち良すぎて声が出ないでしょ？　やっぱ女の子を堕とす時はGスポット責めに限るよね♪」
Gスポットを抉りつけられて、目を白黒させてしまいながら下半身から脳天まで突き抜けるかのように駆け上がってきた強烈な快楽にその一突きだけで何度も絶頂へと押し上げられてしまい、舌まで突き出してしまいながらその絶頂の激しさを体全体を震わせて物語ってしまう。
びくんびくんと体を震わせてその絶頂の激しさを物語っているオイゲンに、容赦なく指揮官は追撃を開始した。
自らの肉棒の味をしっかりと覚えこませて、その快楽から逃れられないようにするために、容赦なく肉棒が引き抜かれる寸前まで腰を引き抜いて、先程よりも力を込めて腰を前へと突き出し、Gスポットを再び抉りつける。
再び声にならない悲鳴が響くが間髪入れずにGスポットを抉りつけたばかりの肉棒の角度を修正し、腰を更に前へと突き出して子宮の入り口めがけて肉槍を突き入れてゆき、激しすぎる快楽に痙攣しっぱなしの膣壁を強烈に擦りつけてやりながら子宮の入り口をごちゅん、と音が響いてしまいそうなほどに抉りつけてやってオイゲンの意識が飛ぶ寸前まで追い詰めてやりながら、そのまま容赦なく子宮の入り口を押し上げたまま種を注ぎ込んでゆく。
「おっ〝っ・・・おっ〝・・・♪　あっ・・・お・・・〝♪」
音を立てて、粘っこい特濃の精液がオイゲンの子宮内に再び注ぎ込まれてゆく。
注ぎ込まれてゆく特濃の精液は、先日吐き出された精液を押し出して、熱く新鮮な精液によってオイゲンの子宮内を再び満たしてゆき、オイゲンの子宮壁に纏わりついてゆく。
自らの胎内にたっぷりと吐き出されてゆく雄の精液が子宮壁に纏わりつき、自らを孕ませようと元気よく精子が胎内を泳いでゆく刺激に、意識を飛ばしてしまいそうになっていたオイゲンは視界が真っ白に染まって激しすぎる快楽に気絶し、舌を口からだらん、と垂らしてしまいながら目から涙を流し、びくびくと体を痙攣させてその凄まじ

い絶頂がどれほど激しかったのか雄弁に物語ってゆく。
「あはっ、気絶しちゃったの？　でも、ボクは今日は容赦しないよ？
ほぉら、あそこに大鏡あるし、そこにいこっか？」
ぐったりとしてるオイゲンの体と繋がったまま、桃尻から手を離して、太ももに細い指先を食いこませ、うんしょ、と背面立位の姿勢でオイゲンの体と繋がったままその体を後ろから抱き上げ。
意識を飛ばし、快楽の波に飲まれてしまったオイゲンの体を調教部屋の端にぽつんと置かれた大きな鏡の所まで連れていこうとする。
ゆっくり、ゆっくりと足を進めてゆくたびに、肉棒と繋がったままの姿勢であるため、オイゲンの子宮の入り口は一歩ごとに押し上げられ、自らよりも小さな指揮官に後ろから抱き上げられるという無様を晒している雌はその四肢をぴくぴくと痙攣させてしまいながら軽く絶頂し続けてしまっていた。
「はい、オイゲン。今の自分の姿を見てよ。・・・うーん、まだ気絶しちゃってるの？　だらしない奴隷だなぁ」
オイゲンの上半身を、大鏡に押し付けて、そのたわわな果実を無様に歪ませてやりながら、ぐったりとしてるオイゲンの体から肉棒が抜ける寸前まで腰を引き抜き、未だに意識を飛ばしたままのオイゲンを覚醒させてやるべく、先程注ぎ込まれたばかりの精液で埋め尽くされているオイゲンの子宮の入り口を、全体重を込めて、思いっきり抉りつけてやろうとする。
強烈な絶頂へと押し上げ続けられてしまったその肉洞は、軽く擦られるだけでも強烈な快楽をオイゲンに齎してしまうことだろう。
そんな状態のオイゲンを思いっきり責め立てたらどうなるだろうか？　答えは明白だった。
「ひっ、ぁっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪
っ・・・っ・・・～♪」
「あはっ、おはよう♪　オイゲン、気持ちいいでしょ？　これ♪」
子宮の入り口を抉りつけられた瞬間、強烈すぎる快楽で意識を飛ばしていたオイゲンの意識が強制的に現実に引き戻されて、大鏡に押し付けられたその胸の突起を鏡で擦ってしまいながら背筋を跳ねさせ、

口から獣のような悲鳴を響かせてしまう。
そして、獣のような悲鳴を響かせてしまっているオイゲンのすっかり指揮官の肉棒に屈服してしまった膣穴を容赦なく肉竿でかき混ぜてやりつつ、オイゲンの後頭部を手で掴み、指揮官はその大鏡に移るオイゲンの姿をオイゲン自身によく見せてやろうとする。
「ねぇ、オイゲン、今の自分の顔、どう見えるかな？　誇り高い鉄血艦に見える？」
オイゲンは鏡に映る自らの姿を見て、思わず言葉を失いそうになってしまった。
鏡に映る自らの顔は、すっかり快楽に蕩けてしまっており、口の端からは涎が、目じりからは涙があふれ、今なお膣穴を穿られてしまっているのに快楽に喘ぎ続けてしまっているその姿はまさに淫乱な雌犬に相応しいものであった。
誇り高い鉄血の重巡洋艦であったオイゲンはもはやこの世には存在せず、与えられる快楽に無様に悦ぶ雌犬だけがそこに存在していた。
「・・・あはっ、これが・・・私の、姿ぁ・・・♪　雌犬みたいぃ・・・♪」
「でしょ？　えへへ♪　ボク専用の雌犬奴隷の、オイゲンなんだよ？　ボクの奴隷になって、毎日こんなえっちな顔しちゃおうね？」
もう、快楽に抵抗するなんてことはオイゲンは考えられなかった。
こくり、と鏡越しに指揮官の目を見て頷いたオイゲンの理性とプライドに完全にトドメを刺すかのように指揮官の腰遣いが更に激しくなり、ラストスパートをかけるかのようなものになってゆく。
その一突きごとに、オイゲンは自らの築き上げてきたプライドと、誇りがこそぎ落とされるかのような錯覚を覚えてしまう事だろう、しかしながらも、鏡に映るオイゲンの表情は淫らに歪んでいた。
「あはっ、すっかり悦んじゃって♪　ボクのおちんちんに完全屈服して、ボクのモノになっちゃえ♪」
「なるっ、なるわ・・・♪　私、指揮官のせーどれいになって・・・赤ちゃ　ん・・・　産　むぅぅぅぅぅぅ　♪　　ひっ、　ひぃ、

あぁ・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
一層強く突き出された指揮官の肉棒が、オイゲンの先ほど吐き出された精液で満たされた子宮の入り口を抉りつけて、再び粘っこい子種汁を吐き出してゆく。
その一突きで再び意識が飛んでしまったオイゲンに、容赦ない追撃が与えられてゆくことだろう。
子宮壁を叩く精液の感触にオイゲンは意識が容赦なく引き戻され、そしてその意識も再び子宮の奥を精液が叩く感触によって消し飛ばされ、指揮官の精液が注ぎ込まれてゆくたびにオイゲンは気絶と覚醒を繰り返し、面白いように四肢を痙攣させてしまう。
かくかくと指揮官は腰を揺さぶり、装填された子種を一滴残らず注ぎ込んでゆく。
精液が吐き出し終わるころには、オイゲンの下腹部は妊娠を暗示するかのように膨らんでしまっていた、その姿を鏡越しに見て、幼い悪魔のような指揮官はにやり、と口角を吊り上げ、膣穴に埋められたままの未だに硬い肉棒で膣壁を擦り、オイゲンへの陵辱を再開した。

司令部への報告書より一部抜粋

アドミラル・ヒッパー重巡洋艦3番艦　プリンツ・オイゲン
調教に成功　反乱の気配なし
指揮官の私見ではあるが、母親としての適性も高いと思われる。
次世代の艦船を産ませ、そして育てさせる、と言う案は有用かと司令部に進言。
更なる艦船の派遣を求む

黒の堕ちる時編　完

黒の想い

前線から離れた海軍基地と言うのは、ここの基地を中継地として通る輸送船の燃料補給の手回しやら、基地に隣接しているレーダー施設の整備についての書類やら、様々な雑多な書類仕事が終わればその後は暇なものだったわ。

んぅ、と私、プリンツ・オイゲンは、共に書類仕事をしていて、大分お疲れの様子なのか机に突っ伏してる愛しい指揮官サマを横目に見つつ、軽く体を伸ばしてずっと同じ姿勢でいたせいで固まった筋肉を伸ばしつつ、机に突っ伏してしまいながら余程お疲れなのか、ぴくりとも動かない指揮官をみて、くすりと苦笑いしながら起き上がり、お疲れの指揮官の為にコーヒーを注いであげようと給湯室へと向かう事にした。

ここの海軍基地には、私と、ロイヤルの憎たらしい・・・まぁ、今では友軍なんだけど、イラストリアスってやつしか居ないようで、規模に対して艦船の数が少ないように感じる、どうやら、ここの海軍基地は公にできないようなことをするための施設のようで、私は哀れなモルモットの一体として選ばれてしまったようなのだ。

「ま、そこまで気にすることでもないけどね」

そう、私以外に誰も居ない給湯室で呟きながら、私はお盆の上に二つ並べられたコーヒーカップの中にコーヒーを注いで、指揮官に持って行ってあげることにする。

激しすぎる、気持ち良すぎて本当に私が死ぬかと思っちゃうぐらいの事が終わって、私が意識を取り戻した後に聞いた話は、信じがたい話であったのは確か。

『艦船を孕ませて、産まれてきた子供に艦船としての教育を施す』と言う誰かが考えた狂ったプランを実験するための施設、それがこの海軍基地。

キューブ要らずの戦力の確保、そう言えば聞こえは良いけども、被験者となる艦船が素直に実験に協力するとは考えづらい。

そのため、艦船の反乱が起きてしまわないように、調教師を指揮官

として雇い、艦船たちの調教を行わせて、従順な雌奴隷に作り変えるとともに、種付けを行わせる。
正直、司令部の考えには反吐が出るけども、まぁ、悪くは無いかなと私は思っていた、疲れた様子の指揮官の横にコーヒーが注がれたコーヒーカップを置く、すると、指揮官はコーヒーカップを握り、ふー、ふー、と息を吹きかけて冷やした後に、ゆっくりと飲んでゆく。
そんな指揮官の様子を横で私は眺めて、ふふ、と微笑んでしまった。
微笑んだ私の方を見て、不思議そうに首をかしげる指揮官の姿。
女の子だって言われても、素直にそう信じてしまいそうになる私の可愛い指揮官は、ぱっちりと開いてる可愛らしい眼をこちらに向けて来る。
そんな指揮官の頬に少し手を伸ばして、むにむに、軽く頬を撫でてあげる、すると、指揮官はんぅ、とくすぐったそうに声を漏らして。
「あははっ、くすぐったいってば♪」
「ふふ♪　ごめんね、指揮官のほっぺ、柔らかそうだったからつい触っちゃった」
指揮官のほっぺは、もちもちすべすべしてて、ずっと撫でていたくなるような肌触り。
肌の質も女の子みたいで、本当に女の子みたい。
でも、この指揮官は、私の事を女にして、堕とした正真正銘の男、なのだ。
それが尚更、面白くて、自然と私の顔に笑みが浮かんでしまう。
誇り高き鉄血の重巡洋艦である、この私が、こんなに可愛らしい女の子みたいな男の子に堕とされてしまったのだ。
数週間前の私が現在の私の事を知ると、質の悪いジョークとしか思わなかっただろう、でも、これは正真正銘の真実、指揮官の虜に堕とされてしまった私は、もう指揮官の肉棒無しでは生きていけない立派な淫乱雌奴隷だ。
「ねぇ、指揮官。　書類仕事、疲れたでしょう？　癒してあげましょうか？　ふふ♪」
「え、良いの？　じゃあじゃあ、パイズリフェラお願いできるかな？」

そのお願いに、私はくすり、と笑みを返して、ゆっくりと上着を脱いで、時々邪魔だなと思える、今では指揮官に愛して貰えるから邪魔なものでも悪くは無いかなと思い始めた大きな胸を露にさせて、指揮官のズボンのベルトを外し、自らを堕としたグロテスクな男根を外気に晒す。

外気に晒された、指揮官の男の先端を咥えて、ぺろぺろと亀頭の辺りを嘗め回して刺激してゆきながら、肉竿を胸の谷間で挟みつつ、手を胸に押し当てて、むにむにと胸肉を肉棒に押し付け、上半身を揺すり、その肉棒に刺激を与えてゆくと、舌で嘗め回している亀頭の部分から先走りが溢れ始めた、その先走りを舐めとってゆきながら、私はもう一度肉棒を咥えながら心の中で笑ってしまった。

見た目は、本当に女の子にしか見えないのに、こんなに逞しい肉棒を持っているなんて冗談みたい、でも、その冗談みたいな存在が、私の事を堕として、性奴隷にしたのだ、性奴隷にされてしまったというのに、私は全く不快感は感じてなかった、むしろ、どんな奴にもなびかないつもりだった私を堕とした指揮官の事を褒めたたえてあげたくなる。

「ふふ、オイゲン、前に比べて随分と上手くなったね？」

私の事を本当に悦ばせてくれる、唯一の男根に愛情を込めて、その肉竿の先端に舌を絡ませ、胸で竿を挟み、丁寧に、確実に、快楽を与えようと私に叩きこまれた技を使って悦ばせていこうとする。

丁寧に、舌と胸を使ってご奉仕してゆくと、私の指揮官様の肉棒が限界が近づいてきたのかびくびくと痙攣し始め、限界が近い様子。

限界が近い様子の指揮官の肉竿にむにゅっ、と胸の形が歪んでしまうほどに強く胸肉を押し当ててゆきながら、先端部をしっかりと吸い上げ、愛しい指揮官サマの精液を搾り取ろうとしてゆく。

どくんっ、どくんっ、と音を立てて、たっぷりと吐き出されてゆく指揮官サマの子種汁を口で受け止め、胸肉をぐにぐにと竿の部分に押し当て、しっかりと吐き出されてゆく子種汁を吸い上げ、飲み干してゆく。

んぅ、とくぐもった声を漏らし、気持ちよさそうに微笑む指揮官の

顔を上目遣いで見上げながら、舌でぺろぺろと亀頭の部分を舐め続けて、吐き出されてゆく子種を舐めとり続けてゆく、慣れたものだ。
「んぅ・・・んぅ、えへへ♪　ありがとね、オイゲン、気持ちよかったよ♪」
指揮官の手が、優しく私の頭を再び撫でる。
心地よさに目を細めて、頭を撫でる指揮官の優しい手の感触にくすり、と微笑み、吐き出された精液をごっくん、と飲み干す。
「ね、オイゲン。　今度はオイゲンのお尻を使ってみたいな、お尻を突き出して、こっちに向けてくれるかな？　今度は優しくするから、ね？　良いでしょ？」
「・・・うん、約束よ？　絶対に、前みたいに酷い事はしないで頂戴ね？　あの時は、本当に痛かったし、辛かったんだから」
正直、お尻の穴を使っての行為には未だに抵抗はある、けども、ご主人様である指揮官には逆らうことは出来ない。
優しくしてくれる、と言う言葉を信じて、壁に手をついて、指揮官に向けてお尻を突き出す形になる、指揮官が後ろから私に覆いかぶさり、胸と口で奉仕したというのに未だに硬さと大きさを保ったままの、逞しいソレを私のアヌスに押し付けて、前に犯された時と違って、ゆっくり、ゆっくりと、埋めるかのように菊門に肉棒を埋めてゆく。
ゆっくりと、優しく埋められてゆく肉棒が腸穴をこじ開けてゆき、奥へ奥へとソレを埋めてゆくたびに与えられる妖しい刺激に、私は口の端からくぐもった声を漏らしてしまう。
くぐもった声を漏らしながらも、あの時に行われた凄惨な陵辱の事を思い出してしまって、強張ってしまった私の体を、指揮官は後ろから菊門に肉棒を埋めてゆきながら、優しく抱きしめて。
「大丈夫だよ、オイゲン。　もう、あんなことはしないからね？　ふふ・・・オイゲンがボクの性奴隷で居てくれる限りは、だけどね？」
「・・・んぅ・・・。　ええ、一生、貴方の性奴隷で居るから・・・。ひ、酷い事はもうしないで頂戴・・・ね。　あ・・・ぅ・・・♪」
ゆっくり、ゆっくりとアヌスを割り開き、奥へ奥へと埋められてゆく指揮官の肉棒は、尻穴の深い場所に存在する性感帯をこつん、突き

上げて、私の体の負担にならないように、そのまま埋めたまま、腰は乱暴に揺さぶられずに、後ろから指揮官は私の事を抱きしめて、胸に手を伸ばし、その小さな手で私の胸を掴んでこようとする。
後ろの穴に埋められた異物によって与えられる妖しい刺激によって股を濡らしてしまっていた私は、自らの胸肉に埋められてゆく細い指先によって体に刻まれてゆく甘い快楽によって、自然と胸の先端が尖がってしまう、私のピンク色の胸の先端部に指揮官の親指と人指し指が近づけられ、ぎゅっ、と尖がっている胸の突起を押しつぶされると、びくぅっ、と私は体を震わせてしまって、その刺激に分かりやすい反応を示してしまった。
「ふふ、オイゲンって、お胸を弄られるの好きだよね？　ほぉら、こうやって胸の突起を抓んであげながら、お尻を穿ってあげると・・・ふふ♪　気持ちいいでしょう？」
「ひぅっ・・・あっ・・・♪　あっ・・・ぁぁぁ・・・♪」
浅いストロークで指揮官の肉棒が前後され、菊門の深い場所にある私の弱点を擦られてしまう、指揮官の責めは、私の後ろの穴の弱点を的確に責め立ててゆき、私の事を悦ばせてゆく。
肉棒のカリ首の部分が過敏な腸壁の敏感な場所を擦り、刺激してゆくたびに、喘いでしまっている私に追撃が与えられるかのように胸の先端部を人指し指と親指で抓まれてしまいながら、私が痛く感じるかどうかのギリギリの絶妙な力加減で引っ張られてゆき、胸とアヌスを同時に責められる刺激に股から愛液が溢れてしまう。
「あっ・・・ああっ・・♪　良いわ・・・指揮官♪　指揮官のおちんちん、私のお尻の良い所に当たって・・・あぅっ・・・♪　気持ちいいわ・・・♪　ふわっ・・・んぅっ・・・ぁっ、ぁぁぁぁぁ♪」
「ふふ・・・♪　オイゲン、君がボクの性奴隷で居てくれる限り、こうやってボクのおちんちんで沢山悦ばせてあげるからね？」
そう言って、指揮官の腰遣いが少しずつ激しくなってゆく。
先程よりも深いストロークで突き入れられてゆく指揮官の肉棒は私の菊門の敏感な場所を的確に擦りあげてゆきながら、最奥を何度も、何度も勢いよく抉りつけてゆきつつ、その激しい腰遣いに一瞬ト

ラウマが蘇ってしまいそうになった私の事を後ろからぎゅっ、と胸を強めに掴んでしまいながら、後ろから、大丈夫だよ、と囁き、私は指揮官の言葉を信じて、下半身から脳天まで駆け上がってゆく強烈な快楽に身を委ねてゆく。

そして、一層強く突き入れられた指揮官の肉棒がアヌスの最奥を思いっきり抉りつけてゆきながら、ぐりぐりと最奥を押し上げたまま、肉棒に装填された熱く粘っこい種汁を吐き出してゆき、衛兵たちの精液と尿を注ぎ込まれた菊門を、私の体に指揮官のモノだという証が刻まれてゆくかのように指揮官の精液によって埋め尽くされ、白く染まってゆく。

「あはっ・・・出てるぅ・・・♪　指揮官のせーえきがぁ・・・♪」

「えへへ♪　気持ちよかったよ、オイゲン。　ありがとね、お尻、使わせてくれて♪」

ゆっくりと、精液を吐き出し終わった指揮官の肉棒がアヌスから引き抜かれてゆき、絶頂直後でぐったりしてしまってる私の顎をくいっ、として、口の端から涎が溢れてしまってる私の口に指揮官の口が押し当てられる。

そのまま自らの舌に絡められてゆく指揮官の舌の感触を味わいながら、心を満たしてゆく幸福感に頬を緩ませてしまう。

指揮官に求められる、それが幸せ、そう感じるように私の体と、心は完全に躾けられてしまったのだ。

「・・・ねぇ、指揮官、私の体、貴方無しじゃあなければ生きられなくなっちゃったんだから、絶対に責任取ってよね？」

「・・・ふふ、勿論だよ！　性奴隷の面倒はしっかり見ないとダメだからね？」

ゆっくりと指揮官の唇が離れてゆき、名残惜しそうに私は離れてゆく指揮官の顔を見つめ、今度はこちらから優しく、唇同士が触れ合う程度のキスをする。

自らの愛しい指揮官に向かって、私の体と心は貴方のモノですと言う、誓いのキスをするかのように、優しく、唇を重ねながら、優しく指揮官の体を抱き上げ。

今日の朝、分かった事を伝える事にした。
「・・・ね、指揮官♪　お腹の子の名前も考えて頂戴よね？」
「・・・あはは、うん！　勿論だよ、オイゲン、しっかりお腹の子の名前、考えるからさ、元気な赤ちゃん、産んでね？」
私の新しい命が宿った下腹部を指揮官の小さな手が撫でる、その下腹部を撫でる小さな手に、私は自らの手を重ねながら、心を満たす幸福感に頬を緩ませるのだった。

悪い夢（長良編）　起

深呼吸を一つ、今日から自分がお世話になる海軍基地の門を、見上げて、足を一歩、踏み出す。
艦船として建造された自分が活躍するための場。
それがここなのだ、新しくこの海軍基地に配属されることになった長良は、緊張した面持ちながらも、自然と足取りは軽く、これからの生活に期待するかのように門へと向かって歩を進めてゆく。
そう、これからの生活は未来への希望に満ち溢れたものになる、そう長良は考えていた、そして、そうなる筈だった。
「こんにちは、今日からお世話になる、長良だよ　よろしくね、衛兵さん」
門を通る時に、警備していた衛兵さん達にぺこりと一礼、何故か衛兵さん達はその一礼に対して敬礼を返したのだが、皆、頬が赤らんでいたり、視線のやり場に困っている様子だった。
その様子を見て、長良は少しだけ首をかしげながら、門を潜って海軍基地の広場の方へと足を運んで行く、その後ろ姿にも、ねっとりとした衛兵たちの視線が絡みついてる事に気が付かないまま。
長良の体は、平凡な艦船としての能力とは裏腹に極上の肉体で。
体系の分かりづらそうな厚着の衣装を着てるというのに服の上からでも分かるそのたわわに実った果実は、雄の視線を釘付けにするのは十分な事だろう。
そして、防御力が高そうな上着とは裏腹に、誘ってるとしか思えないほど短い、風が吹いただけで中が見えてしまいそうなスカートによって碌に隠されてない輝かんばかりの白い太股は雄の劣情を煽る事だろう。
長良は無自覚な事だろうが、その体は余りにも魅惑的で、そして無防備であった。
衛兵たちの何人かが前かがみになってしまうのも、致し方ない事だろう。
「こら、お前ら！　何時までも後ろ姿に見惚れとるんじゃない！」

衛兵たちの隊長格の壮年の男性が、遠ざかってゆく長良の後ろ姿に見惚れてしまっている若い衛兵2人の後頭部を叩くが。
いたずらな風が吹いて、ひらり、と長良のスカートが僅かに捲れてしまい、清楚な印象を受ける長良にぴったりの白いパンツが僅かに捲れたスカートの合間から見えてしまう。
その光景に思わず隊長も暫く視線が釘付けになってしまうが、それもまぁ、致し方ない事だろう。
長良は余りにも男性の性欲と、悪意には無関心で、無自覚で、無警戒であった。
そのせいか、門から遠ざかり、広場の方に向かう道に存在する雑木林に近づいたときに、後ろから近づいてくる何者かの気配に気が付く事は出来ずに。
「・・・ふぇ⁉　きゃっ⁉」
後ろから近づいてきた何者かが、後ろから長良の事を抱きしめて、背の高い草などが生い茂った雑木林の中に引きずり込まれた時にも、碌な抵抗もすることは出来なかった。
「あはっ♪　捕まえた～♪　ちょっと、執務室まで君が来るのを待てなくてね？」
雑木林に引きずり込まれつつ、長良は困惑しながらも、自らを雑木林に引き込んだ犯人の方に視線を向ける。
その犯人の見た目は、可愛らしい少女のようであった、西洋人形のように整った美しい顔は、可愛らしい笑みを浮かべて、長い金髪がよく似合っていた。
犯人が着ていた指揮官としての制服から、この子が自らの指揮官となるメイ少佐だという事には長良は気が付いたが、なぜ自分が雑木林に引きずり込まれたのか、まだ長良は理解が追い付いて無い様子だった。
「あ、あの・・・。　ど、どうしてあてをこんなところに・・・？」
恐る恐る、と言った様子で指揮官の目を潤んだ瞳で見つめながら、そう聞く。
その肉食獣に睨まれた小動物のような姿にくすり、と指揮官はまた

一つ笑みを浮かべて。
「それはね、今から君の事をレイプしちゃうからだよ？　あはっ、艤装が無い艦船なんてボクなら簡単に抑え込めるしね」
余りにも自分の想像から斜め上を行く発言に思わず長良は固まる。
その隙を流さずに、メイ少佐は慣れた様子で長良のスカートをばさり、と捲り、先程衛兵たちの視線を釘付けにしていた可愛らしい白い清楚なパンツを露にさせてやって、そのパンツを手早く脱がせた後に、長良の口の中に乱暴に突っ込み。
口の中にパンツが突っ込まれて、声が出せなくなった長良の両手首に懐から取り出して手錠を付けて拘束し、抵抗できなくさせてやった後に、正面から覆いかぶさり、手錠と同じく懐から取り出したナイフで長良の上半身に纏っている衣装を乱暴にびりびりと破り裂いていこうとする。
「んぅっ!?　んっ、んぅぅぅぅ!?」
流石に、身の危険を本能的に感じ取った長良はじたばたともがいて逃れようとするが、指揮官の力は見た目以上に強く、艤装を外された、小娘同然の筋力しか持たない長良は振りほどく事は出来ずに、あっさりとその上着が破り裂かれ、胸を守っていたブラもあっさりとナイフで切り裂かれ、そのたわわに実った果実を凶暴な肉食獣の前に晒すことになってしまう。
そして、露になったそのたわわな果実に、小さな肉食獣はナイフを懐にしっかりとしまいながら、重量感たっぷりのその胸の感触を楽しむかのように左手で鷲掴みにして、ぎゅむぎゅむと揉みしだいてゆき、もう片方の手を自らのズボンの方に持って行き、器用にベルトを外して下半身を露出させようとしてゆく。
「あはっ、長良ちゃんのおっぱい、柔らかくて気持ちいい～♪　オイゲンや、イラストリアスに負けないぐらいいいおっぱいだね、弾力もあって♪　それでいて柔らかい、うんうん、良い母乳が出そうだよこれは」
むにぃっ、むにぃっ、と擬音が響いてしまいそうなほどの強さで、女の母性の象徴であるたわわな果実を欲望のままに左手で揉みしだい

てゆき、ピンク色の綺麗な胸の突起に欲望のままに吸い付いてゆく。
胸に与えられる刺激に長良は身をよじり、逃れようとするが、圧し掛かっている指揮官を押し返すことは出来ずに、胸への無遠慮な蹂躙を許すことになってしまう。
そして、指揮官は欲望のままに胸肉を蹂躙してゆきながら、露にさせた自らの下半身に屹立している雄の象徴の先端部を、長良のぴっちりと綺麗に入り口が閉じている、素人でも一目で性経験が殆どないと分かる乙女の無垢な秘所にその先端部を押し当てて。
「あはっ、それじゃあ行くよ？　長良ちゃんの初めての相手はボクだよー？　忘れないようにして、ね？　あははっ♪」
胸に自らのモノだという証を刻むこむかのように、一層強く胸を掴んでいる手に力を込めて、ぎりぎりと胸肉を絞ってゆきながら、膣口に押し当てられた２０ｃｍ以上はありそうな、小さな子どもの握りこぶしほどはありそうな太さの悍ましい、何人も女を堕としてきた雄の象徴を勢いよく腰を前へと突き出してゆき、膣口に押し付けられた異物の感触に慄いている長良の事などお構いなしに、雌の秘所で締まりが一際強い入り口を痛々しい、ぎちっ、ぎちっ、と何かが拡張されるような音を響かせてゆきながら奥へ奥へとその凶暴な雄の象徴を捻じ込んでゆく。
逞しい雄の象徴が、勢いよく膣穴にねじ込まれるかのように突き入れられた瞬間に、長良の豊満な体がびくっ、と跳ねて、たわわな果実が揺れる。
余りの激痛に、長良の目からは自然と冷たい涙が零れ、頬を濡らしてゆくが、陵辱者はそんなことなどお構い無しに、自らの肉棒の形を性的刺激などとは無縁であった膣穴に覚えこませるかのように、奥へ奥へと、肉棒を捻じ込んでゆき、初めての証に、長良が乙女だという証拠に、肉棒の先端部が到達したら、軽くこつん、こつんと処女膜を肉棒で小突いた後に満面の笑みを浮かべて腰を前へと勢いよく突き出してゆき、初めての証を踏みにじるかのようにぶち破ってやりながら、初めての証を破った勢いそのままに子宮の入り口を思いっきり抉りつけて、長良の体を大きく揺さぶってゆく。

「んぅっ！　んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！　んっ、んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

余りにも惨い、想像しうる限り最悪の形での残虐な処女喪失。

長良にとってはそのショックは計り知れないもので、自然と冷たい涙が目から零れ、体はその刺激から逃れようと動くが、両手を拘束され、そして圧し掛かられている以上逃れるすべはなく、ただ目の前の小さな肉食獣に捕食されるだけの哀れな餌食でしか無かった。

「あはっ♪　初めてがボクに奪われたのがそんなに嬉しかったのー？　そっかー♪　じゃあさ、ボクのおちんちんで長良ちゃんが誰のものなのかー、しっかりと、体にも、心にも、分からせてあげるね♪」

子宮の入り口を乱暴に抉りつけていたメイ少佐の腰が、勢いよく、獣のように、性技なんてものは存在せずに、ただ目の前の雌を踏みにじり蹂躙するために、乱暴に揺さぶられてゆく。

肉棒が抜ける寸前まで腰を勢いよく後ろに引いて、カリ首で破瓜の激痛に慄くかのように硬直している膣壁を乱暴にひっかいてやりながら、深いストロークで腰を乱暴に、長良の尊厳を踏みにじるかのように前へと突き出してゆく。

正しく、性行とは思えないほど残忍な陵辱、深いストロークで、ただ性を吐き出すためだけに前後される雄の肉棒は前後し、長良の蜜壺をかき混ぜてゆくたびに体には激痛と、心には深い傷を長良に与えてゆき、長良の心をへし折ろうとしてゆく。

「んぅっ、んぅ！　んぅぅぅぅぅぅぅっ、あっ、んぅっ、んぅぅぅぅぅ！」

口を塞いでいるパンツに涎をしみこませてしまいながら、今の長良が出来るのはひたすらパンツの端から苦しそうな声を漏らして、目に涙を一杯に貯めて、自らを蹂躙し、踏みにじる陵辱者の良心に訴えかけてやめさせることだけだった。

しかしながらも、当然陵辱者の腰が止まるはずなどない、最初からトップスピード、ただ性欲を吐き出すためだけに長良の体を使っている陵辱者は長良の負担など一切考えずに自らの男根を獣のようにねじ込み、つい数分前までは無垢だった、今では踏みにじられてしまっ

た少女の膣穴をひっかきまわしてゆく。
「そろそろ中に出すよ？　しっかり受け止めてね？」
「・・・んっ、んうううう!?　んっ、んうううう！」
パンツで口が塞がれてなかったら、無慈悲な種付け宣言にきっと悲鳴をあげて、いやと連呼していた事だろう。
無慈悲な蹂躙によって行われる望まぬ妊娠、それを想像して頭を全力で振って、やめるように何とか伝えようとするが、当然、陵辱者の腰は止まる筈はなく。
「んぅ・・・んぅ♪　長良ちゃんのおまんこにいっ♪　中出しぃ・・・♪」
腰が一層強く前へと突き出され、肉棒の先端部が長良の心を打ち砕く破城槌のように子宮の入り口に思いっきり叩きつけられて、子宮口をぐりぐりとその肉槍は押し上げたまま肉棒に装填された雄の粘っこい子種汁がどくんっ、どくんっ、と音を立てて、長良の子宮内に注ぎ込まれてゆく。
音を立てて注ぎ込まれてゆく粘っこい精液が自らの子宮を満たし、自らを穢してゆく感覚は長良はただ味わう事しか出来ない事だろう。
逃れる事も、抵抗する術もない。
自らの子宮を埋め尽くしてゆく粘っこい感触が長良の心を絶望で満たしてゆき、その目から光が失われそうになってしまうが、陵辱者は腰を揺さぶり続けて、長良の初めてを失ったばかりの膣壁に精液を塗り込むかのようにして肉棒で蜜壺を踏みにじってゆきつつ。
「それじゃあ、二回戦と行こうか？」
初めてを乱暴に奪われ、心が折られてしまってぐったりとしてる長良の体が、仰向けの姿勢から、上半身を地面に押し付けられ、そのむっちりとした肉付きの良い尻を突き出すかのような無様な姿勢にさせられて。
たわわに実った果実を地面に押し付けられ、白いその果実を土で汚してしまいながら、二回戦、と言う言葉を聞いて、長良の白い肌が青ざめてゆく。
「んぅっ・・・んぅぅぅぅぅ、んぅぅぅ！」

レイプされ、女としての尊厳を踏みにじられた長良には、碌に抵抗する力も無かった、獣に後ろから圧し掛かられて、先程精液が注ぎ込まれたばかりの、女陰に逞しい血管の浮き出た肉棒がねじ込まれてゆき、膣壁がごりごりとこそぎ落とされるかのような錯覚を覚えてしまいそうな乱暴なファックにただパンツの端から悲鳴混じりの喘ぎ声を漏らす事しか出来ない。

しかしながらも、後背位で犯されてる長良に、少しずつ変化が生じ始める。

僅かにパンツの端から漏れてくる悲鳴混じりの痛々しい喘ぎ声に、艶のある声が混じり始めたのだ。

皮肉な事に、雌としての本能からか、この余りにも凄惨な陵辱から逃れようとしたのか、体は防衛本能から自らに与えられる苦痛を快楽に転化しようとし始め、長良に望まぬ快楽が与えられ始める。

「・・・ふふ♪　ねぇ、長良ちゃん、もしかして感じ始めてるの？　レイプされちゃってるのに？　だとしたら物凄い淫乱さんだよ？」

後ろから圧し掛かっているメイ少佐は、両腕を目いっぱい伸ばして、地面に押し付けられて汚れた長良のたわわを逃さないように掴んで細い指先を食いこませてゆきながら、先程とは違い、肉棒で擦ると長良が可愛らしい反応を示してくれる性感帯めがけて肉棒を突き出し、抉りつけ、先程とは違って苦痛ではなくて快楽で長良を責め立てていこうとする。

レイプされて、快楽を感じてしまう。

メイ少佐の肉棒が性感帯を的確に擦り、責め立てられてしまうたびに、自らがレイプされてしまって快楽を感じてしまってる事を長良自身も否定しようがないほどに膣奥から愛液を漏らしてしまい、肉棒との結合部から肉槍が前後されるたびに愛液と白濁が交じり合ったものを飛び散らせてしまいつつ、与えられる快楽によって漏れてしまう声を何とか堪えようとするものの。

「あはっ、頑張って気持ちいいの耐えようとしてるんだね？　でも、無駄だよ？」

「・・・っ！　!?　んぅっ、んぅぅぅぅぅぅ、んぅぅぅぅぅぅっ!?」

少佐が肉棒が抜ける寸前まで腰を引きながら、単調な前後運動ではなく、角度を付けて肉棒を捻じ込んでゆき、膣壁をごりごりと肉棒の先端部で強烈に擦りつけてゆきながら子宮の入り口を思いっきり抉りつけられた瞬間に強制的に絶頂へと押し上げられてしまった長良に、更に刺激を与えんと少佐は刺激によって勃起してきた可愛らしい痴豆を人指し指と親指で抓んでぐりっ、と押しつぶし、絶頂直後の長良を強い絶頂と強制的に押し上げてゆく。

結合部からぷしゃっ、と潮が吹いてしまったかのように愛液が勢いよく吹き出てゆき、子宮の入り口をぐりぐりと無慈悲に押し上げている肉棒から子種汁を搾り取ろうとうねうねと蠢く見事な襞を肉竿に押し当ててゆきながら、子宮の入り口に肉棒の先端部に精液を吐き出して貰おうと貪欲に吸い付いてしまう。

「っ・・・♪　初物なのにこの締まりと、絡み具合・・・♪　ボクと長良ちゃん、相性良いのかもね♪　うっ・・・あぁ・・・♪」

メイ少佐もくぐもった声を漏らしてしまいながら、自らの肉棒に絡みついてくる見事な膣穴に精液をぶちまけてゆき、ただでさえ先ほど吐き出された精液で一杯になってしまってる長良の子宮内をまたも粘っこい種で埋め尽くしてゆき、新鮮な種で長良の卵子に自らの遺伝子情報を刻みんでいこうとする。

遠慮なく、自らの体をオナホールと同じぐらいにしか思ってないと言わんばかりの容赦ない種付けは、長良の消耗しつつある気力を更に消耗させてゆくが、陵辱者はそんな事もお構いなしにかくかくと腰を揺さぶり、肉棒の先端部で絶頂を迎えたばかりの性感帯を擦りつけてゆき、長良に望まぬ刺激を刻み込み続けてゆきつつ、耳元でこう囁いた。

「それじゃあ、第三回戦行こうか？」

基地内に存在する雑木林の中、くぐもった悲鳴が一層強く響いて、雲一つない空にその声は吸い込まれてゆき、被害者と加害者以外、その声を聴くことは無かった。

日が傾くころに、やっと哀れな餌食は陵辱者の陵辱から一旦解放されることになる。
二桁近く休まず犯され続けてしまったせいで、餌食の目は充血しつも、目からは光が無くなり、頬は涙で濡れてしまっていた。
そして、ずっと餌食の口を塞いでいた白い、清楚なパンツは涎でぐちょぐちょになっており、もはや口枷としての役割もあまり期待は出来ない有様。
与えられ続けた快楽によって紅潮しながらも、その顔は絶望に染まっており、凄惨な陵辱が行われた事を伺わせる事だろう。
そして、たわわに実った、無自覚に雄を誘惑してしまっていた魅惑の果実は、陵辱者の涎や歯形、更には手形まで刻み込まれてしまっており、見るも無残な有様であった。
一番激しく陵辱が行われてしまった膣穴は、栓となっていた肉棒が引き抜かれた事で溜まっていた精液が音を立てて、すっかりと入り口が開いてしまった膣穴から吐き出されてゆき、土の上に小さな水溜りを作ってしまっている。
ぴっちりと、綺麗に閉じていた小陰唇は無残にもこじ開けられ、ピンク色の満開の花を咲かせてしまっていた、しかしながらも、二桁近くも乱暴に犯され続けてしまったというのに、最後の最後まで雄の肉棒を締め付け、子種汁を搾り取ろうとしてきた餌食の膣穴は正しく雄に犯されるために存在しているかのような名器であった。
先ほどまで名器にねじ込んでいた肉棒を、ぐったりとした餌食の、長良のまだあどけなさと幼さが残る可愛らしい顔に擦りつけてゆきながら、えへへ、と満足そうに陵辱者は、メイ少佐はにこりと笑みを浮かべて。
「えへへっ♪　長良ちゃんの体、気に入ったよ？　体だけじゃなくて、心までボクのものになってくれるように、たーっぷり可愛がってあげるから期待してね？」
「ん・・・んぅ・・・」
長良の口からは、もう、やめて、と言わんばかりにパンツが突っ込

まれた口の端からくぐもった声が漏れるが、そんな事はお構いなしに、長良の整った美しい顔と、そしてリボンで纏められた美しい髪に肉棒を擦りつけてティッシュ代わりに使った後に、ぐったりとした長良の体を抱き上げて、少佐は『建造』ドックの方に長良と共に向かう事にした。

長良の悪夢は、まだ始まったばかりだ。

悪い夢（長良編）　承

海軍司令部執務室地下。
月の灯りが届かない、天井から吊るされた裸電球の灯りだけが頼りの薄暗い地下室に存在するベッドの上に少女が正面から自分よりも小柄な、少女のような見た目をした少年に覆いかぶさられ、すっかり雄の肉棒の形を覚えこまされてしまった膣穴に肉槍を捻じ込まれて、獣のように貪られてしまいながら、必死に許しを請うかのように叫び声をあげた。
「いやっ、もう許してっ！　あてのこと、お家に返してよぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
雑木林の中で行われた凌辱劇から場所を移したものの、長良への休みは一切与えられず、苛烈な陵辱が行われ続けていた。
場所を移した後も、休まずに連続で犯され続け、数えきれないほど中に出され続けて、長良のスレンダーだった下腹部は精液で傍から見ても分かるほどに膨らんでしまっており、少女の身に行われた行為の激しさを物語っている。
既に長良の手首からは手錠が外されているものの、何度も、何度も、度重なる陵辱によって消耗しきった長良では抵抗する力など残されておらず。
必死に叫んで無駄だとは分かっているものの、何とか陵辱者の良心に訴えようとするが、当然そんな事など無駄で。
必死に許しを懇願するかのように叫ぶ少女の事を、長良の事を無慈悲に雄は犯し続けてゆく。
長良の程よく肉が付き、指先を埋めると極上の弾力で雄の事を楽しませてくれる太股に指先を痛い位に食い込ませてゆきながら、膝立ちになり、両足を肩に担ぐかのような姿勢にして、腰を肉棒が抜ける寸前まで一気に引き抜いて、膣壁をごりごりと肉棒のカリの部分で強烈に擦ってやりつつながら、全体重を込めて一気に腰を前へと突き出してゆき、カリ首で引っ掻かれて強烈な快楽が刻み込まれたばかりの長良の性感帯を再び肉槍で強烈に擦りつけてやって、悲鳴をあげていた

長良に今度は嬌声をあげさせてゆく。
「ひぃっ!? あっ、あぁぁぁぁ♪ いやぁっ、あっ、あてっ、犯されてるのにぃっ……♪ いやっ、いやぁぁぁぁぁ♪」
先ほどまで行っていた、ただ己の性を膣穴を吐き出し続けるかのような、雄の欲望に任せたままの行為とは打って変わった、長良の事を快楽で堕とそうとするかのような責め。
四十八手、深山と呼ばれる姿勢で膣穴の深い場所を角度を付けて、強烈に、何度も、何度も抉りつけてゆく。
正しく長良の体は雄に犯され、子を孕むために存在しているかのような極上の体だった。
肉棒を蜜壺の最奥めがけてねじ込んでゆくたびに、うねうねと無数に蠢く膣壁が強引に膣肉をかき分けて突き進んでくる肉棒の先端部に纏わりついてゆき、何度も、何度も種を注ぎ込まれ続けてしまったせいで、既に精液で一杯になった子宮の入り口を抉りつけた瞬間に、豊満な少女の体が大きく揺れて、こじ開けんばかりに抉りつけられてしまった子宮の入り口が先端にキスするかのように吸い付き、子種を吐き出せようとしてゆく。
「あはっ♪ 長良ちゃんの体、本当に良いよね♪ 君の体、ボク、癖になりそうだよ? もっと自分の体に自信もって良いからね? あははっ♪」
「いやっ! いやぁっ! もうえっちするのいやぁっ!
あっ、ぁぁぁぁぁぁぁ♪ っ……っ……~♪」
もはや、長良の抵抗も言葉だけのものになりつつあった。
膣肉をかき分ける逞しい肉棒の先端部が粘膜を擦る刺激にも絶頂へと押し上げられそうになり。
子宮の入り口をこじ開けんばかりに抉りつけられるその刺激に粘膜を擦られる刺激で達しそうになっていた体は絶頂へと押し上げられ。
子宮の入り口を抉りつけられた瞬間、大きく体が揺さぶられてしまい、子宮内にたっぷりと吐き出された精液が波打ち、子宮壁を刺激され、絶頂へと押し上げられたその体は更なる高みへと強制的に誘わ

れ。
絶頂へと強制的に押し上げられるたびに、長良の理性が溶け、心がへし折られてしまいそうになり、激しすぎる陵辱に意識が少しずつ遠のいてしまう。
「あはっ、そろそろトんじゃうかな？　良いよ、トんじゃって♪　そろそろ本気で責めてあげるから・・・ねっ♪　あははっ♪」
「ひっ！　いっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪　いくっ、いくうううううううううううううう♪」
少佐の腰が、肉棒が抜ける寸前までまた後ろに下がり、全体重が込められて、勢いよく腰が打ち付けられる。
上向きに角度を付けて、風を切るかのような凄まじい勢いで突き入れられた肉棒の先端部で長良の一番敏感な性感帯、Ｇスポットを狙いすませて思いっきり抉りつけた。
その瞬間、長良の時間が一瞬止まり、その直後に、長良の背中がぴんっ、と反り返り、声にならない絶叫のような悲鳴が部屋中に響き、肉棒と膣穴との結合部から勢いよく愛液が噴き出て、派手に長良は絶頂へと押し上げられてしまう。
しかしながらも、当然追撃の手が緩められるはずもない。
「ここが良いんでしょ？　ほぉら、イき狂っちゃえ♪」
「いやっ、いやぁっ♪　あっ、あっ〝っ、ぁぁぁぁぁぁ♪　また、またイ〝っちゃうううう♪」
陵辱者の腰が軽く、かき混ぜるかのように揺さぶられてゆき、その腰の動きに合わせて肉棒が動き、長良を快楽で狂わせようとしてゆく。
カリ首の部分が長良の絶頂直後の、過敏になってしまっているＧスポットの部分を擦り、刺激し、息つく暇もない激しい快楽が長良に襲い掛かり、今まで感じたことの無いような嵐のような快楽に少女は耐えようと、何とか歯を食いしばろうとするがそんなささやかな抵抗など全くの無駄で。
Ｇスポット周辺の敏感な場所をかき混ぜていたメイの肉棒が今度は角度を下に向けて、再び腰が前へと突き出されてゆき、余りの快楽

に緩み切ってしまってる子宮の入り口を思いっきり抉りつけて、再び少女の体を容赦ない快楽で絶頂へと押し上げてやりながら、激しすぎる責めに緩んでしまった子宮の入り口を強引にこじ開け、子宮の奥の壁を思いっきり、少女の体が強烈に揺さぶられるほどに抉りつけてゆく。

「っ～♪　っ・・・〝っ♪　〝っっ♪」

子宮の奥の壁を直接肉棒で抉りつけられるという常軌を逸した余りの凄まじい快楽に、少女の体力はついに限界を迎え、目が上に向いたまま口の端から涎を垂らし、意識を飛ばしてしまった。

そして、意識を飛ばしてしまっている少女の子宮の奥の壁さえも、肉杭で楔を打ち込もうとするかのように、何度も、何度も強烈に抉りつけてゆき、そのたびに意識を失い、完全に抵抗する力を無くした少女の首がかくん、かくん、と揺さぶられてゆく。

「あはっ♪　気絶しちゃってるのにこっちは全然緩くならないや♪　今度は子宮に直接出してあげるよ？　受け止めてね♪」

そう言って、子宮の奥の壁をごちゅんっ、と何かが突き上げられるかのような鈍い音を立てて思いっきり、強烈に押し上げてゆきながら、肉槍に装填された粘っこい種を抵抗する力を完全に無くしたオナホールに排出してゆき、先程注ぎ込まれた精液で完全に埋め尽くされてしまってるオナホの子宮内を更に精液で埋め尽くし、大量の精液でつい先日までは乙女の聖域であったそこを容赦なく踏みにじり、雄の種の味を念入りに、魂にさえも刷り込むかのように注ぎ込み続けてゆく。

意識を失ってしまってもなお、体の方は快楽を感じてしまっているようで、子宮の壁を精液が叩くたびにオナホの体がびくんっ、びくんっ、と震え、意識が無理矢理快楽で現実に引き戻されてしまいそうになる、が。

「あっ〝あっ〝♪　おっ、ぁっ・・・♪　ひっ・・・いぃ・・・♪」

精液を肉棒の先端部から吐き出しながら子宮の奥の壁をこつん、こつん、と抉りつけてゆくその刺激に、昂り切った長良の体は絶頂地獄へと叩き落されてゆき、子宮内に行われてゆく念入りな種付けによっ

て与えられる快楽に引き戻されそうになった意識は再び快楽の波に攫われてしまう。
　数十秒に及ぶ長い長い射精が終わるころには、長良のただでさえ精液で膨らんでしまっていた腹部が更に大きく膨らんでしまっていた。
「ふふ♪　沢山おまんこに中出しし続けちゃったせいかー。　もう赤ちゃんの部屋いっぱいだねぇ♪　これ以上中に出しちゃったら、子宮が壊れちゃうかな？　あははは♪」
　かくかくと射精中も、尿道に溜まった精液も全て吐き出そうとするかのように腰を揺さぶり続けていた少佐の腰がやっと止まり、膣穴を埋め尽くしていた肉の栓がやっと引き抜かれて、長良の下腹部めがけて少佐の足がゆっくりと押し付けられてゆく。
　栓が引き抜かれて、足を押し付けられた瞬間に、妊娠を不気味に暗示させるかのように膨らんでいた下腹部が精液が体外に吐き出された事で萎んでゆき、それと共に体外に吐き出された精液がベッドのシーツに大きな水溜りを作ってしまう。
　少佐の精液の粘度は高く、体外に吐き出されてゆくたびに膣の粘膜が擦れ、刺激され、気絶してもなお終わらないその刺激に、長良の体は絶頂に容赦なく押し上げられ。
　しかしながらも、意識が完全に飛んでしまいながらも責め続けられている長良の口の端は、快楽に絆されてしまったかのように、笑みを浮かべるかのように歪み、その口の端からは涎と共に嬌声が漏れてしまっていた。
「あはっ、長良ちゃん笑ってるのー？　良かったぁ♪　気持ちよくなってくれたみたいで♪　それじゃあさ、次はボクのおちんちん、口で気持ちよくしてもらおうかな♪」
　完全に意識が飛んでぐったりとしてしまってる長良の角が少佐の小さな手によって握られて、笑みを浮かべてるように見えるその口元に精液と愛液によって汚れ切った肉棒が近づけられ、乱暴にその口内に肉棒がねじ込まれてゆく。
「おごっ、おっ、おぅっ、ごぉ・・・」
　喉奥を猛烈な異臭を放つ肉槍の先端で穿たれ、流石に苦しそうな声

を漏らすが、当然メイの腰が止まる筈もなく。
長良の口内をオナホに見立てて肉棒を突き入れ、その口内を無残にも踏みにじろうとしてゆく。
しかしながらも、長良の舌は、自らのキスすらしたことすら無い無垢な口を肉棒によって汚されてしまってるというのに、殊勝な事に突き入れられてゆくその肉竿を舐めるかのように動かされ、舌先によって与えられる快楽で陵辱者の事を悦ばせようとしてしまう。
長良に意識などある筈もない、しかしながらも無意識に肉棒にご奉仕してしまっていたのだ、それが、苦痛から逃れるためか、あるいは雄に自分から奉仕しようとしているものか分からないが。
その舌技は、ある意味当然ではあるが、お世辞にも上手とは言えないものだが、その刺激によって陵辱者の限界が少しずつ近づいてゆき、一層強く喉奥が肉棒を思いっきり抉りつけたかと思うと、肉棒に溜まった精液が今度は長良の口内に音を立てて吐き出されてゆく。
「ふふ♪　長良ちゃんのお口、悪くは無かったよ？　気持ちよかったからね？　ふふ♪」
口内に吐き出されてゆく粘っこい精液を、呼吸の為に長良は飲み干してゆきながら、丁寧に自らの口内に欲望を吐き出した肉槍の先端の鈴口に舌を這わせて、吐き出されてゆく精液を舐めとろうとしてゆく。
陵辱者は口内に念入りな種付けを行った後に口から肉棒を引き抜いて、ぐったりとベッドに倒れこんでしまっている長良の頭に手を近づけて、その小さな手で優しく撫でてあげながら、くすりと苦笑を一つ。
「流石に、これ以上責めちゃったら長良ちゃん本当に死んじゃうかもね。　艦船とは言え、無茶させ過ぎたかな？」
口の端から涎と精液が合わさったものを溢れさせて、そのたわわな胸を僅かに揺らしながら浅い呼吸を繰り返している長良の顔は、余りにも激しい行為のせいで僅かに青ざめており、限界が近い事を伺わせていた。
その光景を見て、流石にこれ以上は危ないと陵辱者も判断したの

か、そのたわわな果実の谷間に顔を埋め、極上の果実の柔らかさと、長良の温かさを感じながら、えへへ、と太陽の花が咲いたかのような満面の笑みを浮かべて。
「今日はこれぐらいで許してあげるよ♪　明日も頑張ろうね？　えへへ♪」
　むにむに、とそのたわわに実った果実に細い指先を埋めて、優しく、労わるかのように優しく揉んで、胸の突起に軽く吸い付き、ぺろぺろと、近いうちにミルクを出すことになるであろう胸の突起を優しく嘗め回してゆき、もう一度笑みを浮かべ。
「えへへ♪　ねぇ、ねぇ、長良ちゃん。　ボクの赤ちゃん、産んでくれるよね？　あ、拒否権は無いからね？　ぜーったいにボクの赤ちゃん産んで貰うんだから♪」
　ぎゅむっ、と細い指先を、長良の胸に手形が刻み込まれてしまうほどの強さで食い込ませる。
　自らのたわわな果実に、所有者の証が刻み込まれてしまうかのように乱暴に掴まれてしまってるというのに、長良の口の端からは喘ぎ声が漏れ、その口元は笑みを浮かべてるように見えた。

悪い夢（長良編）　転

西洋人形のような長い金髪に整った可愛らしい顔の、一見すると麗しい少女のよう見える少年が自らの顔を埋めて抱き枕にしていた少女のたわわに実った大きな胸から顔を離して、上体を起こし、んぅ、と声を漏らしながら凝り固まった体を解すかのように軽く体を伸ばして欠伸を一つ。

眠たい眼を小さな指で擦りながら、ちらりと昨日の疲れがまだ残っているのかすぅ、すぅ、と寝息を立て続けている昨日、自らが散々貪ってやった少女の方に視線をやる。

昨日の激しすぎる行為のせいで未だに少女は、長良は可愛らしい寝顔を浮かべながら未だに夢の中の世界にいるようだ、くすり、と少年は笑みを一つ浮かべて、その唇に自らの唇を重ねながら、自らの股間部の猛りを収めるべく、少女の体を『使う事』にした。

未だに夢の中の世界を旅している長良の雄の欲情を誘う見事な体をうつ伏せにさせて、尻を突き出させるような姿勢にさせて、むっちりとした安産型の桃尻細い指先を食いこませて、くぱぁ、と開いて、前の穴ではなくて後ろの穴を外気に晒させる。

「あはっ、おまんこだけじゃなくてお尻の穴もおちんちん入れたら気持ちよさそうだね♪　ねぇ、ねぇ、長良ちゃん？　早く起きないとー、お尻の穴、ボクのおちんちんで穿っちゃうぞー？」

外気に晒されて、ひくひくとひく付く綺麗に閉じている後ろの穴は。

駆逐艦と同じように動き回る軽巡洋艦らしく、ぴっちりと、綺麗に閉じられており、軽く細い指先で尻穴の入り口を撫でられると、さながら更なる刺激を求めるかのようにぴくん、と長良の体は軽く跳ねるが。

昨日の疲れが溜まってるせいなのか、その少女が目を覚ます様子はなく、少年のされるがままになってしまっていた。

目を覚まさないのを見て、メイ少佐は意地悪な笑みを浮かべて、懐からローションを取り出して、自らの指にしっかりと塗って。

「起きないなら、仕方ないな～？　長良ちゃんのお尻の穴の処女、ボクが奪っちゃうよ？　えへへ♪」
そう言いながら、綺麗に、異物の侵入を拒むかのように閉じられた美しい薄いピンク色の菊門の入り口にローションで濡れた人指し指の先端部を押し当てて、ゆっくり、ゆっくりと、無垢な少女の、異物など全く挿入された事は無いであろう菊門を傷つけないように優しく埋めて。
腸壁の敏感な場所を探るかのように、指に塗られたローションを塗り込むかのようにして軽く手首を前後に揺さぶってゆきながら奥へ奥へとその細い指先を根元まで埋めてゆく。
「あはっ、凄いね、長良ちゃんのお尻の穴♪　お尻の壁がボクの指を締め付けて、中々離してくれないよ？」
根元まで挿入されたメイ少佐の細い人指し指を長良の極上の締まりを持つ菊門は食いちぎらんばかりに強烈に締め付けて来る。
割り開かれて、異物を埋められている菊門の入り口は指の根元を食いちぎらんばかりに強烈に締め付けてゆきながら、きゅっ、きゅっ、とリズミカルに腸壁は菊門に挿入されてる人指し指を圧迫し、菊門を異物で苛まれてる長良は額に汗を浮かべてしまいながらも、まだその意識は夢の中に取り残されてしまっていた。
菊門に異物を挿入されて、んぅっ、とくぐもった声を漏らしている長良の姿を見つつ、くすくすと少佐は笑みを浮かべて菊門に埋められたその指先を軽く曲げて、腸壁の部分を傷つけないような絶妙な力加減で爪を軽く食い込ませてゆきながら、引っ掻くかのように手首を後ろに引いてゆき、腸壁をごりごりと擦るかのようにして、異物によって刺激されるなどという事は今まで一度も味わったことは無いであろう性経験皆無の菊門を刺激してゆく。
丁寧に、確実に、敏感な性感帯を探り当て、刺激し、長良の数日前までは穢れを知らなかった、今では自らの性奴隷に堕ちつつある身体に、無垢だった少女の体を淫乱に堕として自らに従順な性奴隷に堕とすために。
そして、腸壁を爪で軽く引っ掻かれて、長良が可愛らしい反応を示

した菊門の性感帯に指の先端部を曲げて爪をソコに食い込ませてやりながら、思いっきり押し上げてやって、長良の体を容赦なく初めての菊門絶頂へと押し上げようとしてゆく。
「あっ、ふわっ、あっ・・・ぁぁぁ・・・♪」
　意識が無いまま、メイ少佐の指先で菊門をかき混ぜられて、容赦なく性感帯を刺激され、軽く絶頂へと押し上げられてしまった長良の体はびくんっ、びくんっ、と跳ねて、全く弄られてない膣穴の入り口から愛液を勢いよく吐き出してしまって、菊門に指先を埋めているメイの手首を汚してしまった。
「あはっ、長良ちゃん、お尻の穴も結構敏感みたいだね♪　初めてでここまで気持ちよくなれるって中々凄い事だよ？　本当は長良ちゃん、こういう事されるのが大好きな変態で淫乱さんなんだよね？　ボクには分かるよ♪」
　菊門から指先を引き抜いて、手首に付着した愛液を軽く舐めとり、えへへ、と笑みを浮かべ。
　絶頂へと押し上げられてしまった刺激で、半分意識が覚醒しつつある雌の体に後ろから覆いかぶさり、指とは比べ物にならないほど太く、逞しい、長さだけでも２０ｃｍ以上はありそうな、昨日散々長良の膣穴を貪り、蹂躙し、男を知らなかった女の子の体に男と言う物を徹底的に覚えこませてやった肉槍の先端部を、指先が引き抜かれて、寂し気にひくひくと入り口を引きつかせてしまってる菊門の入り口にぐりぐりと押し当て、一気に全体重を込めて、その肉槍を思いっきり捻じ込んでゆく。
「ふわっ・・・あっ・・・ぁぁぁぁぁぁぁ!?」
　長良の意識が完全に現実に引き戻される、尻穴に与えられる痛覚混じりの快楽によって、だ。
　勢いよく、一気に腸穴の最奥目指して突き入れられてゆくメイ少佐の肉棒の先端部は、指とローションによって慣らされたと言えども、その極太の肉棒を挿入された時には当然の事ながら痛覚も伴い。
　腸壁の深い場所を思いっきり抉りつけられた瞬間に、無理矢理覚醒させられてしまった長良は悲痛な叫び声をあげる。

しかしながらも、長良の意志とは裏腹に、メイ少佐の事をご主人様だと認めつつある雌の体は、勢いよく根元まで突き入れられてきたメイ少佐の肉槍をきゅっ、きゅっ、とリズミカルに腸壁を纏わりつかせて精液を搾り取るかのように刺激してゆきながら、限界まで押し広げられ、皺が伸び切ってしまってる菊門の入り口をけなげに締め付けて、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。

「あはっ、おはよう、長良ちゃん♪　長良ちゃんがお寝坊さんだったから、お尻の穴の処女、貰っちゃったよ？」

そう言って、背中を反らして初めてのアナルレイプに悲鳴をあげてしまってる長良の桃尻に手を這わせてゆきながら、メイ少佐は長良の敏感な菊門の性感帯を責め立ててやろうとするかのように、埋められたその肉槍を容赦なく前後させてゆく。

腸壁の最奥を抉りつけて、長良の体を大きく揺さぶったその肉棒の先端部が、抜ける寸前まで勢いよく引き抜かれてカリ首の部分で膣と同じように襞が多く、それでいて締め付けの強い腸壁を思いっきり引っ掻くかのように擦りつけてやりながら、けなげに肉棒から子種を搾り取ろうとするかのように締め付けて来る皺が伸び切った窄みから抜ける寸前まで引き抜いて、小さい体の体重を全力で乗せて、思いっきり腰を前へと突き出してゆく。

「ふ わっ、お 尻 か き 混 ぜ た ら だ め ぇ っ！　あっ、あぁっ、ぁぁぁぁぁぁぁ♪　あてっ、壊れるっ、壊れちゃうぅぅぅぅぅぅぅっ！」

全体重を込めて、勢いよく前へと突き出されたその肉槍の先端が容赦なく開拓されつつある腸壁をごりごりと掘削するかのようにこそぎ落としてゆきながら腸奥を思いっきり抉りつけて、それに合わせて上半身をベッドに押さえつけられて、尻を突き出すような格好にさせられてる長良のたわわな果実がベッドに押し付けられ潰れ、卑猥に歪められてしまう。

胸を思いっきり押しつぶされた時の強烈な刺激と、菊門に与えられる無慈悲な苦痛混じりの快楽にただ長良は嬌声交じりの悲鳴をあげて、陵辱者の肛虐を耐えるしかない。

しかしながらも、数日前まで男など知らなかった長良にとって、菊門に与えられる快楽は余りにも異質であった。
腸壁をごりごりと掘削するかのように強烈に擦り、容赦なく腸穴の肉洞を引っ掻き回されるたびに、下半身から文字通り脳天まで突き抜けるかのように与えられる膣穴に与えられる快楽とはまた違う、背筋がゾクゾクとしてしまいそうになる異質な快楽は長良の崩壊しつつあった理性を溶かすのに十分であった。
「あっ、おっ、おっ♪　お尻っ、気持ちいいっ、あっ、ぁぁぁぁ♪　あはっ、あて、お尻で気持ちよくなっちゃってるぅ♪　あはっ、あははっ♪」
膣側の壁を擦りつけるかのように角度を付けて肉棒が付きこまれてゆき、ごりごりと腸壁を思いっきり抉りつけてゆきながら壁越しに子宮の辺りを思いっきり抉りつけて、肉棒を抜く瞬間に角度を修正、下側から上側の壁を肉槍の先端が思いっきり擦りつけてゆきながらカリ首の部分がごりごりと腸壁を擦りつけて、それと共に長良の今までギリギリのところで保っていた理性が一気に削り取られてゆき、菊門での絶頂へと長良は押し上げられてしまいながら笑みを浮かべて、自らの体に絶え間なく与えられ続ける快楽を受け入れ始めた。
「あはっ、気持ちいい？　ボクも気持ちいいよ♪　長良ちゃんのお尻おまんこ、凄く気持ちいい♪　締まりも良くて襞が多くて、名器だよ♪　お尻も柔らかくて気持ちいいよね、うんうん♪」
そう言って、菊門を踏みにじり蹂躙している少佐の腰遣いがラストスパートをかけるかのように更に激しくなってゆき、長良の喘ぎ声も菊門を少佐の肉槍で乱暴に抉りつけられるたびに地下室中に響き、すっかり過敏になってしまった腸穴の最奥を思いっきり抉りつけられるとぷしゃっ、と潮まで吹いてしまっていた。
「お尻の穴の初めて、奪われちゃったばかりなのにこんなに気持ちよくなっちゃってるなんて本当にとんでもない変態さんだね、長良ちゃんは♪　そんな変態さんの長良ちゃんは、ボクの肉便器になってるのがお似合いだよっ」
「あっ、あぁぁぁっ♪　あて・・・あて、変態・・・えへへ♪　あはっ、

お尻の穴でぇ、こんなに、気持ちよくなっちゃってるなんてぇ・・・♪　あて、変態だったんだ・・・♪　あぅっ・・・♪　あはっ・・・あはは・・・♪」

少佐の細腕が振り上げられて、胸と比べると若干肉付きは薄いものの、それでも男の視線を釘付けにする安産型の桃尻めがけて振り下ろされ、長良のその魅惑の桃尻に小さな手形が幾つも刻み込まれてゆく。

当然ながら長良に猛烈な激痛が走る事だろうが、すっかり少佐によってマゾに調教され。

もしくは、元からマゾの素質があった長良は尻を思いっきり叩かれるその刺激にさえも快楽を見出し、菊門に埋められてるその肉棒にご奉仕するかのように腸壁を纏わりつかせて、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。

理性が崩壊すると、後は呆気なかった。

自らの事を蹂躙し、踏みにじる雄の事をご主人様だと体だけではなくて心の底からも認め、菊門に出し入れされてゆく肉棒に気持ちよくなってもらおうと長良の体はご奉仕してゆく。

正しく名器と言ってもいい程の長良の菊門は、挿入の際には強烈な締まりで突き入れられてゆく肉槍の先端を歓迎し、根元まで挿入されたらアヌスの入り口でぎりぎりと根元を締めあげてやりながら肉襞を肉竿の部分に舌でご奉仕するかのように絡みつかせ、子種を搾り取ろうとしてゆく。

「っ・・・っ・・・♪　お尻の穴に吐き出してあげるよっ・・・しっかり、受け止めて・・・ねっ・・・♪」

「うんっ・・・♪　出して、指揮官っ・・・！　あてのお尻の穴も、指揮官のせーえきで一杯にしてぇ・・・♪　あっ・・・ぁぁぁぁぁ♪」

肉棒が抜ける寸前まで引き抜かれて、力いっぱい叩きつけるかのように突き入れられ、奥の部分が思いっきり抉りつけられ長良の体が大きく揺さぶられる。

ぐりぐりと奥の部分を肉槍の先端部で押し上げてやりながら、少佐は肉棒に装填されていた熱く粘っこい子種をどくんっ、どくんっ、と

音を立てて長良のアヌスに大量に注ぎ込んでゆき、無垢だった少女の、今では淫乱に堕ちてしまった雌の菊門を雄のモノだという事を示すかのように大量の種で埋め尽くしてゆく。
「あはっ・・・♪　中にぃ・・・出てるぅ・・・♪　あてのお尻の穴も、せーえきで・・・一杯にされちゃった・・・えへへ♪　あて・・・男の人のモノになっちゃったんだ・・・えへへ♪」
膣穴だけではなく、菊門さえも粘っこい精液で汚され、白濁で埋め尽くされてゆく感覚に、長良は悲しそうな表情を浮かべる事はなく、むしろ雄のモノにされて悦ぶかのようにだらしない笑みを浮かべてしまっていた。
少佐の腰が小刻みに揺さぶられて、腸壁に塗り込むかのように精液が吐き出されてゆくその感覚さえも、今では心地いい。
粘っこい精液を注ぎ込んでいった肉棒がアヌスから勢いよく抜かれると、長良は名残惜しそうにんぅ、と声を漏らした。
先ほどまでは綺麗な形をしていた窄みであったが、今は入り口の皺が伸び切ってしまうほどまで大きく口を開けて、吐き出された雄の種をどぷっ、どぷっ、と音を立てて体外に吐き出してゆく。
「・・・ね、長良ちゃん、ボクのモノになってくれるよね？」
その言葉に、長良はこくりと頷くしか無かった。
「ふふふ♪　よろしい、もう、抵抗はしないでくれるよね？」
「・・・うん、あて、もう、抵抗しない・・・♪　抵抗しないからぁ・・・もっと、あてのこと、気持ちよくしてくれる・・・？　えへへ♪」
自分から仰向けになって、股を大きく広げて雄を誘う姿勢になる
股が大きく開かれて、雄の目の前に晒されてしまってる小陰唇が捲れて、露になってしまってる膣口からは愛液が止めどなく溢れてしまっていた。
「もう、手錠は要らないよね？　君は今日からボクの肉便器の1人だよ？　大切に気持ちよくしてあげるね？」
長良の手首を拘束していた手枷が外されるが、長良は抵抗する事無く、むしろ、雄の体を優しく抱き寄せて。
「うん・・・♪　あてのこと、気持ちよくして・・・♪　あてが、お母

さんになるまで、おまんこに、沢山、せーえき注ぎ込んで・・・ね？」
誰にでも優しく、親しみやすい長良は、余りにも無防備であった、本気で自らの事を堕とそうとしてくる雄に勝てるはずなど最初から無かったのだ。
自ら股を開いて、雄を誘う長良の姿は、頼れる面倒見のいい長女ではなく、快楽に完全に堕ちた雌の姿であった。
その雌に小柄ながらも歴戦の雄が正面から覆いかぶさり、その体を貪るかのように貫いていこうとする。
完全に堕ちてしまった長良への、雌へのトドメが。
子を孕ませるための種付けが行われようとしていた。

悪い夢（長良編）　結

「えへへっ、じゃあ、今から長良ちゃんの事をママにしてあげるために～、赤ちゃん孕みやすくなるオクスリ、注射して～、絶対に孕むように沢山、たーくさん、赤ちゃんの部屋に種付けしてあげるね」

股を開いて雄を誘っていた長良の体に正面から覆いかぶさっている小柄な雄は、この雌を自らのモノにするために、ベッドの傍に置かれていた棚から注射器を取り出して、にこり、と心底楽しそうに笑みを浮かべ、注射器を長良の首筋に突き立てて、注射器の中に充填されている薬液を注いでゆく。

注射器が首筋に突き立てられ、薬液が注ぎ込まれてすぐに、長良の淫らに作り変えられてしまった淫乱な雌の体は、自らの下腹部がどくん、どくん、と脈打ち、雄の種を欲するかのように膣奥から愛液が分泌されてしまう事だろう。

膣奥から分泌された愛液が、肉槍が今まさに突き立てられようとしている膣口を濡らし、押し付けられた肉槍の先端を捻じ込んでほしそうに、ひくひくと膣口を震わせて、長良は目じりに涙を貯めながら雄に雌の本能のままに懇願してしまう。

「指揮官・・・♪　あてのことぉ・・・♪　ママにしてぇ・・・♪　指揮官の、女にしてぇ・・・♪」

淫らに指揮官の肉棒を求める長良の姿はもはや娼婦のようで、子宮から全身に広がってゆくかのような熱にその白い肌を朱に染めてしまいながら、潤んだ瞳で指揮官の事を見つめ犯して欲しいと懇願してしまう。

「えへへ♪　勿論だよ。　今からボクのこれで、長良ちゃんの事、ママにしてあげるからね？　それじゃあ、いくよっ♪」

愛液が止めどなく溢れ続けている膣口に押し付けられたその肉棒の先端部が、全体重を込められて雌として一番大切な場所である胎内を蹂躙せんと勢いよく、叩きつけるかのように全体重を込めて突き入れられてゆく。

勢いよく、捻じ込まれるかのように、長良の事を蹂躙するかのように荒々しく突き入れられてゆく肉棒の先端部は、長良の初めてを奪った時とは打って変わって、あっさりと阻むものもなく奥へ奥へと突き進んでゆき、長良のうねうねと雄の種を絞りつくそうと蠢く膣壁をごりごりとこそぎ落とすかのように強烈に擦り続けてゆきながら突き入れられてゆくその肉棒の先端部は長良の子宮の入り口をこじ開けんばかりに強烈に、力任せに抉りつけてゆく。

「あはっ、来たぁ♪　あてのおまんこにぃ♪　指揮官のおっきいおちんちんっ、入って来てるぅ♪　あぅ♪　赤ちゃんの部屋ぁ・・・♪　こつんこつんされるのぉ・・・♪　凄く、気持ちいいのぉぉ・・・♪」

勢いよくねじ込まれてきた肉槍の先端がヴァギナの最奥を全力で抉りつけて、自らに種付けしようと容赦なく膣穴を穿られ続けてゆく刺激が心地よくて仕方ない。

快楽に堕ちてしまった長良は、その快楽を更に得ようと、雄に更に気持ちよくして貰おうと、きゅっ、きゅっ、と膣穴の入り口を強烈に締め付けて、肉棒が後ろに引かれる瞬間に圧迫し、突き入れられる瞬間に膣肉をかき分けて突き進んでゆく肉棒の先端に柔肉を絡ませ、柔らかい快楽で先端を包み込み、初めてを奪われた時と同じく、締まりの強い入り口と柔らかな刺激で楽しませてくれる膣壁の両方で自らを蹂躙し続けてゆく指揮官の肉棒にご奉仕してゆく。

ミミズがうねうねと蠢くかのように絡みついてくるかのような膣壁と、膣口の搾り取るかのような締め付けは、数多の雌を堕としてきた調教師であるメイ少佐の事さえもその膣穴の虜にしてしまいそうなほどのもので、メイ少佐も腰遣いもその名器と言っても良い膣穴を更に貪ろうと、発情期の犬のような乱暴なものになってゆく。

「いいね、君のおまんこ♪　今までボクが堕としてきた二人に比べても勝るとも劣らないぐらいのいいおマンコだ♪　褒めてあげるよ？　偉い偉い♪」

「えへっ・・・♪　指揮官にぃ♪　褒められてぇ、あて、嬉しい・・・れすぅ・・・♪　指揮官、もっと、もっと、あてのこと、気持ちよくしてください・・・♪　指揮官のモノだっていう、証ぃ、おまんこだ

けじゃなくて、お尻にも、口にも、胸にも、刻んでください・・・えへへ♪」
容赦なく、幼い雄は全体重を込めて腰を叩きつけてゆきつつ、肉棒を突き入れてゆくたびに大きくたぷん、たぷん、と揺れ動き、雄を誘惑するその果実を両手に鷲掴みにしてやって、ぎりぎりと細い指を食いこませ、長良の望んだとおりにその胸に小さな手形を刻み込み、長良が自分の女だという事実をその体に刻み込んでやりながら、叩きつけるかのようにごちゅん、ごちゅんっ、と子宮の入り口を突き上げてゆく。
乱暴に突き入れられていくその肉槍の先端は緩んできた子宮の入り口を穿ち、子宮の入り口をこじ開けてやりながら、新しい命をあやすための生命のゆりかごである、子宮の奥の壁を思いっきり抉りつけてゆく。
膣内だけではなく、生命のゆりかごにさえ行われる苛烈な陵辱によって与えられる強烈すぎる刺激は長良を激しい絶頂へと押し上げてゆくことだろう。
先ほど注射された排卵誘発剤によって、雄の種によって孕む準備が完全に整った子宮を刺激されるたびに長良は目にハートを浮かばせてしまい、膣奥から洪水のように愛液を溢れさせて、肉棒が出し入れされる結合部から溢れ出た液体を周囲に飛び散らせてしまいながら、与えられる快楽にただ喘ぎ続けてしまう。
「そろそろ、中に、出してあげるよ？　しっかり、受け止めてね・・・えへへ♪　ほぉら、孕んじゃえ！」
「あんっ、あんっ♪　指揮官っ、指揮官っ、うん、あてっ、指揮官の、赤ちゃん・・・産む・・・だからっ、だから、ずっと、あてのこと、傍に置いて・・・ねっ、気持ちいい事・・・してぇ・・・♪　ふわっ、ふわっ・・・あぁっ、ぁぁっ、ぁぁぁぁ♪」
一層強く、子宮の奥の壁を抉りつけようと、乱暴に、膣肉をこそぎ落とすかのようにごりごりと角度をつけて突きこまれてゆく肉棒の先端部で膣穴を刺激され、ごちゅんっ、と音が響いてしまいそうなほどの勢いで子宮の入り口をこじ開けられ、赤ちゃんの部屋の最奥の壁

を抉りつけられてしまった瞬間に、長良の淫らな、すっかり指揮官専用の娼婦の体に作り変えられてしまったその体は反り、絶頂へと押し上げられてしまったようで、体全体をびくっ、びくっ、と痙攣させてしまう。

体全体をびくっ、びくっ、と痙攣させて、潮まで吹いてご主人様である指揮官の体を汚してしまいながら、ぐったりと脱力してしまっている長良の姿を見て、にやり、と笑みを浮かべ、鬼畜な指揮官は絶頂寸前の肉棒を再び抜ける寸前まで引き抜いてゆき、強烈すぎる絶頂へと押し上げられたばかりの長良の体を更に苛んでいこうとする。

「ふぇ・・・し、指揮官、らめぇっ！　今、凄いの来たばかり・・・だからぁっ、今、それ動かしちゃぁ・・・」

「あはっ♪　ボク、まだ出してないよ？　ほぉら、長良ちゃんのだーいすきなおちんちんだよ？　しーっかり気持ちよくなって・・・ねっ！」

止めようと声を絞り出そうとした長良に、今一度自分の立場を分からせてやるべく、抜ける寸前まで引き抜かれたその肉棒の先端部を、一気に、力任せに思いっきり突きこんでゆく。

力任せに突きこまれてゆく肉の槍の先端は僅かにお腹側に角度を付けられており、突き入れられてゆく肉矛は先ほどよりも激しく蠢き、子種を絞り出そうとしてゆく膣肉をかき分けてやりながら、子宮と同じ、どう鍛えても守りようのない弱点であるGスポットを容赦なく強烈に穿ってゆく。

オーガズムへと押し上げられた直後に、自らの弱点であるGスポットを抉りつけられた瞬間、声を絞り出そうとしてた長良の動きが完全に一瞬止まり、その直後に舌を突き出してしまいながら声にならない悲鳴を周囲に響かせてしまう。

容赦なく、追撃を与えるかのように己の体に刻み込まれてゆく激しすぎる、脳を揺さぶり魂に刻み込まれてしまうほどの凄まじい快楽は、誰が自分のご主人様なのか、長良に心の底から、完全に理解させようとすることだろう。

もはやメイ少佐と言う名のご主人様に絶対に抗えないように快楽を体にも、心にも、そして魂にも刻み込まれてしまって、声にならな

い悲鳴を漏らし続けている長良を楽にしてやるべく、Gスポットを抉りつけたばかりの肉槍の先端部の角度を修正し、子宮の奥の壁めがけて勢いよくその腰を前へと突き出してゆく。
「〜♪〜♪　っ・・・っ・・・〜!」
　子宮の入り口を容易くこじ開け、子宮の奥の壁を抉りつけられた瞬間に、堰を切ったかのように、音を立てて注ぎ込まれてゆく特濃の精液。
　一瞬で子宮内を完全に埋め尽くし、染め上げてゆくその感触に体を長良は指揮官の手で掴まれたその胸を大きく震わせてしまいつつ、自らの卵子が蹂躙されてゆくその感覚に先ほどと同じように、ただ声にならない悲鳴を漏らし続ける。
　濁流のように、音を立てて注ぎ込まれてゆく精液は、排卵誘発剤によって子を孕む用意が整った卵子を夥しい数の精子が蹂躙し、踏みにじり、確実に自らの子を孕ませようと数と質の暴力で念入りにその卵子を輪姦してゆき。
　何とか、最後の力を振り絞って、最後の一線を超えまいと踏みとどまっていた卵子もついに屈服し、メイ少佐の遺伝情報がその卵子に刻み込まれ、新しい命が長良の子宮に宿る事だろう。
「あはっ、凄いイキっぷり♪　よっぽど孕まされるのが気持ちよかったのかな？　えへへ♪　それならボクも嬉しいなぁ、ねぇ、長良ちゃん聞いてるー？　今、長良ちゃんの赤ちゃんの部屋、ボクのせーえきで埋め尽くされちゃって、ボクの赤ちゃん、孕まされちゃってるんだよ？　おーい・・・。　あー、これはダメか、イきすぎて、全然こっちの声、聞こえてないみたいだ。　まぁ、良いかー。　おまんこも、お口も、お尻の穴も、まだまだ使えるだろうしぃー、もっと長良ちゃんの体で楽しませて貰おうっと♪」
　念入りに、数十秒に渡って確実に長良に自らの子を孕ませようと種付けを行った後に、ゆっくりと肉棒を引き抜いて、口を半開きにさせて、涎を口の端から垂らしてしまってる長良の髪を掴んで、ぐったりとしてる長良の口内に容赦なく自らの肉棒を捻じ込んでやり、髪を掴んだまま長良の口を使って自らの肉棒を綺麗にしていこうとする。

「んぐっ・・・んっ・・・ごぉ・・・ん・・・んぅ・・・っ」
気絶し、意識を失った長良は、自らの口内をティッシュ代わりに使われて、苦しそうな声を漏らすものの、当然抵抗することなど出来るはずもない。
ただ、指揮官の肉オナホとして、その性欲を受け止めるために使われてゆくだけだ。
長良の口内をティッシュ代わりにして肉棒を綺麗にした後に、綺麗になった肉棒を口内から引き抜いて、えへへ、と指揮官は屈託のない満面の笑みを浮かべて、ぐったりとしてる長良の体をうつ伏せに寝かせてやって、後ろから覆いかぶさるような姿勢になり。
「それじゃあ、今の一回で孕んだかどうか分かんないしぃー、もーっと種付けしてあげるね？　えへへ♪　覚悟してよね、長良ちゃん♪」
数えきれないほど手形が刻み込まれた、しかしながらも雄の劣情を誘い続ける桃尻を軽く撫でてやって、意識を失ったその雌の体を貪り続けようと、後ろから覆いかぶさり、貫いていこうとする。
肉オナホとして使われて、指揮官の性欲を処理されてしまうというのに、意識を失ってしまったその雌の口は歪み、その表情は笑っているように見えるかもしれない。
長良と言う一人の心優しく、面倒見の姉として理想的な艦船としての面影はもはや残されていない、雄に従順な肉便器だけが、その場に残されていた。

司令部への報告書より一部抜粋

長良型1番艦　長良
調教に成功　反乱の気配なし
従順な艦船であるため、母親としての適性が高いと思われる、参考画像を添付する、確認されたし
司令部への報告書に添付された写真には、慈悲の微笑みを浮かべ

て、綺麗なピンク色の胸の先端から母乳を溢れさせてしまいつつ、メイ少佐の逞しい肉槍をそのたわわに実った、基地に来た頃よりも子を孕んでしまったせいで膨らんだ大きな胸で挟み、谷間からはみ出ているその肉槍の先端に舌を這わせて、美味しそうに頬張りながら肉棒に奉仕する長良の写真と、M字開脚で股を大きく開き、すっかり小陰唇が捲れて大きな花を咲かせてしまっている膣穴を見せつけるかのように指で開いて、頬を恥ずかしそうに赤らめてしまっている写真の二枚が同封されていた。

この写真を見た司令部は、新しい艦船の派遣を固く決意することになる。

長良の想い

あてたちの指揮官である、メイ少佐はちょっと、いや、かなりエッチな所があって、女の子に酷い事も沢山するけど、優しい子だとは、思う、多分。

イラストリアスさんの淹れてくれた紅茶をあては啜りながら、ふぅ、と一つ息を吐いた。

ここの海軍基地は、所属している艦船数が少ない割には立派な食堂が存在しており、ちょっと寂しく感じる食堂の椅子には、あての他に二人の同僚が座って、あてと同じように紅茶を飲んでいた。

「ねぇ、イラストリアス。　あんた、妊娠何か月目だったかしら？」

銀髪の、最初はちょっと怖いと思ってた、意外と面倒見のいいその人は、紅茶を一口啜って。

「ロイヤルの飯は不味いけど、紅茶は美味しいわね、あ、このクッキーも美味しい。　長良は料理上手よね、そこのお母さんと違って」

クッキーを美味しい、と言ってくれたオイゲンさんに、えへへ、とあては笑みを浮かべる、最初はちょっと怖いって印象はあったけど、こうやって話してみると結構良い人でした。

「むぅ・・・。　ご飯は不味いは余計、ですよ」

オイゲンさんの言葉に、ほっぺを膨らませて、あてのクッキーを一枚頬張り、紅茶をお上品に一口。

「そろそろ八週目ですね。　この前、指揮官様が私のお腹にいる子の名前、決めてくれたんです。　産まれてくるのが待ち遠しいですね♪」

そう言って、幸せそうにお腹を撫でるお嬢様は、イラストリアスさん。

あてや、オイゲンさん達よりも先にここにやってきて、指揮官が最初に調教した人で、この基地で一番最初に指揮官の赤ちゃんを孕まされた人、幸せそうに微笑むイラストリアスさんの姿を見て、あてや、オイゲンさんも釣られてくすり、と笑みを浮かべる。

「ふふ、良かったじゃない。　私も、そろそろ指揮官に赤ちゃんの名前、考えて貰おうかしら」
　ここで今、雑談しているあてたちは、産まれた国も、陣営も、艦種も違うけど、ある事で統一されていた。
　それは、ここの海軍基地の指揮官によって、調教され、そして、子を孕まされたという事、当然、あても近いうちに出産して、一時の母になる。
「でもでも～、赤ちゃんが出来てしまうと、赤ちゃんに悪い影響が出ないようにって、おまんこでエッチな事するのは禁止されてしまうのですよね・・・。　ここ最近は、お胸や、お尻ばっかりですし、ちょっと寂しい気もします」
　お淑やかな、お嬢様のような見た目とは裏腹に、指揮官との行為の時は、あてよりも大きい胸や、その長い銀髪を振り乱して乱れちゃうイラストリアスさんは、おまんこが穿られるのが大好きみたいで、最近はちょっと欲求不満みたい、あても、妊娠してるのが分かってから、指揮官におまんこでエッチな事して貰えなくて、寂しいと思っていたから、イラストリアスさんの意見には同意見。
「ま、仕方ないじゃないの。　私たちお母さんなんだからね。　それに、お尻を弄られるのも良い物でしょ？」
　くすくす、と笑みを浮かべながらそう返すオイゲンさんを見て、イラストリアスさんはちょっとだけぷー、と可愛らしく頬を膨らませて。
「んもぅ、オイゲンさんはおまんこよりも、お尻を弄られるのが好きだからそう言えるんですよ。　・・・まぁ、私はお尻でするのも好きですけど、ちょっと最近マンネリ気味と言うか・・・や、優しくしてくれるのは嬉しいんですけど、刺激が足りないって言うか・・・」
「へぇ、あんたマゾなのね。　変態♪」
「むぅ、オイゲンさんも指揮官様とお尻でセックスするときも、毎回お尻を叩いてってお願いしてるではありませんか」
「ふふふ。　あんたと違って、私は自分がマゾだってこと隠してないもの。　お嬢様気取って遠慮してたら、あんたから指揮官取っちゃう

わよ？」
　くすくす、と笑みを浮かべるオイゲンさん。　言ってる事は過激だけども、冗談で言ってるのはその様子を見れば明らかであった。
「ふふ、大丈夫ですわよ、指揮官様、私の事、ずーっと愛してくれるって約束してくれましたもの♪　・・・でも、そう、ですね、もう、私は、イラストリアスは指揮官様の奴隷なのですから、今度からしっかりと自分のしてほしい事、指揮官様にお願いするようにします」
「ふふふ、それが良いわよ。　どうせ、指揮官には私たちの恥ずかしい所は殆ど見られてるんだし、今更恥ずかしがったり遠慮したりするなんて馬鹿らしいわ。　長良もそう思うでしょ？」
「・・ふふ、うん、あてもそう思うよ、オイゲンさん。　おまんこも、お尻の穴も、ぜーんぶ、指揮官に見られちゃってるもんね」
　指揮官に茂みの中に連れ込まれて、犯された時は、とっても痛くて、怖くて、苦しかった。
　でも、指揮官に犯されて、獣のように求められてるうちに、少しずつ、嫌じゃなくなっていって。
　体が屈服すれば、心が屈服するのはすぐだった、最初はあんなに嫌だった、指揮官に陵辱されるのも、今では全然嫌じゃなくなってる。
　むしろ、指揮官とエッチするの、あては、嫌いじゃなかったり。
「ふふ♪　そうよね、ええ。　乙女の体を踏みにじって、私たちの事を母親にしやがったあの指揮官には、ちゃーんと責任は取って貰わないとね」
　くすくす、と笑みを浮かべていたオイゲンさんは、ちらり、と時計を見て、ふむ、と一つ呟き。
「・・・で、そろそろ午後だけど、指揮官がお仕事してるかどうか、長良、ちょっと見てきてくれるかしら？　あの子、この時間帯になるとよく昼寝しちゃってるのよね。　もし仕事を終わらせずに寝てるようだったら、起こして仕事させて頂戴」
「うん。　任せて。　指揮官がお昼寝してたら、しっかり起こしてあげるから」
　僅かに残った紅茶を飲み干して、堰から立ち上がり、ちらり、とお

皿に盛られたクッキーに視線を移し、ある事を思いついて小皿に我ながら自信作のそれを何枚か乗せて、指揮官のお部屋の方に向かおうと足を進める。
ちょっとだけ、クッキーを食べてくれた指揮官の反応を期待してしまう、美味しい、と言ってくれたら嬉しいなぁ。
執務室のドアをこんこん、と軽くノックして、返事がないので入るよ、と伝えた後にドアノブに手をかけ、ドアを開き、中へと入り、指揮官の方に視線をやると、指揮官はオイゲンさんの予想通り、お昼寝してるようで、可愛らしい寝息を立てながら夢の世界に旅立ってしまってるようだった。
「あはは、指揮官もまだまだ子どもだもんね。　でも、指揮官、書類の決裁は終わったみたいなのかな？」
でも、子どものように見えてしっかり者の指揮官は、ちゃんと自分に与えられた書類仕事は終わらせていたようで、机に突っ伏して眠ってしまってる指揮官の傍には、書類の束が置かれていた。
そーっと、指揮官に近づいて、起こさないように、指揮官の柔らかな髪の方に手を伸ばし、優しく頭を撫でる。
「ふふ・・・こうして撫でてると、妹が増えたみたい♪　指揮官、あんなに凶悪なモノ持ってるのに、こんなに可愛いなんてちょっと卑怯だよ？」
指揮官の寝顔は、年相応の少女のようなもので、あては自分の妹たちの姿を連想してしまう。
指揮官が風邪をひかないように、そっと、指揮官の事を抱き上げて、ソファに寝かせてあげながら、今だけは指揮官の事を独り占め。
膝に指揮官の頭を乗せて、優しく頭を撫でてあげながら膝枕。
「えへへへ♪　今だけはあてが指揮官の事を独り占めだよ？　ふふ～♪　指揮官ったら可愛い～♪　つんつん♪」
そーっと、指揮官の柔らかなもちもちほっぺを指で突く、何度か指揮官の事を起こさないようにほっぺをつんつんして楽しんでいると、あてはある事に気が付いた。
「・・・ふふ♪　・・・指揮官の、こっちの方も、元気だよね？　・・・

ね、指揮官♪　起きちゃわないなら、指揮官のおちんちん、あてが食べちゃうよ？」
　指揮官の逞しい、あてだけじゃなくて、イラストリアスさんや、オイゲンさんを虜にしてしまった、こんなに可愛らしい見た目とは裏腹に大きな大きなおちんちんは、ズボン越しにでも分かるほどに大きく膨らんじゃって、その存在を主張してしまっていた、それを見て、ちょっとだけ指揮官に仕返ししてあげようと、意地悪な事を思いついた悪い笑みをあては浮かべてしまっていると思う。
　でも、良いよね♪　・・・指揮官には、ずーっと、エッチな事されてばかりだったし、たまには、仕返ししても。
「起きないって事は、エッチな事、して、良いって事だよね？　・・・ね、指揮官♪　あてが、こんなにエッチな子になっちゃったのは、指揮官の責任、だから・・・。　ちゃんと、責任、取ってよね？」
　すぅ、すぅ、と未だに寝息を立てて、夢すら見てるか怪しい深い眠りに落ちてしまっている指揮官の下半身を覆い隠しているズボンと、そしてパンツを脱がせて、指揮官の逞しいおちんちんを露にさせて、あても、上着を脱いで、ブラをずらして、時々重くて邪魔だって感じる事もある、でも指揮官が沢山愛してくれて嬉しいお胸を出して。
「・・・ふふ♪　指揮官のおちんちん、あてのおっぱいで挟んであげるね？」
　こんなに、えっちな子にしたのは、指揮官なんだから、ちゃんと、その体で責任は取って貰わないとね♪
　あての大きな、指揮官に沢山開発して貰ったお陰で、最近乳首からミルクが漏れるようになっちゃったお胸の谷間で、指揮官の脈打つソレを挟んであげて、谷間から露になってる指揮官のおちんちんの先端に口を近づけて、舌でぺろぺろ、と舐めてみる。
　最初は、指揮官のおちんちんをお口でするのは苦手だったけど、今では指揮官の敏感な場所が手に取るように分かる。
　エラが張った、カリ首の辺りに舌を這わせて、指揮官の竿を挟んでいるお胸を、両手で竿に押し付けるようにして圧迫してあげて、胸全体をえっちに歪めてしまいながら、指揮官のおちんちんを、お胸と、お

口を使ってご奉仕してゆく。
カリ首に舌を這わせて、お胸で竿全体を包み込んで圧迫してあげてると、おちんちんの先端からはちょっとしょっぱい、先走りと呼ばれるものが溢れてきて、あてはカリ首に這わせていた舌を先走りを溢れさせちゃってる亀頭の方に近づけて、ぺろぺろ、と舌先でそれを舐めとってゆく。
幸いなことに、おちんちんにえっちな事されてるというのに、指揮官はまだ眠りの世界に旅立ったままで、目覚める様子もない。
その様子を見て、あてはちょっとだけ大胆に指揮官にご奉仕しようとしてゆく。
先走りを舐めとった後に、火照った体を癒すために、両手でお胸を竿に押し付けながら、つん、と尖がってきたお胸の突起を軽く弄る、胸の突起からはミルクが滲んじゃうけど、おちんちんをしゃぶって、昂ってしまったあては自分の事を止める事を出来そうになかった。
先端を咥えて、舌先で亀頭を嘗め回してゆきながら、竿の部分を包み込んでいる胸で扱いていく、谷間が指揮官の熱いおちんちんで擦られるその刺激に、気を抜くとあては指揮官がイっちゃう前に自分がイってしまいそうになる。
こんなに、えっちな体になっちゃったのは、指揮官のせいなんだから。
そう、心の中で思いながら、あては愛しい指揮官の、びくびくと震えて、限界が近いおちんちんに吸い付いて、お胸を一層強く竿に押し付け、乳首を自分の指で抓りながら、絶頂へと達してしまった。
膨らんだ胸の突起から、ミルクが溢れて、ソファを汚してしまう、後で指揮官に怒られちゃうかもしれないけど、そんな事を気にしてる余裕はあてには無かった。
口で咥えられている先端から熱い熱い、淹れたての紅茶よりも熱いかもしれない赤ちゃんの元が吐き出されていって、あての口を埋め尽くしてゆく。
んくっ、んくっ、と飲み干すのに苦労しそうな熱い熱いそれを、一滴残さず飲み干してゆき、尿道に溜まった精液も搾り取ろうと口を窄

めて吸い付き、指揮官のおちんちんに溜まった精子を全部搾り取った後に、口と胸を離して、口の端から溢れた精液を袖で拭い、指揮官に気持ちよくなってもらった事が嬉しくて、えへへ、と笑みを浮かべてしまった。
「・・・んぅ・・・。　長良・・・。　おはよう・・・もう、長良ってば、夜まで我慢できなかったの？」
　眠たそうに、お寝坊さんが目を覚ます。
「・・・えへへ♪　ごめんね、指揮官。　寝てる指揮官が可愛かったから、つい・・・」
　むぅ、と、ちょっとだけ指揮官は不服そうな顔をして。
「・・・長良のご主人様は、ボクなのに、主導権はボクがずーっと握るつもりだったのに、むぅ」
　不服そうな顔をして、頬を膨らませてる指揮官の頬を優しく指でつんつん。
「ふふ♪　指揮官、そんな顔しないで？　ね、夜になったら、奴隷なのに、ご主人様の精子を絞ろうとした、あてに、たーくさん、オシオキして欲しいな・・・♪」
「・・・ふふん♪　勿論だよ、夜は覚悟しててよね」
　すぐに機嫌を直して、ふふんっ、と微笑み返す指揮官の姿を見て、今度は優しく頭を一撫で。
「ね、指揮官！　クッキー焼いたんだよ、三時のおやつに、良かったらどうぞ♪」
　すると、指揮官は目を輝かせて。
「本当!?　じゃあじゃあ、あーんして、長良！」
　口を開けて、あーんを、せがむ指揮官の姿を見て、あては微笑を浮かべながら、手を近くに置かれていたウェットティッシュで拭い、小皿に盛られたクッキーを一枚指で掴み、指揮官の口元に近づけた。

　あてたちの指揮官である、メイ少佐はちょっと、いや、かなりエッチな所があって、女の子に酷い事も沢山するけど、優しい子、だとは

思う。
何故ならば、この可愛らしいご主人様の元に居る奴隷は、今は皆幸せに過ごしているから。
あても、色々あったけど、今は幸せです♪

堕落する深紅　起

ルビーの如く赤い瞳が、今日から配属されることになる海軍基地の門を見上げる。

赤い瞳に、やっと出会う事が出来る自らの指揮官への期待から、妖しい光を宿し、門を守っていた若い衛兵2人に敬礼し、足取り軽く、指揮官の部屋が存在する司令部へと向かおうとする。

彼女の名前は大鳳、重桜の装甲空母だ。

大鳳の容姿に見惚れていた、門を守っていた若い衛兵は、慌てて門を通って基地の奥へと進んでゆく大鳳の背中に向けて敬礼を返し、胸の高鳴りを抑えようと深呼吸を何度か。

先ほど、自らの傍を通った、あの艦船の肉体は正しく雄が理想とする雌を具現化したかのようなものであった、整った美しい顔、地面に触れてしまいそうになるほどに伸びた、艶のある黒髪、頑丈な子を沢山産んでくれそうな肉付きの良い、それでいて引き締まった桃尻。

しかしながらも、若い彼が一番劣情を誘われたのが、もはや雄に見せつけて誘惑してるとしか思えない、上半球が殆ど露になっているその大きく実った、大鳳が歩くたびにゆさゆさと揺れるその魅惑の果実。

今、彼の傍を通った蠱惑的な雌の色気に、彼だけではなく同僚もあてられてしまったようで、彼と同じように頬を赤らめながら、大鳳の後ろ姿に視線が釘付けになってしまっていた。

この海軍基地には、既に何人か艦船はいるが、この基地に所属してる艦船の中ではイラストリアスと同じかそれ以上の雄の劣情を誘う極上の体つきかもしれない。

ごくり、と衛兵は生唾を一つ飲み込み、色気にあてられてしまって、ズボン越しにでも分かるほどに隆起してしまった自らの愚息を慰めるべく、前かがみになりながら自らの同僚にトイレに行くと告げて、持ち場を離れようとする。

どうやら同僚も似たような状況だったようで、門の守衛二人同時に抜ける事になり、戻ってきた後に隊長に小言を言われることになった

そうな。

「うふふ♪　大鳳の、指揮官様はぁ、どんなお方なのでしょうか♪　ふふっ・・・♪　会ってからのお楽しみだと、上層部の方が仰っていましたが、楽しみですわね♪」

さて、この雄の劣情を無条件に誘う極上の体を持つ大鳳であるが、欠点をいくつか抱えていた。

まず一つ目の欠点が、愛情深いものの、その愛が非常に重いというもの。

そして二つ目が、自らの『指揮官』への盲目的な愛情を持っているという事。

世間一般では、彼女のような存在をヤンデレと呼称される。

そして、世間一般に知られるヤンデレのイメージと同じで、彼女も非常に勘が鋭かった。

具体的に言えば鼻が効いた。

「・・・」

ぴたり、と執務室の入り口の前で立ち止まり、先ほどまでの指揮官への期待に満ち溢れていた恋する乙女のような微笑から一転、その顔からは表情が一切消え失せ、目からハイライトが消える。

ドアノブに伸ばそうとした手を止めたまま、何度か鼻をぴくぴくと動かし、無表情だった顔が怒りで歪みそうになる。

誰かが、自分の、自分だけの指揮官になる筈であった彼をたぶらかし、淫行を働いたのだと。

忌々しい雌豚の汚液とたぶらかされ、弄ばれた可哀そうな指揮官の吐き出した精が交じり合った匂いに、僅かに混じった紅茶の香りから、ロイヤルの艦船のものである可能性が高いと判断。

指揮官への挨拶が終わった後にロイヤル艦船を見つけ出して排除すると心の中で固く大鳳は決意しながら、こんこん、と大鳳はドアをノックし、ドアノブを引いて執務室の中に入る。

「重桜から長旅ご苦労様。　ボクがここの海軍基地の指揮官であるメ

イだよ。　階級は少佐、今日からよろしくね、大鳳！」
　幼さの残る愛らしい顔に、腰に届きそうなほどに伸びた、窓から差し込んできた光が反射して輝いてるように見える金色の髪。
　その幼さの残る顔に、にぱっ、と笑みを浮かべる、まだランドセルを背負って学校に通ってそうな指揮官の姿を見て、大鳳は心の中でこの幼い、少女にしか見えない少年を弄んだロイヤル艦船への憎悪を膨らませつつ、ゆっくり、ゆっくりとその少年に近づき。
「指揮官様・・・もう、安心ですからね・・・？　大鳳が、指揮官様の事を弄ぶ雌豚共から、指揮官様の事を、守ってあげますから・・・」
　きょとん、とした表情を浮かべている指揮官の事をぎゅっ、と抱きしめて、その大きく実った、美爆乳の谷間に指揮官の顔を埋めさせ、頭を優しく撫でる。
　大きく実った果実が、自らの頬を包み込み、優しく頭を撫でる大鳳の手の感触を味わいつつ、指揮官は、メイ少佐は、珍しく困惑していた。
　メイ少佐は、調教師である。
　調教師としてそれなりに裏社会では名の知れた人間であったが、その能力に目を付けた海軍上層部からスカウトされ指揮官として、艦船たちを従順な雌奴隷に堕とし、孕ませ、艦船に生まれた子どもを教育し、戦力増強の新たな方法を模索せよという指示を受けていた。
　調教師として、それなりに女を調教し、堕としてきたメイ少佐であったが、この手のヤンデレタイプは初めてであった。
　大鳳の言ってる事が全く理解できない、こいつは何を言ってるんだ？
　大鳳の、マシュマロのような肌触りの極上の乳肉の魔性の感触から逃れようと、じたばたと両手を動かして大鳳から逃れようとする、そうすると、あっさりと大鳳は解放してくれた。
「あら、指揮官様、うふふ・・・恥ずかしかったのでしょうか～？」
　くすくす、と蠱惑的な笑みを浮かべる大鳳の姿を、一旦距離を取り、見上げ、こほん、と仕切り直しの意味を込めて若い指揮官は一つ咳払い。

「・・・えー、あのー、大鳳・・・ちゃん、だよね？　あのー、うーん、君が、何言ってるのか、ボク、物凄く言いづらいんだけど、分かんないんだよね、詳しく説明をお願いできるかな？」
　困惑しつつも、何とか言葉を絞り出す指揮官の姿を見つつ、大鳳はある一つの確信を覚える。
　あくまで、大鳳にシラを切り、指揮官の体を弄んだ雌豚を守ろうとしているのだと。
　何という献身、何という優しさ、指揮官様への溢れんばかりの愛慕が更に高まると共にここまで指揮官様にさせているロイヤル艦船への殺意が強まってゆく。
「指揮官様、言わなくても分かります。　指揮官様はぁ、雌豚の事を、庇っていらっしゃるんですよね・・・？　ふふっ・・・♪　名前、教えてください、今から、この大鳳が、その雌豚をこの世から肉片一つ残さず消し去ってきますわ～♪」
　指揮官への愛慕から見惚れてしまいそうな笑みを浮かべながらも、その目に殺意と言う名のどす黒い炎を燃やす大鳳の姿を見て、指揮官はある一つの確信を覚えた。
　こいつには話すよりも実力行使に出て自分の体が犯されるために存在している雌だという事を分からせた方が手っ取り早いという事を。
　そうと決まれば、やる事は一つだ、懐に手を突っ込み。
「さぁ、指揮官様♪　雌豚を排除し終わったら、指揮官様のお世話、大鳳に全て一任してくださいね♪」
　こちらに全く警戒心を向けてない雌に床を蹴って小柄な体格を活かして素早く大鳳の懐に潜り込み、こちらの懐に仕込んでいたスタンガンを大鳳の腹部に押し当てる。
「ひぃっ・・・!?　きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
　外に響いてしまいそうなほどの悲痛な大鳳の悲鳴が口の端から漏れ、びくっ、びくっ、とその豊満な果実を大きく跳ねさせて、体を痙攣させた後に、どさり、と膝から床に崩れ落ちてしまう。
　愛する指揮官様の突然への行為に、大鳳は一瞬困惑するが、すぐに

納得した。
ああ、指揮官様は、己の体を弄ばれた上に、その姿を写真で撮られるかして、きっと弱みを握られているんだ。
弱みを握ったうえで、それに気が付いた艦船をこうして指揮官を使って、排除しようとしている。
許せん相手だ、痺れが取れたら、その存在を消し飛ばしてくれる。
そんな理由でなければ、こんなに指揮官様を愛している大鳳の事、傷つける筈無いじゃないか、と。
「指揮官・・・様ぁ・・・。　大鳳・・・指揮官・・・様の、ためならば、なんでも・・・します・・・。　だから、だから、貴方の弱みを握っている、艦船の事を、教えて、ください・・・。　大鳳が、消して、差し上げます・・・から・・・」
膝から崩れ落ちて、うつ伏せの姿勢で床に倒れ、そのたわわな果実を床に押し付けられてしまって、卑猥にその果実を歪ませてしまっているぐったりとしている大鳳の魅惑の体にねっとりとした視線を浴びせていた指揮官であったが、その言葉を聞いて、こいつにはやっぱり話は通用しないなと再認識し。
「いや、これ、弱みを握られてるとかじゃないんだけどね。　ボクは艦船の女の子と指揮官になってから沢山エッチな事が出来て、毎日幸せな日々を過ごしてるけど。　それじゃあ、大鳳ちゃんの体も、ボクのものだという証をしっかりと刻み込んであげて、たーくさん躾けてあげるね？」
その言葉を聞いて、大鳳は言葉を失った、ならば、先程部屋から漂ってきた指揮官とロイヤルの雌豚の体液が交じり合った匂いは、もしや指揮官様がその雌豚に命じて奉仕させた結果生まれたものだとするならば？
ふっ、と大鳳の瞳からハイライトが消える、指揮官への怒りではない、指揮官を誑かしたその雌豚への怒りでどうにかなりそうだった。
「・・・指揮官、様ぁ・・・♪　そんな、雌豚共・・・よりもぉ・・・♪　大鳳の、体を、使ってぇ・・・♪　性欲、ぶつけて、くださいぃ・・・♪　指揮官様の、性欲、全部、大鳳が、受け止めてぇ・・・♪　そん

な雌豚共なんかよりもぉ、大鳳の方が良いって事ぉ・・・。　指揮官様に、教えて、あげます・・・からぁ・・・♪」

罵詈雑言の一つでも浴びせられると思っていた、メイ少佐は再び困惑の表情を浮かべつつ、スタンガンによる強烈な電流によって体が痺れてしまっている大鳳が回復して暴れられないように、手を後ろに回して、手錠で拘束してやりつつ、その身に纏っている衣装をびりびりと乱暴に懐から取り出したナイフで破り裂いてゆく。

「ああんっ♪　そんな、指揮官様・・・がっつき過ぎですわよぉ・・・♪　レディの体を、扱う時は、もっと、丁寧に、するべきですわぁ・・・♪」

一方の大鳳は、どんな形であれ、愛すべき指揮官様に体を求められるという事に対して、心の底から悦んでしまっているようで、服がナイフによって破かれて、傷一つない美しい、玉のような素肌が露にされてゆくたびに、痺れてしまっている体を僅かにくねらせて、熱のこもった吐息を漏らす。

大鳳が身に纏っていた際どい衣装が布切れになり、下着さえも無残に引き裂かれて、下着の下に隠されていた乙女の聖域が、指揮官様と自分以外には絶対に誰にも触れさせる気は無い、愛する指揮官様が使いやすいように毛がしっかりと剃られているソコが露にさせられてしまう。

露にさせられてしまった恥丘は、所謂モリマンと言う奴で、他の女性に比べて比較的隆起が激しく、綺麗に、性経験の少なさを物語るかのように小陰唇はその口を閉じており、膣口を外敵から守っていたものの、これからされる行為に期待してしまっているのか、閉じられた陰裂が蜜で滲んでしまっていた。

「あはっ♪　今からレイプされちゃうって言うのにさ、随分と余裕だね？　良いのー？　君、この様子だと処女でしょ？」

仕事が、やりやすくて助かる、それはありがたいが、どこか大鳳の様子に不気味さを感じつつ、露になった乙女の聖域に口を近づけて、舌先でぷっくりと膨らんだ恥丘の丁度真ん中にある小陰唇に舌を這わせて、舌先でその陰唇をこじ開け、膣口に舌を挿入してゆきつつ、大

鳳の性感帯を探ろうとするかのように、舌を動かし、膣穴を嘗め回していこうとする。
　大鳳の言動に困惑しながらも、プロの調教師であるメイ少佐は舌先を埋めて、膣口の敏感な性感帯を探り当てようとするかのように舌で膣穴の浅い部分、つまり膣口の辺りを重点的に舌で嘗め回してゆきつつ、入り口付近を嘗め回されてしまって刺激され、快楽を感じてしまってるという事を物語るかのように隆起し始めた陰核を軽く人指し指と親指で抓み、ぐにっ、ぐにっ、と押しつぶしてゆき、的確に、しかしながらも得体のしれない底知れぬ相手なので確実に、雌としての側面を曝け出させて、快楽に溺れさせようとしてゆく。
「ああんっ・・・♪　指揮官様ぁ・・・♪　外見は可愛らしいのにぃ・・・♪　お上手・・・ですわね・・・♪　あんっ、ふわっ・・・♪　あぅっ・・・♪」
　指揮官様の舌先が、大鳳自身でさえも余り弄ったことはない膣穴の敏感な場所を探り当て、自身の知らなかった体の弱点を刺激され、己の体に与えられる指揮官様からの愛とも言うべき快楽に、大鳳は表情をだらしなく歪めて、口の端から涎を垂らしてしまいながらその快楽を享受してしまっていた。
「・・・そりゃあ、プロだし、大鳳以外の女の子も沢山抱いてきたからね、それがボクの仕事だし。　だから、女の子の敏感な場所は、軽く弄るだけで分かっちゃうんだよ？　えへへ♪　大鳳ちゃん、おまんこの入り口の、上の辺りが弱点、でしょ？」
　膣穴に埋められていた舌先を引き抜き、袖で口の周りに付着した愛液を拭い取ってゆきながら、今回の調教対象である女の膣穴に、クリトリスを弄ってない方の手の指先を押し当てて、ぬぷぬぷと音を立てて、人指し指の第二関節まで埋めた後に、指を折り曲げて、膣壁の天井付近を軽く爪で引っ掻き、先程舌で軽く嘗め回しただけで探り当てた大鳳の弱点部分を容赦なく責め立ててゆく。
「あっ、ああっ・・・ふわっっ・・・～♪　指揮官様っ・・・凄いっ・・・あっ・・・ぁぁ・・・♪　でっ・・・でもっ、今、聞き捨てならない事、仰いました・・・よねぇ・・・！」

正しく熟練の、雌を堕とすためだけにひたすら鍛えられた性技で絶頂へと押し上げられてしまった大鳳は、ぷしゃっ、と膣口から愛液を勢いよく吐き出して、その体全体を痙攣させて、絶頂へと押し上げられてしまった事をメイ少佐にも伝えてしまいながら、大鳳としては愛すべき指揮官様の発言のある一部分が聞き捨てならなかったようで、はぁ、はぁ、と息を整えながら、こう言葉を続けた。

「指揮官様ぁ・・・♪　・・・今まで、ずーっと、仕事でぇ、女の子を、抱いてきたって、言いましたけどぉ・・・♪　ふふっ・・・♪　大鳳の、聞き間違い、でしょうか・・・？」

はぁ、はぁ、と熱っぽい息を大鳳は漏らしながら、その言葉が冗談だと思いたかった

「・・・えっ？　ああ、うーん。　いや、聞き間違いでもなんでもなくて、マジな話なんだけど。　ボク調教師だからさ、こうやって女の子を犯して、堕とすのが仕事で・・・」

「指揮官、様ぁ・・・。　これから、調教師なんか、そんな、大鳳以外の女を抱く、なんて、仕事、しなくていいですよぉ・・・♪　指揮官様の事、お世話、してあげますから・・・必要なら、経済的にも。そして、もちろん、夜のお世話も！　大鳳が、ぜーんぶしてあげますから・・・ね？　だから、指揮官様・・・調教師なんて仕事、やめてください、ね？」

今度は指揮官が言葉を失う。

上層部が送り込んできたこの艦船は確かに体は極上だが、言動がどうかしている。

「調教師をやめた後はぁ・・・♪　ふふ、今、ここにいる雌豚共もぉ・・・もう、要りませんよねぇ・・・？　大鳳が、責任もって、『処分』しておきますね・・・ふふふ♪」

ふぅ、とため息を一つ。

「その申し出は断らせて貰うよ。　ボクはボクのやりたいことをやらせて貰う。　この調教師って仕事、ボク、我ながら天職だって思ってるんだ。　それじゃあ、待たせたね、今から君の事、犯して、二度とボク専用の性奴隷を『処分』するなんて事言えないように調教してあ

げるよ」
　そう言って、手錠によって拘束されてしまってる大鳳に後ろから覆いかぶさり、後背位の姿勢で、先程まで舌と指先によって弄ばれていた膣穴の入り口に、露にさせた２０ｃｍ以上はありそうな、血管の浮き出た極太の肉棒の先端部をぐりぐりと押し付けて、その太く逞しい肉棒の先端部を、自らの性奴隷に危害を加えるとも取れる発言をしたこの雌に後悔させてやろうと、安産型のむっちりとした桃尻に細い指を食いこませてその尻肉に小さな手形を刻み込んでやりつつ、力任せに腰を前へと突き出してゆき、雌穴の奥を目指して焼けた鉄のように熱い肉の塊を捻じ込んでゆく。
　亀頭の部分の太さが６ｃｍかそれ以上はあるであろう極太の肉棒の先端部は、大鳳の綺麗に閉じていた膣口を力任せに思いっきり引き裂けんばかりにこじ開けてやって、膣口を割り開いてやった勢いそのままに突っ込まれてゆく肉槍の先端は膣肉を強引にかき分け、押し広げ、雄の肉棒の形をその柔軟な肉洞に覚えこませてやりつつ、それ以上の肉棒の侵入を阻むかのように存在している初めての証を、乙女の聖域を思いっきり力任せに膣口をこじ開けた時と同じように引き裂いてやり、初めての証を引き裂いたそのままの勢いで、大鳳の雌として一番大切な場所である子どもを産むための部屋を、子宮の入り口を大鳳の体が床に叩きつけられてしまいそうなほどの力強さで思いっきり押し付けてやり、大きく実った牛のように巨大な乳肉を更に卑猥に歪ませてやると、膣を引き裂かんばかりの刺激と、胸を床で押しつぶされたその刺激に大鳳は鳴く。
「あんっ、ふわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪　指揮官様のぉ・・・♪　おっきなおちんちん・・・♪　大鳳のぉ・・・♪　初めてを奪ってくださって・・・ありがとうございます・・・♪　あぅ・・・あっ、はぅ・・・♪」
　愛する指揮官様の、小柄な体格とは不釣り合いなほどに逞しい男根に初めてを奪われ、凄まじい激痛に体を震わせてしまいながらも、愛する指揮官様が相手だろうか、大鳳の体は激しい腰遣いで指揮官によってその豊満な体を貪られてしまってるというのに、腰が乱暴に前

後し、膣穴をかき混ぜられるその刺激に早くも快楽を見出し始めてしまうことだろう。
「・・・ふふ♪　初めてを奪ってくれて、ありがとうって来たかぁ・・・♪　良いよぉ♪　大鳳ちゃんのことぉ、ボクの性奴隷の1人にしてあげるからね・・・♪　ふふ、他の皆と同じように、たーくさん、可愛がってあげるんだから♪」
　大鳳の他の女性に比べて肉付きの良いモリマンはは、肉棒を突き入れるたびにクッションになり、いい塩梅で貪るかのように突き入れられてゆく指揮官の肉棒を搾り取り、子種を搾り取ろうとしてゆく、さながら、精液を一滴残らず吐き出させて、大鳳だけしか見ないように仕向けようとするかのように。
　確かに、大鳳の膣穴は名器と言っても良い代物であった、雄を誘惑する極上の体を持つ大鳳の膣穴もまた、雄の種を搾り取るのに特化したもので。
　指揮官様の肉棒を掴んで離さない狭い狭い膣口はさながら巾着のように抜ける寸前まで引き抜かれて、勢いよく最奥めがけて突き入れられてゆく肉竿を強烈に締め付けて、子宮の入り口をその肉槍が叩いた瞬間に反射的に膣口が強く締まり、肉棒を後ろに引く際にエラが張ったカリ首が肉洞を掘削するその刺激に大鳳は無様に快楽で喘いでしまいながら、愛しい雄のソレを逃さないために強烈に膣口を締めて子種汁を搾り取ろうとし続けてゆく。
「くっ・・・あはっ♪　良い体・・・してる、ねっ、本当・・・♪」
　肉棒を後ろに引く際も、雄竿にむしゃぶりついてくる刺激に思わず達してしまいそうになりながらも、メイ少佐はこの女に主導権を握らせるわけにはいかないと、射精しそうになるのを何とか堪え、桃尻を力任せに掴んでゆきながら、大鳳の探り当てた膣中の性感帯を肉竿の先端で強烈にこそぎ落とすかのように全力で擦りつけ、熟練の腰技で大鳳を追い詰めてゆき。
「そろそろ、中に、出して、あげる、よ、しっかり、受け止めて・・・ねっ！」
　魅惑の体を持ちながらもその体とは裏腹に性経験のない大鳳に激

しい、脳を揺さぶる快楽を与えてやりながら、絶頂寸前の大鳳に止めを刺すべく、子宮の入り口を、子を孕むための一番大切な場所を絶頂寸前のびくっ、びくっ、と痙攣してしまっている逞しい肉棒の先端部で力いっぱい抉りつけてやって、ぐりぐりと子宮口を押し上げたまま。

「あはっ♪　指揮官様の、熱い赤ちゃんの元がぁ・・・沢山、沢山、大鳳の中にいいいいいいぃ♪」

子宮の入り口を押し上げたまま、肉棒に装填された文字通りマグマのように熱く、粘っこい特濃の精液を子宮内に直接音を立てて注ぎ込んでゆく。

大量に、下品な音を立てて注ぎ込んでゆく粘っこい精子は一瞬で大鳳の先ほどまで穢れを知らなかった子宮内を埋め尽くしてゆき、大鳳は自らの子宮内を埋め尽くし、子宮壁に纏わりついてくる愛すべき指揮官様の子種を一滴残さず受け止めようと、膣口を強烈に締め付けて、その種を搾り取ろうとし続けてゆく。

ぱんっ、ぱんっ、と後ろから覆いかぶさったまま指揮官は腰を揺さぶり続けて、肉竿に装填された子種汁を一滴残らず注ぎ込み続けてやって、大鳳の子宮内を完全に種で埋め尽くしてやった後に、じゅぽっ、と音を立てて肉棒を引き抜いてやる。

すると、すっかり指揮官の肉竿の形に拡がってしまった大鳳の淫らな膣穴からはごぽり、と音を立てて、精液と愛液と、そして初めての証が交じり合ってダマになった粘着質なモノが体外に溢れてゆき、執務室の床をその淫らな液体で汚してしまう。

大鳳は、はぁ、はぁ、と何度も荒い呼吸を繰り返して、何とか呼吸を整えようとしてゆきながら、体外に溢れてゆく精液の感触に、寂しそうにんぅ、と声を漏らし。

「指揮官、様ぁ・・・♪　大鳳のぉ・・・体で、気持ちよくなってくれました・・・よね・・・♪　ふふ・・・もっと、もっと、注ぎ込んで、大鳳の事、お母さんにして良いんですよぉ・・・♪」

犯されて、割り開かれたばかりの膣口をひくひく、と快楽を更に求めるかのように淫らにひくつかせて。

「・・・だから、指揮官様・・・。　大鳳以外の、女は、全員、大鳳に『処分』させてください・・・♪」
「・・・。　これは、教育が必要だねぇ」
犯されてしまったというのに、寧ろもっと犯して欲しいと懇願する大鳳の姿を見て、今回の仕事は厄介なことになるぞと軽く頭を抱えながら、どうするか策を練るメイ少佐であった。

堕落する深紅　承

海軍基地、執務室地下に存在するメイ少佐の艦船調教部屋。
通称『建造ドッグ』に連れてこられた大鳳は、あられもない姿で天井から垂らされたロープで拘束されてしまってるというのに、これから愛する指揮官様によって行われる行為に期待してしまっているのか、その頬を赤らめて、はぁ、はぁ、と、熱っぽい声を漏らしてしまっていた。
両手を天井から垂らされたロープで縛られ、特殊素材の繊維によって編まれた頑丈なロープで脚を畳んだ状態で拘束され、爪先立ちになることを強要されてしまっている。
当然、女性にとっては苦しい姿勢であったが大鳳にとっては愛する指揮官様によって行われる行為であるため、体は悲鳴をあげるものの全く気にしてない様子であった。
そんな姿勢を強要されてしまってるというのに、苦しい様子を少しも見せない大鳳の姿を見て、指揮官は言いようのない不気味さを感じつつ、これからの行為に使用するための道具を棚の中から取り出してゆく。
「ふふ♪　ここなら、指揮官様と、二人きり、ですわね♪　・・・でもぉ、この部屋からは、大鳳以外の女の匂いがしますわよ？　大鳳がこれから指揮官様の性処理をずーっとしてあげますから、もう、この部屋を他の女と一緒に使わないでくれますよね？」
そんな大鳳の言葉を聞いて、メイ少佐は少しだけ呆れつつ、右手に電気マッサージ器と、左手一杯に大量のピンクローターを持ちつつ、大鳳に近づいてゆき。
「ねぇ、これからそんな事を言えなくなるぐらいにたっぷり調教してやるつもりなんだけど、随分と余裕じゃないか」
「あはっ♪　大鳳を愛してくださるなんて、大鳳にとってはご褒美ですわ♪　・・・それに、この大鳳、自分を曲げるつもりはありませんわよ？　指揮官に近づく雌犬たちは、この大鳳が追い払って差し上げますわ」

拘束されてしまいながらも、なおも全く調子の変わらない大鳳の姿に、ふぅ、と一つ少佐はため息をついて。
「そっか。　じゃあさ、君のその余裕、叩き潰してあげるよ。　ねぇ、このローターがさ、君のおまんこにどれだけ入るか気にならない？　えへへ♪　どれだけ入るか、ちょーっと確かめてみるね♪」
「ああん♪　指揮官様のぉ・・・♪　意地悪ぅ・・・♪　道具なんかじゃなくて、指揮官様の逞しいそれで、大鳳の事を躾けてくだされば、いいのにぃ・・・♪」
そう言って、メイ少佐は少し屈み、コンクリートの冷たい床の上にローターと、そして電動マッサージ機を置いて、片足吊りの姿勢で拘束されてしまってるせいで地下室の外気に晒されてひくひくとひく付いてる女性器の方に指を近づけて、先程自らの肉棒で貫いてやった膣穴の入り口に人指し指と中指を押し当て、くぱぁ、と指先をチョキの形にして膣口を開いてやり、ローターを入れやすいようにしてやりつつ、まじまじと大鳳の膣を観察。
先ほど、肉棒で貫かれたばかりの、先日までは無垢な処女膣であったそこの壁は愛する指揮官様の種を注いでもらおうとうねうねと壁に隙間なく存在している襞が蠢いており、膣奥からは愛液が指揮官様によって自分の奥まで見られてしまっている興奮からか愛液が大量に分泌されてしまっていた。
「それじゃあ、一個目、行くよ？」
異物を挿入しやすいようにメイ少佐の指先で拡げられた大鳳の名器と言っても良い膣穴に、一つ目のローターを埋めてゆく。
「あぅっ・・・♪　玩具がぁ・・・♪　大鳳のぉ、おまんこの奥にぃ、進んでいって・・・♪　指揮官様のおちんちんじゃないのにぃ・・・♪　あぅっ・・・♪」
ぬぷっ、ぬぷっ、と膣の深い場所めがけて音を立てて、ゆっくり、ゆっくり、慎重に埋められてゆくそのローターが襞の多い大鳳の淫らな膣壁を擦るたびに、拘束されてしまってる雌は大きな胸を軽く震わせて、与えられる刺激にくぐもった声を漏らしてしまう。
ローターを人指し指で押し込んで、膣奥まで挿入した後に、もう一

個ローターを大鳳の膣穴に、さっきと同じ作業を繰り返し、持ってきたローターを全て雄の精液を搾り取るのに特化した極上の名器に挿入してゆく。
「あはっ、これで8個め。　ね、大鳳ちゃん♪　これを今から全部動かしてみるけどー、イくの耐えられるかな？　あはは♪」
　そう言って、膣穴から露出しているピンクローターのスイッチを一斉に動かしてゆく、すると、大鳳の口からは耳をつんざくような、悲鳴にも似た淫らな喘ぎ声が口から溢れてしまう、それと同時に、余りにも激しい刺激のせいでその体は自然と揺れ、片足立ちの姿勢で自らを拘束しているロープを軋ませてしまいながら、自らの体に与えられた快楽の激しさを物語ってしまう。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪　指揮官様、これ、これダメですぅ！　大鳳っ、大鳳、おかしくなっちゃいますっ、あっ、あぁぁぁ♪　ひぃぃぃぃぃぃぃっ！」
　びくんっ、びくんっ、と体全体を震わせて、露出させられたその大きな果実を揺らしてしまう大鳳の姿を見つつ、ふふ、と指揮官は口角を吊り上げ、ローターが振動し、襞の多い膣壁を擦るたびに雄を誘惑するかのように揺れ動く果実に手を伸ばし、先ほどまでローターを埋めていた、僅かに愛液の付着した右手で重量感たっぷりのその果実を力任せに鷲掴みにして、指先を食いこませてゆく。
「ひぃぃぃぃぃ♪　胸もっ、いじめるの、やめてくださいっ、指揮官様ぁ、おまんこに入ってるこれぇ・・・止めてぇぇぇぇ♪」
　械製のピンクの悪魔が強烈に振動するたびににじみ出た淫液が攪拌され、泡立ったものが周囲に飛び散ってゆく、そんな様子を見ながらも幼いながらも、雌を調教する技術を学んだ雄は、容赦なく責め立てようと、少ししゃがんで床に置かれていた電気マッサージ器を左手で素早く掴んで、ローターのによって与えられる性的刺激で半ば強制的に勃起させられてしまったクリトリスにその電気マッサージ器を押し付け、スイッチをいじり、強烈にその電動マッサージ機を振動させてゆく。
「おまんことぉ、クリちゃん、同時に苛められるのはどうかな？　えへ

へ♪　気持ち良すぎて、どうにかなっちゃいそうでしょう？」
　電動マッサージ機を押し付けられた瞬間、これからされる行為に大鳳の体は期待してしまうかのように跳ね、クリトリスを押しつぶしながら電動マッサージ機が振動し始めた瞬間に、口からは声にならない悲鳴が溢れてしまう。
「～♪　～♪　っ・・・っ・・・～♪　っぁぁぁぁぁぁぁ♪」
　余りにも激しい、脳を揺さぶるかのような、暴力的な快楽。
　しかしながらも、今の大鳳は幸せに満ちていた。　愛する指揮官様によって、自らの体にこの先一生消える事は無いであろう、指揮官様の妻であるという証が刻み込まれているという感覚。
　膣粘膜を強烈に振動するローターによって滅茶苦茶に擦られ、刺激され、無理矢理自らの体が淫らに開拓されてしまうその刺激は、正しく暴力と言っても良いものだった。　８個の異物が一斉に振動し、膣穴で暴れまわるたびに、大鳳の指揮官様専用の体は挿入されてしまった異物によって更に愛する指揮官様の肉棒を受け入れ、子種汁を搾り取るために存在するそこがより子種を搾り取るのに便利なように最適化されてゆく。
　不規則に蠢き、肉棒に纏わりついて精を搾り取ろうとしてゆく襞の多い膣壁に存在する性感帯は、この異物たちによって淫らに開拓され、指揮官様の指や、肉槍で少し擦られるだけでも過敏な反応を示し、蜜が自然と溢れてしまうことだろう。　これも、全ては指揮官様に愛して貰いやすくなるため。
　過敏な、少し弄られるだけでも女性は反応してしまうことであろう、ただ女性が快楽を得るために存在している器官である淫らな性突起、クリトリスを押しつぶしている電気マッサージ器が振動し、指揮官様の手でその電動マッサージ機が上下に揺れ動き、陰核が踏みにじられるかのように刺激されてゆくたびに、大鳳は愛する指揮官様によって高みへと誘われてしまうことだろう。
　指揮官様によって愛され、自らの体を指揮官様好みの淫らな雌に作り変えられてゆくことは、大鳳にとっては幸せであった。
「ね、ね、とっても気持ちよかったでしょ？　これから、後ろの穴もボ

クのモノで気持ちよくしてあげるからね？」
　大鳳の考えが、少しずつ、この幼い指揮官にも理解できてきたようで、幸せそうな顔で何度も、何度も絶頂へと押し上げられてしまってる大鳳の姿を見つつ、後ろに回り込んで、露出させている自らの凶悪な、先程大鳳の初めてを奪った肉棒の先端部を尻穴の入り口にぐりぐり、と押し当てる。
「っ・・・っ・・・～♪　っ・・・あぅっ、しっ、指揮官様っ、そこはぁっ、性交の為の穴ではありませんよっ・・・!?　ひぅっ、あっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
　大鳳の静止の声など、この幼い雄には当然届くはずはない。　ぴっちりと、皺が深い綺麗に閉じられた後ろの穴の窄みに押し当てられた自らの肉棒の先端部を、一気に腰を前へと突き出してゆき、力任せに異物など一度も受け入れたことはない、大鳳自身も知識はあるものの、本当に使う人が居るとは思いもしなかった菊門をこじ開けて、極太の肉槍が奥へ奥へと埋められてゆく。　勢いよく、力任せにねじ込まれてゆく極太の肉槍は、ぎちっ、ぎちっ、と何かが拡張され、押し広げられる痛々しい音を周囲に響かせてゆきながら奥へ奥へと、無慈悲に、ただこの雌を淫らに更に作り変えてやるために埋められていったペニスの先端が腸奥を抉りつけて、大鳳の体を大きく揺さぶった瞬間に、雌の口が激痛によって陸に打ち上げられた魚のようにぱくぱくと口だけが動き、少し遅れて、耳をつんざくような痛々しい悲鳴が漏れてしまう。
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ、痛いっ、痛いっですわぁ・・・指揮官様ぁ・・・！」
「あはっ、流石は装甲空母だけあって、体、頑丈だねぇ♪　お尻の穴、裂けるどころかボクのおちんちん締め付けて離さないよ？」
　大鳳のアヌスは、ヴァギナと同じように雄を、愛する指揮官から精を注ぎ込んで貰うのに特化した淫らな名器であった。
　指揮官の極太の肉棒を捻じ込まれた瞬間に、括約筋が悲鳴をあげるものの、裂ける事は無く、突き入れられてきた肉槍の先端部を柔軟な腸壁が纏わりついて刺激し、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。　前の

穴に比べて襞の数は少ないものの、柔軟性に富んだゴムのような感触の腸穴は、肉棒が腸穴の最奥を抉りつけて壁越しに子宮の辺りを刺激した瞬間に、きゅっ、と肉棒全体を締めあげるかのように締まり、雄種を吐き出させようと淫らに肉棒に刺激を与えていこうとする。
「あぁぁぁぁぁ♪　痛いっ、痛いのにぃっ・・・♪　どうしてっ、あぅっ・・・♪　ひっ、ぅぅぅ♪」
　指揮官が肉棒を抜ける寸前まで腰をゆっくりと引いてゆき、カリ首で腸壁をごりごりと掘削するかのように擦ると、大鳳の体から力が抜けてしまいそうになる妖しい刺激が下半身から脳めがけて駆け上がって来て、大鳳を絶頂へと誘おうとしてゆく。　割り開かれたばかりのアヌスを、まずは最初は腰をゆっくりと揺さぶり、肉棒の形に括約筋に覚えこませようとするかのように肉棒を前後させ、腸壁を擦り、刺激してゆく。　すると、最初は激痛に慄いていた大鳳であったが、少しずつ、少しずつ、快楽を覚え始め、本来ならば排泄の為に使う穴を犯される妖しい快楽にその身を震わせてしまう。　それと同時に、指揮官の小さな手に握られた電動マッサージ機でクリトリスを押しつぶされて、陰核を苛められてしまったら、大鳳はその快楽を耐えることなど最初から出来るはずもなく、また絶頂へと押し上げられてしまって、菊門に埋められたその肉棒をきつく、食いちぎらんばかりに締め付けてしまい、体から雌の発情した匂いを、フェロモンを溢れさせてしまいながら体を跳ねさせ、その大きく実った母性の象徴が派手に揺れてしまう。
「指揮官様ぁ♪　これぇっ・・・凄すぎてぇ・・・♪　あぅっ、大鳳っ、大鳳っ、どうにか、なって、しまそうですわぁ・・・♪　あはっ、指揮官様ぁ・・・♪　凄いぃぃ・・・♪」
　前の穴をローターで圧迫されてしまいながら後ろの穴を擦られる猛烈な刺激に、つい先ほどまで生娘であった大鳳は耐えることなど出来る筈なかった。　いや、耐える事など大鳳には最初からする必要は無かったと言うべきかもしれない。　何故ならば、この行為は指揮官様と愛を育むための神聖なる行為であり、指揮官様によって自らの体に与えられる行為は全て愛なのだ。

愛する指揮官様の腰遣いが更に激しくなってゆき、淫らに開拓され始めた大鳳のアヌスの性感帯を強烈に擦り、腸壁の最奥を思いっきり抉りつけて、壁越しに存在する大鳳の子宮を刺激してゆく。　腸壁越しに子宮を抉られる刺激に、ぷしゃっ、とローターが８個も挿入されている膣穴から潮を吹いてしまい、与えられる快楽の激しさを物語ってしまいながら、大鳳は口を開いて、無様におねだりまで始めてしまう。

「指揮官様っ・・・指揮官様ぁ・・・♪　大鳳のぉ、お尻マンコにぃ・・・♪　指揮官様のせーえきっ、溢れちゃうぐらいに、吐き出してくださいぃ・・・♪」

指揮官の腰が乱暴に打ち付けられてゆくたびに、たぷん、たぷん、と大鳳の桃尻は大きく揺れ、幼い雄の腰遣いが更に乱暴に、ラストスパートをかけるかのような激しいものになってゆく。

「ふふん♪　自分からおねだり出来て偉いよっ！　これで、他の子への攻撃性さえなければ仕事は楽なんだけど・・・ねっ！」

そして、腰を一気に後ろに引いて、その腰の動きに合わせて引き抜かれる寸前まで後ろに下がってきた数多の雌を陥落させてきた肉の槍を間髪入れずに全体重を込めて腰を前へと突き出して、淫らに開拓されてしまった雌のアヌスの最奥を力任せに抉りつけてゆきながら、左手で膣穴から露出しているローターの銅線を掴んで、一気に手を下に振り下ろして膣穴に埋められた８個のローターを勢いよく体外へ吐き出させてやる。　強烈に振動するローターが膣穴から勢いよく吐き出されてゆくたびに、脳を揺さぶる強烈な快楽に激しすぎる絶頂へと押し上げられてしまい、激しい、暴力的な絶頂へと押し上げられてしまった大鳳に間髪入れずに後ろの穴の最奥を抉りつけて、その絶頂をより激しいものへと押し上げてやりながら、ぐりぐりと腸穴の最奥を抉りつけたまま肉棒に装填されている粘っこい子種汁を音を立てて猛烈な勢いで本来なら排泄するために存在しているその穴に大量に吐き出してゆく。

「あっ、ぁぁぁぁぁぁ♪　ひっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」

先ほどまで生娘であった大鳳は、当然、その暴力的な、激しすぎる

快楽に耐えられるはずもなく、後ろの穴の一番深い場所を叩きつけるかのように吐き出されてゆく精液に、指揮官様の熱い愛の感触に心地よい絶頂感に包まれてしまいつつ、嵐のように襲い掛かってくる暴力的な快楽によってその意識は刈り取られてしまった。　意識が刈り取られる瞬間に、大鳳の体が一層強く跳ね、ローターが引き抜かれたばかりの膣穴から潮まで吹いてしまいながら尿道を震わせ、ちょろちょろと尿まで漏らしてしまい、愛液で作られた水溜りに尿を混じらせてしまう。

「あはっ、気持ち良すぎてトんじゃった？　まぁ、いいや、これからする事が大分楽になるし」

　かくかく、と腰を揺さぶり、肉槍に装填された粘っこい子種汁を腸穴に一滴残らず吐き出してゆき、結合部から精液を溢れさせて、床に出来た淫らな水溜りに精液を混ぜてやりつつ、にぃ、と笑みを浮かべ。

「ね、大鳳ちゃんの体ならさ、衛兵さん達にたーくさん可愛がって貰えると思うよ？　・・・えへへ♪　衛兵さん達の事、これから気持ちよくさせてあげてね？」

　大鳳の悪夢がこれから始まる。

堕落する深紅　転

ティーカップに注がれた紅茶を一口、そして皿に盛られたクッキーを一枚指で抓んで口に持って行きながら、ソファの隣に座っている今日の秘書艦であるイラストリアスの方に幼い指揮官はにぱっ、と満面の笑みを浮かべて視線を向けた。

「ね、イラストリアス。　この紅茶と、クッキー、とっても美味しいね♪　特にこのクッキーにはチョコレートが混じってるのかな？」

くすくす、と美味しそうにクッキーを頬張る指揮官の姿を見て、お淑やかに彼女は笑みを浮かべながら、一つ頷き。

「はい、指揮官様♪　ストレートの紅茶は指揮官様に少し渋く感じるのでは？　と思って、その渋さを中和できるように甘いクッキーを作りましたわ」

このクッキーのレシピは、長良に教えて貰ったものだった。

心の中で密かに彼女に感謝の言葉を送りつつ、イラストリアスは言葉を続ける。

「指揮官様のお口にあったようで、何よりです♪　ふふっ」

幸せそうにクッキーを頬張りながら、紅茶を啜る自らの主の頭にそっと手を伸ばして、優しく頭を撫でる。

きっと、傍から見れば指揮官の制服を少し背伸びして着て、指揮官ごっこをして遊んでいる無邪気な妹を撫でる姉のように見える事だろう。

イラストリアスの妹の1人であるヴィクトリアスがそのままスケールダウンしたような見た目をしている指揮官の頭を優しく撫でつつ、周囲をきょろきょろと見回して、違和感を覚えた様子で彼女は口を開いた。

「・・・そう言えば、指揮官様。　今日、新しくこの基地にやってくる艦船が居ると聞きましたけど、その人は何処にいるのです？」

普通、やってきた艦船を調教するときは、指揮官は地下の艦船調教部屋、通称『建造ドッグ』から暫く出てこないはずなのだ。

オイゲンが調教されてるときもイラストリアスは彼女にされてい

る行為を想像して股を濡らしてしまったものである。
　長良の時も暫くは指揮官は艦船ドッグから出て来なくて、オイゲンと2人で互いの体の猛りを慰めあったのは記憶に新しい。
　だというのに、一度調教を始めたら地下に籠りっぱなしの指揮官がこうして三時のおやつを共に食べているのを見て、少しだけ違和感を覚えてしまったのだ。
　そのイラストリアスの言葉を聞いて、ふふっ、とメイ少佐は面白そうに口元を歪めて。
「イラストリアス。　今回、この基地に送られてきた子はかなーり厄介な子でね。　ちょーっとだけ工夫しないと、堕とせないと思ったんだ」
　クッキーを食べ終え、満ち足りた表情を浮かべながら彼女のむっちりとした膝の上に、後頭部を乗せて。
「地下室で大鳳ちゃんの事を調教しながら思ったんだけど、あの子はボクが孕めと言ったらボクの子を孕むことに何の躊躇も覚えないだろうね。　それだけ聞くと調教が楽に聞こえるでしょ？　でも、違うんだなぁこれが」
　今一瞬だけ、胸が邪魔で指揮官の顔が見れない事を恨めしく思いながら、彼女は自らの膝に後頭部を乗せた愛する指揮官の頭を優しく撫でつつ、話を聞き続ける。
「所がどっこい、あの子は自分以外の子に手を出さないで、なんて言い始めた、更にはイラストリアスを傷つけるなんて事も言ってきたからねぇ。　これはクライアントの意向的にもアウト、ついでに苦労して調教した性奴隷を傷つけられるのもボクの心情的にはアウト」
　んぅ、と頭を撫でられてくすぐったそうな声を漏らしつつ。
「だから、今、あの子にはオシオキしてあげてるんだよ。　もう、二度とボクの大切な性奴隷に危害を加える、なんて事考えられなくなるようにね」
　大切な性奴隷、と言われて、イラストリアスは頬を赤らめてしまつつ、ふふ、と笑みを浮かべ。
「身を案じてくれてるのですか？　・・・ふふ、ありがとうございます、

指揮官様♪　イラストリアス、感動ですっ！」
「・・・まぁ、うん。　ボクの赤ちゃんを孕んでくれてる子達、だし。
大切にしようかなって」
頬をぽりぽり、今度は指揮官が赤面する番であった。

衛兵詰め所の地下一階、営倉のある一室。
天井から吊り下げられた豆電球だけが唯一の光源である薄暗いその一室からは、男女の荒い息遣いが聞こえてくる。
その部屋の中に居る雄雌の中で、唯一の雌である長い黒髪と大きな胸が特徴的な雌は、口にリングギャグを装着され、目にはアイマスクが付けられ、手は手錠で拘束されてしまってるため、雄たちのされるがままだ。
上半身は制服をまとったままで、下半身を露出させている衛兵の数は8人、うち3人は、上司であるメイ少佐から与えられた肉便器に群がり、己の性欲をその肉便器を使って発散しようとしていた。
衛兵の1人は、精液と愛液が交じり合った液体が飛び散った床に何の躊躇もなく寝転がり、己の性欲をただひたすら発散するためだけに雌の、既に雄たちの獣欲のままに蹂躙され続けてしまって、こじ開けられてしまった窄みから精液を垂れ流し続けている菊門の入り口に肉槍を押し当てて、一気に貫いてゆきつつ、その豊満な体を仰向けの姿勢に倒させてやって、屈強な胸板で彼女の背中を受け止めてやって、太い右腕で歯形や、手形などの陵辱の跡が残るたわわに実った豊満な左胸を絞り上げてやると、右胸も筋肉の詰まった獣のような腕によって圧迫され、卑猥に歪んでしまう。
「しっかし、こいつ何処から派遣された娼婦なんでしょうね？　マゾ願望があるから俺たちで好きにしろってあの小さな指揮官様からは言われましたけど」
菊門を貫いてる衛兵隊長に疑問の声を漏らしつつ、先程子宮にたっぷりと注ぎ込まれた精液が膣外へと溢れ出てゆく、陰唇が凄惨な陵辱

によって無残に捲れてしまってる肉便器の膣穴に、菊門を貫いてる肉棒と比べて細いものの、それでも日ごろから有事に備えて鍛えられているお陰か、堅く、逞しい肉棒の先端部を押し付けて、一気に腰を前へと突き出してその膣穴の最奥めがけて雄の欲棒を突き入れてゆきつつ。

「さぁなぁ？　俺も詳しい事は分からん、でも、今はあの小さな指揮官様に感謝しようぜ。　あの人のお陰でこうやって上玉を抱かせて貰ってるんだからな。　それにしてもすげぇなこの肉便器の乳肉。指を食いこませるたびにすげぇ歪むぜ」

肉便器の逞しい右手で掴まれている左胸に、衛兵のごつごつとした太い指先が食い込む。

すると、大きく実ったマシュマロのような極上の手触りの、雄を誘惑してやまない魅惑の果実が大きく形を変えて、雄たちの興奮を煽ってゆく。

菊門を貫いてる衛兵隊長は、手に感じるマシュマロのような胸の感触に少し感動したかのような声を漏らしてしまいつつ、菊門に埋められたその肉棒を、肉便器に一切の遠慮なく、ただひたすら己の性欲を発散するために揺さぶり、自ら肉便器になる事を志願した、と指揮官から聞いた、マゾ便器にお情けをくれてやろうと太い人指し指で胸の先端部を思いっきり押しつぶし、卑猥に歪んでしまっているその果実を更に大きくひしゃげさせてゆく。

「前にここに送られてきた白い髪の姉ちゃんや、尻穴便器も良かったけどこいつもすげぇ良いよな。　おお・・・口の中も気持ちい・・・。指揮官様々だなぁ、本当！」

両穴を貫かれて、自慢の大きな果実が好き放題に手で揉みしだかれて、苦しそうな声を漏らしてしまってる肉便器のリングギャグで広がりっぱなしになってしまってる口オナホに、衛兵の1人が肉棒を捻じ込んで、何の遠慮も無く喉奥をごちゅんっ、ごちゅんっ、と抉りつけてゆく。

当然、口まで塞がれてしまった肉便器はたまったものではなく、何とかこの苦しみから解放されようと舌で突き入れられてゆく肉棒に

ご奉仕して、精液を吐き出させようとしてゆく。
指揮官様に捧げる筈であった肉便器の、大鳳の体は雄たちの獣欲に晒され、汚されてない場所が無い程に徹底的に蹂躙されてしまっていた、折れそうになる心を必死に大鳳は保とうとして、己の穴と言う穴を塞いでいる肉棒によって体の中をかき混ぜられても絶対に絶頂だけは押し上げられまいと必死に刺激を耐えようとしてゆくが、雄たちは肉便器の事情など知ったことは無いと言わんばかりに、その豊満な魅惑の体を欲望のままに蹂躙し続けてゆく。
後ろの穴と前の穴に突き入れられ、出し入れされてゆく肉棒が交互に腸奥と膣奥を抉りつけてゆき、喉奥を肉槍の先端が穿つ、指揮官のモノと比べると確かに小さいものの、それでも普段から鍛えられているお陰で逞しい肉槍が膣粘膜と腸粘膜を擦るたびに、雌の体に耐えがたい強烈な快楽が走り、大鳳の心を蝕んでゆく。
指揮官様ではない、好きでもない男に獣のように犯されて、快楽を感じてしまってるなんて、自分の本性は誰にでも股を開いてしまう淫売ではないのかと。
そこまで考えてしまった瞬間に、彼女の必死に保とうとしていた己のアイデンティティが打ち砕かれてしまいそうになる。
その事を必死に否定するかのように、何とか男たちから逃れようともがくが、当然、極上の雌である大鳳の事を雄たちは逃してくれることもなく。
「ほぉら、中に出してやるぞ、しっかり受け止めろよっ！」
まず最初に射精したのは、雌便器の口に肉棒を捻じ込んで喉奥を何度も、何度も口をオナホに見立てて使用していた若い衛兵で、一層強く喉奥を力いっぱい抉りつけたと思うと、雌の喉奥をぐりぐりと押し上げたまま、肉棒に装填された熱い子種汁が音を立てて凄まじい勢いで吐き出されてゆき、彼女の口内を濃い雄の匂いを放つ精液で満たしてゆきながら、かくかく、と腰を揺さぶり、肉棒に装填されたその精液を一滴残らず吐き出そうとしてゆく。
口内に吐き出された汚液を吐き出そうと、大鳳はもがくが、雄は逃してくれるはずもなく、口の中に吐き出された精液を目じりに涙を貯

めながら大鳳は飲み干してゆくしかない、喉に纏わりつくかのようにべっとりした精液を飲み干してゆくたびに、限界を迎えつつあった彼女の心はへし折れそうになってしまう。
　そんな大鳳をあざ笑うかのように、膣穴を貪っていた衛兵の1人は、腰をびくっ、びくっ、と震わせて、肉棒を大きく痙攣させてゆきながら肉洞の襞の多い、既に何人も衛兵たちの肉棒を受け入れて、乱暴に犯されてしまってるというのに一切締まりが緩くならないそこの最奥をごちゅんっ、と欲望のままに勢いよく突き上げてゆきながら、肉棒に装填された雌を孕ませるための子種汁を肉棒を震わせ、音を立てて大量に注ぎ込んでゆく。
　大量に吐き出されてゆく粘っこい子種汁が子宮壁を叩いてゆくたびに、口に吐き出された精液を吐きそうになりながら飲み干してゆく大鳳は体をびくり、と震わせて、好きでもない男によって孕まされる妊娠の恐怖に震えてしまう。
　そんな大鳳の胸を痛い位に掴んでいる衛兵の隊長は、後ろの穴から抜ける寸前まで肉棒を引き抜いて、一気に根元まで、力任せにねじ込んでゆき、既に心身ともに限界になりつつある大鳳の後ろの穴の最奥を全力で抉りつけてやって、その瞬間にぐりぐり、と腸壁越しに子宮を突き上げてやりながら肉槍に装填された粘っこい子種汁を濁流のような凄まじい勢いで大量に注ぎ込んでゆく。
　本来なら排泄の為に存在している菊門を好きでもない男の精液で埋め尽くされてゆくたびに、大鳳の体は絶望に震え、目から冷たい涙が溢れてしまう。
　穴と言う穴にねじ込まれていた肉棒が引き抜かれて、また別の男が大鳳に覆いかぶさってゆく、今度は大鳳の体をうつ伏せにさせて、その豊満な尻を突き出させるような格好にさせ、後ろから覆いかぶさり、獣のような姿勢で貫かれてゆく。
「(あはっ・・・。　そっか・・・これが、指揮官様の・・・愛、なんだぁ・・・。　そっか・・・えへへへ♪)」
　後ろから、獣のような姿勢で貫かれて、その重量感たっぷりの果実を床に押し付けられ、卑猥に歪まされてしまってる雌は、己の壊れそ

うになっている心を必死に保つために、こう考えるようにした。
こうやって、男たちに大鳳を犯させて、滅茶苦茶にされてしまってるのも、指揮官様からの愛の鞭なのだと。
指揮官様の気に障るような事をしてしまった、大鳳への罰なのだと、この輪姦を乗り切ったら、優しい優しい指揮官様が迎えに来てくれて、大鳳の事を愛してくれるのだと。
自分にとって都合が良い考え方でしかないが、追い詰められて壊れそうになっている大鳳にとっては、そう思って必死に壊れかけている心を保つしか無かった。
「うぉ・・・。　凄いうねり、こいつは凄いな・・・っ！」
後ろから覆いかぶさり、膣穴を貫いてる雄は、大鳳の気持ちなど知った事ではない、ただ、上官から与えられたこの雌を使って、基地に所属している艦船と間違いが起きないようにするためにその体を使って性処理を行うだけだ。
この雌の膣穴は、正しく極上の名器と言っていい物であった。
乱暴に突き入れられてゆく若い衛兵の肉槍を包み込むかのようにうねうねと無数に蠢く膣襞が嘗め回すかのように竿の部分に纏わりついて、膣穴の入り口はきゅっ、ときつく締まり、雄の精液を搾り取ろうとしてゆく。
後ろから覆いかぶさり、この雌を貫いている衛兵は己の射精欲に従い膣奥を一層強く抉りつけてやって、彼女の体を床に力いっぱい押し付けてやりながら肉棒に装填されている熱い子種汁を腰を大きく震わせて、どくんっ、どくんっ、と音を立てて大量に注ぎ込んでゆく。
「(・・・えへっ、あはっ・・・あははっ・・・。　せーしがっ・・・一杯ぃ・・・♪)」
膣穴を容赦なく後ろから覆いかぶさられるような姿勢で蹂躙されて、ぐったりとしてる雌の体に、雄たちが群がってゆく。
大鳳にとって、不幸中の幸いと言っても良い事は、指揮官によって開発されてしまったその体は雄たちの陵辱を受けていくうちに少しずつ、快楽を大鳳に与え始めて、この行為が指揮官によって与えられる罰だと認識し受け入れられるようになってからは、大鳳も素直に快

楽に溺れていけた事であった。

数時間後。

「やぁ、大鳳ちゃん、随分とお楽しみだったみたいだね。　ねぇ、ねぇ、ボクが何でこんなことしたのか、理解してくれたかな？」

メイ少佐が衛兵詰め所の地下にやってきたのは、既に周辺は暗くなり、深夜になった頃であった。

営倉に存在する頼りない光源が現在の惨状を映し出す、床には股を大きく開いた姿勢のまま、大量に注ぎ込まれてしまった精液によって下腹部が僅かに膨らんでしまいながら、ぐったりと横たわっている両胸に卑猥なものをぶら下げている雌牛が一匹いた。

整った、何時もは蠱惑的な笑みを浮かべているその顔は雄たちの粘つく精液によって淫らな化粧が施されてしまっており、リングギャグで塞がれた口からは弱弱しい声が漏れると同時に、つい先ほどまで雄たちに犯されてしまっていたそこからは涎と精液が混じったモノが止めどなく溢れてしまっており、頬を伝って床に零れ落ちてしまっている。

口オナホとして、何回も、何回も数えきれないほど口内を犯されてしまったせいで、口内を貪るかのように乱暴に突き入れられてゆく肉棒を満足させるための術を、雄を悦ばせるための技術を強制的に覚えさせられてしまったその口に取り付けられたリングギャグをメイ少佐の手によって外されると、大鳳はやっと凄惨な陵辱劇から解放された安堵感からか、もしくはやっと愛する指揮官が傍までやってきてくれた嬉しさからか、はたまた両方の理由からか、か細い呼吸を繰り返してゆきながら、その口元は嬉しそうに歪む。

長い、艶のある黒髪は、手持無沙汰の雄たちによって肉棒を扱かれる為に使われ、女の命ともいえるそこは精液によって汚されてしまっており、雄の種の匂いがその髪にしみついてしまっていることだろう。

髪、だけではない、口も、その雄を誘惑してやまない胸も、当然膣

も、菊門も、雄に使われてない場所は無い位に雄たちの欲液によって染め上げられてしまっており、どれほど激しい陵辱が行われたのか、一目で理解できてしまう。

大きく実った豊満な果実は、雄たちの欲望のはけ口として時には手で鷲掴みにされ、時には肉棒を挟まされてしまい、数えきれないほどの雄の手形がその豊満な、マシュマロのような柔らかさの魅惑の果実に刻み込まれてしまっており、雌が荒い呼吸を繰り返すたびに大きく実った果実は揺れ、白濁で染め上げられた乳房を雄を誘惑するかのように揺らす。

凄惨な陵辱を行われて、体が汚されて無い場所が無い程に蹂躙されてしまったというのに、その色気は衰えるどころか寧ろ増してしまっていることだろう。

雄たちの欲望に晒されて、汚されぬいたその体は皮肉な事に雄の劣情を誘ってしまう。

精液で染め上げられた雌の魅惑的な色気にごくり、とメイ少佐は生唾を呑み込んでしまいつつ、大きく広げられたままの股の方に視線を移した。

つい先ほどまで雄の欲望を受け入れるための肉オナホとして使われていた膣穴は、陰唇が無様に開ききり、淫らな花を咲かせてしまって雄の劣情を誘い、吐き出された精液と愛液が交じり合ったものを大きな口を開けてしまっている膣口からごぷっ、ごぷっ、と音を立てて垂れ流してしまっている。

度重なる陵辱を受けてしまったというのに、その雌穴は最後まで雄を悦ばせ続けて、肉棒が乱暴にねじ込まれてしまっても膣口を強烈に締めて、突き入れられてゆく肉棒を締め付け、刺激し続けて精液を搾り取り続けた。

後ろの穴も前の穴と同様に、つい先日までは異物など受け入れたことなど一度も無かった綺麗に閉じていた後ろの穴の窄みは無残にこじ開けられ、今では無残に拡がってしまった菊門の入り口からはつい先ほど吐き出されたばかりの粘っこい子種汁が腸奥まで見えてしまいそうなほどに拡がってしまった入り口から溢れ、重力に従って地面

に零れ落ち、膣穴から溢れた精液と交じり合い、淫らな水溜りを作ってしまっていた。
精液によって膨らんでしまった下腹部をメイ少佐が足で軽く踏んで押してみると、滝のような凄まじい勢いで膣穴と菊門から体液が止めどなく溢れてゆき、膣壁と腸穴を擦る精液の感触だけでも昂り切った大鳳の体は絶頂に押し上げられてしまったのか、ぷしゃっ、と潮まで吹いて絶頂してしまう。
「しきかん、さまぁ・・・たいほう、たいほうね、しきかんさまの、こと、しんじて、がんばった、よ？　ごめんね、しきかん、さま、たいほう、もう、しきかんさまのせーどれい、きずつけたりなんていわない、から」
凄惨すぎる凌辱は、大鳳の心を蝕み、一時的な幼児退行まで引き起こしてしまったようで、その様子を見つつメイ少佐は苦笑いして、精液で汚れた頭を軽く撫でてあげつつ。
「えへへ、分かったならいいよ。　もう、ボクの奴隷を傷つけるなんて事は言わないようにして、それで、ボクの奴隷とも仲良くするようにするんだよ？」
指揮官の手で優しく頭を撫でられて、えへへ、と大鳳は無邪気な子どものように笑みを浮かべて。
「うん、わかったよ、しきかん、さま、でも、しきかん、さま、たいほう、たいほう、こわーい、おにいさんたちに、いっぱい、いっぱい、ひどいこと、されちゃったから、しきかんさま、ひどいことされた、ぶん、たいほうと、あそんで、くれる？」
ふるふる、と先ほどの事を思い出して震える大鳳の事を優しく抱きしめてあげつつ、にやり、とメイ少佐は笑みを浮かべ。
「うん、いいよ。　じゃあさ、えへへ♪　大鳳の事をママにしてあげるね？　嬉しいでしょう？」
その言葉を聞いて、にぱっ、と輝かんばかりの笑みを浮かべて。
「わぁい♪　たいほう、しきかんさまのあかちゃん、はらんで、ままになるね♪　しきかんさまぁ、たいほうのこと、めいっぱい、あいして、ね？」

一時的な幼児退行に陥ってしまった大鳳の頭を優しく撫でてあげつつ、ひょい、と軽々と抱え上げて、まずは大鳳の事をお風呂に入れてやるために、お風呂場へと足を進めた。

堕落する深紅　結

ぐったりと力なく営倉の薄汚れた床に横たわっている白濁に塗れた大鳳の体を抱き上げる。
「あはっ……♪　しきかんさまぁ……♪　もっと、たいほうにふれてぇ……♪」
「衛兵さん達本当に容赦ないねぇ……。　大鳳ちゃん、もう安心して良いからね？　さっきみたいなことはもうしないからさ」
「……うぅっ……！　たいほう、たいほう、とっても、とってもこわかったです……」
抱き上げられた大鳳は愛する指揮官に触れられて、幸せそうな声を漏らすが先ほどの陵辱劇で疲労しきった幼児退行まで起こしてしまってる非力な少女は抱き上げられても身じろぎ一つすることが出来ない。
身じろぎ一つ出来ないものの、目じりに涙を浮かべて、悪夢から解放された安堵感から大鳳の瞳からは自然と涙が溢れてゆく。
そんな大鳳の様子を見て、さすがのメイ少佐も若干の罪悪感に苛まれつつ、大鳳と共に営倉を後にするのであった。

大浴場。メイ少佐の強い要望に動かされた上層部によって作られたそこは広く、床から天井までは軽く見積もっても１０ｍ以上はありそうだった。今はお湯が張っていないものの、浴室は人が十数人ぐらい一気に入っても大丈夫そうなぐらい広く、シャワーも十数個ほど用意されていた。
大鳳の豊満な体を床に寝かせて、シャワーヘッドを手に取り、しっかりと近くによって、無理をさせてしまった少女を労わるかのように優しくお湯をかけてその豊満な体にべっとりと付着した子種を洗い流してゆく。
「えへへ……♪　しきかんさまぁ……♪　さっきの、おにいさんたちにい、たくさん、たーくさん、ひどいことされちゃったぁ……たいほ

うのぉ、おまたもぉ、きれいにしてください♪」
「うんうん、分かってるよ。あの人たちのせーえきが沢山注がれちゃったここも、しっかりと綺麗にしてあげないとね？」
「はぃ・・・♪　たいほうとあそんでいいのはぁ・・・しきかんさまだけですからぁ・・・♪」
　お湯で体に付着した汚液を洗い流した後、不特定多数の筋肉質な衛兵たちによって貪られ、蹂躙されてしまった雌穴に細い指先をゆっくりと押し当て、ぬぷぬぷと音を立てて埋めてゆく。　あっさりと、何の抵抗もなくピンク色の淫らな花を咲かせている陰唇に埋められてゆく。　自らの体の内側に挿入されてゆく愛する指揮官の指先の感触に大鳳はんぅ、とくぐもった声を漏らす。
　中指と人指し指の二本の指はあっさりと根元まで挿入され、数多の男たちの性欲を受け切ったよく解れた膣襞に軽く、傷つけないように優しく爪を立ててあげながら、膣穴にたっぷりと吐き出された精液を掻きだそうとするかのように手首を動かしてゆく。
　メイ少佐の手首が動かされてゆくたびに、愛液と白濁が交じり合った汁が清潔な浴場の床に飛び散ってゆき、膣穴を引っ掻き回す指の感触に大鳳の口からは艶やかな声が漏れてしまう。　何回も何回も、大鳳自身も１０から先を数えてないほどに男根を捻じ込まれて、乱暴に貪られ、蹂躙され続けてしまったというのに、大鳳の膣穴は締まりが悪くなるどころか、むしろよく解されたお陰か具合がよくなってそうなほどで。　すっかり淫らに開拓されてしまった膣襞を軽く爪で擦るだけで膣奥から熱い愛液が溢れ、うねうねと蠢く襞が指先に切なそうに絡みつき、快楽を求めるかのように浅ましくきゅっ、と膣口が締まり、責める雄の劣情を誘おうとする。
「・・・ふふ♪　大鳳ちゃん。　指じゃあ奥まで届かないし、ボクのおちんちんで、精液、掻きだしてあげるね？」
「えへへ♪　たいほう、しきかんさまのぉ、おちんちんだーいすきですぅ・・・♪　たいほうのぉ、おまんこぉ、たくましいしきかんさまのそれでぇ、たーくさん、かきまぜてくださいね♪」
「わかってるよ、大鳳ちゃん。　色々な人に犯されて、滅茶苦茶にされ

ちゃったみたいだけど・・・。　その事、忘れちゃうぐらいに、ボクのおちんちんで沢山大鳳ちゃんの事、気持ちよくしてあげるね？」
　そう言って、正面から覆いかぶさる。　最初に犯した時とは違って、優しく、大鳳の体に覆いかぶさって、ぎゅっ、と抱きしめてあげながら、少し休憩できる時間が作られたお陰で先ほどよりも顔色が良くなったと言えども、未だに疲労の色が残る大鳳の事を労わるかのように、精液が洗い落とされたと言えども手形や歯形などが刻まれた陵辱の跡が痛々しい胸の突起を優しく小さな舌先でぺろり、と舐めて、ぺろぺろ、と優しく嘗め回してゆく。
　胸の突起を優しく嘗め回し、つい数日前まで生娘であったことが想像できないほど輪姦され拡がってしまった、指である程度掻きだされたと言えども奥までたっぷりと吐き出されてしまったせいで未だに残ってる精液と愛液が交じり合ったものが垂れ流されている膣口に、その体躯には似合わないほどの、衛兵たちのモノと比べて一回りも二回りも巨大な肉槍の先端をぬちゅぬちゅと音を立てて擦りつけて、肉竿の血管の浮き出た側面部分でビンビンに勃起してしまってるクリトリスを押しつぶし、快楽で苛んでいこうとする。
　もどかしい刺激に、大鳳は目じりに涙をためて、切なそうに声を漏らす。　そんな様子の大鳳を見て、くすりとメイ少佐は微笑み一つ。
　優しく、もし苦しかったら言うようにね、と言った後に、膣口に逞しい肉槍の先端を押し当て、ゆっくり、ゆっくりと、大鳳の事を労わるかのように腰を前へと突き出し、埋めてゆく。
「あっ・・・あぁっ・・・♪　しきかんさまのぉ・・・おおきいのぉ・・・♪　たいほうのぉ、わるいひとたちにいじめられちゃったおまんこぉ・・・♪　しきかんさまのかたちになってるぅ・・・♪」
「・・・ふふ♪　ボクの、大きいでしょ？　大鳳のおまんこの形、ボクのおちんちんの形に拡げてあげるから・・・ねっ？　ふふふ♪」
「あはっ・・・♪　しきかんさまぁ・・・♪　うれしいぃ・・・♪　たいほうのからだにぃ、わるいひとたちによごされちゃったからだにぃっ！　しきかんさまのものだってあかしぃ、きざんでくださいぃ・・・♪」

細心の注意を払い、これ以上大鳳の事を傷つけないようにゆっくりと優しく埋められてゆく肉杭をもう二度と離さないようにするかのように、すっかり解され貫かれたばかりの時と比べて締め付けはマイルドになったものの、うねうねと無数に蠢く襞が肉槍に絡みついて奥へ奥へとそれを押し進めてゆくたびに肉襞による肉棒への奉仕が更に激しくなってゆき、子種を搾り取るのに最適化されたその膣穴の具合の良さにすぐに達しそうになってしまうが、何とか堪えて最奥をこつん、と抉りつける。

最奥をこつん、と抉りつけると、きゅっ、と膣口がけなげに、散々乱暴されてしまったというのに肉棒から精液を搾り取ろうと締まり、肉竿に纏わりついている襞が更に激しく蠢き、さながらしっとりと濡れた筆で肉竿を余すところなく撫でまわされてるかのようで、挿入した雄の理性を失わせる魔性の名器と言っても良い物だった。

大鳳ちゃんには悪いけど、沢山おまんこを耕してくれた衛兵さん達にはちょっと感謝しないとね。　と、心の中でそう大鳳に聞こえないように呟きながら、膣奥まで埋められた肉槍を腰を後ろに引いてゆき、カリ首の部分で襞がびっしりと存在してる肉壁を引っ掻いてやり、奥まで注がれてしまった衛兵たちの精液を体外に吐き出させようとしてゆく。

少佐の細い腰が後ろに引かれ、肉の槍が抜ける寸前まで引き抜かれてゆくと、胎内に未だに残った、不特定多数の雄たちの精液が交じり合ってダマになったものが掻きだされてゆき、そのたびに大鳳は己の体を穢していて、圧迫していた汚液が無くなってゆくのを実感し、えへへ、と無邪気に、普段のような妖艶な笑みではなく幼児退行を起こしてしまったせいもあってか、幼い子どものような笑みを浮かべ。

「あはっ、しきかんさまのぉ・・・♪　おちんちんでぇ、たいほうのことぉ、きれいにされてますぅ・・・♪　あはっ、もっときれいにしてぇ・・・♪」

「うんうん、もっと綺麗にしてあげて、その後にたーくさん、中に出してあげるからね？　ふふっ・・・。　赤ちゃんの部屋まで、精液で一杯にされちゃったみたいだから・・・。　ここもしっかりと綺麗にし

てあげないとね？」
「あぁぁぁっ♪　しきかんさまのがたいほうのいちばんふかいところまではいってるぅぅぅぅ♪」
　そう言って、抜ける寸前まで引き抜かれていた肉槍を再びゆっくり、ゆっくりと埋めてゆき、こつん、と子宮の入り口を押し上げたかと思うと、腰に力を込めて、子宮口を押し上げている肉棒の先端部を前へと突き出し、衛兵たちの精液がたっぷりと吐き出された子宮内にさえも肉棒を埋めてゆき、子宮壁にべっとりと纏わりついてる精液を掻きだそうとするかのように肉槍を子宮壁に押し当てたまま腰を後ろに引いてゆく。　抜ける寸前まで肉棒が再び引き抜かれると、どぽっ、と粘着質な音を立てて結合部から精液と愛液が交じり合ったものが零れ落ちてゆき、床を汚してゆく。
　当然、子宮内まで肉棒を挿入されるのは大鳳にとっても初めての経験で、子宮壁を擦られる凄まじい刺激に絶叫してしまう。　しかしながらも、その声は幸せそうであった。　何故ならば愛する指揮官様によって己の体の最奥まで愛して貰ったのだから。　激しい快楽は大鳳の疲弊した体を苛み、絶頂へと押し上げられて意識が飛びそうになるが、何とか大鳳は堪え、愛する指揮官様に目いっぱい愛して貰おうとけなげにその小さな体を抱きしめてゆく。
　何度か腰を前後に深いストロークでゆっくりと、優しく前後させて、肉槍で子宮内にもたっぷりと吐き出された精液を掻きだしてやった後に、くすり、と大鳳の愛するメイ少佐は笑みを浮かべ。
「・・・ね、大鳳ちゃん。　衛兵さん達の相手、大変だったよね？　今から、頑張ってくれたご褒美あげるね？　・・・ね、大鳳ちゃん、ボクの赤ちゃん、今から孕ませてあげるから、覚悟して・・・ね？　ふふ♪」
「はぃ・・・♪　しきかんさまのあかちゃん・・・たいほうにぃ、くださいぃ・・・♪」
「ふふ、大鳳ちゃんの事、ママにしてあげるね？　それじゃあ、行くよ？」
　ぎゅっ、と両手で、大きく実った雄の劣情を無条件で誘う極上の果

実を鷲掴みにして、ぎりぎりと細い指先を先ほどと違って、大鳳の事を傷つけないように細心の注意を払うのではなく、寧ろこの体に自らのモノだという証を改めて刻み込んでやるかのように指先を力いっぱい食い込ませてやりながら、精液を掻きだし終えて、膣口付近まで戻って来てる肉槍の先端部を、ぎりっ、と一層強く胸を卑猥に歪めてやったかと思うと、一気に腰を前へと突き出してゆき、うねうねと子種をねだるかのように蠢き続ける襞壁をごりごりとこそぎ落とすかのように猛烈に擦ってやりながら子宮の入り口を思いっきり突き上げ、容易く口を開いたその中に先端を挿入してやり、子宮の奥の壁を思いっきり抉りつけてやって大鳳の体を大きく揺さぶってやる。すると、その刺激だけで絶頂してしまったのか、びくぅっ、と、大鳳の体は跳ねるが、そんな雌の事などお構いなしに激しく腰を前後に揺さぶり、雄を魅惑するその体に自らのモノだという事を分からせる最後の儀式を行おうと、子を孕ませようと一心不乱に蹂躙してゆく。

肉槍が突き立てられた結合部から愛液が攪拌されて泡立ったものが飛び散るほどの激しい抽送。　肉棒が力任せに叩きつけられるかのようにねじ込まれてゆき、文字通り奥の奥を抉りつけられるたびに雌は幸せそうに鳴く。　ああ、愛する指揮官様にこんなに愛されて幸せ、と言わんばかりに、先程の凌辱によって刻まれた心の傷を忘れようとするかのように、愛する指揮官様に満足してもらうために下腹部に力を籠め、乱暴に埋められてゆく肉棒を締め付け、子種を搾り取ろうとしてゆく。

うねうねうと無数に蠢く膣壁が叩きつけられるかのようにねじ込まれてゆく肉棒にむしゃぶりつくかのように絡みつき、先程よりも圧が増し、締め付けがきつくなってきたその刺激に段々とメイ少佐も限界が近づいてゆき、けなげにこちらの事を気持ちよくさせようとしてくる自らの肉奴隷の1人にくすり、と笑みを浮かべて、愛してるよ、と聞こえるか聞こえないかぐらいの声量で囁いたかと思うと。　肉槍が抜ける寸前まで一気に腰を後ろに引き、引き抜かれる際にカリ首で強烈に大鳳の敏感な場所をこそぎ落とすかのように擦ってやりながら、一気に引き抜かれたその肉棒を全体重を込めて叩きつけるかのよ

うに突き出してゆき、一層強く子宮の入り口を押し広げて最奥を抉りつけて。
「ふわっ、ふわぁぁぁぁぁぁぁ♪　しきかんさまのあかちゃんのもとぉ・・・たくさんでてるぅ・・・♪」
「っ・・・っ・・・♪　あはっ・・・♪　たくさん、たーくさん、種付けしてあげるから・・・ねっ！　ボクの性奴隷だって証っ・・・刻み込んであげるんだからっ・・・！」
「・・・えへへっ・・・♪　たいほうもぉ・・・しきかんさまのことぉ・・・あいしてますぅ・・・♪　だからっ・・・しきかんさまのぉ・・・あかちゃん、はらみます・・・ね、あはっ・・・♪」
　子宮壁を一層強く叩きつけた肉棒の先端部はぐりぐりと最奥を押し上げたまま、びくっ、びくっ、と跳ねるかのように痙攣し、肉竿に大量に装填された特濃の孕ませ汁を音を立てて吐き出してゆき、雌の数多の雄たちの精液で汚されてしまった子を作るためのゆりかごに誰がご主人様なのか、誰が支配者なのか改めて教えてやろうとするかのように精液で白く染め上げようとしてゆく。
　大鳳の事を改めて染め上げるかのように吐き出されてゆく子種汁によって一瞬で子宮内は埋め尽くされ、大量に吐き出されてゆく活きの良い精子は卵子を求めて元気よく子宮内を泳ぎ回り、ついに卵子を見つけ出したかと思うと一斉に自らの遺伝子情報を刻み込もうと群がり、輪姦し、この雌の胎に新しい命を宿そうとしてゆく。
　自らの卵子が愛する指揮官様の精子によって蹂躙され、新しい命を宿されてしまったのは大鳳にもしっかりと理解できて、種付けされて孕まされる快楽にだらしない笑みを浮かべて舌を出してしまいながら、一層強く体が跳ねたかと思うと、ぐったりとその体から力が抜けた。
「・・・あはっ、気絶しちゃった？　・・・ふふ、幸せそうな顔で気絶しちゃって、そんなにボクの事が好きなの？」
　かくかく、と肉棒に装填された子種汁を一滴残らず注ぎ込んで、ゆっくりと肉棒を引き抜いた後に幸せそうな顔して気絶している大鳳の頬を優しく撫で。

「・・・。　流石に、衛兵さん達に与えるのは酷い事しすぎちゃったかな？　・・・ごめんね、もうしないから」
少しだけ、今回ばかりはやり過ぎたかもと感じるメイ少佐は、大鳳の唇に優しく自らの唇を重ねて、その体を抱き起し、自らの寝室に連れてゆくのであった。

大鳳型装甲空母1番艦　大鳳

調教に成功　反乱の気配なし

更なる艦船の派遣を求む

堕落する深紅　完

深紅の想い

私の愛する指揮官様は、ちょっとだけ背が低い。背が低くても、可愛らしいですから全く問題はありませんけどね。

ここの海軍基地に所属している艦船の数は４人。私、大鳳と、お邪魔虫・・・もとい、同じ装甲空母であるイラストリアス、長良、そしてプリンツオイゲン。私だけに愛を向けてくれないのは、少し、いや、かなり不満はある。けども、大鳳は思い知りました、指揮官様は私だけではなくて、性奴隷全員の事を愛していると。

指揮官様の悲しむ顔を見るのは、私の本意ではありませんし、何よりまた酷い事されるのは勘弁願いたいですもの。なので、私には珍しく妥協して、ずっと指揮官様の傍に居たいという気持ちを心を殺して抑え、当番制である秘書艦の役目が回ってくるのを文字通り一日千秋の思いで待ち続けていました。

そして、今日はいよいよ私に秘書艦が回ってくる日。普段と違ってお化粧にも気合を入れて、指揮官様の執務室のドアをこんこん、と優しくノックする。すると、ドア越しに愛しの指揮官様の声で入って良いよ、と帰ってきたのでドアを開いて、中へと足取り軽やかに入ってゆき、指揮官様の顔を見つめる。

ああっ、愛しの指揮官様。こちらに優しい笑みを浮かべて見つめてくれる指揮官様のお顔を見るだけで大鳳は幸せです♪

「今日は秘書艦業務よろしくね、大鳳ちゃん」

「はいっ、今日はよろしくしっかりと指揮官様の事、支えますわね。何か困ったことがあったら、なんでも大鳳に言ってくださいね♪」

「あはは、頼もしいね。じゃあ、さっさと書類、片づけちゃおうか」

机の上に小さな山となっている書類の束を見て、指揮官様の頬が僅かに引き攣る。　この海軍基地には事務員も居ないため、軍事書類の決裁は殆ど指揮官様と、日替わりの秘書艦によって行われることになっているという。

秘書艦以外の艦船に事務業務のお手伝いもしてもらっているらしいのだけども、この様子を見ると効果的とは思えない。艦船である以

上、軍事鍛錬も欠かす訳には行かないから、仕方ないとは大鳳も思いますけどね。
　コーヒーをマグカップに注ぎ、苦いのが少し苦手な指揮官様の為に砂糖をスプーン一杯。ミルクも小さじ一杯注いで、指揮官様の横に置く。
　今、指揮官様が決裁している書類は、この海軍基地が存在する海域周辺の警備計画の立案書だった。むぅ、と一つ唸り、難しい顔をしながらコーヒーを一口啜る指揮官様の横に私は立ちながら、決裁の終わった書類を纏めて、ファイルに挟んでゆく。
「ねぇ～、大鳳ちゃん。ボクさ、軍事には全く詳しくないんだけどさ。軍事に詳しいであろ艦船である君の意見を聞かせて貰って良いかな？」
「はい、海域の警備計画について、ですわよね♪この海軍基地には大型艦ばかりですものねぇ。装甲空母である私や、イラストリアスが出撃すると、備蓄資源には優しくはないでしょう。なので、長良やオイゲンの２人に海域の警戒を行って貰うのがよろしい、と大鳳は考えますわ」
「うん、その通りなんだよ。備蓄資源の余裕的にも、君とイラストリアスを出す訳にはいかない。特にイラストリアスはお腹も大きくなってきたしねぇ。よし、大鳳案で行こうか」
　こくこく、と頷きながら、警備計画書に長良とオイゲンの名前を記入する指揮官様の姿は、どこか自信なさげな様子だった。でも、軍事知識には疎いって言うのに、しっかり自分の仕事をしようとする指揮官様の姿は私には輝いてみえますわよ！
　ある意味、私を調教してる時よりも真剣な表情で書類を向き直る指揮官様を眺めつつ、ある興味が湧いてきた。指揮官様は海軍に雇われるまでは調教師として裏社会で仕事をしていたらしいけど、なぜ、艦船たちを指揮する立場である指揮官になったのだろうかという事。
　この書類の山が片付いたら、聞いてみよう、と密かに決心しながら、私も書類仕事を手伝おうと指揮官様の横に椅子を持ってきて、書類の山に向き直る事にしました。

「ふぃー……疲れたね！　でも、大鳳ちゃんのお陰で書類仕事完了っと！大鳳ちゃんもお疲れ様。ゆっくり休もうか」
「ええ、ゆっくり、休みましょう、指揮官様♪私の膝の上、空いてますわよ？良かったら、膝枕いたしましょうか？」
「良いの？じゃあ、お言葉に甘えさせて貰おうかな～。ありがとね、大鳳ちゃん」
　ソファに腰かけて、膝をぽんぽん。私の指揮官様はんぅ、と小さく声を漏らし、大分疲れた様子で体を解してこちらにとてとて。疲れた様子でソファに寝転がり、私の膝の上にその小さな頭を乗せる。
　その長い艶やかな金髪を解きほぐすかのようにその柔らかな髪に指を入れて、手を下に動かして優しく撫でてゆく。私に、妹は居ないけども、こうやって頭を撫でていると、妹が出来たみたいで自然と口元に笑みが浮かぶ。
　ふにゃあ、と頭を撫でられるのが気持ちいいのか、可愛らしい声を漏らす指揮官様。ああ、今日も指揮官様は愛らしいですわ♪
　でも、今だけは自らのこの大きな胸に恨めしい気持ちが存在した。この胸さえなければ、指揮官様の砕けた可愛らしい笑みが見れたはずなのに。
「そう言えばさ、大鳳ちゃんさ。一つ気になったんだけど聞いて良いかな？」
「はい、なんなりと、ですわ♪この私、大鳳から教えられることならばなんなりと♪」
「ふぅむ、じゃあ、一つ。――なんで、大鳳ちゃんはさ、ボクにそこまで尽くしてくれるの？そりゃあ、ボクは大鳳ちゃんによく助けて貰ってるよ？でもさ、ボクは控えめに言ってあまり良い指揮官じゃあないと思うんだよね、格好いい、という訳でもないし」
「女の子に酷いことしてばっかりだよ、本当に。きっと死んだら地獄行きじゃあないかな？まぁ、それでボクは構わないけどね、自分の行

動は全部自分のものさ」
　真面目な声色でこちらに問いかけてくるその言葉に、私は言いたい事を我慢して、しっかりと耳を傾けて聞くことにしました。真剣に、話してる相手の言葉を遮るのは失礼に値しますもの。
　でも、なんで指揮官様がそんな事を聞いて来るのか、大鳳には理解できませんでした。
「この見た目も、ボクからすれば調教対象の女の子を油断させるためのものでしかないからね。軍事知識も豊富という訳でもないし、胸を張って得意言えそうなのは調教ぐらいなものだよ」
「だから、さ。なんで、ボクの事を、ここまで愛してくれるのか、尽くしてくれるのか、全然分かんないんだよ。調教して、こちらに忠誠を誓わせてから、てなら分からない事はないけどさ。君、調教する前からボクに忠誠誓ってくれてたよね？なんでなの？」
「メイ様」
　何時ものように、指揮官様、と呼ぶのではなくて、彼の名前を呼んで、ぎゅっ、と抱き起して、私の自慢の大きな胸にその顔を埋めさせながら、頭を優しくなでなで。
　離さないように、強く、優しく抱きしめてゆきながら、言い聞かせるように彼に声をかけてゆく。
「大鳳の愛は、指揮官様だけに向けられますわ。指揮官様の良い所、他の貴方の奴隷よりも、何倍も知ってるつもりです。指揮官様は、確かに女の子に酷い事をしてきたかもしれません、地獄に行くことになるかもしれません」
「ですけども、大鳳は指揮官様の事を愛してるのです。指揮官様は、気配りが上手くて、なんだかんだいって奴隷想いで、愛が深い方ではありませんか。軍事については、確かに詳しくはありませんし、事務仕事も苦手かもしれません、ですけども、しっかり指揮官としての責務を果たそうと努力しているではありませんか、それに、他にももっと良い所が」
「もういい、もういい、分かった、分かったよ！　十分だよ！」
　ぎゅっ、と私の事を強く抱きしめて、指揮官様は胸の谷間に顔をう

ずめたまま、声を荒げました。照れてしまってるようで、こちらに自分の顔を見えないようにしてるのかもしれません。
優しく、頭を撫で撫で。
「……では、私からも質問が一つございますわ。なぜ、調教師として活躍していた貴方が、海軍の指揮官になろう、と思ったのか」
「んぅー……。まぁ、報酬が良かった、からかな。この仕事を受ける前にさ、大金が必要な出来事があってね」
「その出来事とは？差し支えがなければ、理由を教えて下さます？」
「お母さんだよ、お母さん。ボクのお母さんだって人が、ガンを患っちゃってね、大金が必要だったのさ。まぁ、その人とは血は繋がってるってだけで、殆ど顔も会ったことはないけどね」
ぎゅっ、と指揮官様を抱きしめる力が強くなってしまう。指揮官様が痛くないか、少しだけ不安になるけど、ぎゅっ、と痛い位に今は強く抱きしめてあげたくなった。
胸の谷間に指揮官様の顔が完全に沈められて、苦しそうな声を漏らしているのに気が付いて、慌てて指揮官様の事を解放する。
「まぁ、ボクの事を産んでくれたし。親孝行、少しはしないとねぇ」
「それに、今の仕事、悪くないって思ってるよ？今の指揮官って待遇も悪くはないし、君たち艦船とエッチな事するのも悪くはないし、ね」
「でも、あの人にはもうちょっと甘えたかったなぁ。大鳳ちゃんと同じように、おっきなお胸の人だったんだよ、甘えた事、一回も無かったけどね」
「……ねぇ、指揮官様。今だけは、大鳳に、思いっきり甘えてください」
「……変に、気を遣わせちゃったかな？ごめんね、でも、ありがと」
そう言って、私の体をぎゅっ、と抱きしめる指揮官様は年相応の子どものように甘えるかのように、私の胸の谷間に顔を埋めて、すりすり、と頬ずりしてきて、優しくその頭を撫でながら、あることに、股間部が膨らんでしまっていることに気がつきました、ふふ♪こちらの方も甘えん坊さんですね。
胸を覆い隠している布をずらして、自慢の大きな胸を露にさせてあげながら、指揮官様の股間の方に手を伸ばす。指揮官様は露にさせら

れた大きな胸の突起に吸い付いて、ちゅっ、ちゅっ、と赤ちゃんのように胸の突起を一心不乱に吸ってゆく。その必死な、可愛らしい姿にきゅん、とときめいてしまう。艦船にも母性本能というものが存在するのならば、それかもしれない。

「んぅ♪今は、大鳳が指揮官様のお母様ですよ♪大鳳にたーくさん、甘えて、溺れてくださいね？指揮官様の全て、大鳳が受け止めてあげますから、ね？」

「……大鳳、お母さん？ふふ……♪悪くはない、かな♪ねぇ、大鳳お母さん♪ボクの、おちんちんシコシコして、気持ちよくしてくれる、かな？」

「ええ、勿論ですわよ♪しきか……いえ、メイ♪お母さんの私にいっぱい甘えて、辛い事、ぜーんぶ忘れて、お母さんに溺れてくださいね？」

そう言って、ズボンの方に伸ばした手で指揮官様の、いえ、メイの逞しい男根を露にさせて、その男根に優しく握りしめて、上下に手を動かして、しこしこ、と擦ってゆく。手の中で上下に擦られるたびに手の中でメイの逞しい肉槍が震えて、乳首に吸い付いて、目を潤ませながら甘い吐息を漏らす。その姿にまたきゅんっ、と胸がときめいてしまい、亀頭の部分に掌を擦りつけたり、カリ首の部分を軽く指で引っ掻いたりして、普段はご主人様であるメイの事を少しだけいじめてしまう。

切なそうに、亀頭の部分を掌で擦られると、胸の突起に軽く歯を押し当てて、反撃とばかりに乳肉に細い指先を食いこませてくるメイの姿が、可愛らしくて仕方ない。今だけは、私の事を母親だと思って甘えてくれるメイの事を独り占めできる。この二人の時間を、もっと楽しむために、焦らすかのようにして、指揮官様の肉棒を苛めてゆく。

「んぅ……お、お母さん……焦らさないで、お、お願い……だから……」

「……ふふ♪分かってますわよ、はい、お射精しましょうね？沢山、沢山、私の手の中に吐き出せたら、撫でてあげますから、頑張ってくださいね♪」

「っ……あぅっ♪お、お母さん♪でっ、出るぅ♪あぅっ、あっ、あぁぁ♪」

私の手の中に握られていたメイのおちんちんを焦らすのをやめて、手でしっかりと、痛くないように優しく握りしめてゆきながら、上下に動かして擦ってゆき、肉棒に装填された子種汁を一気に搾り取ろうと、竿を握る手に力を込めて一層強く擦った瞬間にびくっ、びくっとメイの腰が跳ねて、肉棒に溜まった熱い熱い子種汁が大量に吐き出されてゆき、私の手だけではなくて、胸の方まで飛び散ってしまう。

こしこし、と手を動かして肉棒に装填された子種汁を一滴残らず吐き出させてあげながら、母親が息子にするときのように、優しくメイの柔らかな金髪を撫でてあげて。

「ふふ、一杯射精出来て偉いですよ、メイ♪今日はもうお仕事も片付きましたし、一杯、私に甘えてくださいね？」

「……うん、ありがと。えへへ♪今日はお母さんに、沢山甘えちゃうね？」

「あっ、で、でも、他の人には内緒でお願い！約束だよ？」

「ふふ、勿論ですわよ、私と、メイ、二人だけの秘密、ですわ♪」

こちらを押し倒そうと覆いかぶさってくるメイの盛んな性欲を受け止めるためにぎゅっ、と抱きしめる。

甘えるかのように胸に吸い付きながら私の体を貪ろうとするその姿に胸がきゅんってなってしまって、メイ自身も普段とは違ったプレイに興奮してしまったのか、一晩中獣のように互いを求めて愛し合ったせいで、徹夜までしてしまって目の下に出来たクマをオイゲンに笑われてしまったのは、また別の話。

私の指揮官様は、ちょっとだけ背が低い。背が低くても、私の大切な人であることは変わりませんし。私のとっても大切な旦那兼息子です♪

二羽の鶴　起

その日、海軍基地の門の警備をしている衛兵二名はこの基地にやってきたばかりの新米であった。

ふぁぁぁ、と門を警備している衛兵の一人が眠そうに欠伸を一つ、もう一人がはぁ、と溜息をして注意をするが、不真面目な衛兵は暇で暇で仕方ないのだから欠伸も出るさ、と答えて態度を改めるつもりは無し。

注意した比較的真面目な衛兵の方も、暇なのは確かに同意だな、と肩を竦めて答えた。

近くに娯楽のための場所なんてこの周辺には全く存在しない、平和そのもののこの基地に所属する衛兵は良い意味では大らかな気風が存在するが悪く言えば緊張感が足りないのだ。

新米二人に門番を任せているのも先輩方が基地付近に存在する空き地にテニスコートでも設置するからだという。前線の基地で衛兵がそんな事をすれば間違いなく基地司令から大目玉を食らうだろうが、基地司令も乗り気だという話だから驚きだ。

緩いのは良いんだが、緊張感がなぁ、真面目な彼はふぅむ、と腕組み一つ。

まぁ、平和なのは悪い事ではないが、と真面目な方の衛兵も暖かに差し込んでくる日差しに眠気が込み上げて欠伸が出てしまいそうになったのか、口を押さえようとした時に、視界の端に艦船の姿を見て慌てて姿勢を正す。

やってきた艦船の数は二人。

おぉ……と、不真面目な方の衛兵がやってきた艦船の片方の容姿に釘付けになってしまったようで感嘆の声を漏らす、事実、彼女の容姿は特筆に値するものであった。

白い着物を陣羽織のようにして纏い、今日から配属になる海軍基地を見上げる茶髪の女性。艶やかな地面にすら届いてしまいそうな長髪を後ろで束ね、腰に刀を差している艦船の名前は瑞鶴。

着物の下に付けているの紅のワンピースだろうか、そのワンピース

から零れ落ちてしまいそうになる大きく実った白い果実に門番の片方は視線が奪われてしまっていた、ごくり、と生唾を呑み込み、慌ててその艦船がこちらに向かって手を振っているのに気が付いて敬礼を返す。

凛々しい印象を感じるものの、こちらに手を振りながら笑みを浮かべるその姿は快活なもので、彼女にときめいてしまう不真面目な衛兵。

不真面目な衛兵が、ちらり、と先ほどから一切言葉を発さない真面目な衛兵の方に視線を向けると、どうやらその真面目な衛兵の方は、瑞鶴の方ではなくて隣にいる艦船に視線が釘付けになってしまっているようであった。彼も釣られてそちらに視線を向けてみると、なるほど、真面目な彼がそちらに視線が釘付けになってしまったのが分かる。

どうやら真面目な衛兵の不埒な視線に気が付いたようで、くすくす、と面白そうに笑みを浮かべて衛兵たちに顔を向ける。長い茶髪の艦船、瑞鶴と同じように腰に刀を差している彼女の髪の色は銀髪のストレートロングで、着物の袖が翼のように見える。どうやら、隣の姉妹艦と思われる艦船よりも胸は大きいようで着物という体のラインが分かりづらい服装であるというのに大きく実ったその果実は男を誘惑するかのようにこちらに向かって歩いてくるたびにぷるん、ぷるん、と揺れ動いてしまう。

真面目な衛兵は暫くその大きな胸に視線が奪われてしまっていたが、不真面目な衛兵に肘で小突かれて慌てて不埒な視線を向けてしまっていたことに気が付いて、近づいてきた二人に敬礼を返し、門を開いて中へと招き入れる。

門を通り、衛兵の二人に手を振って基地の奥へと進んでゆく銀髪の艦船は、翔鶴はくすり、と笑みを浮かべて隣にいる妹の方を向いて口を開いた。

「ねぇ、瑞鶴。ここの衛兵さん達、面白い人たちね」

「翔鶴姉に衛兵さん達、釘付けになってたわね！ふふっ、私の自慢の姉の魅力に気が付いてくれたようで嬉しいわ」

「ふふ♪瑞鶴の方も、衛兵さんの一人がずーっと見てたわよ？人気者ね」
その言葉を聞いて、えへへ♪と照れ臭そうに微笑む瑞鶴の手を握り、海軍基地の司令部を目指す二人の艦船、瑞鶴と翔鶴の姉妹。
翔鶴は、妹と共に同じ海軍基地に所属することが出来た事が嬉しくて仕方なかった、瑞鶴の方も翔鶴と同じ気持であった、これから始まる姉妹と、そして新しい仲間たちとの共同生活に胸を弾ませる二人であったが、これから先起こるであろう悲劇など想像できるはずもない。
まさかここが、艦船を調教し、孕ませるための施設であるという事を二人は知る由もないだろう。

海軍基地の指揮官執務室の前までやってきた二人は、すぅ、と深呼吸をして身だしなみを整える、お互い自分の服装をチェックし、頷きあうと翔鶴の方から控えめにこんこん、とドアの方をノックした。
ドア越しに返ってきた幼い少年の声に、二人は首をかしげながら、ドアを開いて中へと足を踏み入れる。執務室の中には大き目のソファが一つ、棚には紅茶の茶葉とティーカップが幾つか。一見すると普通の執務室のように見える。
普通の執務室の中に一際目立つ人物が、指揮官の椅子に座っていた金髪の少年が椅子から立ち上がり、二人を歓迎するためにとてとて、近づいてきた。
「やぁ、重桜からの長旅ご苦労様。ボクの名前はメイ少佐だよ、ここの海軍基地の指揮官をやってるんだ、よろしくね！」
「え、ええ……よろしく。……あの、失礼かもしれないけど一つ聞いて良いかしら？貴方、何歳なの……？」
「あははっ、うん、ボクみたいなちっこいこが指揮官をやってるのが気になるんだよね、まぁ、気持ちは分かるよ。えー、確か今年で年齢は十二歳だった……かなぁ？」
「じゅ、十二歳……随分と小さいのね……」

「あらあら、瑞鶴、小さくてかわいい指揮官じゃないの、ふふ♪」
屈んで姿勢を低くして、目線を同じに合わせて長い、腰にまで届いてしまいそうな艶やかな金髪を撫で撫で。
翔鶴に撫でられて、にぱっ、と太陽の花が咲いたかのような笑みを浮かべる指揮官の姿は、年相応の少女のように見える事だろう。
少なくとも瑞鶴はその見た目に油断してしまった、この幼い少女のような見た目をした、所謂男の娘ならば、警戒には値しないと。
こんな幼いのに指揮官として雇われている以上、艦隊指揮の実力はそれなりなのだろうと、そして、柔和な優しそうな笑みから察するに優しい指揮官なのであろうと、人の良い瑞鶴はそんな印象を抱く。
全てが計算通りであるという事も知らずに、素直に、この指揮官は子どもであると油断してしまった。
その油断が、命とりになると知らずに。
「えへへ、撫でてくれてありがとね。長旅で疲れたでしょ？お茶、淹れてくるね？」
「ふふ、お構いなく。ね、指揮官……私に任せてくれませんか？」
「ううん、長旅で疲れてる所、働かせるのがもっと悪いよ、翔鶴も、瑞鶴も、ソファの方に座っててね♪」
そう言って、二人がソファに座るのを促しつつ、手早くお湯の入ったポッドをスプーンで一混ぜする際に袖口に仕込んでいたプラスチックの小さな容器から、以前イラストリアスに使用した睡眠薬よりもいくらか強力なものを密かにポッドの中に存在する紅茶に注いでゆき、スプーンでしっかりとかき混ぜて、ティーカップに二人分の紅茶を注いでゆく。
はい、おまたせ、と言って、ソファに座った二人の机の上にティーカップを置きながら、えへへ、と顔に笑顔を張りつけて己の思考を読まれないようにする。
二人とも紅茶を飲んでぐっすりと眠ったら調教開始だ、強力な睡眠薬が入った紅茶を飲めば暫くは、何しても目を覚ますことはないだろう。
メイ少佐に一つ誤算があったとするならば、瑞鶴の方は兎も角翔鶴

の方は容姿に騙されるような人間ではなかったことであろう。
「少佐、折角ですし一緒に紅茶を楽しみませんか？」
「え、ああ、うん……そ、そうだね、一緒に飲もうか……」
「はい♪一緒に飲んだ方が美味しいですしね♪ね、瑞鶴、瑞鶴もまだ手を付けたら駄目よ？」
冷や汗が額に浮かぶ、まさかここまで勘が鋭いとはメイ少佐も予想外であった。立ち上がり、ポッドの方に歩んでゆく翔鶴はティーカップに紅茶を注ごうとしながら、妹が飲まないように注意しようとする、が。
「ふぇ？」
すっかりメイ少佐の容姿に騙されてしまっていた瑞鶴はティーカップに注がれていた紅茶を喉も乾いていたという事もあって一滴残らず飲み干してしまっていた後であった。
その瞬間に、瑞鶴の瞼が重くなる、慌てて意識を保とうとするが、すぐにその意識も保てなくなって、ソファの方に崩れ落ちるかのようにその意識は深い眠りに誘われてしまった。
鉄が擦れるような音が僅かに響いて翔鶴が何かを構えようとする、が、それよりも先にメイ少佐が動いた。
「させないっ……よっ、と！」
「瑞　鶴　か　ら　離　れ　て　く　だ　……っ、ひぃっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「……今度、オイゲンに感謝しようっと、護身用武器持っておくように言ってたの、彼女だもんね」
少佐の袖の中からテーザーガンと呼ばれる暴徒鎮圧用の武器が飛び出て、刀を構えようとした翔鶴の首筋に突き刺さる。大の大人でさえも無力化しかねないその強烈な電撃を受けて膝をついた翔鶴に間髪入れずに踏み込んで、痺れた手に握られている日本刀を蹴り飛ばして、その体を床に押し付けてやり、両手を後ろ手に回してやって懐から取り出した手錠によって拘束してやりながら、ふぅ、と額に浮かんだ冷や汗をメイ少佐は拭った。
もし、護身用の武器としてテーザーガンを持っていなかったら間違

いなく危機的状況に追い込まれていたであろう、今まで容姿で油断させて奇襲するという方法で艦船たちを無力化してきたが、今回は本当に危なかった、少しでも動くのが遅れていたら床に押し付けられて無力化されていたのは自分だったかもしれない。
「……なんの、まね、ですか……指揮官……っ！」
「なんのまねって、そりゃあ、君たちを犯すために無力化したんだけど」
「っ……！最低、ですね……！」
　指揮官の言葉を聞いて、ぎりっ、と悔しそうに歯を食いしばり、何とか手錠を外そうともがこうとする翔鶴であったが、先程のテーザーガンによる強烈な電圧攻撃によって痺れてしまった身体では、碌に動かすことは出来ない、さながら、猟師の罠にかかった鶴のように哀れにもがく翔鶴を尻目に、大股で意識が完全に堕ちてしまった瑞鶴の方に近づいて、懐から取り出した小型のナイフを胸元が雄の劣情を煽るかのように大きく開かれた紅のワンピースに押し付けて、びりびり、と拘束から逃れようともがいていた姉に見せつけるかのように衣服を破り裂いてゆく。その光景を見て平和な海軍基地の静寂を切り裂くかのように悲鳴が一層強く響く。
　翔鶴のやめて、という悲鳴や、私にはなんでもして良いから許してあげて、という悲鳴をＢＧＭに、瑞鶴の身に纏っていた衣装をナイフで器用に破り裂いてゆき、その美しい魅惑の体を露にさせる。
　露になった、程よく鍛えられて引き締まりつつもむっちりとした極上の体を見て、えへへ、と楽しそうにメイ少佐は笑みを浮かべて、すべすべとした太ももを軽く撫でた後に、その肉付きの良いむっちりとした太ももに手を這わせてくぱぁ、と大きく股を広げてやって、目を潤ませて、必死に誰か来て、と叫んでいる姉に妹の痴態を見せつける。
　綺麗に閉じられた陰唇は男性経験の少なさを物語っている、恐らく自慰すら碌にしたことは無いであろうまだ綺麗に形を保っているな女性として一番大切な場所がこの鬼畜な指揮官によって蹂躙されてしまうのだ。
「あははっ、ねぇねぇ、翔鶴ちゃんの妹～、これから犯してあげるね？」

「やめてくださいっ！私の事は好きにして良いですから、瑞鶴には酷い事しないでくださいっ！」
「え～？やだよ、まずはこの子を犯すって決めてるんだ♪えへへ♪まずはおまんこする前にしっかりとローションを塗り込んであげて～」
懐から再び新しい道具を、ローションが入った小瓶を取り出して、小瓶の蓋を開けて中身に入ったローションを人指し指と中指で掬いあげて、全裸にさせられて股を大きく広げさせられてしまっている瑞鶴の男性経験を物語るかのように綺麗に閉じられた小陰唇に押し当て、陰唇をこじ開けるかのようにして指先を埋めてゆき、指で掬いあげたローションを塗り込むかのようにその膣穴をかき混ぜていく。
自らの体に侵入してきた異物の感触に、んぅ、とくぐもった声を瑞鶴は漏らすものの、強力な睡眠薬の効果によって、僅かに身じろぎはするものの起きる様子はない、起きる様子の無い瑞鶴の狭い狭い、締まりのきついソコに埋められた細い指先で硬い姫穴を解きほぐすかのように指先を動かしてゆき、適度にローションを塗り込んで潤滑は十分だと判断し、指先をぬぽん、と音を立てて引き抜き。
「それじゃあ、よーく見といてね、妹ちゃんの事のこと守れないいんだよ、君、あはは♪」
「い　や　め　て　っ、い　や　ぁっ、　い　や　ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！誰か、誰か、助けてっ、瑞鶴の事を助けてあげてぇぇぇぇぇぇ！」
「誰も助けになんかこないよ？あははは♪君が泣いても許してあげないんだから♪ほぉら、いくよぉ♪」
手早くズボンを脱いで少女のような外見であるものの自らが男性であるという証を、二十センチ以上はありそうな極太の赤黒い雄の象徴を露にさせる。
妹を守れなかった無力感から、それともこれから妹にされることを想像して絶望してしまったのか、涙まで流して必死に許しを請う翔鶴の事など無視して、今からの行為をしっかりと見せつけてやろうとするかのように、意識を失ったままのその体の腕を掴んで起こしてやり、そのまま太ももに手を這わせて股を大きく開かせてやり、肉感的

な柔らかな太ももに手形が残ってしまいそうなぐらい強く掴んでやりながら、背面立位の姿勢で抱えてやって、翔鶴に近づき、既にこれからする行為への期待から先走りまで溢れさせて興奮してしまっている悍ましい肉槍の先端を指でローションを塗り込まれたとは言え綺麗に閉じられたままの小陰唇にぐりぐりと押し当てる。

翔鶴から、ひっ、とその醜悪な肉棒が瑞鶴の割れ目に押し当てられるのを見せつけられて、恐ろしいモノを見てしまったかのような悲鳴が上がるがそれを無視して、割れ目にぐりぐりと押し当てられたままの巨大な雄の象徴を、小さな子どもの握りこぶしぐらいはありそうな雌を躾けるのに特化した肉の棒を瑞鶴の体を下に落としてやって、一気に処女膣の最奥めがけてそれを捻じ込むかのように突き入れてゆく。

ずぷっ、ずぷぷっ、と音を立てて勢いよくねじ込まれてゆく肉の棒の先端部はローションで潤滑を得たと言えども硬さの残る未だに異物に慣れてるとは言えない締まりが非常にきつい穴の突然の侵入者に慄くかのように痙攣する肉襞をごりごりとこそぎ落とすかのように擦ってやりながら、これ以上の侵入を拒むかのように存在した乙女の証を、処女膜を強引にぶちぶちと音を立てて、それこそ傍でその光景を見ている事しか出来ない翔鶴にも聞こえてしまいそうなほどの勢いで乱暴に突き破ってやり、そのままの勢いで子宮の入り口を思いっきり突き上げて瑞鶴の豊満な体を大きく揺さぶってゆく。

流石に己の体を内側から拡げられる凄まじい激痛と異物感に意識を失ってる瑞鶴の表情も反射的に苦痛に歪むが、その事などお構いなしに、翔鶴に己の無力感を味あわせようとするかのように、背面立位の姿勢で瑞鶴の処女膣をオナホ代わり使い、乱暴に処女膜を破られてしまったせいで血が大量に溢れ、肉棒が出し入れされるたびに結合部から血が飛び散るその光景をしっかりと姉に見せつけていく。

結合部から飛び散った処女の証が無残に破られた証拠である深紅が翔鶴の青ざめた頬に飛び散り付着し、怒りという感情よりも先に妹を守れなかったことに対する絶望感と無力感、そして恐ろしさから言葉を失う。

「あはっ♪瑞鶴ちゃんのぉ、処女膣オナホ、すっごく気持ちいいよぉ♪ねぇ、ねぇ、しっかりと見てるぅ？自分の妹が乱暴に犯されてぇ、守れなくて処女を散らしちゃってるの～、これぇ、翔鶴ちゃんが守れなかったのがいけないんだからね？」
「ごめんなさい……ごめんね……瑞鶴、弱い、弱いお姉ちゃんで……お願い、お願いします……もう、もう妹に酷い事、しないで……ください」
「うぅーん……やっぱダメだ！あはは♪ほぉら、そろそろ中に出してあげるよ、処女オナホマンコに種付けされるのぉ、しっかり見といてよね、お姉ちゃん♪」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
メイ少佐の腰遣いが更に激しくなり、瑞鶴が乱暴に上下にそれこそ、オナホのように揺さぶられ、その豊満な体が揺さぶられるたびに大きく実った柔らかな果実が卑猥に跳ねてゆく、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と己を身を守るための防衛本能からか、それとも瑞鶴の雌として成熟しつつある身体は淫乱にも乱暴に犯されてしまってるというのに快楽を感じ始めてしまったのか愛液が分泌され始め、メイ少佐の極太が上下に揺さぶられ膣オナホの最奥が抉りつけられるたびに結合部から愛液と処女の証が交じり合ったものが派手に飛び散ってゆき、翔鶴の顔に飛び散ってゆく。
そして、一層強く、鬼畜な男の娘の肉槍の先端が瑞鶴の姫穴の最奥を抉りつけた瞬間に瑞鶴の体はびくんっ、びくんっ、と絶頂してしまったかのように、或いはこれから行われる種付けに抗議するかのように強く跳ね、どくんっ、どくんっ、と擬音が響いてしまいそうな凄まじい勢いで瑞鶴の今まで精など一度も受け入れた事などない子宮内に大量に子種汁を吐き出してゆき、結合部から精液と愛液と初めての証が交じり合ったものを溢れさせて、涙を流す翔鶴の顔に互いの体液が交じり合ったものを落としてゆく。
かくかく、と腰を揺さぶり、一滴残らず肉棒に装填された子種を吐き出してゆき、念入りに種付けしてやった後に、その体を床にうつ伏せの姿勢で倒してやって、尻を突き出すかのような姿勢にさせてやっ

た後にむっちりとした桃尻の尻たぶをくぱぁ、と拡げてやり。
「ふぅ♪ふぅ♪あはっ、処女オナホマンコに種付け気持ちよかったぁ♪次はお尻の穴使わせて貰うね？」
「いや……もう、やめて……ください……おねがい、します……私の事は、好きにしていいですから……もう、瑞鶴に酷い事するのは、やめてください……」
「あ、なんでもしてくれるの？わぁい♪やったね♪じゃあ『ボクは』瑞鶴ちゃんには酷い事しないよ、うんうん、やっさし～、ボクの優しさに感謝してね、ありがとうございます、は？」
「……っ……ありがとう……ございます……ます……！」
悔しさからぎりっ、と歯を食いしばり、目から涙を溢れさせる翔鶴を見つつ、にこり、と笑みを浮かべ、意識を失い、ぐったりとしてる瑞鶴から離れ、自ら犠牲になろうとした姉に近づいてゆき、先程瑞鶴の衣装をびりびりと破り裂いたばかりのナイフを構えて、鼻歌交じりに翔鶴が身に纏っている衣装を破り裂いてゆく。
衣装が破り裂かれる際も、目を閉じて、必死に耐えるかのようにしていた翔鶴であったが、着物が破かれてその裸体に注がれる視線に羞恥で白い肌に朱が差す、裸にさせられた翔鶴に股を開くように命じると、恥ずかしそうに頬を赤らめて妹を守るために姉は自ら股を開き、男を招き入れようとした。
着物が破かれて、露になった翔鶴の体は瑞鶴の体よりも肉付きがよく、豊満であった。着物越しにも分かるほどに大きく実っていた柔らかな果実を、ナイフを懐にしまって両手が空いた指揮官はがっちりと鷲掴みにしてやって、むにむにと両手でその果実を揉みしだいてゆくとその柔肉は卑猥に歪み、雄を楽しませる。股を開いて雄を招き入れようとしている翔鶴の、瑞鶴と同じように男性経験の少なさを物語るかのように綺麗に閉じられた小陰唇に妹の体液と雄の精液が交じり合ったドロドロになった肉槍の先端部を押し当てて、ぎりっ、と一層強く乳肉に細い指先を押し込んで一層激しくそのたわわを歪ませてやった後に、陰唇に押し当てられたソレを力強く前へと突き出して侵入者を拒むかのように閉じていた割り開いてやって、ぎちっ、ぎちっ、

と肉穴が拡張されるような痛々しい音を響かせてやりながら奥へ奥へとその巨大な肉槍を何の遠慮も無くねじ込んでゆく。
　力任せにねじ込まれた凶悪な異物によって己の膣穴を強引に割り開かれる激痛に悲鳴が漏れそうになるが、翔鶴はこの陵辱者の望む通りに悲鳴はあげまいと必死に唇を噛んでその悲鳴を堪えようとする。
「あはっ♪瑞鶴ちゃんのおまんこは物凄くきつかったけど、お姉ちゃんのおまんこの締まりも良いね♪」
「っ……っ……っ！」
「声漏らさないように我慢してるの♪あははっ、随分と反抗的な目をしてるねぇ、良いよ♪そっちの方が、調教するの楽しいし♪」
　必死に声を漏らさないように我慢している翔鶴をあざ笑うかのように、ぎりぎり、と乳肉に指先を食いこませて卑猥に歪めてゆきながら、牛のように大きく実った胸からミルクを絞ろうとするかのように手を動かして絞ってゆき、先ほどの行為によって瑞鶴の蜜と破瓜と、そして雄の精液が交じり合ってドロドロに塗れている肉槍の先端で、初めてを奪われたばかりで肉棒が前後されるたびに激痛が走っているであろう膣壁をごりごりと擦ってゆきつつ子宮の入り口を叩きつけるかのように突き上げてゆき、その豊満な体を蹂躙するかのように貪ってゆく。
　最初は、自らの膣穴に埋められた悍ましい肉槍によって膣粘膜が擦られても苦痛しか感じなかった翔鶴であったが、少しずつではあるが違和感を覚え始める、その違和感を否定しようとするものの、翔鶴自身も知らなかった膣穴の過敏な場所を擦られてしまうと、必死に悲鳴を漏らすまいと堪えていた口の端から僅かに甘い声が漏れてしまう。
　口の端から僅かに漏れた甘い声ににやり、とメイは邪悪に口角を吊り上げて笑みを浮かべ、大きく実った果実の僅かに勃起し始めてきた胸の突起を人指し指と親指でぐりっ、と押しつぶしてやって、耐えがたい鋭い違和感を、快楽を刻み込んでゆく。
　胸の突起が弄られてしまいながら、膣のお尻側の壁付近に存在する過敏な箇所が擦られ、んんぅっ、とくぐもった声を最早隠せないほど大きな声を口の端から漏らしてしまった雌に間髪入れずにまだ硬さ

の残る子宮の入り口を力任せに抉りつけてやって、その魅惑の体を大きく揺さぶってやる、すると今度こそ明確に快楽に喘いでしまう声が漏れてしまい、楽しそうにメイ少佐は笑みを浮かべるのであった。
「(なんで……私の体、気持ちよく……耐えないとっ、犯されてるのにぃ……感じるなんて、絶対にありえないわ……っ)」
必死に快楽を耐えようと、理性を総動員して歯を食いしばり、堪えようとするが、まるで陵辱者は翔鶴の弱点を見透かしているかのように的確に肉棒を突きこんで責め立て、苦痛に耐えようとしていた翔鶴に耐えがたい快楽を与え、何とか保っているその理性を快楽によって削り取ろうとしてゆく。
その通り、調教師であったメイは翔鶴の過敏な箇所を探り当てていた、探り当てた過敏な性感帯に対して容赦なく肉棒を突き入れ、確実に刺激し、その心をへし折ろうとしてゆく。
妹を傷つけた憎い相手だというのに、少しずつ快楽を刻み込まれて絶頂へと押し上げられてしまいそうになっているのが悔しいのか、翔鶴はいやいや、と頭を振り、涙を流すが、雄の肉棒によって躾けられてしまいつつあるその過敏な体は快楽に耐える事は出来ずに、ラストスパートをかけるかのような激しい腰遣いによって姫穴の淫らな性感を擦られ、翔鶴の意志とは裏腹に雄からの種を受け止めようとしてしまっているかのように肉槍に膣壁を吸い付かせて子種汁を搾り取ろうとしてしまう。
「いやっ、いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!こんなので、イきたくないいいいいいいいぃ!」
「あはっ、良い悲鳴ありがとね♪　ほぉら、イっちゃえ♪」
「いやっ、いやぁっ、イっちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♪
っっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ♪」
犯されてる翔鶴の背筋がぴーんっ、と反り返り、抵抗しようとする理性を押し流そうとするかのように暴力的な稲妻のような快楽が下半身から脳天まで駆け抜けてゆき、びくっ、びくっ、とその豊満な体を跳ねさせてしまいながら一層強く、子宮口をこじ開けんばかりの勢いで突き入れられた肉棒に襞の多い膣壁を擦りつけてしまって、種を

搾り取ろうとしてしまいながら、子宮口をぐりぐりと押し上げられたまま音を立てて吐き出されてゆく粘っこい子種汁が子宮の奥の壁を叩く感触にその絶頂を更に強いものへと押し上げてしまい、ぷしゃっ、と結合部から潮まで吹いてしまって絶頂の激しさを物語ってしまう。

激しい、今まで翔鶴が経験したは快楽の中で凄まじい絶頂へと押し上げられてしまって、ぐったりとしてしまっているその体に、念入りに自らの子を孕ませていこうとするかのように腰を揺さぶり、肉棒に装填された種を一滴残らず、結合部からぐちゅぐちゅと淫らな音を響かせて吐き出してゆくと、その刺激だけでも先の絶頂によって過敏になってしまっている性感が擦れて軽く翔鶴の体を絶頂へと押し上げてゆく。

余りの快楽、そして精神的な疲労から、翔鶴は気絶してしまったようで、数十秒に渡る射精が終わるころにはその体はぐったりとしてしまっていた。

「あはっ、気持ちよかったよ♪まぁ、聞いてないみたいだけどね、瑞鶴ちゃんのことは『ボク』は、酷い事しないよ、えへへ♪」

そう言って、翔鶴の顔を一度撫でる指揮官の顔は、無邪気で屈託のない笑顔であったがさながら悪魔が嗤っているように見えた。

二羽の鶴　承

薄暗い、僅かな灯りだけが頼りの執務室地下。通称『建造ドッグ』内部。

長い艶やかな銀髪が特徴的な、一糸まとわぬ姿で男を魅惑する体を惜しげもなく晒している女性が椅子に腰かけている少年に跪くかのようにして屈み、股間に屹立している太い肉竿の亀頭部分を口に咥えて奉仕していた。

くちゅっ、くちゅっ、と大きな先端を口を目いっぱい広げて加えて、賢明に奉仕している彼女の目じりには涙が一つ、好きでもない男の悍ましいソレを咥えているのだ、先程、妹と自らの処女を奪ったソレを。舌を這わせて、先端から溢れたカウパーを舐めとってゆくたびに血と精液、そして自らの蜜が交じり合った汚液が彼女の、翔鶴の口内を汚してゆく。自らの弱みを見せまいと、決して屈服しないという事を訴えるかのように上目で金色の髪が特徴的な一見すると少女のように見える少年を睨むが、涙目であったらその迫力は皆無であろう。

反抗的な目でこちらを見つめて来る翔鶴の姿を見て、にぃ、と少年は口角を吊り上げて彼女の頭を掴んで、喉奥めがけて自らの数多の雌を堕としてきた凶悪なソレを捻じ込んでゆく。一切無遠慮にねじ込まれてきた肉槍の先端が咽頭を思いっきり抉りつけて、余りの苦しさに目じりに浮かんだ涙が頬を伝い零れ落ちる、その涙は冷たいものであった。

口オナホの最奥を抉りつけんばかりに叩いたかと思うと、少年の肉棒がびくびくと痙攣し、粘っこい、スライムのようにドロドロとした特濃の精液が口内を性処理玩具同然に扱われた翔鶴の喉に絡みつき、なんとか粘つくソレを呑み込もうとする彼女の目じりに再び苦痛から涙が浮かぶ。吐き出したいのは山々だが、頭を掴まれてる以上それは不可能であった。

一滴残らず吐き出された子種を何とか飲み干してゆく翔鶴の姿を見下し、少年はにこっ、と屈託のない笑みを浮かべつつ、頭を掴んだまま射精を続ける肉棒を腰を揺さぶり前後させ、喉奥を何度も小突い

てゆく。喉奥にたっぷりと吐き出された精液で呼吸が塞がれそうになり、何とか飲み干してゆくものの、次から次へと吐き出されてゆく粘っこい精液の量に翔鶴は自らの喉がスライムで埋め尽くされてるかのような錯覚を覚えてしまう。
「ごほっ……ごほっ……随分と……女性への扱いが、ごほっ……ごほっ……荒いんですね、指揮官……！」
「あははっ、ごめんごめん、ついさ、翔鶴ちゃんが反抗的な目をしてたからいじわるしたくなっちゃったんだ、でもさぁ、おちんちんに噛みついたりしなかったのは偉いと思うよ？」
「……瑞鶴が、人質に、とられてますからね……！」
「偉い偉い、そうだよ～、瑞鶴ちゃんに『ボク』から、酷い事されたくなかったら、しっかりボクの事を愉しませるんだよ？」
　ごほっ、ごほっ、と口を侵略していた悍ましいソレから解放されて、うずくまり苦しそうに咳き込む翔鶴はその言葉を聞いて悔しそうに唇を噛んだ。この憎い少年の皮を被った悪魔の汚液に塗れた肉棒など誰がわざわざ好き好んで咥えるものか、射抜かんばかりに少年を、メイ少佐を睨みつける翔鶴であったが、体格にも勝っているというのに少年に手を出すことなど出来る筈がない、何故ならば、彼女の愛しい妹はこの悪魔のような指揮官によって処女を奪われた挙句、自分とは別の場所に囚われてしまっているのだから。
　妹の為にも、自らが体を張って、この悪魔の性欲のはけ口になるしかない、反撃の糸口を見つけたいものであるが、今はただ耐えるしか無かった。
　そんな翔鶴の考えを見透かしてか、それともうずくまって咳き込むその姿が滑稽なのか、にこっ、と少年は懐から怪しい薬液が充填された注射器を取り出して、翔鶴にゆっくりと近づいてくる。
　明らかに怪しい注射器を見た瞬間に、さすがの翔鶴も体をびくり、と恐怖で震わせて、思わず後ずさり。
「逃げたらダメだよ？君が逃げちゃったらこのお薬、君の妹に使っちゃうからね？」
「……っ！卑怯者……っ！」

「なんとでも言うと良いさ、でもさぁ、このお薬、翔鶴ちゃんにとっても悪くないお薬だよ？だってさー、情報部が女性工作員の尋問用に作った強力な媚薬らしいし」
「媚薬……っ!?く、薬を使わないと、私の事、堕とせないんですか……臆病者……！」
　その声は上ずっていた、明らかに強がりで発せられたその言葉を聞いて、ふふ、と微笑ましそうにメイは笑みを浮かべた後に何の躊躇もなく翔鶴の細い首に注射器の針を突き刺して薬液を、特別な訓練を受けた女諜報員すらアヘ顔を晒す肉オナホに容易に堕とすことができる強力な媚薬を注射してゆく。
　針が己の体に突き立てられた瞬間に、びくりっ、と翔鶴の体は強張るが、体の中に薬液が注ぎ込まれてゆくとすぐに媚薬の効果が出てきたのか、白い肌に朱が差し、はぁ、はぁ、と、先程精液が注ぎ込まれた口からは熱っぽい吐息が漏れてしまう。
　体が熱くて仕方ない、女として一番大切な部分から、子宮が燃え上がるかのように熱くなり、その熱が体全体に広がってゆき、彼女の身を焦がしてゆく。媚薬を打たれた後の子宮は、さながら雄の精液を求めるかのように強く脈打ち、自然と膣奥から愛液が溢れて、雌のしなやかな太ももを濡らしてしまっていた。
　快楽が欲しくて仕方ない、目の前の悪魔の視線が無ければ自ら己の体を慰めようとしてしまっていただろう。
　太ももの内側擦り合わせて、今にも自らの目の前で快楽を得るために自慰してしまいそうな雌の姿を見つつ、メイは傍の棚に置かれたハンディカメラを発情した女体に向けて。
「ねぇねぇ、気持ちよくなりたいでしょ？いいよ、オナニーして、今からその光景、ビデオカメラで撮らせて貰うけど」
「……っ」
「恥ずかしがらなくていいよ？というか、カメラの前でオナニーしちゃわないなら、君の妹に同じような事させるだけだし、妹の為にも、一肌脱がないとね？」
「……わかり、ましたっ……！」

精一杯、力強く、射抜くかのようにカメラとメイを睨んだつもりであったが、頬が赤らみ、目は潤んでしまっているその姿は雄の加虐心をくすぐるだけにしかならないだろう。

薄汚れた床にM字開脚の姿勢で大きく股を開いて、カメラに秘所を見せつけるかのようにしながら、己の火照った体を慰めるべく、愛液が滴る、先程メイの肉棒を受け入れて処女を奪われたばかりの割れ目に細い細い人指し指をあてがい、ぬぷぬぷと音を立てて膣穴に指先を埋めてゆき、くちゅくちゅ、と己の膣穴をかき混ぜるかのように敏感な場所を自らで刺激していこうとする。

媚薬ですっかり昂り、発情してしまった身体は自らの指でかき混ぜるだけでも雌に耐えがたい快楽をもたらし、すぐに昂った体は絶頂へと押し上げられてしまいそうになる。

カメラで撮影されてしまっているのも、今の雌にとっては快楽を得るためのスパイスでしかなく、愛液を周囲に飛び散らせながら快楽を貪るその姿は浅ましいものであった。

しかしながらも、体とは裏腹に、翔鶴の心は未だに折られては無かった、これも妹の為、と自らに言い聞かせ、この悪魔が隙を見せるその時までは耐え忍ぼうと、せめて声は出すまいと唇を噛んで必死に己の体を慰めようとしていた。

だが、そのささやかな抵抗も悪魔に打ち砕かれてしまうことになった。

「ね、ね、声を我慢してる所悪いけどさ、我慢はしちゃだめだよ？それと、イくときはしっかりイくって宣言してね、えへへ♪」

「……っ……っ……このっ、悪魔ぁっ……！」

「ふふ♪褒め言葉だよ♪」

「あっ、あっ♪っ♪ふわっ、あっ、ぁぁ♪いっ、イくぅ♪イっちゃうぅぅぅぅぅぅぅ♪」

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぬぷっ、ぬぷっ、淫らな水音と嬌声のハーモニーを奏でてしまいながら、膣穴をかき混ぜるその動きが激しくなってゆき、M字開脚という屈辱的な体勢で自慰を強制させられている雌の体が一層激しく跳ねて、びくっ、びくっ、と体全体を震わせ絶頂に

達したその姿を少年は手に持ったビデオカメラに収めて、にこり、と満面の笑みを浮かべて。
「えへへ♪ビデオカメラで撮影されちゃってたのに派手にイっちゃったねぇ♪」
「はぁ♪……はぁ♪っ……!こ、心までは、絶対に貴方には屈しませんから……!」
「いいねぇ、その折れない心、じゃあ、君の妹の為にも、ボクのことも一っと気持ちよくして貰おうかな♪ね、そのままの姿勢でおまんこを指で拡げて、ボクにおねだりしてみて」
　屈辱的な要求であった、しかしながらも、これも妹の為、と己に言い聞かせて、M字開脚の姿勢のまま指先を自らの小陰唇に持って行き、目いっぱい拡げて己の愛液が滴る雄の肉槍を今か今かと待ち受けている浅ましい雌穴を見せつける。くぱぁ、と目の前にいる少年と、ビデオカメラの前に晒された雌の膣穴は、さすがは艦船の頑丈さと回復力と言った所か。太すぎる肉槍に貫かれてしまったというのに緩んだ様子はなく、指で拡げられてしまって最奥まで露にさせられてしまっており、外気が触れた子宮口はひくひく、とひくついて雄の劣情を煽る。
「し、指揮官の、ふっとい、おちんちんで、私の淫乱まんこを、かき混ぜて、ください……!」
「しっかりおねだりできて偉いぞぉ♪それじゃあ、行くね、翔鶴ちゃんのぉ、お姉ちゃんの風上にもおけない淫乱おまんこ、ボクのおちんちんでかき混ぜてあげるからね♪ね、ありがとうございます、は？」
「ありがとう……ございい……ますぅ……!」
　片手でカメラを持って、翔鶴の羞恥か、はたまた興奮か、あるいは両方か。真っ赤になったその顔を撮影しながら近づき、先ほどまで翔鶴に咥えさせて掃除させた太い太い、逞しい肉槍の先端をくぱぁ、と露にさせられた秘所の入り口に押し当て、全体重を込めて腰を前へと一気に突き出してゆく。勢いよく突き出された熱い肉槍が精液を求めるかのように鼓動する子をなすための雌として一番大切な場所の入り口を叩きつけた瞬間に、雌のしなやかな体が跳ねて周囲に潮まで

飛び散らせてしまいながらその一突きだけで絶頂へと押し上げられてしまった。
　雌として一番大切を抉りつけられる下半身から稲妻のように脊椎を駆けあがって脳天を揺さぶる強烈すぎる快楽に翔鶴は声にならない悲鳴を漏らすばかり。子宮口を抉りつけていた肉棒がピストンされ、掘削するかのように膣粘膜をごりごりと擦られてしまいながら過敏なポルチオを抉りつけた瞬間に再びその体が跳ねて、肉棒が叩きつけられた結合部からは本気汁が周囲に飛び散り、先程翔鶴がぶちまけた潮と合わさり床に淫らな水溜りを作り出してしまう。
　これも妹の為、と己に言い聞かせながらも、翔鶴は貪欲に己の体に与えられる快楽を離すまいと少佐の細い腰に足を回してがっちりとホールドし、己の体に種付けをねだるかのようにきゅっ、きゅっ、と肉洞を穿る熱い肉杭にうねうねと蠢く肉襞を絡ませ、子宮口を突き上げた瞬間に一層強く、ぎりぎりと食いちぎらんばかりに膣口を締めて精液を自然と欲してしまう。
　雄の為に存在してるかのような淫らな肉オナホとしての素質は媚薬によって開花させられてしまったものなのだろうか。突き入れられてゆく凶悪な男根をその体で受け止めてゆきながら、あくまで心は屈すまいとしている雌の意志に反してその体は与えられてゆく快楽によって昂り、心も与えられてゆく快楽によって蕩けてしまいそうになっていた。
「ね、ね、翔鶴ちゃんの敏感な場所ってここでしょ？ふふ、ボクには分かるよ、翔鶴ちゃんの敏感な場所、ね、アクメしちゃいなよ♪いいよ、翔鶴ちゃんのアクメする無様な所、ビデオで撮っといてあげるからアクメして♪」
「いやっ、いやぁぁぁぁ♪いやなのにぃっ、こんな奴にイかされたくないぃぃぃ！いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁっ！イクっ、イクぅぅぅぅぅぅ♪」
「凄いイきっぷりだねぇ♪さっきからイきっぱなしじゃない？媚薬のせいもあるかもしれないけど～、こんなにイき狂えるなんて翔鶴ちゃん元から淫乱だったとしか思えないよ？」

腰を後ろに引いて、肉棒を強烈な締め付けで雄から種を絞ろうとして来る淫らな膣口付近まで戻した後にカメラを握ってない方の手で腰を前後するたびに雄を誘うかのように揺れ動く大きく実った美巨乳を鷲掴みにして、ぎりぎりとたわわな果実を卑猥に歪ませてやりながら上側に角度をつけて一気に腰を前へと突き出してゆき媚薬と度重なる絶頂によって限界まで過敏になってしまっているGスポットを思いっきり、翔鶴の体が揺れてしまうほどに抉りつける。

突き上げられたその瞬間に一瞬だけ意識が飛んでしまったようで目を白黒させてしまって舌を突き出してしまいながら体を一層強くぴーんっ、と跳ねさせたかと思うと、ぷしゃっ、と結合部から潮を飛び散らせてしまっている翔鶴の体を法悦の極みに叩き落そうとするかのように、角度を修正して腰を更に前へと突き出し子宮の入り口をこじ開けんばかりに思いっきり抉りつけてやる、すると意識が強制的に覚醒させられてしまったようでイクっ、イクっ、と一層強く叫び、思わず目の前に存在している悪魔をぎゅっ、と強く抱きしめてしまう。

「あははっ♪気持ちよくなってくれたようで嬉しいよ、そろそろ中に出してあげるからね、しっかり受け止めてね♪」

「あぁぁぁぁっ、今、中に、出されたらぁぁぁぁ♪いやっ、またイっちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅ♪」

「良いよ、気持ちよくなって、もう、何も考えられなくなっちゃうぐらい凄いアクメ……ね♪」

子宮の入り口をこじ開けんばかりに、いや、度重なる刺激と発情しきってしまったその体は一層強く子宮口を突き上げられた瞬間に男根を子宮内に受け入れようとするかのように柔軟に口を開き、子宮の奥の壁を、雌として一番大切な場所の最奥さえも雄の象徴によって踏みにじられ、蹂躙されてしまう。

生命のゆりかごの最奥を肉槍の先端で思いっきり抉りつけられた瞬間に、意識がまた飛んでしまったようで舌をだらしなく突き出してしまいながら度重なる刺激によって緩んでしまった尿道からちょろちょろとだらしなく尿まで漏らしてしまっていた。尿が自らの体にかけられるのを気にも留めずにぐりぐりと子宮の奥の壁を押し上げ

たまま肉棒に溜まった特濃の精液を腰を震わせて音を立てて子宮内に直接子種をぶちまけてゆく。
待ち望んだ雄の種を子宮内に直接注ぎ込まれる雌として最上の快楽を味わうことになった翔鶴は子宮壁を子種が叩くたびに体をびくっ、びくっ、と跳ねさせ、絶頂を繰り返し、意識を引き戻されるたびに再び絶頂へと突き上げられて気絶するの地獄と天国を一度に味わう事になり、だらしないアへ顔まで晒してしまいながら己の体に行われてゆく種付けの快楽を享受してしまっていた。
「あはっ、凄い顔♪今の翔鶴ちゃんのお顔、妹に見せてあげたいなぁ♪」
「っ♪おっ、ぁっ♪っ、ぁっぁ♪」
「って、聞こえてないか、まぁいいや♪このままボクのおちんちんの味をしっかりその体に教えてあげるからね♪ボクのおちんちんじゃないと満足にアクメ出来ないボク専用の肉便器にしてあげるんだから♪」
すっかり体力を消耗しつくした翔鶴に容赦ない追撃が加えられてゆく、地下室に獣のような雌の喘ぎ声が響いた。

一方そのころ、衛兵詰め所の地下室。
最早恒例となった指揮官からの『差し入れ』に地下室に集まった衛兵たちの視線が突き刺さる。
埃が溜まった床に設置された安楽椅子には股を大きく広げさせられ、拘束させられてしまっているせいで秘所を雄たちの目の前に曝け出すような格好にさせられてしまいながら肘掛けの所に両手を括り付けられて抵抗する力を完全に奪い取られたこれから雄たちの餌食となる哀れな雌が一匹。
目を覆い隠すかのようにアイマスクが装着させられており、口にはギャグボールも付けられて言葉も発することも目で何かを見る事も叶わない。と言っても、彼女の意識は既に夢の中であるため余り意味はないかもしれないが。

首からは可愛らしい文体で『肉オナホ、自由に使ってね♪』と書かれたプラカードが下げられており、小陰唇は特殊なテープによって拡げられ、膣穴の最奥に存在する子宮口まで外気に晒されてしまっている、その光景を見て、耐えきれる雄など居るだろうか、いや居る筈がない。

我先にと『差し入れ』された雌に群がり、その体を使おうとしてゆく。　が、それを手で制して、一歩前へと踏み出たのは年を食ったガタイの良い男性であった。一番槍は衛兵隊のまとめ役である隊長、お預けを食らう事になった部下たちは隊長を羨ましそうに見るが、彼が一番最初に『差し入れ』を堪能するのは何時もの事なので文句を言いながらも渋々引き下がる。

自らの上司である指揮官に感謝の言葉を述べて、ズボンを下ろして血管が浮かび上がる逞しい肉槍を露にさせたガタイの良い隊長は正面から肉便器に覆いかぶさり、その肉槍を力任せにねじ込んでゆく。先ほど、指揮官自らの肉棒から吐き出された子種汁によって潤滑を得た淫らな肉オナホの膣穴は突き入れられてゆく肉棒を柔軟に受け止めてゆき、意識が無いというのにその体は無意識に子種汁を求めようとするかのようにうねうねと蠢く膣壁で肉棒を締め付けてゆく。

「あの小さな指揮官には、感謝しても、しきれん……なっ……！」

「隊長、後がつっかえてるんで早くしてくださいよ」「そうですよ、何時も隊長長いんですから！」「俺たちにも早くその女抱かせてくださいよ！」

「分かっておるわ、っと、この肉オナホ凄い吸い付きだな……俺のチンポを咥えて離さないぞ……！」

大きく実った果実を両手で容赦なく鷲掴みにして、この肉オナホの正体など全く気にすることはなく、己の性欲をぶつけようとぱんっ、ぱんっ、とただ快楽を貪るためだけの激しい獣のような腰遣いで肉棒を前後させてやって、子宮の入り口を叩きつけていきながら、ぐりぐりと肉棒で子宮口を押し上げたまま肉棒に装填された熱い熱い粘っこい子種汁を腰を震わせて音を立てて吐き出してゆき、肉オナホの子宮内を真っ白に染めてゆく。

この肉オナホの膣穴の具合は今まで『差し入れ』された雌たちと勝るとも劣らないほどのもので、熱い蜜壺に肉槍を捻じ込んでやれば肉襞が纏わりついて子種汁を絞ろうと竿の部分に嘗め回すかのように絡んできて、最奥を抉りつけてやると、子種を絞ってやろうと膣口がきゅっ、と締まり、後ろに腰を引いて肉棒を戻そうとするとチンポを離すまいと柔肉全体を絡ませて離すまいと入り口が一層強く締まってくる。

その余りの具合の良さに衛兵の隊長格の男性は容易く絶頂へと押し上げられ、かくかくと腰を揺さぶって肉棒に装填された子種汁を一滴残らず注ぎ込んで竿を引き抜いてやった後に、むっちりとした柔らかそうな太ももに犯した回数を数えるために一本線を書き足してやって、順番待ちの列の最後尾に回る。

一回犯しただけでは全く飽きない極上の、正しく肉オナホになるために生まれてきたとしか思えない体は雄たちの性欲が暫くぶつけられ続ける事になった。

翔鶴が守ろうとした瑞鶴であったが、姉どころか妹自身も知らないうちに男性経験の数が二桁ほど増えてしまう事だろう。

やっと、新しく衛兵隊所属となった新米に順番が回ってくる頃には先輩たちに犯しぬかれてしまったせいで肉オナホの体はすっかり白濁に染め上げられてしまっており、くぱぁ、とテープによって拡げられてしまっている陰唇からは大量に注ぎ込まれてしまったせいでダマになった精液がごぽっ、ごぽっ、と音を立てて垂れ落ちてゆき、薄汚れた床に水溜りを作ってしまっていた。雌にとっては幸か不幸か、その意識は未だに堕ちたままであり、数多の雄たちの食い物にされたことについてこれから先知る事はないだろう。

太ももに五つほど存在する完成した正の字と、四本の線から察するに二十九回も雄たちの精液を膣穴で受け止め続けたようだ、形の整った美巨乳や、揉み心地が良さそうな太ももには数えきれないほどの手形が刻み込まれておりどれほど激しい陵辱が行われたのか物語って

いる事だろう。
大きく口を開けさせられてしまっている、つい先日までは生娘であったことが想像も出来ないほど拡げられてしまった入り口からは精液と共に、雄に犯され続けてしまう事によって体が淫らに変質してしまったのか、はたまた何度も犯されてしまったことによって淫乱としての本性が暴かれたのか白濁した本気汁が交じり合ったものが零れ落ちてゆき、雄の劣情を煽ってゆく。
前の穴の具合がよかったせいで、後ろの穴の窄みは綺麗に閉じたままであり、新米の衛兵は、先程門番を警備していた勤務態度がお世辞にも真面目とは言えない不真面目な衛兵は、先輩方から貰ったローションを肉槍に塗りたくり、綺麗に閉じられたアヌスの入り口に押し当てて、ゆっくり、ゆっくりと腰を前へと突き出してゆき、綺麗に閉じていた後ろの穴の窄みを無残にこじ開け、奥へ奥へとその肉棒を根元まで埋めようとしてゆく。
新米の衛兵は、この肉オナホの正体に薄々感づいていたが、その事は口には出さなかった。己の性欲には勝てなかったのである。
肉オナホの、瑞鶴の菊門の具合は見事なもので、さすがは艦船と言った所だろうか、突き入れられてゆく肉槍を柔軟に腸壁の形を変えて受け止めてゆき、根元まで埋められ、前後に揺さぶられてゆく肉棒から精液を絞ろうと、前の穴に比べて襞が少ない分締まりの良いアヌスで雄の種を搾り取ろうとする。
余りの具合の良さに、あまり女性経験の多い方で無かった雄は数擦りで腰を震わせて肉棒から子種を吐き出してしまい、瑞鶴のアヌスを白く染め上げ、射精の快楽に頭が真っ白になってしまいそうになる錯覚を覚えてしまいながら懸命に腰を揺さぶり、肉棒に溜まった種を一滴残らず注ぎ込んでやった後に、太ももに一本線を書き足して完成しかけであった正の字を完成させ、半分腰砕けになってしまいながらアヌスから肉槍を引き抜こうとするが、ぎりぎりと食いちぎらんばかりに引き抜かれようとする肉竿に腸壁が纏わりついて刺激してゆき、過敏になった肉棒を刺激されて容易く絶頂へと押し上げられてしまって再び射精。

なんとか肉棒を引き抜くころには腰が砕けてしまっており、先輩たちの手によって寝室まで連れて行ってもらったのはまた別の話。

瑞鶴への輪姦が終わるころに、やっと翔鶴も拷問のような激しすぎる快楽から解放されることになった、が。
「あっ、あへっ♪あっ、ぁぁっ♪ひっ、ぅぅぅ♪」
「気持ち良すぎて馬鹿になっちゃったかなぁ？おちんちんが無くなった後も自分で気持ちよくなろうとしちゃうなんて本当に変態さんだねぇ♪」
「違うぅ♪これはぁ、薬のせいでぇ♪あっ、ぁぁっ、また、またイっちゃぅぅぅぅ♪」
床に作られた白濁の海に横たわりながら、すっかりメイの肉棒の形に拡がってしまった自分の膣口にしなやかな指を突っ込んでかき混ぜてなおも快楽を貪ろうとしている雌が一人。
すっかり顔は度重なる激しい絶頂によってアヘ顔を晒してしまっており、膣口を弄るたびに本気汁と精液が混じありったものを飛び散らせてしまいながら無様に絶頂を繰り返し続けてしまっていた。
メイ少佐はぽりぽりと後頭部をかきつつ、そろそろ薬の効果は切れてる筈なんだけどなぁ、と心の中で呟き、すっかり淫乱に堕ちた雌の方を見て、にこり、と笑みを浮かべて。
「でも、ご主人様の許可なしに勝手にイっちゃってる翔鶴ちゃんにはオシオキしてあげないとねぇ♪」
「オシオキ……♪オシオキぃ♪あぅっこ、これも、瑞鶴を、守るため……だからぁ……オシオキ……してぇ♪」
自分が淫乱であったという、突きつけられた無慈悲な現実から逃れようとするかのように、妹を守るためだと自分に言い聞かせて縋るかのように腰に抱き着いてきた雌を撫でてやりながら、メイは優しくその体を抱き起してやって、部屋に設置された分娩台のような股を拡げさせたまま拘束する淫らな椅子に翔鶴を座らせ、股を開かせたまま足を拘束し、その首筋に懐から取り出した注射器を突き刺して、太もも

に快楽を求めるかのように蜜を垂れ流す膣穴にバイブを突き立て、ビンビンに勃起してしまっているクリトリスを挟み込むかのようにローターをテープを使って取り付けてやりつつ、その頭にヘッドギアのようなものを取りつけて、ビデオカメラのデータが入ったＳＤカードを挿入口に挿入してやると。

『いやっ、いやぁぁぁぁ♪いやなのにぃっ、こんな奴にイかされたくないぃぃぃ！いやっ、いやぁぁぁぁぁぁぁっ！イクっ、イクぅぅぅぅぅぅ♪』

「あぅぁっ♪これぇ♪私ぃ？ぁっ、ぁぁぁ♪」

「あははっ、凄いでしょ、これ♪君の痴態を見る事が出来るんだよぉ、周囲の音も自分の出したえっちな音にかき消されて聞こえずに、視界も自分のえっちな姿で奪われちゃうんだ、どんな気分かな♪」

ま、この言葉も聞こえないんだろうね、と呟きつつ、くすりと微笑む。

翔鶴の方はと言うと、己の痴態を見せつけられて羞恥で体が熱くなるのを感じる事だろうが、己の膣穴に突き立てられたバイブが唸り、膣壁を擦る強烈な刺激に再び絶頂へと押し上げられてしまいそうになることだろう、が。

「あぅっ、なんでっ、なんでイけないのぉぉぉ♪あっ、ぁぁぁ♪イかせてぇぇぇ♪」

「あははっ♪凄いでしょ、この薬♪寸止めされたままイけなくなっちゃうんだよ♪」

イかせて、イかせて、と叫ぶ翔鶴にくるり、と後ろを向き、くすくすと笑みを浮かべてその場からメイ少佐は離れてゆく。

姉の方は、後少しで堕ちるだろう、後は、妹を堕とすだけだ。

二羽の鶴　転

瞼が重い、意識が朦朧とする。
股の辺りから感じる鈍痛に顔をしかめる。重い重い瞼を開いて周囲を見回そうとする。
朧げな視界の中、見える周囲の景色は薄暗い。コンクリートで囲まれた灰色の壁から察するにここが地下室のような場所であるという事は少し見ただけである程度推測することは出来た。
はて、地下室、どうして、自分はどうしてこんな場所に居るんだろうか。動きの鈍い脳を必死に回転させ過去の事を思い出そうとする。
自らの姉である翔鶴と、新しく配属されることになった基地までやってきて、その後、指揮官が淹れてくれた紅茶を飲んで、後は……。
紅茶を飲んだ後からの記憶が途切れている。一体どうして？
不安になり、自分の体を動かそうとすると、かちゃかちゃと両手に手錠でも付けられているのか、鉄が擦れるような音が響くばかりで体を動かすことが出来ない。
くちゅん、と寒気を感じてくしゃみを一つした後に、自分の体の方に視線を移すと、一糸まとわぬ裸体を外気に晒していた。
股を大きく開かせるような形で、全裸で分娩台のような場所に拘束されてしまっている。そこまで今の自分の現在の状況に気が付いた時に、瑞鶴の顔から血の気が一気に引いてゆく。
「なんなのよ……これぇ……翔鶴姉、どこぉ……？」
「あ、やっと目が覚めたんだね～、おはようおはよう」
「しっ、指揮官!?出来れば、この拘束外して欲しいんだけど！」
「あ、ごめんそれ無理、だって君が抵抗できないようにわざわざ縛ったんだし～」
その言葉を聞いて、未だに理解が及ばないのか唖然としている茶髪の美少女を見つめながらくすくす、と楽しそうに笑みを浮かべる。分娩台に拘束されて、むっちりとした肉付きの良い太ももに革で作られたベルトを食いこまされてしまって大きく股が開かされて、本人も知らない間にすでに数十回は犯されてしまったせいでくぱぁ、と雄を誘

うかのように大きく口を開けてしまっている膣穴に、細い人指し指と中指を無造作に挿入し、先ほど注ぎ込まれた衛兵の精液の残滓と膣奥から溢れ出た蜜が交じり合ったものをぐちゅぐちゅとあえて雌にも聞こえるように音を響かせるかのようにしてかき混ぜてやりつつ、すっかり淫らに開拓されてしまった雌穴の性感帯を指先で押し上げてやると、軽く達してしまったのか豊満な体がびくんっ、びくんっ、と震え、口の端から無様に涎が溢れてしまう。
「ふわぁっ、やぁっ、ちょっ、やめぇっ♪」
「おまんこの方は大分解れてるみたいだねぇ♪ね、ね、君が知らない間にさ、君の男性経験の数凄い事になってるんだよ～、ま、意識がなかったから、君は自分に何されたのか知らないだろうけどね」
「ひぃっ、いやっ、いやぁ♪そ、そんなの嘘よぉ……」
　自らの膣穴を指先でかき混ぜている少年から驚愕の真実を突き付けられて、ひぃ、と怯えたかのような声を漏らし、その整った美しい顔を恐怖で歪めている雌を追い詰めてやるべく、手首を前後に揺さぶり、細い指先でその膣穴をかき混ぜてゆく。強制的に雄の味を覚えこまされてしまった瑞鶴の雌穴は敏感な場所がメイの指先で擦られるたびに素直に反応を示し、雌の口からは嬌声が漏れてしまう。
　指先で膣穴をかき混ぜてゆきつつ、空いてるもう片方の手でズボンをずらし、瑞鶴が意識を失っている間に処女を奪った二十センチ以上はあるだろう悪魔のような肉槍を露にさせて、膣穴をかき混ぜられる快楽に喘いでいる少女の先程貫通させられてしまったというのに綺麗に入り口が閉じられているアヌスの窄みに熱い肉杭の先端をぐりぐり、と押し当てて、予想もしてなかった場所に異物を押し当てられてひっ、と小さく悲鳴をあげた雌の事などお構いなしに腰を一気に前へと突き出してゆき、菊門を容赦なくこじ開けて太い太い凶悪な肉杭を根元まで捻じ込んでいこうとする
「あぐっ、やめっ、ひぃっ、痛いっ、痛いからぁっ！やめてぇぇぇぇぇぇっ！」
「えへへ、そんな事言う割にはさ、お尻の締まり凄くて物凄く気持ちいいよ？それにさぁ、さっき犯されてる間に、お尻の処女も喪失し

ちゃったみたいだし、今更じゃないかな？」
「っ……！私の事を何だと思ってるのよぉ、絶対に許さないんだからぁ！」
「あははっ、肉便器に決まってるじゃん。それに、涙目で睨まれても全然迫力なんてないよぉ？あはっ、瑞鶴ちゃんのお尻ぃ、締まりがきつくて気持ちいいねぇ♪」
奥へ奥へと埋められてゆく異物が腸壁を擦るたびに、刺激から反射的にびくっ、びくっ、と震える正の字が幾つも書かれたむっちりとした肉付きの良い太ももに細い指先を食いこませて、その太股の感触を堪能してゆきつつ、肉槍が半分ほどまで菊門オナホに埋められたら、一気に腰を前へと突き出してゆき、残りの半分を勢いよく最奥めがけて突き入れる。メイの逞しい雌を犯すために存在しているソレを根元までねじ込まれて、衛兵の肉槍では責められなかった深い場所を力任せに、思いっきり突き上げられると、苦痛と快楽が交じり合ったかのような刺激が瑞鶴に襲い掛かり、大きく実ったたわわな果実を派手に揺らしてしまいながら悲鳴を漏らしてしまう。
悲鳴を漏らしてしまいながらも、自らの体を弄ぶ少年の皮を被った悪魔を睨みつける瑞鶴であったが、悪魔の言う通りその目じりには涙が浮かんでおり、睨みつけても迫力と言うものが存在しない事だろう、メイが腰を揺さぶり、肉棒が前後へと揺さぶられてゆくと、エラが張ったカリ首の部分が腸壁を擦り、刺激し、極太の肉杭を捻じ込まれている雌はそのたびに苦しそうに声を漏らすものの、柔軟で、それでいて子種汁を搾り取るのに特化した締まりの良い第二の性器は、少しずつメイの肉棒の形に拡げられ、作り変えられてゆき、哀れな雌便器の口から漏れる声が少しずつ艶のあるものに変化してゆく。
アヌスを穿られるたびに与えられてゆく、苦痛と快楽混じりの、今は快楽の割合の方が強いその刺激によって溢れてしまいそうになる声を抑えようと、必死に歯を食いしばって耐えようとするものの、痛みならともかく、アナルを穿られて与えられる快楽に耐える方法を知る筈もなく、熟練の調教師であるメイによって弄ばれ、翻弄されてしまって、たまらず悲鳴のような嬌声を漏らしてしまう。

「あぅっ♪やめっ、お尻ぃっ、いじめないでぇぇ♪」
「ん～、いやだよ♪お尻の穴にぃ、今からせーし注ぎ込んであげるからね♪しっかり受け止めてよね♪」
「いやっ、いやぁぁ♪離れてっ、離れてよぉぉぉぉ♪」
拘束されている己の体を必死によじり菊門に与えられるその刺激から逃れようとする瑞鶴であったが、体をよじるたびに大きく揺れ動くたわわな果実を鷲掴みにされて指先を食いこまされると軽く絶頂してしまったようで膣に埋められたメイの指先をぎりぎりと食いちぎらんばかりに締め付けてしまいながら白濁した本気汁が指先に絡みついてゆく。
ラストスパートをかけるかのように激しく腰を揺さぶり始めるとそれに合わせて拘束された瑞鶴の豊満な体も揺さぶられてゆき、絶頂へと押し上げられてしまって過敏になった体に与えられる刺激に耐えられるはずもなく、一層強くメイの腰が後ろに引かれて肉槍の先端が一気に叩きつけられるかのように埋められて最奥を抉りつけると、その体は高みへと強制的に突き上げられてしまって、離れてと言いながらも菊門の入り口で肉棒の根元を強烈に締め付けて離さないようにしながら射精をねだってしまう。
射精をねだるかのように締め付けて来るアヌスに肉欲のままに子種汁をぶちまけてゆきつつ、ふふ、とメイは微笑み、絶頂へと押し上げられてしまって蕩けた顔を晒してしまってる瑞鶴の頬をぺろり、と舐めて、かくかくと腰を揺さぶり肉棒に溜まった子種を一滴残らず注ぎ込んでやった後に肉棒を引き抜いてやり、柔らかそうなマシュマロ乳を掴んでいた手を名残惜しそうに放す。
引き抜かれると共に、驚愕の真実を突き付けられて、更にはアヌスを滅茶苦茶に犯されて気力と体力を消耗しきってしまった瑞鶴は、はぁ、はぁ、と荒い呼吸を繰り返しながら、潤んだ瞳でメイの事を見つめる。そして、震えた声で必死に懇願の声を絞り出した。
「……もう、もうやめてよぉ……こ、これ以上されちゃったら、私、おかしくなっちゃうからぁ……」
「何言ってるのさ、これからが本番だよ？ね、ね、君のお姉さん、どう

なったのか知りたいでしょ？」
「っ……しょ、翔鶴姉にもひどい事してるんだったら、本当に許さないんだから……！」
「ひどい事？ああ、うん、沢山したよ～♪君の事を守るんだって、必死になってボクのおちんちんしゃぶったりおまんこで気持ちよくしようとしてたよ？」
「……っ！殺してやる……っ」
「そんな顔しないでよ♪今から会わせてあげるから、ね♪」
　死にかけていた瑞鶴の目に鋭い光が宿る、殺意という名の冷たい炎を宿した目で射抜くかのようにメイを見つめるものの、その反応を予想していたのかメイは肩を一つ竦めて、減らず口を叩く雌の口にギャグボールを装着。そして離れて地下室のドアを開いてどこかへと向かった。
　メイの居ないうちに何とか抜け出そうと自らの姉を傷つけた者への怒りから気力を奮い立たせて拘束から逃れようともがくが、逃れることは出来ない。
　ぎりっ、と奥歯を噛む。姉を守ると誓ったのになんたる様だ。
　暫くすると、ドアが開いて、二人分の足音が聞こえてくる。怒りの炎が宿った目を足音が聞こえてくる方向に向けて睨みつけようとするが、その光景を見て瑞鶴の無理矢理奮い立たせた気力が一気に消し飛びそうになってしまった。
「ね、ね、感動の再会嬉しいでしょう～？」
「あっ、あぅ……イかせてぇ……♪イかせてぇ♪」
「……んぅっ、んぅぅぅ～！」
「うん、今からイかせてあげるね♪ね、これなんだと思う？双頭バイブって言ってね、自分も気持ちよくなりながら相手も気持ちよくさせることができるおもちゃを使ってあげるから、それ使って相手の事も気持ちよくさせてあげるんだよ？」
「これも、瑞鶴を守るため……なら、しますぅ♪」
「うんうん、これも君の妹を守るためだからね、頑張るんだよ♪」
　目隠しさせられて、手を後ろにして手錠で拘束され、全裸姿に首輪

とリードによって引きずられるかのようにして連れてこられた自らの姉の姿。その姿を見て思考が一瞬だけ完全に停止してしまった。
クスリによって絶頂へと至る事を妨げられて絶頂へと至れないままずっと寸止めされ続けてしまった翔鶴の理性は既に崩壊寸前であった。イかせてと懇願し続ける彼女の姿からは以前のような気品溢れる姿は想像できない。
弾力性のある極太の双頭バイブを翔鶴のこれからされることに期待しているのか蜜を垂らし続ける淫乱マンコにねじ込んでやると更なる快楽を求めるかのようにその豊満な体をくねらせて下品に雄を誘ってしまう。
そして、そのままメイは翔鶴の後ろに回り込んで、膣穴にねじ込まれたバイブが蠢くたびにひくひくと綺麗に閉じた入り口を震わせている菊門に先ほどまで翔鶴が守ろうとしていた大切な人を蹂躙していた肉槍を入り口を押し当てたと思うと、腰を一気に前へと突き出してゆく。それと同時に綺麗に閉じられていたアヌスの入り口がぎちぎちと痛々しい音を響かせて奥へ奥へと肉棒が埋められてゆき、それと共にびくぅっ、と翔鶴の体が刺激に跳ねてしまう。
アナル処女を喪失してしまったというのに、目隠しされた翔鶴の口元は笑っているように見えることだろう、マゾ淫乱雌豚に調教されてしまった今の翔鶴にとっては菊門に与えられる苦痛すらも快楽でしかない。両穴を穿られて快楽に喘いでいるあまりにも痛々しい姉の姿を見て瑞鶴は己の弱さを悔やむことだろう、しかしながらも悔やんだところでもう遅い。
アナルを穿られながら前へと押し出されて、膣穴にねじ込まれた双頭バイブのもう片方の先端部を瑞鶴の愛液が止めどなく溢れる割れ目に押し当てられたかと思うと、メイの腰が一層強く前へと突き出されそれと同時に両穴を犯されてる哀れな雌の腰も突き出されてゆく。
ギャグボールの端からくぐもった声が溢れ出る。膣穴に一気に押し込まれた双頭バイブの先端が壁を擦りつけてゆくたびに瑞鶴の目から涙が零れ落ちてゆく。妹の子宮の入り口をゴム質のソレが押し上げたと思うと姉も同じく子宮口を押し上げられたのか与えられる

快楽によってあんっ、と艶っぽい声を漏らして喘ぐ。菊門に埋められた肉棒が前後に揺さぶられてゆくと翔鶴の腰も釣られて動き、それによって膣穴を穿られてる瑞鶴はギャグボールの端から涎を垂らして与えられる甘美な刺激に喘いでゆく。菊門を貫いているメイはまるで姉妹を二人同時に犯しているかのような錯覚を覚え気をよくして姉の安産型の桃尻めがけて腕を振り上げて振り下ろし、尻肉に小さな手形を刻み込んでゆく。

瑞鶴を妹と知らずに犯しつつ、菊門を貪られてる雌はアヌスの最奥を抉りつけられてしまいながら桃尻を叩かれるたびにイくことができないもどかしさからこう叫んだ。

「イかせてぇ♪おかしくなっちゃうぅぅぅぅぅぅぅ♪」

「あはっ、良いよ♪イかせてあげるね♪妹のおまんこを犯しながら、お尻も犯されちゃって喘いでる淫乱さんにご褒美あげないと、ね♪」

「んっ、んっ、んぅ♪んっ、んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♪」

懐から取り出した注射器の先端を姉の首筋に突き立てた瞬間に、散々焦らされていたその体は一気に絶頂へと押し上げられてしまう。菊門を犯しているご主人様が妹と言ったはずであるが、その言葉を気にする余裕は今の翔鶴には無かった。菊門の最奥を抉りつけられた瞬間に失神してしまいそうなほど強烈な絶頂へと押し上げられる。膣穴に埋められたバイブをきゅぅぅぅぅ、と強烈に締め付けてしまいながら腰が前へと突き出されてしまって翔鶴の子宮口をこじ開けんばかりにバイブの先端が押し付けられるとともに瑞鶴にも同じ分だけの強烈な刺激が与えられてゆき、瑞鶴の豊満な体も絶頂へと突き上げられて口を塞がれている妹は目を白黒させてしまいながらバイブが突き立てられた結合部から潮を派手に吹いてしまって、イってしまった事を陵辱者に教えてしまっていた。

そして、一層強く腰が前へと突き出されて、アヌスの最奥を抉りつけられてしまいながら子種汁が吐き出されてゆくと、翔鶴の体も高みへと強制的に押し上げられて一際強い絶頂へと押し上げられて妹と同じように潮まで吹いてしまいながら瑞鶴の方に倒れこむかのように上体を押し付けてしまう。瑞鶴の胸と翔鶴の胸が押し付けられて

卑猥に歪んでしまう。
ぐったりとしてる翔鶴のアイマスクがメイの手によって外され、瑞鶴の口を塞いでいたギャグボールも外される。そして、姉は目に光を灯してない妹の姿を見せつけられる。
今の自分の状況と、瑞鶴の状況を見て、果たして自分が何をしたのか、そしてメイが何をしたのか理解して、翔鶴の快楽によって濁った瞳から冷たい涙が零れ落ちた。
「ねぇねぇ、おまんこ気持ちよかったでしょ？妹さんの方もぉ、とっても気持ちよくなってくれたみたいだね～♪良かったね、姉妹仲良く気持ちよくなれて♪」
「あはは……あはっ……♪もっと、もっと、気持ちよくしてぇ♪私の事、壊しちゃうぐらい……」
「うんうん、気持ちよくしてあげるよぉ♪翔鶴ちゃんは欲しがりさんだなぁ♪ね、瑞鶴ちゃんの方はどうかな？」
「……もう、翔鶴姉には酷い事しないで……お願い、だから……」
「良いよ、もうオクスリ使ったり酷い事はしないからさ、瑞鶴ちゃんも一緒に楽しもう……ね♪」
もう、抵抗しようとするだけの精神力は瑞鶴には無かった。
瑞鶴がこくり、と一つ頷くのを見てにこり、と満面の笑みを浮かべる。笑みを浮かべるメイの姿は、まるで悪魔が微笑んでいるかのようであった。

二羽の鶴　結

姉妹を拘束が解かれても、二人とも抵抗しようとはしなかった。既に抵抗するだけの気力は無かったのか、あるいは快楽に屈服してしまったのか、或いは両方の理由なのか。

二人が拘束を解いても抵抗の意志が無い事をメイは確認すると、くすりと笑みを浮かべて、二人にたっぷりと子種を吐き出したというのに未だに萎えてない肉棒を見せつけて。

「ね、二人ともさ、ボクのこれを二人のお胸で挟んで気持ちよくしてくれないかな？」

「……はい、分かりました……ふふ♪指揮官のおちんちん、あれだけ出したのにこんなに大きいなんて……ね。瑞鶴も一緒に気持ちよくしてあげましょう♪」

「……分かったわ、私にも、翔鶴姉にもひどい事しないって言うんだったら、言う通りにするから……。こういう事するのは初めてだから、下手だったらごめんね」

二人は跪いて、お互い正面から向かい合うよな形でたわわに実ったマシュマロのような果実で未だに大きさと硬さを保っているソレを二人で挟み込むかのようにして、上体を上下に揺さぶり肉棒を扱いていこうとする。

所謂Wパイズリと呼ばれるような姿勢でいきり立つ肉棒を姉妹特有の息の合った連携でマシュマロ果実で扱いてゆきながら、二つの胸の谷間から顔を出した亀頭に翔鶴は積極的に、瑞鶴の方は恐る恐ると言った様子で舌を這わせてゆく。

掴めば指先が埋もれてしまいそうな、軽く触れば肌が吸い付いてくるような極上の果実を持つ魅惑の雌二匹に乳肉を使って肉棒を扱かれる快楽はそれだけで並みの男性が達してしまいそうになるほどの恐るべきモノであり、亀頭に二人分の舌が這わされて嘗め回されてゆくたびに数多の女を堕としてきたメイと言えども長時間は耐えられないほどの強烈な快楽を齎してゆく。

二人とも仕込めば娼館でトップを狙えそうな逸材だ、この二人を自分一人で独占できるのだから笑いが止まらない。くすり、とメイは口角を吊り上げて、熱心に肉棒を舌を這わせている二人の頭を軽く撫でてやって、撫でられると二人は嬉しそうにんぅ♪と声を漏らし、びくんびくんと痙攣を繰り返す限界が近いであろう肉竿に乳肉を一層強く、二人のたわわが卑猥に歪んでしまいそうなほどに押し付けると、その肉棒の先端部から二匹の雌へのご褒美代わりに子種汁が飛び出て吐き出された粘っこい種が堕ちた二人に淫らな化粧を施してゆく。

胸にかかった子種汁を翔鶴は舌で舐めとってゆきながら、恍惚とした表情を浮かべて、瑞鶴も自らの敬愛する姉の淫らな姿にごくり、と生唾を呑み込む。

「んぅ……ふふ♪指揮官のせーえき美味しかったですよ♪」

「……そ、その、上手くできてたかしら……気持ちよくなってくれたのなら、良かったけど……」

「ふふ♪二人とも、気持ちよかったよ♪じゅあ、次は二人ともそこで四つん這いになって、こっちにお尻を突き出してくれるかな？」

指揮官のその言葉を聞いて、二人はこくりと頷いて四つん這いになって尻を突き出すような姿勢になる。

妹の方に後ろから圧し掛かり、度重なる陵辱によって開発が進み、小陰唇が開いてしまって膣口を外気に晒してしまっている雌穴に肉棒の先端を押し当てたかと思うと一気に腰を前へと突き出してゆき、瑞鶴の子宮の入り口をこじ開けんばかりに抉りつけてやると、瑞鶴の口からはんんぅっ♪と嬌声が溢れる。妹の痴態を見て、切なそうに潤んだ瞳を向けてきた翔鶴の膣穴にはご主人様の人指し指と中指を挿入してやってぐちゅぐちゅと蜜が攪拌される音を響かせてやりながらかき混ぜていく。

「あんっ♪あんっ♪これぇっ、凄い♪指揮官の太いのが、私の敏感な場所擦って♪いくっ、イッちゃうぅぅぅぅ♪」

「んぅ♪指揮官、指揮官♪指じゃなくてぇ、私にもおちんちんねじ込んでぇ♪瑞鶴みたいに滅茶苦茶にしてくださぃぃぃ♪」

「二人とも凄い乱れっぷりだねぇ♪うんうん♪分かってるよ、翔鶴

ちゃんの方にもボクの赤ちゃん孕ませてあげるから、待っててね♪」
ぱんっ、ぱんっ、と指揮官の腰が前後に激しく揺さぶられてゆく。獣ののような激しさで乱暴に前後されてゆく肉棒の先端部は瑞鶴のすっかり雄の肉棒の味を覚えこまされてしまった膣粘膜を擦り激しい快楽を与えてゆき、子宮口を叩きつけるたびに雌の体を絶頂へと突き上げてゆく。下半身から脳天まで駆け抜ける強烈な刺激、今まで味わったことのない猛烈な快楽に瑞鶴の理性が急速に蕩けてゆく。瑞鶴の理性が蕩けてゆくのに合わせるかのように膣奥から分泌された蜜がたっぷりと絡まった襞が突き入れられてゆく肉棒に絡みついてゆき、子種汁を搾り取ろうとしてゆく。
締まりは流石に意識を失っている間に処女を奪われた時と比べてその後に行われた激しい陵辱もあって緩んでいるものの、寧ろ子種汁を搾り取るのに更に進化しているように感じる。処女を奪われた時は抵抗するかのように強烈に締め付けてきた膣穴も今ではすっかり肉棒に馴染み、突き入れられてきたそれを雄が飽きないように不規則に、さながらミミズのように蠢く肉襞が竿に絡みついてきて、肉襞を振り切るかのように突きこまれてきた肉棒の先端部で子宮の入り口を突き上げられると、子種汁をねだるかのように子宮口を亀頭にキスさせてゆき、膣口をきゅっ、と強めに締め付けて搾り取ろうとしてくる。その膣穴は生娘のモノではない、雄から精液を搾り取るための淫魔のモノに作り変えられてしまっていた。
見事な具合の良さに、あの衛兵さん達も良い仕事してくれるなぁ、と心の中で呟きつつ、性技なんてものは存在しないよく言えば力強い、悪く言えば獣欲をそのまま叩きつけるかのような激しい腰遣いで雌を孕ませるために腰を打ち付けてゆきつつ、滅茶苦茶にしてほしいとねだる淫乱な姉の膣穴に埋められている指先を折り曲げてGスポットを擦ってやると、妹と同じように下品に喘いでしまいながら絶頂へと押し上げられて白濁した本気汁がにじみ出てゆく。
「そろそろ中に出してあげるよ♪しっかり、受け止めてね♪……と言っても、翔鶴ちゃんの方にだけど、ね♪」
「あっ♪すごっ、指揮官のおちんちんが赤ちゃんの部屋こじ開けて

るうううううう♪」
「ふぇ、あっ♪翔鶴姉だけズルいよぉ♪」
びくん、びくん、と絶頂が近いのか痙攣を繰り返す肉棒を抜ける寸前まで引き抜いて叩きつけるかのように突きこむと見せかけて、翔鶴の膣穴に埋められていた指先を引き抜いてそのまま絶頂へと押し上げられたばかりの姉の膣穴の最奥まで痙攣を繰り返す肉槍を一気に奥を目指して突き入れてゆき、ご主人様の子を孕むのを待ち望んでいる子宮の入り口をこじ開けてやったかと思えば子宮の奥の壁を入り口をこじ開けた時の勢いそのままに思いっきり抉りつけてやって、翔鶴の体を一層強く揺さぶってやったかと思うと、ぐりぐりとそのまま奥の壁を押し上げたまま肉棒に装填された雌を孕ませるための孕ませ汁をどくんっ、どくんっ、と音を立ててぶちまけるかのように注ぎ込んでゆく。
ぶちまけるかのように、この雌を確実に孕ませるために音を立てて濁流のような勢いで注ぎ込まれてゆく粘っこい種は翔鶴の僅かに残った理性さえも洗い流してしまいそうなほどの凄まじい勢いで子宮内を満たしてゆき、太い肉棒によって栓がされてしまってるせいで子宮内から逃れることの出来ない精子は卵子を目指して子宮内を泳ぎ回ってゆく。子宮壁を叩きつけるかのように肉棒が痙攣して種が吐き出されてゆくたびに、翔鶴の淫乱に堕ちてしまった身体は絶頂を繰り返し、肉棒がねじ込まれている結合部からぷしゃっ、と潮を吹いてしまいながら余りの激しい快楽に舌を突き出して白目をむいて無様な顔を晒してしまっていた。
吐き出されてゆく特濃の精子は翔鶴の卵子を夥しい数で蹂躙してゆき、ついに一匹の精子が卵子に侵入して遺伝子情報を刻み込んで新しい命を宿そうとしてゆく。雌としての本能からか、はたまた押し流されずにすんだ僅かに残った理性が警鐘を鳴らしたのか定かではないが翔鶴は己が孕まされてしまったという事を悟るだろう、尤も、その僅かに残った意識さえも激しすぎる快楽によって押し流されてしまうのだが。
自らの姉が激しすぎる絶頂へと突き上げられて、雌として一番の幸

福である雄によって孕まされる快楽にアヘ顔まで晒してヨガっているのを見て、瑞鶴は快楽を求める雌犬のように尻を振る。
　そんな瑞鶴の膣穴に指先を捻じ込んでやって乱暴に手首を揺さぶってかき混ぜてやりながら、未だに翔鶴の膣穴に埋められたままの肉棒を乱暴に腰を揺さぶって前後させてゆき、意識がトんでしまった翔鶴の事を無理矢理現実に引き戻してゆきつつ、姉の膣穴を使って肉棒を扱いてゆく。
「あんっ、あんっ♪あっ、あっ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ♪」
「あんっ、んぅ♪私にも、早くおちんちん頂戴♪早くぅ、早くぅ♪」
「あははっ、姉妹揃って凄い淫乱さんだねぇ♪分かってるよ、瑞鶴ちゃん、すぐに瑞鶴ちゃんもお姉ちゃんと同じように、ママにしてあげるから、ね♪」
　翔鶴の膣穴はメイの肉棒によく馴染んでいた。先ほどまで行われていた激しい、想像を絶するかのような暴力的な性行為によってすっかりメイの肉棒の形に覚えこまされて、自らの処女を奪った獣によって与えられる雄によって支配される雌の悦びを教えられてしまった翔鶴の体はメイの肉棒が無ければ本気でイく事の出来ない淫乱な体に作り変えられてしまった事だろう。突き入れられてゆく凶悪な肉棒を妹と同じように初めてを奪われた時と比べて緩んでしまった膣穴で締め付けてゆきながら、蜜がたっぷりと絡んだ肉襞を肉竿に絡みつかせてゆく。それと共に膣口を妹よりも強く締めて肉棒を離さないようにして、子宮の入り口を抉りつけた瞬間に一気に肉棒全体に絡ませている肉襞で肉棒を絞り上げて、亀頭の部分に子宮口を吸い付かせてゆく。腰を引こうとすると子宮口が亀頭に吸い付くかのようにして子種汁を搾り取ろうとしてゆき、何とか射精を堪えて腰を後ろに引いてゆくと竿やカリ首に肉襞が絡みついてきて、後ろに腰を引いてゆくとともに膣口が更に強く締まり、肉棒を逃すまいと全力で子種を搾り取ろうとしてゆく。一度挿入したら離れられないこちらも魔性の膣穴と言える見事な雌穴であった。姉妹揃って子種を搾り取るのに特化した淫魔膣と言えるだろう。
「あっ、あぁぁぁ♪指揮官のおちんちん来たぁぁぁぁ♪凄い、凄いよぉ

♪こんなの、耐えられない、堕ちちゃう、私堕ちちゃうぅぅぅ♪」
「いいよ、お姉さんも堕ちちゃったんだから、君も堕ちちゃって♪」
それでも何とか理性を総動員して姉の膣穴から肉棒を引き抜いて、妹にねじ込まれていた指先を引き抜く。そして、姉の膣オナホで扱かれて限界が近い凶悪な肉棒の先端部を本気汁が止めどなく溢れる妹の、瑞鶴の膣穴に押し当てて、淫らにおねだりしている瑞鶴の膣の最奥めがけて捻じ込んでゆき、子宮の入り口を思いっきり抉りつけてこじ開けてやってそのままの勢いで子宮の奥の壁を突き破らんばかりに思いっきり抉りつけてやると瑞鶴の体が大きく揺さぶられて、子宮内を、子どもを産むための部屋を雄の肉棒によって踏みにじられる暴力的な快楽によって無理矢理高みへと雌の体は突き上げられて、背筋を弓のように反らしてしまう。激しい絶頂に突き上げられてしまいながらも子宮内に挿入された亀頭を逃すまいと子宮口で亀頭の部分をがっちりとホールドして逃れられないようにする。
当然絶頂寸前であった指揮官の肉棒は耐えられるはずもなく、ぐりぐりと子宮壁を押し上げてやりながら欲望のままに肉棒に装填された子種汁を腰を跳ねさせてゆきながらどくんっ、どくんっ、と擬音を周囲に響かせてしまいそうな勢いで吐き出してゆく。吐き出されてゆく指揮官の種が一瞬で、先ほどまで様々な雄によって蹂躙されてしまっていた瑞鶴の子宮内を埋め尽くしてゆき、指揮官の色に染めなおしてゆく。そして、大量に注ぎ込まれた精子は卵子を求めて子宮内を元気よく泳ぎ回ってゆき、卵子をその数と質を活かして蹂躙してゆき、新しい命を瑞鶴の腹部に宿そうとしてゆく。こちらも姉と同じように、自らが孕まされてしまった事を本能的に理解するが、怒りの感情の代わりに幸福感で一杯になることだろう。雄に支配され、姉と共にご主人様にこれからの艦生を捧げて奉仕してゆくのだ、一人ならば不安であったが、姉と一緒ならば何も迷う必要はない。
「あはっ、二人とも気持ちよかったよ♪ありがとね♪」
にゅぽん、と音を立てて膣穴から肉棒を引き抜いて、半開きになって涎を垂らしている姉の口の中にねじ込んで無理矢理綺麗にさせてゆき、一通りに綺麗にさせてやった後に口から肉棒を引き抜いて、

すっかり快楽に堕ちてしまった表情を浮かべた鶴二匹を堪能するべく、未だに萎えてない肉棒を見せつけてやりながら今度は妹の方に覆いかぶさった。

翔鶴型一番艦翔鶴、瑞鶴。
調教に成功、反乱の気配なし。
一旦更なる艦船の派遣は見送り、暫く様子を見る事を具申する。
二羽の鶴　完